超古代の星

サマエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超古代の星

【Ｎコード】
Ｎ３４２８Ｙ

【作者名】
サマエル

【あらすじ】
フォレストに掲載していた桜舞う星」続編。

今度は花の都巴里を舞台に、超古代の光『ウルトラマンティガ』の登場です。

超古代の星・前夜（前書き）

思えばモノローグに挑戦したのはこれっきりだったような……

超古代の星・前夜

＜大正元年・フランス、巴里　某所＞

その日は黒雲が空を覆い、滝のような雨が激しい勢いもそのままに降り注いでいた。

その雨の中を、一人の男がひた走っていた。

両手に何らかの荷物を抱えている事から、何か大事な物を運んでいるらしい。

やがてその人物は一軒の小さな教会を見つけると、急いでいるのか少々乱暴に扉を叩いた。

「……ハイ、いかがなさいましたか？」

ややあって、教会の神父が出て来た。

すると、男性は周囲に人の気配がない事を確認し、神父に言った。

「すまない、実は人に命を狙われている。危険が去るまで私の息子を保護していただけないか？」

「な、何ですって！？それは大変です、ハイ。」

神父がそう答えると、男性は両手に抱えていたものを、神父に手渡した。

それは、毛布に包まれた生後間もない赤ん坊だった。

「生きて危険をやり過ごせたら、必ず息子を迎えに来る。では私はこれで……。」

男性はそう言って、雨の中に消えて行った。

「……人が人のたった一つの命を奪う……何と罪深い事でしょう、ハイ。」

大正元年、フランスは巴里某所で、一人の男性が惨死している姿が発見された。

物心ついた時、僕は一人だと気づいた。

親なんていない。
いつも一人ぼっち。

周りには集まって遊んでる子供達……。
みんな、僕と違って青い目をしてる。

……。

……違う。

みんな普通だ。

青い目をしているのは普通なんだ。

じゃあ僕は？

普通じゃないの？

この黄色い肌も……

この黒い髪も……

おかしいの……？

だから……

僕は一人なの？

一緒に遊べる友達も、
一緒に暮らす親も、
僕にはないの？

レノ神父に聞いても、神父は答えてくれなかった。

レノ神父も、僕の事嫌い？

ある日、金髪のスーツの男が言った。

「神父殿、こちらの教会に猿が紛れ込んでいるようですよ。」

そしたら、レノ神父はいつもより強い口調で言った。

「彼は立派な人間です。髪や肌の色の違いなど、関係ありません。」

……そうか。

猿って、僕の事だったんだ。

僕は普通じゃない。
だって、猿にしか見られないんだから。

怒ればいいのか、泣けばいいのか……？

僕にはわからなかった。

ただ、

僕を産んだ親が、憎くて仕方なかった。

こんなガラクタ一つ残して死んだ親が。

ああ、主よ……。

願わくば、

この憐れなる猿に、安らかな未来があらん事を……。

気がつけば、僕はいつの間にか、神父のまね事をしていた。

でも、そんなある日……

僕は突然声をかけられた。

「あの～、こんな所で何してるんですか？」

初めてだった。

神父の他に、僕に話し掛けてきたのは。

「……。」

驚いた。

驚いてしばらくその人を見ていた。

女の人だった。

僕よりちょっと年上で、赤い修道服を着ていた。

「……君は……驚かないの？」

尋ねてみた。

この黒い髪も、この黄色い肌も、不思議じゃないのだろうか。

すると、

「どうしてですか？」

当たり前のようにそう言った。

「だって、僕は髪の色も肌の色もみんなと違う。みんな、気味悪がって近付かなかった。君は、気味悪がらないの？」

「何言ってるんですか！黒い髪って初めて見ますけど、カッコイイですよ！」

「……え？」

カッコイイ？
みんな嫌がったこの黒い髪が？

自分を褒めてもらった事なんて、今までなかった。

「私、エリカ＝フォンティーヌっていいます。貴方は？」

初めてだった。
僕に自分から名前を教えてくれた人は……。

「僕……、ダイゴ＝モロボシっていいます。」

「へぇ～。ダイゴさんですか。強そうで素敵な名前ですね！」

「あ、ありがとう……。」

思わずお礼を言った。

嬉しかった。

僕に話し掛けてくれた事、

僕を褒めてくれた事、

僕に名前を教えてくれた事、

そして……、

僕に笑いかけてくれた事。

エリカさん。

彼女は、僕に笑顔をくれた。

嬉しかった。

幸せだった。

いつの間にか、エリカさんは僕にとって、神父以上に大切な人になった。

エリカさんがいるだけで、僕の心は明るいものになった。

これからもそうなると、僕は信じて疑わなかった。

そう……

あの男がくるまでは。

光を継ぐ者（前書き）

あの独特な掛け声を描き切れたか、少し不安だったり……（汗）

光を継ぐ者

いつもの澄み切った青空が、巴里の上に浮かんでいた。

「……遅いなぁ～。」

周りで同年輩の子供達が遊んでいる中、ダイゴ＝モロボシの姿は修道院の中にあった。
とは言っても、今までのように暗い顔ではない。
誰かに会う事を楽しみにしている時の、そんな顔だ。

「おやダイゴさん、まだこちらにおられたのですか？」

「あ、レノ神父様。」

レノが修道院に戻って来たのは、その時だった。
しかしダイゴが待っていた人とは違い、ダイゴは少しがっかりした表情になった。

「天気の良い日は、外へ出た方が良いですよ？」

「うん……。人を待ってるから……。」

レノ神父の勧めを、ダイゴは遠慮がちに断った。
誰かと待ち合わせをしている時は、片方が相手に見つけてもらうまで待っているのが鉄則である。
両方が動き回っていると、中々見つけられないからだ。

「そうですか……。……あの、ダイゴさん？」

「何？」

「もしかしてその待っている人と言うのは……、エリカさんではないですか？」

「うん。そうだけど、どうかしたの？」

「いえ……、聞いてみただけです、ハイ。」

一瞬心配そうな表情を見せるレノに尋ねるダイゴだが、何か言えない理由があるのか、レノははぐらかすように言うと、修道院の奥に行ってしまった。

すると、外の方から何かが派手にぶつかる音と同時に、悲鳴が聞こえて来た。

「いった～い！！」

「あ……、やっと来た。」

待ち焦がれた声に笑顔を浮かべ、ダイゴは外に飛び出した。

そこには、赤い修道服を着た一人のシスターが、道の往来でひっくり返っていた。

「大丈夫？エリカさん。」

そう言って手を差し延べる。

すると、エリカはダイゴの存在に気付いた。

「あ、ダイゴさん……。」

差し出された手を掴んで立ち上がると、エリカは服についた汚れをはたき落とした。

「エヘヘ、恥ずかしい所見られちゃいましたね。」

そう言って、エリカは照れた表情でおどけて見せた。

このエリカという人物、超がつく程の天然かつそそっかしさで、普段からやたらと道端の看板にぶつかるわ、何もない所で転ぶわ、騒がしいシスターだった。

しかし、ダイゴにして見ればそんな所もエリカの愛嬌で、その様子についつい微笑んでしまうのだ。

「あ～、ダイゴさん何笑ってるんですか～！？」

その微笑みを笑われたと思ったのか、エリカがむくれた。

その表情も可愛いと思いながら、ダイゴは弁解した。

「違うよ。ただ、可愛いなって……。」

「え……？もう、ダイゴさんったら……。」

面と向かって可愛いと言われた事が嬉しかったのか、エリカは恥ず

かしそうな表情で両手の人差し指を合わせた。

「……あ、そうだ！エリカ大事な事を忘れてました。」

「大事な事？」

おうむ返しにダイゴが尋ねると、エリカは無駄に力強く頷いた。

「そうです！スッゴく大事な事なんです！」

「……で？」

「はい！」

「その大事な事って何な訳ですか？」

思い出した事が大事という事ばかり強調して、いつまで経っても本題に入らないエリカに、ダイゴが尋ねた。
すると、エリカは勿体振るように話し始めた。

「実はさっき、凄い人に会ったんです！」

「うん。で、どこが凄い人なの？」

「まあまあ焦らないで。夜になったら分かりますよ。」

「夜に……？」

ますます分からないダイゴは首を捻る。
すると、それに気付いているのかいないのか、エリカはうっとりし

た様子で言った。

「ああ～、エリカもう感激です～。正に夢みたいな出会いでした！」

「え……？」

その言葉に、ダイゴは一瞬不機嫌な顔を見せた。
何者か知らないが、エリカの表情はやたらと嬉しそうだ。
よく見ると、頬も僅かに紅潮している。
少なくとも、自分には見せた事のない表情だ。

「エリカさん。それって一体誰かなの？」

怪訝な表情で尋ねるダイゴ。
するとエリカは、勿体振るように言った。

「今夜、レビューを見に来て下さい。そうすれば分かります。」

そう言って、エリカは何かに気付いたように立ち上がった。
「あ、困っている人発見！それじゃダイゴさん、また後で！」

言うや、エリカはバタバタと走って行ってしまった。

「……。」

その背中を無言で見つめるダイゴ。
結局わかったのは、エリカが何か凄い人に会って、少なからず好意を抱いているという事だ。

「誰なんだ……、一体……？」

顔も名前も知らないが、その凄い人というのに対して、ダイゴはいい感情を持てなかった。

「……ハックション！！」

同時刻、日本大使館にて帝国海軍少尉、大神一郎は盛大なくしゃみをかました。

「ハハハ、大神君風邪かい？それとも、誰か君の噂をしているのかな？」

その様子に、思わず机に座った男が笑った。
鼻の下に立派に整えた髭を蓄え、真っ黒な髪を綺麗に分けている。
彼は迫水典通。
フランス在住の日本大使で、かつては政治の世界にその名ありと謳われた、『鉄壁の迫水』その人である。
そして、今くしゃみをした人物こそ帝国海軍中尉にして、帝国華撃団隊長、大神一郎中尉である。
彼は二度に渡る帝都防衛を果たした功績を買われ、特別留学生とし

て、このフランスにやって来たのだ。
最も、他に本当の目的があるのだが、彼がそれを知るのは次の日の事である。

「……お、もうこんな時間か。大神君、今日はこの位にしよう。」

「はい、分かりました！」

そう言って、書類を片付け始める二人。
すると、ふと迫水が口を開いた。

「そうだ、大神君。君に紹介したい所があるんだ。少し、時間をもらえるかい？」

「はい。どちらに行かれるんですか？」

「フフ、それは行ってのお楽しみさ。」

パリには、昼と夜で二つの顔がある。
昼は太陽の明かりのもと、美しい建造物の数々が姿を見せ、夜になればカジノやショーなど、昼とは別の魅力が現れる。

昼夜を問わず華やかな街。
それがパリなのである。
そのパリの真ん中に位置する所に、『テアトル・シャノワール』はあった。
シャノワール。
日本語にすると、黒猫という意味である。
それを示すように、入口のネオンには洒落たスーツとハットを身に纏った黒猫が描かれている。
シャノワールは、客に料理を振る舞いながらダンサー達のレビューを見てもらうという、ダンスレビューの正統派を貫いたスタンスで、パリでも屈指の人気を誇る店なのだ。

「……ここか。」

そのパリ屈指の名店の前に、ダイゴの姿があった。

「ようダイゴ。またエリカさんのレビュー見に来たのか？」

「あ、ドミニクさん。」

ダイゴの姿に気付いた一人の青年が、声をかけて来た。
金髪と蝶ネクタイが特徴的な、とても若い青年だ。
すると、ダイゴも顔見知りらしく、笑顔で答えた。

「うん。エリカさんに来るように言われたんだ。」

「へぇー、お前専用のダンスでもやるのかね？」

「ううん。何でも凄い人に会わせるって。」

そう言うと、ドミニクは考え込むように顎に手をやった。

「凄い人……？もしかして、さっきの日本人じゃないか？」

「どういう事？」

ダイゴが尋ねると、青年はキョロキョロと辺りを見渡して耳打ちした。

「実はさっきな、迫水大使が見慣れない日本人連れて来てたんだよ。ほら、エリカさんって日本人に凄い興味あったろ？」

そう言われ、ダイゴはエリカと出会って間もない頃を思い出した。確かにエリカは、どういう訳か日本に興味を持っていて、ダイゴも一度何故丁髷をしていないのかと問い詰められた事もある。

「なるほど……、流石ドミニクさん。何でも知ってるんだね。」

「へっ、まあな。このドミニクにかかれば、軽く解決さ。」

ダイゴに褒められたドミニクが気をよくする。

すると、店の入口から鋭い声が飛んで来た。

「こらドミニク！仕事サボるんじゃなぁい！」

「わひっ！」

「あ、シーさん。」

見ると、メイドっぽい服を着た女性がドミニクを睨みつけていた。

彼女はシーと言って、レビューの司会と売店の売り子を兼任している。
因みにドミニクの仕事は入口での客案内である。仕事の内容上シーの方が上の立場であり、ドミニクもシーに頭が上がらなかった。

「あらぁ、ダイゴ君じゃなぁい。またエリカさんのレビュー見に来たのぉ？」

ダイゴの姿を見るや、シーが笑顔に早変わりした。この二人を始め、何度かシャノワールに出入りしているダイゴは、みんなの顔なじみになっていた。
ダイゴもまた、ドミニクやシー達を兄や姉のように慕っていた。

「ううん。エリカさんから凄い日本人に会わせてあげるって言われたんだ。」

「そうだ！なあシー、お前、迫水大使の連れに接待したろ？何か知らねぇか？」

ドミニクが思い付いたように尋ねた。
確かにシーの仕事は司会と売り子。
もしかしたら、その人物と話をしたかもしれない。
ドミニクの予想は、ズバリ的中した。

「ああ、大神さんの事？かっこよかったわよ～！正にサムライって感じでぇ～！」

「……何か、話したの？」

恐る恐る尋ねるダイゴ。

すると、シーはうっとりした表情で答えた。

「ええ。売店にも顔出してくれたわよ？エリカさんのブロマイド買ってくれたしぃ～！」

「……ブロマイド……？」

その言葉に、ダイゴの表情が俄かに曇った。

確かシャノワールで売られているブロマイドは一枚５０フランと高額で、ダイゴも中々金がなくて買えない程だった。

それを買うという事は、その大神という人物もエリカの事を少なからず気に入っているという事だ。

「……。」

ダイゴは、まるで自分とエリカの間に距離が生まれたような気がした。

エリカが自分を捨てて、その大神とかいう日本人のもとに行くんじゃないか。

そんな不安にかられた。

「……その人、今何処にいるか分からない？」

「え？んっと～、確か楽屋に行ったと思うけど……。」

シーの口から楽屋という言葉が出るや、ダイゴは店内に突っ込んだ。

「あ！ダイゴ君！？関係者以外立入禁止よ！？」

「……どうしちまったんだ？ダイゴの奴……。」

入口に残されたシーとドミニクの二人は、呆然とダイゴの背中を見ていた。

ダイゴはシャノワールの中をなりふり構わず走り回った。
その大神とかいう日本人を見つけるために。
見つけてどうするのかは全く考えていないが、とにかくダイゴはじっとしていられなかった。
そうしないと、エリカがいなくなるような気がしてならないのだ。
そんな事を考えながら走っていたからか、ダイゴは目の前に立つ人影に気付かなかった。

「わあっ！？」

止まりきれずに人影と派手にぶつかるダイゴ。途端に周囲の目がダイゴを向く。

「あいたたた……、君、大丈夫かい？」

頭を押さえて起き上がるダイゴに、声がかけられた。

「うん、僕は大丈夫……。」

そう答えて目を開くと、ダイゴは思わず固まった。
何故なら、そこにいたのは……。

「あ、あの……？」

「……。」

大神は焦っていた。
目の前には自分と同じ黒髪の少年が、頭を押さえてこちらを睨んでいる。
何か自分に敵意を示すような、そんな表情だ。

「だ、大丈夫かい？」

「……。」

もう一度尋ねてみるも、帰ってきたのはやはり沈黙。
どうしたものかと悩んでいる大神のもとに救いの手が差し延べられ

たのは、その時だった。

「あ、大神さん見〜つけた！」

「エリカくんか……。」

見ると、レビューを終わらせて修道服に着替えたエリカの姿があった。

「どうしたんだい？やけに慌てているみたいだけど……。」

エリカと知り合ったのは今日が初めてだが、初対面の時はまだ落ち着きがあった。

何を騒々しく騒いでいるのか尋ねると、エリカはロビーを指差して言った。

「ロビーで迫水大使が待ってましたよ？怒ってたから呼びに来たんです！」

「ハッ！しまった！もうこんな時間じゃないか！」

大神は青い顔をして、一目散にロビーへ走って行った。

迫水から３０分にロビーに来るように言われていた事を思い出したのである。

「……エリカさん。」

「へ？……あ、ダイゴさん！いつからそこに？」

「さっきからいたよ……。」

今更気付いたエリカにため息をつき、ダイゴはエリカに問いただした。

「エリカさん、昼間言ってた凄い人って……。」

「はい！大神さんがどうかしましたか？」

「いや、別に……。」

真顔で答えるエリカにそうはぐらかし、ダイゴは背中を向けた。心が洗われるはずのエリカの笑顔を見ると、何故か無性に悲しくなったのだ。

おそらくは、あの大神という男のせいで。

「そうだ！ダイゴさん！大神さんの事どう思いました？」

「……ビックリしたよ。」

「やっぱり！ダイゴさんもそう言ってくれると思ってましたよ。」

良い意味に受け取ったのか、笑顔を浮かべるエリカだが、ダイゴはそんな意味で答えた訳ではなかった。

「（大神……。何なんだあの人は！？）」

いきなり現れたかと思えば、瞬く間に周囲に溶け込んでいるあの青年に、ダイゴは驚きと共に言い知れぬ怒りを覚えた。

「（冗談じゃない……！エリカさんを、あんないきなり現れた奴

に奪われるなんて……！）」

１４年間生きて来て、エリカは唯一心を許した存在なのだ。
シャノワールの人達も好きだが、エリカとは違う。
その大切な人が、いきなり現れた日本人に奪われるなど、到底納得できるものではなかった。

「ウ～ッサッサッサ！」

静かな沈黙に包まれた夜の巴里を、一つの影が歩いていた。
ウサギを連想させる独特な笑い声に混じり、刃物が擦り合う音が聞こえる。

「感じる！感じるピョン！あの力が、この近くにあるピョン！」

それは、人の姿をしたウサギの怪物だった。
シルクハットとサングラスで着飾る様子は巴里らしくお洒落だが、その顔から滲み出る残虐性は隠しきれない。

「何としても見つけ出すピョン！オイラ達に刃向かったあの男のよ

うに、このシゾー様がズタズタに切り裂くピョン！！」

シゾーと名乗った怪物は、そう言って両手の巨大なハサミを動かした。

「切るピョン、そいつもラビッと切るピョン！グチャグチャに切り刻んでやるんだピョーン！！」

翌日、大神の姿はシャノワールからさほど遠くないカフェにあった。昨夜、アパルトメントに送ってくれた迫水から昼頃大使館に来るように言われたため、腹ごしらえをする事にしたのだ。

「ここにするか……。すみません、注文をお願いします。」

よさ気な席に座り、ギャルソンに声をかける大神。

しかし、ギャルソンは遠目でこちらを見るばかりで反応しない。

「困ったな……、無視してるのかな……。」

ありえない話ではなかった。

日本人は、肌や髪の色が西洋人と全く違う。
その事から、得体の知れない人種と敬遠されるのは、この戦前の時代では仕方ない事だった。
とはいえ、これでは腹ごしらえも何もあったものではない。
どうしたものかと考えていた大神の耳に、聞き覚えのある声が聞こえて来たのは、その時だった。

「あいたっ！！」

何かがぶつかるような音と共にその声を聞いた大神が後ろを振り向くと、そこには見覚えのあるシスターがフラフラと歩く姿が見えた。

「エリカくん……。そうだ、彼女に頼めば……。」

東洋人という事で来ないなら、フランス人のエリカに頼めばいい。
大神はそう考え、エリカの名前を呼んだ。

「お～い、エリカくん！」

「はい。……あれ？誰か呼んだと思ったけど……。」

呼ばれて返事はしたものの、それが分からず辺りをキョロキョロと見渡すエリカ。
大神は何とか気付いてもらおうと、両手を大きく広げて目立つようにアピールする。
すると、ようやくエリカが大神に気付いた。

「あ、大神さん！こんな所で会うなんて、これはもう運命ですね！！」

運命と呼ぶべきか偶然と呼ぶべきかはさておき、エリカはトコトコと大神の所へやって来た。

「何もないテーブルで何してるんです？もしかして日本の儀式ですか？」

「いや……注文を取りに来てくれなくて……。」

何故そんな発想に繋がるのかと不思議に思いながら大神が答える。
すると、それを指し示すように腹の虫が鳴いた。

「じゃあ、私も何か食べます！すみませ～ん！！」

そう言って手を振ると、ギャルソンはさっきまでの対応が嘘のようにやって来た。

「私はパン・オ・ショコラとホットチョコレート！大神さんは？」

「じゃあ、あの人と同じものを。」

期待通りに注文を取る機会をくれたエリカに感謝しつつ、大神は奥のテーブルに座った老紳士を指差して言った。
大神は巴里に来るのは初めてだ。
日本とは少なからず食事の習慣も違うだろうし、実際メニューを見ても大神には初めて見る名前ばかりでちんぷんかんぷんだった。
こういう場合は、無理に考えずに周囲の人が食べる物と同じ物を頼むのが正解だ。特に現地の人なら、その時間に最も適した注文をするため、俗に言うゲテモノを避ける事にも繋がる。
無論エリカと同じものを頼んでもいいのだが、パンも飲み物も甘いのは遠慮したい。

「クロワッサンにコーヒーですね。すぐにお持ちいたします。」

そう言って、ギャルソンは足早に店内に戻る。

「ふう、エリカくんのおかげで、やっと朝食にありつけるよ。」

「巴里の人って気難しいですから、外国人には敬遠するのかもしれないですね。」

安堵のため息をつく大神に、エリカが答えた。

ヨーロッパ、特にフランスとなると、革命で民主主義を勝ち取った名残から自分達を誇らしく考える所がある。

何処の馬の骨とも知れない東洋人に気安く接する事は、誇りあるフランス人のする事ではないと考えたのかもしれない。

最も、本当は初めて見る外国人に敬遠する食わず嫌いなだけであるが。

「お待たせしました。ごゆっくりどうぞ。」

程なくして、ギャルソンが注文の品を持って来た。

「それじゃあ大神さん。早速いただきましょう！」

余程腹が減っていたのか、エリカは素早くカップを手に取った。

「うん、美味しい！……でも、ちょっと苦いかな……？」

一口味わって首を傾げるエリカ。

苦いのも当たり前だ。

何故ならそれは……。

「エリカくん……、それホットチョコレートじゃなくて俺のコーヒー……。」

「えっ……!?あ、あの……私、頼んで来ます!」

やってしまったという顔で立ち上がるエリカ。
しかしその時、エリカは後ろを歩くギャルソンにぶつかってしまった。

「あらっ!?」

その拍子でバランスを崩し、エリカは前のテーブルに倒れ込む。
すると、その時に掴んだパラソルがへし折れて奥のそれを薙ぎ倒し、テーブルは全て将棋倒しになってしまった。

「エリカくん!」

その余りに悲惨な状況に、大神は思わずエリカに駆け寄る。
その時、別の鋭い声が飛んだ。

「……いつにも増して騒がしい事だな、エリカ。」

「あ、グリシーヌさん。」

その声の主に顔を向け、エリカが言った。
長く美しい金髪を右肩に流し、深海を思わせる青い服と瞳が特徴的な、エリカと同年輩の少女がそこにいた。

「……エリカ、この男は？」

グリシーヌと呼ばれた少女は、目線だけを大神に向けて尋ねた。

「大神一郎さんです。日本からいらしたそうです。」

「日本人……、ふん、またか……。」

以前にも日本人に会ったような口ぶりで、グリシーヌは露骨に嫌悪な表情を見せた。

「まあいい、エリカの知り合いなら名乗っておいてやろう。私はグリシーヌ・ブルーメール。ノルマンディの血を引く、誇り高い貴族だ。」

「あ、自分は大神一郎……。日本大使館でお世話になっています。」

その容姿からは想像できない威圧感に圧倒されながらも、大神は自己紹介をする。

「高が東洋の分際で、巴里観光か？」

「いえ……留学生として……。」

随分上からの物言いに圧倒されつつ返事をする大神。

すると、エリカがフォローするように口を挟んだ。

「ほら、グリシーヌさん。例の一件をまだ気にしてるんですか？だから日本やダイゴさんの事……。」

「エリカ！余計な事は一切しゃべるな。……大神一郎とやら、巴里の街を見る事は構わんが、見苦しい真似はするな。」

他言無用の事なのか、グリシーヌはエリカに釘を刺し、大神にそう吐き捨ててカフェを後にした。

「……あ、あの人は？」

「グリシーヌさんですか？私の先輩みたいな人で、ちょっと怖い所が……。」

エリカがそう言いかけた時だった。
その怖い先輩がいつのまにか戻っていたのである。

「……エリカ、呼んだか？」

「な、なんでもありません～ん！」

「そうか……。」

そう言って、グリシーヌは今度こそその場を後にした。

「朝ごはん、もう一度頼みましょうか。すみません～ん！」

何とかその場を取り繕うエリカ。
しかし忘れてはいけない。
外のテーブルを全て薙ぎ倒している事を。
当然迷惑千万のギャルソンの怒りは頂点な訳で……。

「あの……、もしかして怒ってます？」

「……。」

更に逆なでするような一言に、ギャルソンの拳がワナワナと震えた。
つまり、怒っているという事だ。

「あ～ん、ごめんなさぁ～い！！」

「エ、エリカくん！？」

一目散に走り出すエリカを、大神は慌てて追い掛けた。夢を見た。
久しぶりに、あの日の夢だった。
降りしきる雨の中、教会に預けられたあの日。
戻って来ると約束しておきながら、戻って来なかった父親。

「また……あの夢か。」

それだけではなかった。
見た事もない太古の遺跡に自分はいて、目の前に立つ巨大な石像が語りかけて来たのだ。
……光を継げと。

「どういう事なんだ……？」

ポケットにしまっている彫刻を取り出して見る。
錆びた青銅で出来た、今にも壊れそうな彫刻。
しかし、ダイゴにしてみれば両親との繋がりを示す、たった一つの遺品だった。
エリカと出会うまで、ダイゴはこんな夢ばかり見ていた。

それをまた見るようになった事は、ダイゴにエリカがいなくなる事を暗示するように思えた。

「エリカさん……。」

ダイゴは窓の外に降る雨を見て、今日も会う約束をした人の名前を呟いた。

一方そのエリカは、テルトル広場にて大神と雨宿りをしていた。カフェを飛び出して広場まで来た所を雨に降られ、こうして建物のしたで雨上がりを待っているのだ。

「雨……早く止まないかな……。」

ふと、エリカが呟いた。

「どうしたんだい、エリカくん。急にしんみりして……。」

さっきまでの快活さが嘘のように寂しそうな表情のエリカを気遣い、大神が優しく声をかける。

すると、エリカはポツリポツリと話し始めた。

「雨を見ると……、私が修道院に入れられた時を思い出して……。」

悲しい思い出なのか、エリカは辛い表情で一旦止めた。

「昔から、私の周りでは色々な奇跡が起こったんです。」

「奇跡？」

「人の病気が治ったり……。荒れ地に涌き水が出たり……。」

その言葉に、大神は昨日初めてエリカに会った時の事を思い出した。
暴走した自動車に乗っていたケガ人を一瞬で治癒させた力。
大神の予想が正しければ、それは霊力によるものだった。

「始めはみんな、喜んでくれたんです。……でも、その内にみんな私を気味悪がって……。」

「それで……、修道院に入れられたんだね？」

大神が言うと、エリカは微かに頷いた。

「……大神さんも、私の事、変だと思いますよね……？」

「いや、素晴らしいと思うよ。」

「え？……素晴らしい……？」

即答した大神に、エリカは目を丸くした。

「そうさ。気にする事はないよ。」

「大神さん……、ありがとうございます……。」

大神の言葉に、エリカは思わず目頭が熱くなった。
今までこの事を話して、距離を置かなかった者はいない。
しかし、この大神は違った。
誰もが驚く事を、まるで以前も見た事があるかのように、理解を示してくれたのだ。

「エリカくん、聞いてくれ。実は、俺のいた日本にも、君のように不思議な力を持つ女の子達がいた。」

不思議な力を持つ女の子達。
大神は名前こそ口に出さなかったが、それは間違いなく帝国華撃団花組だった。

「……私も、その人達みたいになれますか……？」

「なれるさ。きっとなれるよ。」

まるでそれを保障するように言う大神。
その様子に、エリカはようやく笑顔を取り戻した。

「ありがとうございます！これで私も……ちゃんと戦えると思います。」

「戦う……？一体何と？」

「え!?あ、いや……な、何でもありません!」

やはり口外出来ない事なのか、エリカは慌ててはぐらかした。
すると、それと時を同じくして雨音が止んだ。

「そうかい?……あ、雨も止んだみたいだよ?」

「本当だ……。へへ、私、雨上がりの匂いって大好きなんです。」

見ると、雨を降らせていた雲の隙間から、眩しい日差しが差し込んで来た。
まるで、エリカの心に陽がさしたように。
その時、教会の鐘の音が響いた。

「あっ!私教会にダイゴさんを待たせてたんです!大神さん!先に失礼しますね!!」

そう言うと、エリカは勢い良く広場を飛び出した。

「いった〜い!」

しっかり看板にぶつかって。

「エリカくん……。ぶつかる位なら走らなければいいのに……。」

最もな事をぼやきつつ、大神も仕事のために大使館へ歩き出した。

「な、何と！ダイゴさん、それは本当なんですか、ハイ。」

ダイゴから夢の話を聞いたレノ神父は、驚きの表情を浮かべた。いつもとやや様子の違うレノ神父に驚きつつも、ダイゴは頷いた。

「うん。昨日も見たんだ。神父様、何か知ってるの？」

ダイゴが尋ねると、レノ神父は神妙な面持ちで話し始めた。

「実は、ダイゴさんのお父上より、伝言を授かりましたです、ハイ。」

「伝言？」

「ハイ。貴方がそのような夢を見るようになったら、伝えるように言われてましたです。」

そう言って、レノ神父はダイゴの父が残したという伝言を伝え始めた。

「もしも夢で巨人の導きがあれば、その導きに従うようにと……。」

「巨人の導き？それって夢に出て来た、あの……。」

「正しくそれです、ハイ。」

重々しく頷き、レノ神父は続けた。

「そして、導きに従った後、巨里に災いを齎す者を討つ光が現れると……。」

「光……？」

やや抽象的な表現に首を傾げるダイゴ。

すると、レノ神父は一枚の紙切れを取り出した。

「これは……？」

「その時が来たら貴方に渡すように言われていた地図です。カタコンベは分かりますか？」

「うん。知ってるけど……。」

カタコンベは、古代の巨里の建造物を残した地下の都市で、言わばもう一つの巨里だ。

確かにそこなら、まだまだ未発見の隠し部屋等が沢山あってもおかしくない。

「そこに……、父さんが残した何かがあるんだね？」

「ハイ。何かは分かりませんが、間違いありませんです、ハイ。」

「それじゃあ、エリカさんとは会えないな……。」

ダイゴが残念そうに呟いたその時、教会の扉が突然開かれ、話題の人物が顔を出した。

「ダイゴさ～ん、お待たせしました～！」

「あ、エリカさん……。」

エリカの姿に少しだけ笑顔になるダイゴ。

すると、エリカは開口一番ダイゴに謝罪した。

「ごめんなさい、ダイゴさん。待たせちゃって……。」

「ううん、いいよ。それに……。」

気遣かってくれたエリカに感謝しつつ、ダイゴは申し訳なさそうに答えた。

「ごめんね、エリカさん。今日、ちょっと用事が出来たから……。」

「用事？……もしかして、こっそり美味しいプリンでも食べに行くんですか！？」

「いや……、ちょっと探し物を……。」

何故プリンに話が飛ぶのか不思議に思いつつ、ダイゴは探し物と答えた。

父は今までレノ神父にも口止めしていたのだ。

カタコンベに何があるのかは分からないが、余り人に知られるべきものではない事は確かだ。
それに、カタコンベの秘密が父の死に関係している事も十分考えられる。
もしそうなら、何かしらの危険を伴う事になるだろう。
そんな危険な調査に、エリカを巻き込みたくはなかった。

「それじゃあ神父様、行って来ます。」

そう言って出発しようとするダイゴ。
しかし、ここで待ったの声がかかった。
エリカである。

「ちょっと待って下さい！探し物ならエリカも手伝います！」

「えっ！？いや、でも……。」

「遠慮しないで！困ってる人を救うのが、シスターの勤めです！」

「いや、まあ、そうなんだけど……。」

突然の申し出に驚くダイゴ。
確かにエリカと二人になれるのは願ってもないが、流石に危険が伴うとなると話は別だ。
すると、ここでエリカがトドメの一言を口にした。

「……ダイゴさん、エリカがいちゃ迷惑ですか？」

「ええっ！？いや、そんな事は全然……！！」

悲しそうなエリカの表情に、慌てて弁解するダイゴ。
すると、その言葉でエリカは元の笑顔に戻った。

「やっぱり！ダイゴさんならそう言ってくれると信じてましたよ！」

「……ハハハ……。」

すっかり乗り気なエリカの後ろで、ダイゴの渇いた笑いが漏れた。

「ダイゴさん……、お気をつけて……。」

その後ろ姿に、レノ神父は声をかけて見送る事しか出来なかった。

ダイゴとエリカは地図を頼りに、カタコンベの奥に入り込んだ。

「なんだか暗くて、気味悪いですね。」

ダイゴの後ろで、エリカが怖ず怖ずと呟いた。カタコンベはパリの観光名所の一つだ。
道に迷わないように、順路に沿って明かりはついているが、地図が

示す道のりはその順路から大きく外れている。
当然そんな道に明かりなどなく、二人は暗闇に包まれた道を、懐中電灯の明かりと地図だけを頼りに進んでいた。

「カタコンベの中にこんな通路があったなんて……、エリカ全然知りませんでした。」

初めて通る隠し通路を進む中、背中のエリカが呟いた。

「僕も初めてだよ。まさか父さんがこんなものを……。」

厳密には、おそらく父より以前の代から守られていたのであろう。
この通路からは、想像もつかない長い年月を感じた。

「……ダイゴさん、あれ!?」

ふと、後ろのエリカが上の方を指差した。

「……あれは!!」

その方向に光を向け、ダイゴは驚いた。
そこにいたのは、エッフェル塔と見間違わんばかりに巨大な、一体の巨人の石像だった。
日本でいう仏のような風貌は、正しく光を連想させる。

「……これが、父さんの残した……。」

石像の神々しさに目を奪われるダイゴとエリカ。

その時、真上の地上から突然の悲鳴が聞こえて来た。

「キャーーーーッ！！」

「悲鳴！？一体何処から……？」

「上です！待ってて下さい！今行きますからね！」

人助けしたいというシスターの血が騒ぐのか、エリカは一目散に走り出した。

「ああっ、ちょっと！エリカさん！！」

たちまち姿の見えなくなったエリカを慌てて追い掛けようとするダイゴ。

その時、真後ろで何かが光った。

「！？」

その光に振り返ったダイゴは、思わず絶句した。
光を放っていたのは、あの石像だったのだ。
まるで長い眠りから目覚めたような輝きを放つ石像に魅入られ、指一本動かせないダイゴ。
そのダイゴの耳に、何者かの声が聞こえて来た。

「……来たか……光を継ぐ者……。」

「え……？」

それは、目の前の石像だった。
どういう訳か知らないが、石像は意思を持ち、ダイゴに語りかけているのだ。

「貴方は……一体……？」

「古代に封じられし……災いを討つ者……。」

その言葉に、ダイゴはレノ神父の言葉を思い出してハッとした。

（そして、導きに従った後、巴里に災いを齎す者を討つ光が現れると……。）

「（まさか……、さっきの悲鳴はその災い……！？）」

レノ神父の言葉が真実だとしたら、このパリに災いが起きようとしている事になる。

「目覚めの時は来た……。光を継ぐ者よ、今こそ封じられし力を

目覚めさせる時だ。」

石像がそう言った時、まばゆい閃光が走った。
その眩しさに思わず目を閉じるダイゴ。
そして数秒経って目を開くと、ダイゴはまたしても驚いた。

「……石像が……！！」

何と、目の前にあった石像が忽然と姿を消していたのだ。
ついさっきまで目の前にあったのに。

「……災い……光……。」

ダイゴは無意識の内に、石像の言葉とレノ神父の言葉を繰り返した。
災いを討つ光。そして石像は、自分が光を継ぐ者と言った。
という事は……、

「……まさか……、僕がその光を継ぐって言うのか……。」

という事は、自分が光となってパリを災いから守るという事になる。
守れるのか？自分にパリが。
そう自問した時、ダイゴの脳裏にエリカが浮かんだ。

「エリカさん……、そうだ！エリカさんが！！」

先程の悲鳴がもし災いであるなら、エリカも巻き込まれた可能性が高い。
エリカの無事を祈りながら、ダイゴは走り出した。

ここで、時間は災いが起きる少し前に遡る事になる。

「ここが舞踏会の会場か。流石に立派だな……。」

青空の下、豪華な屋敷の庭に広がる会場の隅に、大神の姿があった。
この日、大神は急な用事の入った迫水に変わってライラック伯爵夫人の主催する舞踏会に大使代理として参加したのだ。
一応の正装はしているが、それでも目の前にいる貴族達の華やかさに比べれば月とスッポンである。
その時、気まずさを感じる大神の肩に手が置かれた。

「……見ない顔だね。警察だが、少しいいかな?」

「いいっ!?じ、自分は迫水大使の代理として……。」
振り返って見ると、やや太った警官が、怪しげにこちらを見ていた。
大神は慌てて弁解しようとするが、それより先に別の声がした。

「仕事熱心だねぇ警部。その人はあたしの客だよ?」

その聞き覚えのある声にまさかと思い、大神は振り返った。
すると、そこにはこのパーティーの主催者が、二人の秘書を連れていた。

「ようこそ、ムッシュ大神。あたしのパーティーに来てくれるとは、嬉しいねぇ。」

「グ、グラン・マ!?じゃあライラック伯爵夫人とは……。」

大神はあからさまに驚いた。

目の前にいるライラック伯爵夫人は、昨夜シャノワールで会ったオーナーのグラン・マその人だったからだ。

「そうさムッシュ。女はいくつもの顔を持ってるんだからね。」

大神の驚く表情に満足しながら、グラン・マは隣に立つ警官に手を向けた。

「紹介するよムッシュ。このパーティーの警備の指揮を取っているエビヤン警部さ。」

「夫人の客人でしたか……、これは失敬。巴里市警のジム・エビヤンです。」

「はじめまして、エビヤン警部。日本大使館の大神一郎です。」

誤解してしまった事を詫びながら、挨拶として握手を求めるエビヤン。

大神もそれに気づき、お辞儀ではなく握手を返す。

「さあ、パーティーを楽しんでおくれ。メル、シー、ムッシュをもてなして。」

グラン・マがそう言うと、後ろに控えていた二人の秘書が前に進み出た。

「ウィ、マダム。ムッシュ大神、どうぞこちらに。」

「冷たいものを用意してますから。」

「ワインでよろしいですか？ミネラルウォーターもございますが……。」

「あ、すみません。ワインをいただきます。」

青く短い髪のメルに尋ねられた大神は、一瞬考えた後前者を答えた。理由は簡単。目の前にはワインしかないからである。ミネラルウォーターもあるのだろうが、取りに行かせるのは少々忍びない。

そんな事を考えていた大神の目に、見覚えのある人物の姿が写った。

「あれは……、グリシーヌか？」

長い金髪と青い服。間違いない。

すると、ワインを差し出したメルが驚きの表情を見せた。

「グリシーヌ様とお会いになられていたのですか？」

「グリシーヌ様は、ノルマンディ公の血を引く、ブルーメール家の御息女なんですよぅ。」

シーも同じように、驚いた表情を見せる。

グリシーヌはこのパリで名門中の名門。

悪い意味ではないが、大神が知り合う機会があったとは考えにくい。
それに大神も、会ったとは言え良い印象を持たれたようではなかった。

「でも、何だかこっちを睨んでいるようだけど……。」

大神がシーにそう言った時、後ろから声が聞こえた。

「それは、君が珍しいからですよ。黄色い東洋の猿がねぇ。」

それは、一人の貴族だった。
名前はダニエルというのだろうか。
右手の指輪の外側にそう名前が彫ってある。

「まあ、ここはミー達のような上流階級が集まる社交場ですから。
君のような不釣り合いな動物には来て欲しくないと、まあそういう事ですよ。」

「何……！」

「ほう？何か言いたい事でも？」

ぬけぬけと挑発するダニエル。
しかし、大神は睨むだけで怒鳴ったり殴ったりはしなかった。
そんな事をすれば、自分を代理に任命した迫水や、パーティーを主催したグラン・マに迷惑がかかるからだ。
ダニエルも、それで大神は手が出せないと思い、すき放題言っているのだ。

「ムッシュ……サムライ……。」

じっと耐え忍ぶ大神を助けられず、シーは残念そうな顔で大神を見つめる。
一方のダニエルは、更に大神を煽って来た。

「おや、どうしました？黄色い猿が、怒って赤くなりましたね。」

「……。」

怒りを堪えてダニエルを睨む大神。
すると、グリシーヌが騒ぎを聞いて歩み寄って来た。

「ほら見たまえ。グリシーヌ様も君が目障りなようだ。」

自分の代わりに大神を追い出してくれるに違いない。
そう考えていたダニエルだが、グリシーヌの怒りの矛先は大神ではなかった。

「目障りなのは貴公の方だ。今すぐ失せろ。」

「へっ？」

「失せろ！二度と顔を見せるな！！」

「ひぇ～！！」

グリシーヌに威嚇されたダニエルは、情けない悲鳴を上げてパーティー会場から逃げ去った。
他者を愚弄するダニエルの言動が、グリシーヌの気に障ったのだ。

「貴公も貴公だ。愚弄されて何故戦わん！」

続いてグリシーヌは、大神を指差して問いただした。ダニエルの言葉は人種差別もいい所である。怒らないはずがない。
にも関わらず言い返す事もしない大神の態度も、グリシーヌは気に入らなかった。

「それとも、何か理由があるのか？」

「……別に。相手にする程の奴じゃない。」

本当はグラン・マと迫水に迷惑をかけたくないのが理由だが、おそらくグリシーヌは納得しないと考え、大神は敢えて嘘ぶいた。
すると、グリシーヌは納得しながらも、大神に忠告した。

「……確かに、奴はつまらん小物だな。だが、人は誇りによって生きるものだ。貴公がそれでは、来たる戦いに勝利等有り得ん！」

「戦い……？何の事だ？」

エリカに続いてグリシーヌも口にした言葉の意味が分からず、大神が尋ねる。
しかしその直後、大神はその戦いの意味を身を以って知る事になる。

「キャーーーーッ！！」

突然の爆発が、パーティー会場を襲った。
優雅な笑い声が、たちまち悲鳴に変わる。

「爆発！？何が起こったんだ！？」

見ると、無数の野ウサギが現れ、会場を荒らしていた。
その中心に、大神は奇怪な影を見た。

「な、何だあれは！ウサギか？」

顔はウサギだが身体は人間なみに大きく、巨大なハサミをシャキシャキと鳴らしている。
平たく言えば、ウサギ人間といった所だろうか。

「この近くに間違いないピョン！さあ、ケガしたくなかったら、このシゾー様に光の証を渡すピョン！」

人々が逃げ惑う中、シゾーと名乗るウサギはハサミを鳴らした。
そこに、立ちはだかる人物がいた。
グリシーヌだ。

「待て、そこのウサギ！」

「お前に用はないピョン。オイラが探しているのは光の証を持つ者だピョン！」

「下らぬざれ言を……、成敗してくれる！！」

言うや、グリシーヌは何処からともなく巨大な戦斧を取り出し、シゾーに斬り掛かった。

「え～い、邪魔をするなピョン！こうなったらお前から先に刻んでやるピョン！」

シゾーも負けじとハサミを繰り出す。
激しくぶつかり合う二つの刃。
すると、程なくしてグリシーヌの動きが鈍り始めた。
やはり相手は人間でないために、生身では限界があるのだ。

「こやつ……、やるではないか！こうなったら差し違えても……。」

「無理をするなグリシーヌ！相手をよく見ろ！生身で勝ち目はない！」

そう言う大神だが、グリシーヌは尚もシゾーに攻撃を仕掛ける。

その時、横から無数の弾丸がシゾー目掛けて撃ち込まれた。

「そこのウサギさん！好き勝手にはさせないわよ！！」

それは、何とエリカだった。

悲鳴を頼りにカタコンベの地下通路を抜けたエリカは、たまたまパーティー会場の近くの地上に出て来たのである。

「エリカ……、この男がそうだ。」

「えっ！？それじゃあ日本から来る人って、大神さんだったんですか！？」

「私もさっきグラン・マから聞いたばかりだが、間違いない。」

「それじゃあ、一旦本部に戻って……。」

「なんだ？どういう事なんだ？」

勝手に話がまとまりつつある中、一人状況を飲み込めない大神が尋ねる。

戦いだのなんだの、訳が分からない。

すると、そこへエビヤン警部が部下の警官隊を連れてやって来た。

「あのウサギを狙え！撃てぇ！！」

エビヤン警部の号令で、警官隊は一斉にシゾーに発砲する。

「くっ、こんな時に光武があれば……！」

悔しげに大神が呟いた時、エリカが答えた。

「あります！！光武なら……霊子甲冑ならあります！！」

「何っ！？霊子甲冑があるだと！！」

「ついて来い、大神一郎！！」

そう言って走り出す二人を、大神は慌てて追いかけた。

「エリカさん！……こ、これは……！？」

ダイゴがカタコンベから地上に出て来たのは、丁度大神達が見えなくなった辺りだった。

「ウサッ！見つけたピョン！！」

すると、ダイゴに何かを感じたシゾーがダイゴの前に立ちはだかった。

「お前！光の証を渡すピョン！」

「わあっ!?な、何でウサギが!」

「ウサギって言うなピョン!さあ、刻まれたくなかったら、大人しく光の証を渡すピョン!」

「光の証?何の事だよ!?」

初めて耳にするものを渡せと言われても渡しようがない。
すると、シゾーはハサミを構えた。

「仕方ないピョン!ならば殺して奪うまでだピョン!」

「わ、……うわあああああっ!!」
ハサミで威嚇されたダイゴは、一目散に逃げ出した。

「逃がさないピョン!光の証を渡すピョン!」

霊子甲冑があると聞いて大神が案内された所。
それは、何と昨日迫水に招待されたシャノワールだった。

「シャノワール……？こんな所に霊子甲冑があるのか？」

「いいから早く！！」

訝しむ大神だが、エリカに急かされて中に入る。

「さあ、私の後について来て下さい！」

「遅い！もう、全員集合しているぞ！」

「大神さん、きちんと着替えられましたか？」

「あ、ああ。でも、その格好は一体……？」

いつもと違い、色違いの戦闘服を身に纏った二人に驚きを隠せない大神。

あのシャノワールの地下に、こんな設備があったなど、思いも寄らない事だった。

そこへ、更に驚くべき人物が現れた。

「……全てを明らかにする時が、来たようだな。」

「迫水大使！」

「大神君……、いや、大神中尉。君は留学のためだけに巴里に来

たのではない。新たに結成された、『巴里華撃団花組』の隊長として、この巴里に配属されたんだ。」

「巴里華撃団……。」

想像もしなかった事実に、驚きを隠せない大神。
当たり前だ。
何せ大神は今まで、巴里には留学と聞かされていたからだ。

「そして、巴里華撃団の総司令が……。」

そう言って、迫水は後ろに座る人物に目をやった。
そこには、大神のよく知る人物が座っていた。

「ようこそ、ムッシュ大神。巴里華撃団は、貴方を歓迎するわ。」

「ライラック伯爵夫人!!まさか、貴女が……!!」

そのまさかだった。
ライラック伯爵夫人はシャノワールのオーナーグラン・マにして、巴里華撃団花組の総司令だったのである。

「そうさ。そして、隊員はこの二名。エリカ・フォンティーヌと、グリシーヌ・ブルーメールだよ。」

「隠してた訳じゃないんです。大神さんが隊長とは思わなくて……。」

「……よろしく頼む。」

改めて大神に挨拶を述べる二人。
すると、グラン・マが口を開いた。

「さてムッシュ。色々聞きたい事があるんじゃないかい？」

「いえ！今は一刻も早く出撃準備を！」

大神は迷わず即答した。
今は緊急事態である。
気になる事はあるが、説明は敵を倒してからで十分だった。

「よし、じゃあムッシュの見たいものを見せてあげるよ。」

そう言って、グラン・マは徐に立ち上がった。

「ウダウダしている奴ぁ、セーヌ河に叩き込むぞ！さっさとやりやがれ！！」

地下の格納庫。
そこには、帝劇を想起させるような空間が広がっていた。
その空間内で、作業着を着た人達が慌ただしく動いている。

おそらくは、光武の整備に追われているのだろう。

「威勢がいいね、ジャン班長。いつ見ても惚れ惚れするよ。」

「オーナー、出撃準備中は立入禁止ですよ。」

ジャンと呼ばれた男が、やれやれという口調でため息をついた。

どうやら彼が、巴里華撃団の整備担当らしい。

「つれないねぇ。ムッシュ大神、霊子甲冑の面倒を見てくれるジャン整備班長だよ。」

「アンタが隊長さんか！整備班長のジャン・レオだ。」

「は、はい。ジャン班長、よろしくお願いします！」

熱い握手を交わす二人。

すると、ジャンは大神を格納庫の奥に案内した。

「ほら、こいつが隊長さんの乗る『光武F』だ。」

「凄い……、これが俺の光武なのか！」

かつて帝国華撃団時代に扱っていたそれと遜色ない完成度に、感嘆の声を上げる大神。

白に青いラインが入ったシリウネス鋼を用いた強固な装甲と、二刀の大太刀。

シャノワール整備班と神崎重工の科学の結晶が、そこにはあった。

「それだけじゃねぇ。俺の可愛いもう一人の子供を見せてやるよ。」

そう言って、ジャンは大神を更に奥へ連れてきた。

「これは……、地下列車ですか！？」

そこには、帝劇の轟雷号とタメを張るスケールの、巨大列車があった。

「ああ、エクレールって言うんだ。こいつで隊長さん達を、巴里の何処でも届けてやるよ。」

ジャンが胸を張って自慢したその時、メルから通信が入った。

「オーナー！敵怪人に動きがありました！作戦司令室にお戻り下さい！」

「さあ、仕事の時間だ。ムッシュ、準備はいいね？」

「……敵は警官隊を制圧。シャンゼリゼ通りを凱旋門方面に進撃中ですぅ！」

「さあムッシュ、この状況、どう判断する？」

シーの報告に頷き、グラン・マが問い掛けた。

すると、大神は数秒考えたのち答えた。

「まずは敵の蒸気獣を全滅させましょう。その後、怪人を撃破しま

す。」

「いい答えだ。ムッシュ、後は任せたよ！」

期待通りの答えに安心して、グラン・マは大神に全ての権限を委ねた。

「よし、エリカくん、グリシーヌ、準備はいいか？」

「はい！いつでも大丈夫です！バシッと行きましょう！！」

「このグリシーヌ、覚悟は常に出来ている！心配は無用だ。」

二人の返事に頷き、大神は出撃命令を出した。

「巴里華撃団・花組、出撃せよ！！」

「くっ、退却だ！！」

銃撃が全く通用しない相手に、エビヤン警部は遂に退却命令を出した。

たちまちに逃げ出す警官隊の車を、巨大な鉄の固まりが押し潰す。
シゾーの操る蒸気獣、『ポーン』である。
ざっと数えて十体弱のポーンが、凱旋門前を練り歩いていた。

「ウーッサッサッサ！いいザマだピョン！」

退却する警官隊を、ポーンの奥にいるシゾーが笑った。

「さあ、隠れてないで出て来るピョン！！」

邪魔物を蹴散らし、ダイゴの姿を探すシゾー。
その時、上の方から声が響いた。

「そこまでです！！」

「何っ……！？」

突然の声に驚くシゾー。
すると、ポーンの前に赤、白、青の三つの光武Ｆが姿を現した。

「巴里華撃団、参上！！」

それは、巴里に現れた魔を討つ、人類の希望だった。

「貴様、一体何者だ！何故ウサギが人を襲う！」

「ウサギさん、貴方は本当は悪いウサギさんじゃないはずです！」

「ウサギウサギ言うなピョン！！シゾーという名前があるピョン！」

やはりウサギと呼ばれるのは嫌なのか、シゾーは地団駄を踏む。

すると、今度はグリシーヌが追い撃ちをかけた。

「ウサギに名前など要らぬ。貴様の悪事もそこまでだ！」

「まだ言うピョンか！ポーンども、奴らを潰すピョン！！」

そう叫んで、シゾーは姿を消した。

それに伴い、命令を受けたポーン達が一斉に三人に迫る。

「目標、敵蒸気獣の撃破！みんな、行くぞ！！」

「「了解！」」

二人の確かな返事に頷き、大神は二刀を構えて飛び出した。

初めての戦いにも関わらず、巴里華撃団はさしたる苦戦もなくポーンを全滅させた。

初陣で士気が高まっていた事もあったが、大神の指揮の上手さも大きかった。

巴里華撃団はそれぞれ使用する武器が異なる。
大神は二刀、エリカはマシンガン、グリシーヌは巨大な斧といった具合だ。
大神はエリカを中央に置いて敵を掃射させ、グリシーヌと二人で左右か、ポーンに攻撃を仕掛けたのだ。
この作戦が功を成し、ポーンは瞬く間に沈黙した。
これに一人苛立っているのが、外ならぬシゾーだった。

「お、おのれ巴里華撃団……、許してやらないピョン！！」

「なんですか、このウサギさんは。見かけばかりで全然弱いじゃないですか。」

すると、そこに一人の男が顔を出した。
先程パーティーで大神を馬鹿にした貴族、ダニエルである。

「こらこら、そこのウサギさん。おいたは駄目ですよ、おいたは。このダニエル様がお仕置きを……。」

「こうなったら……、出て来るピョン！蒸気獣『プレリュード』！」

シゾーがそう叫んだ時だった。
凱旋門を飛び越えて、巨大なウサギの姿をした蒸気獣が現れたのである。

「うわあっ！な、何だ！話が違うじゃないか！」

先程の強気な態度から一転し、ダニエルは尻餅をついた。

「ぱ、巴里華撃団とやら！ミーを守らせてやる！早く助けろ！！」

ダニエルがそう言うより早く、大神の光武Ｆが飛び出した。
それと同時にプレリュードの両腕からガトリング砲が連射される。

「くっ……。」

「な、何をするんだ！服に砂煙をかけるとは……！」

「ここは危険です！早く安全な所へ！」

「ミーに命令するな！この役立たずの身の程知らずめ！！」

助けた礼一つなく侮蔑の言葉を吐き捨て、ダニエルは逃げ出した。
そして、ようやくシゾーの攻撃が一段落し、大神は二刀を構え直した。

「よし、みんな行くぞ！」

「待て。どういうつもりだ！」

プレリュードに攻撃しようとした大神に、グリシーヌの声が飛んだ。

「貴公は日本人だ。巴里に来て間もないのに、何故巴里の人間を？
ましてや、先程の者の愚弄に何故怒らぬ？」
グリシーヌは、斧を突き付けて問い詰めた。

「貴公には日本人としての……、男としての誇りというものがないのか！？」

すると、大神はハッキリと告げた。

「日本だろうが巴里だろうが、そんなものは関係ない！」

「何……！？」

「全ての人々の幸せを守るために戦う。それが俺の誇りだ！」

この世界における全ての人々が笑っている事。
それが大神の願いであり、それを守る事が、大神の誇りだった。
帝劇時代に共に戦った、あの光の勇士のように……。

「大神さん……！！」

「ほう……！」

大神の言葉に、エリカは感銘を受け、グリシーヌも意外な顔をする。
そして、大神は二刀を翳した。

「目標、巨大蒸気獣の撃破！みんな、行くぞ！」

「「了解！！」」

ウサギ姿の蒸気獣プレリュードは、三対一の状況にも関わらず、花組を苦戦させた。
凱旋門に現れた時の、ウサギ特有のジャンプ力を使い、包囲されても簡単に脱出してしまうからだ。

「くそっ！ちょこまかと素早い……！！」

自慢の斧による一撃が中々加えられず、グリシーヌが悔しげにぼやく。
一方の大神は、冷静にプレリュードの動きを読み取っていた。

「……、よし！エリカくん！奴の両足を狙撃してくれ！！」

「了解！！」

大神に言われ、エリカのマシンガンが火を噴いた。

「し、しまったピョン！！」

シゾーが気づいた時には遅かった。
既にエリカのマシンガンで無数の弾丸を一度に浴びたプレリュードの両足は、小さい爆発とともに黒い煙を上げ始めたのだ。

「これでジャンプは使えないぞ！シゾー、覚悟しろ！」

二刀を構えて叫ぶ大神。
しかし、シゾーの隠し玉はプレリュードだけではなかった。

「これで勝ったと思うなピョン！来るピョン！超古代怪獣メルバ！

！」

シゾーがそう叫んだ時だった。
遥か上空で咆哮が聞こえたかと思うと、一体の竜にも似た怪獣が現れたのだ。
全身に無数の穴を持ち、大きな翼を広げて凱旋門に降り立つメルバ。
そのスケールに、花組は戦慄した。

「ば、馬鹿な……。こんな化け物を使役しているというのか……。」

流石のグリシーヌも、驚きを隠せない。
メルバは凱旋門よりは小さいとはいえ、光武Fの5倍の高さがある。
とてもではないが、初戦で相手に出来るレベルではない。
一方、劣勢だったシゾーは状況が好転したと笑った。

「ウーッサッサッサ！巴里華撃団！覚悟するピョン！メルバ、あいつらを踏み潰すピョン！」

「ガアアアッ！！」

メルバは甲高い咆哮を上げると、目から赤い光線を放った。

……しかし……、

「……あれ……？」

いつまで経っても攻撃が来ない事を不思議に思って見てみると、メルバは何やらやってしまったという顔で固まっている。
見ると、プレリュードが全身から煙を上げていた。

どういう訳か、メルバは間違えてプレリュードを狙撃してしまったのである。

「ま……まさか自分の怪獣にトドメを刺されるとは……。」

息も絶え絶えに、シゾーは無念の叫びを上げた。

「納得出来ないピョーン！！」

その言葉とともに、プレリュードは大爆発した。

しかし、大神達は喜ぶ訳にはいかなかった。

何故なら、目の前には超古代怪獣メルバが立ちはだかっているからだ。

「ガアアアッ！！」

メルバの咆哮が凱旋門を中心に鳴り響いた。

「あれが……災いなのか……？」

凱旋門の影に隠れて一部始終を見守っていたダイゴは、驚きと恐怖の入り混じった表情でメルバを見ていた。

目の前の三体の光武Ｆは懸命に立ち向かっているが、あの大きさでの攻撃は雀の涙でしかない。

「……巴里華撃団……。」

それでも必死に立ち向かう花組を見て、ダイゴは巨人の言葉を思い出した。

（光を継ぐ者よ、今こそ封じられし力を目覚めさせる時だ。）

「……僕も……。」

巴里華撃団はあんなに頑張っている。

自分にも……、光を継いだ自分にも何かやれる事があるはずだ。

そう思った時だった。

ダイゴの服のポケットが、急に光を放ったのだ。

「え……？」

それは、両親の形見の彫刻、『スパークレンス』を入れたポケットだった。

試しにスパークレンスを取り出したダイゴは、驚きで目を見張った。

何故なら古びた青銅のスパークレンスが、光り輝く金と銀の彫刻に変わっていたからである。

まるで、光に目覚めたかのように。

「……光……。」

静かにそう呟いた時、メルバの咆哮が耳に届いた。

「！！」

それと同時に目の前で上がる火柱。
もはや、怖がっている場合ではなかった。

「父さん……母さん……、エリカさん……。」

スパークレンスを握り締め、大切な人の名前を呼ぶ。
すると、仄かにスパークレンスの光が強まった。

「僕に……、勇気を授けてくれ！！」

そう叫び、ダイゴはスパークレンスを高々と空に掲げた。
すると、スパークレンスの先端が翼のように二つに割れ、中のクリスタルがまばゆい光を放った。
光は柱となってダイゴを包み、その体を光へと変えた。
災いを討つ、希望の光へと……。

それは突然現れた。
凱旋門に出現した光の柱。
その輝きに、その場にいた誰もが一瞬目を奪われる。
そして光の柱が消え、その中から現れた存在に、誰もが驚愕した。

「……光の……巨人……？」

凝視したまま、大神が呟いた。
赤と紫と銀の体色。胸に輝く青いカラータイマー。
そこにいたのは、間違いなく光の巨人。
ウルトラマンだった。

「チャッ！」

ウルトラマンはメルバを見ると、徐に構えを取った。
すると、メルバもウルトラマンに狙いを定め、襲い掛かって来た。

「ジュッ！！」

「ガアアアッ！」

互いにぶつかり合い、激しい衝撃が生まれる。
そのまま押し合っていた状況が数秒続いたのち、ウルトラマンは一瞬の隙を突いてメルバを投げ飛ばした。

「チャーッ！！」

けたたましい轟音と共に地面に激突するメルバ。
そこに、ウルトラマンが馬乗りになって追撃した。

「ハッ！ハッ！デュアッ！」

仰向けに倒れたメルバに、激しいパンチのラッシュを見舞う。
しかし、敵もさるもので、メルバはその状態からウルトラマンに目の光線を撃った。

「ジュワッ！？」

不意を突かれた攻撃を至近距離で喰らい、ウルトラマンは後ろに倒れる。
その隙に、メルバは立ち上がって翼を広げた。

「ハッ！」

ウルトラマンはすかさず起き上がって飛び掛かるが、メルバはその寸前に空高く舞い上がった。

「ガアアアッ！」

そして、物凄いスピードで空を疾駆し、ウルトラマンに体当たりしたのだ。

「ジュワッ！？」

その衝撃で倒れるウルトラマン。
しかし、メルバは間髪入れずに再び目の光線を発射して来た。

「ジュワッ!?」

倒れるウルトラマンに、再び体当たりが見舞われる。
その時、ウルトラマンの胸のカラータイマーが、赤く点滅を始めた。

「……まずい!早く勝負を決めないと……!!」

思わず大神が叫ぶ。
しかしメルバは、逃がさないとばかりに光線を発射した。

「チャッ!」

それを前転で避けると、ウルトラマンは立ち上がり、両腕を額のクリスタルの前で交差させた。

「シュワッ……、ハッ!!」

そして勢い良く両腕を降ろした瞬間、ウルトラマンの体色が紫と銀に変化した。
空中戦を得意とする、スピードのスカイタイプである。

「ガアアアッ!」

トドメとばかりに光線を撃つメルバ。
しかし、ウルトラマンは驚くべき速さで飛び上がり、蹴りの体勢でメルバに突っ込んだ。
スカイキック……、目にも止まらぬ速さで敵に空中からキックを見舞う、スカイタイプの技の一つだ。

「ガアッ!?」

思わぬ反撃に遭ったメルバは、そのまま地面に落ちる。
すると、ウルトラマンは空中で両腕を左右に水平に広げ、頭上で合わせた。

「ハァァァ……！」

ランバルト光弾……、
頭上で合わせた手にエネルギーを集中させ、光の矢にして敵に撃ち込むスカイタイプの必殺技だ。

「ジュッ！！」

頭上で合わせた両手を左腰に下げ、右手を突き出す。
すると、エネルギーを具現化した光の矢が放たれ、メルバの胸に深々と突き刺さった。

「ガアアアア……！！」

断末魔の悲鳴を上げたのち、メルバはゆっくりと仰向けに倒れ、大爆発した。

「チャッ！」

それを確認して、ウルトラマンは空高く飛び立った。

「……終わりましたね……。」

ウルトラマンが去ったのち、エリカが呟いた。

「ああ、エリカくんもグリシーヌも、初戦ながらよく頑張った。」

シゾーの撃破には至らなかったものの、ポーンを倒す過程は十分なものがあった。

その事から、大神は二人に労いの言葉をかけた。

「はい！ありがとうございます、大神さん！」

「……まあ、最後はあの巨人に奪われてしまったがな。」

「ウルトラマンの事かい？」

「えっ？大神さん、さっきの巨人を知ってるんですか？」

驚いた様子で尋ねるエリカ。

すると、大神は笑って答えた。

「ああ。本人じゃないけどね。」

そう言って、大神は話を変えた。

「……ところで、日本の帝国華撃団には、戦いに勝利した後で必ず行う約束事があるんだ。今から手本を見せるから、二人とも俺に

続いてやってみてくれ。」

「は、はい！」

何を思ったのか、緊張して応えるエリカ。
しかし、これから二人は信じられないものを目撃する事になる。

「それでは……、勝利のポーズ、決めっ！！」

「……何だそれは……。」

「大神さん……、どうしちゃったんですか……？」

呆れた表情のグリシーヌと、驚いて固まっているエリカ。
それを見て、大神は思わず慌てた。

「お、おい！二人ともやれよ～！！」

その日の夜、花組は初陣の勝利を祝ってエッフェル塔前にきていた。
何でも、花火を見るのだそうだ。

「ところで大神さん。あのウルトラマンって……、一体どんな人

なんですか？」

ふと、大神の隣に立つエリカが尋ねた。

「そうだな……、俺達がピンチになると、何処からともなく現れて助けてくれる正義の味方……、かな？」

帝国華撃団時代に助けてくれた勇士を思い出し、大神が応える。

すると、不意にグリシーヌが横槍を入れて来た。

「どうだかな。所詮は得体の知れぬ奴。そんな者に巴里の平和を委ねる訳にはいかん。」

それだけ言って、グリシーヌはその場を立ち去る。

その後ろ姿を見ながら、エリカは呟いた。

「……私には、得体の知れない人には見えなかったけどな……。」

「どういう事なんだい？」

大神が尋ねると、エリカは考え込むように答えた。

「初めて見たはずなんですけど……、何でだろう。初めて会った気がしないんです。まるでずっと前から知っていたような……、そんな気がするんです……。」

エリカのこの感覚は正しい。

何故なら、ウルトラマンの正体はダイゴなのだから。

最も、この時点で二人がその事実を察する余地はないが。

そのダイゴの声が聞こえて来たのは、その時だった。

「エリカさ～ん！！」

「え？……ああっ！！ダイゴさんの事すっかり忘れてました！！」

「ダイゴ……？もしかして、彼が……？」

手を振りながらこちらに走って来るダイゴを指差し、大神がエリカに尋ねた。

シャノワールでぶつかった時はすぐ迫水に会いに行ったので、知り合うチャンスがなかったのだ。

「あら、大神さんダイゴさんの事知らなかったんですか？」

意外そうな顔で驚き、エリカはダイゴを前に連れてきた。

「それじゃ、彼がダイゴさんです。覚えてあげて下さいね。」

「ああ。ダイゴ、よろしく。」

「……うん。よろしく……。」

渋々ながらも、ダイゴは差し出された大神の手を握った。

「ごめんなさい、ダイゴさん……。ほったらかしにして……。」

「もういいんだよ、エリカさん……。無事で良かったよ……。」

「うふふ……、ありがとう。」

とびきりの笑顔を見せるエリカに、ダイゴも大神も、心が洗われる気がした。

「……光の巨人か……。」

作戦司令室にてグラン・・マは一人、巴里華撃団初陣の映像を見ていた。

「始まったんだね……、巴里の災いが……。」

そう呟き、机の上に広がる本に目を落とした。

「伝説の巨人……ティガの復活……だね。」

グラン・マの口から出たティガという言葉。

それは、机の上の本の見出しに書かれた言葉と同じであった。

光を継ぐ者（後書き）

《次回予告》

皆さ～ん、こんにちは！

マジカルエンジェル・コクリコのマジックショーへようこそ！

ボク、頑張るから、皆さん笑顔になってね！

次回、サクラ大戦３！

《笑顔の仮面》

愛の御旗のもとに……

ボク……幸せだよ……

笑顔の仮面（前書き）

あの羽根つきミニゲームの難易度は異常。

「何か、つまんない……。」

勘弁してよ、コクリコ……。

笑顔の仮面

「……全員揃ってるね。」

作戦司令室にて、グラン・マは周りを見渡して言った。

「今日集まってもらったのは他でもない。ムッシュの身分は、正式に巴里華撃団花組の隊長となった。それに伴い、ムッシュには新しい任務に就いてもらう。」

「新しい任務？一体どんな……？」

任務と聞いて表情を固くする大神。

すると、グラン・マはニヤリと笑って何かを取り出した。

「ほら、こいつだよ。」

「……いいっ！？」

それを見た瞬間、大神の表情は凍り付いた。

何故ならそれは、大神が帝国華撃団時代に着用していたモギリ服だったからだ。

と、いう事は……、

「もしかして、またモギリをやるんですか……？」

まさかと思って尋ねる大神。

すると、グラン・マはしたり顔で言った。

「当たり前じゃないか。ついでに店内のボーイも兼任してもらうからね。」

「はい……。」

まさか巴里に来てまでモギリをさせられるとは思わず、ため息をつく大神。

すると、グラン・マがシーに声をかけた。

「シー、あれをムッシュに渡しておくれ。」

「ウィ、オーナー。はい、携帯キネマトロンです。」

そう言って、シーは大神にハンドサイズの機械を手渡した。

キネマトロンは、帝国華撃団のメンバーである李紅蘭が発明したもので、離れた所から通信が出来る画期的なメカだ。

しかし、トランク程の大きさのために持ち歩きにくいのが難点であった。

それを克服したのが携帯キネマトロンで、通信は片方しか出来ないものの、ポケットに入れて持ち運びが出来るので、格段に通信がやりやすくなったのだ。

「さてムッシュ。他にも色々聞きたい事があるだろう?」

「はい。巴里華撃団とは……?」

前回は緊急事態であったために省略したが、大神は当然とも言える疑問を口にした。

「それじゃあ、巴里華撃団設立の経緯から話そうか。」

そう言って、グラン・マは一冊の古びた本を取り出した。

「こいつは古い時代から伝えられて来た巴里の予言書だよ。この中に、ある言い伝えが残されている。」

「言い伝え？」

訝しむ大神に、グラン・マは重々しく頷いき、話し始めた。

巴里に災いを齎す闇が蘇りし時、希望の光は目覚める。
その書き出しで始まる段落には、今回の事件と酷似する内容が記されていた。
巴里を襲う魔の存在。
それに立ち向かい、巴里を守る希望の光。
遥か昔、自分達を守ったその光を、人々は讃え、こう呼んだ。

……ティガと……

「……しかし、必ず巨人が復活するとも限らない。それで、帝国華撃団をモデルとして霊的組織、巴里華撃団設立に至ったのさ。」

曖昧な希望にすがるより、自分達が希望となる。
言わば、巴里華撃団はティガと対を成す希望の存在だった。

「で、シャノワールなんだけどね。流石のムッシュも驚いたろう？」

「はい。まさかシャノワールが総司令部だったとは……。」

実際は帝国華撃団も本部を劇場に構えていたので同じようなものだが。

「では、ウルトラマンティガというのは……。」

大神は、いよいよ核心とも言える問題を口にした。

「それは、前回の戦いのレポートにそくして話すよ。メル、レポートを読み上げておくれ。」

「ウィ、オーナー。シャンゼリゼ通りに出現したウサギの怪人、及び怪獣は妖力が確認され、巴里の破壊と混乱を企てたようである。怪人は花組に、怪獣は巨人に倒されたために正体は未だ不明である。ただ一つ言える事は、伝説の災いと光が蘇った事である。」

早い話が、ティガが復活した以外は何も分からないという事だ。

「本には災いとしか書いてない。有力な情報はないね。」

「だが、何者かが巴里を狙っている事は確かだ。それを止められるのも私達だけという事もな。」

あくまでティガをあてにしないつもりなのか、グリシーヌはそう言い放った。

「それだけ分かれば上等さ。さあ、夜の支度をするよ。」

そうグラン・マが締めくくり、その場は解散となった。

「……ティガ？」

「そうです！そのティガが、巴里を守ってくれたんです！」

おうむ返しに聞くダイゴに、エリカは興奮気味に語った。
会議が終わった後、エリカは教会でダイゴにティガの活躍を語っていたのだ。
実際の所本人は目の前にいるのだが、それをエリカが知るはずもない。
ダイゴもまた、それを話すそぶりを見せず、寧ろエリカの話に驚いて見せた。

「で、そのティガが怪獣をやっつけた訳？」
「そうです！ハッとかチャッとか言って……！」

ハイテンションでティガの真似をするエリカ。
すると、エリカが突き出した右手が、ダイゴの後ろの棚にぶつかった。
その拍子に棚の上にあった花瓶が落下し、真っ二つに割れてしまった。

「あ……！」

「エ、エリカさん……。」

冷や汗をかくエリカと、呆れた表情を浮かべるダイゴ。
すると、そこへレノ神父が駆け付けた。

「どうされました？何か割れる音が……。」

直後、ダイゴが無言で指差した方を見てレノ神父は固まった。
何故なら……、

「こ、こ、これは！設立時から共にあった大切な花瓶が……！」

その花瓶の無惨な姿に、レノ神父は膝をつき、天を仰いで嘆いた。

「主よ……、どうかこの罪をお許し下さい……。」

「あ、あの……、ごめんなさい！私、同じもの買って来ます！」

流石にいたたまれなくなり、エリカはダッシュで教会から飛び出した。
教会に残されたダイゴは、レノ神父に声をかけた。

「神父様……、エリカさんも反省しているし、許してあげてくれない？」

「……はい。エリカさんもわざとではないでしょうし、形あるものは、いつかは壊れますです、ハイ。」

ハンカチで涙を拭くレノ神父。
すると、ダイゴは本題に入った。

「そうだ、神父様。この前の事なんだけど……。」

「ハイ。希望の光が、復活しました。ダイゴさん、見つけたんですね。」

「うん。エリカさんはティガって呼んでた。あれが、巨人の名前なのかな？」

ダイゴが尋ねると、レノ神父は考え込むそぶりを見せた。

「おそらくその通りです、ハイ。かつて東の地にも、同様の巨人がいたと聞きます。」

「……ウルトラマン……ティガ……。」

その名を呟き、ダイゴはポケットから光の証、スパークレンスを取り出した。

前まで錆びた青銅だった彫刻は、見違える程の輝きを放っている。

光を継ぐ者。

自分がまさか、そんな運命にあったとは、ダイゴも思わなかった。

しかし、現にティガは自分を後継者に選んだ。

果たしてそれが偶然なのか、それとも必然なのかは分からないが、今のダイゴに出来る事は、その力を受け入れる事だけだった。

「えっと……、確かこの辺りだよね……。」

花瓶を買いに行ったエリカを探しに、ダイゴは市場に足を運んだ。
巴里での生活用品は、大概この市場に揃っている。
おそらくエリカもここにいると、ダイゴは踏んでいた。

「あ、そこの人ちょっといい？」

「ん？僕の事？」

声がした方を見ると、小さい女の子がダイゴを下から覗き込んでいた。
フランス人ではないのだろうか、肌がやや黒っぽい。
帽子を被った活発そうな少女だった。

「はいコレ。よかったら来てね。」

そう言って、少年は一枚のチラシをダイゴに手渡した。

「シルク・ド・ユーロ？」

一番上の見出しには、白い文字でそう書かれていた。
シルク・ド・ユーロと言えば、ヨーロッパでも指折りのサーカス集団である。
確かつい最近、この巴里に来たばかりだった。

「それにしても、君は……？」

ふと、ダイゴは少女を見た。
チラシを配っている事から、サーカスの関係者である事は間違いないだろう。
しかし、見る限り少女は１０歳前後。
まさかこの歳で働いているというのか……？
そう考えるダイゴに、少女は胸を張って答えた。

「ボクはコクリコ。サーカスの団員だよ？」

正にダイゴの予想そのまんまだった。
コクリコと名乗った少女は、シルク・ド・ユーロの団員だったのだ。

「へぇ……、本当に？」

「何だよ～、疑ってるの？」

膨れて見せるコクリコだが、確かに１０歳くらいでサーカスが出来るというのは、俄かに信じにくい話だ。
その時、市場の奥が急に騒がしくなった。
見ると、市場の真ん中で馬が暴れているではないか。

「よ～し、見てて！ボクがサーカス団員だって事、証明してあげる！」

「えっ！？ちょっと……！」

ダイゴを余所に、コクリコは市場のテントに飛び移った。

その身のこなし、信じられない軽さだ。

「す……凄い……！」

その様子に、ダイゴは驚いて見ている事しか出来なかった。

「君……凄いね……。」

呆気にとられた様子で、大神が馬に乗るコクリコに声をかけた。
いきなり屋根を跳んで現れたかと思うと、暴れる馬の背中に乗り、軽く落ち着かせてしまったのだ。

「どう？ボクが団員だって事、納得してくれた？」

得意げに胸を張るコクリコ。
すると、そこにダイゴが駆け付けた。

「なるほど……、納得だよ。」

「ダイゴ！どうして君が？」

「……それはこっちの台詞だよ。何でアンタがエリカさんと一緒にいるのさ。」

大神の姿を見るや、ダイゴはあからさまに不機嫌な表情を見せた。

「（俺……、何かしたのか？）」

言われのない視線に困惑する大神。
すると、エリカが助け舟を出してくれた。

「実は、花瓶を買おうと市場に来たら大神さんに会ったんです。」

あの後、エリカは割ってしまった花瓶と同じものを買うべく市場に来ていたのだが、たまたま野菜を注文しに来た大神と会い、二人で花瓶を探していた。
その前で馬が暴れだし、結果としてコクリコに助けてもらったのだ。

「オジサンも中々やるね！カッコ悪かったけど。」

「オジサン？酷いな……、これでもまだ２３なんだぞ？」

初めてオジサン呼ばわりされ、大神はショックを見せた。
まだ大神は２３なのだ。
まだまだオジサンではなくお兄さんである。
すると、コクリコも失礼だと思ったのか、すぐに謝った。

「あ、ごめんなさい。ボクの名前はコクリコ。オジサン……じゃなかった、お兄さんは？」

「俺は大神一郎。シャノワールでモギリをしてるんだ。」

きちんと訂正する所が可愛らしく思い、大神は微笑みながら名乗る。
すると、エリカとダイゴも続いた。

「私はエリカ・フォンティーヌ。修道院のシスターなの。」

「そう言えば、僕もまだだったよね？僕はダイゴ＝モロボシ。教会に住んでるんだ。」

とは言っても、ダイゴは仕事を持っていない訳ではない。
教会の一員として、色々ボランティア活動等にも参加しているのだ。

「へぇ～、イチローにエリカにダイゴか。イチローもダイゴも変な名前だね。何処の国の人？」

「日本人だよ。君もフランス人じゃないね。」

コクリコの疑問に答えつつ、大神が指摘した。
すると、コクリコは笑顔で答えた。

「当たり。ボク、ベトナム人なんだ。」

ベトナムはインドシナ半島にある国だ。
確か少し前にフランス領になっているはずだった。
ホーチミンが革命を起こす事になるのだが、それはこの物語の終わったずっと後の事である。

「さっきは見事だったね。あの暴れ馬を止めるなんて……。」

「エヘッ、ありがとう。ボクね、動物が好きで、みんな話が出来ると思ってるんだ。」

ダイゴに褒められ、コクリコは照れた様子で言った。

すると、エリカがふと何かに思い出したように手を叩いた。

「あ、動物で思い出しましたけど、私花瓶が買いたいんでした。」

「……何処が繋がってるの。」

動物からどう連想すれば花瓶に辿り着けるのか。

ダイゴが呆れた口調で言うと、コクリコが胸を叩いた。

「買い物?だったらボクが案内するよ。市場には詳しいんだ。」

「本当!?実は花瓶を探してるの。これくらいの。」

そう言って、エリカは手で花瓶の外観を描いた。

花瓶の割には若干大きすぎないかと思うダイゴだが、敢えて黙っておく。

「わかった。花瓶はこっちだよ。」

そう言って、コクリコは市場の奥を指差した。

目をこらして見ると、確かに瀬戸物や骨董品が見える。

おそらくコクリコは何度も市場に出入りしているのだろう。

どの場所にどんな品物が置かれているか一瞬で判断出来るのが、何よりの証拠だ。

「やっぱり男の子ね。大神さんより頼りになりますね。」

感心したようにエリカが言う。

すると、コクリコは不意に振り返った。

「ボク、男の子じゃないよ。ほら。」

そう言って、コクリコは帽子を取った。
すると、左右の可愛い栗色のお下げ髪が現れた。

「女の子だったのか……。」

「普通気付かない？」

エリカと同じようにコクリコを男の子と思っていたのか意外そうな顔をする大神を、ダイゴがなじる。

「アハハハハ！いいよ、たまに間違えられるから。」

その場を取り繕うように、コクリコが笑った。

「さ、早く行こう。お店が閉まっちゃうよ！」
「コクリコ、ありがとう。おかげでいい花瓶が安く買えましたね。」

割ってしまったものより数段価値の高い花瓶を抱え、エリカがコクリコに礼を述べた。
コクリコは店を教えてくれただけでなく、その店の主人と値段交渉をして、１０００フランだった花瓶を２００フランまで下げてもらったのだ。
その業は、ネゴシエーターにも匹敵する。

「何だかコクリコに助けられてばかりだな。俺も何か手伝おうか？」

「本当！じゃあ手伝って。イチローだけでいいからさ。」

大神の申し出に、コクリコは目一杯の笑顔を見せた。

「それじゃ、僕達は花瓶を届けて来ます。」

「またね、コクリコ。」

そう言って、エリカとダイゴは一足先に市場を後にする。
すると、コクリコは早速市場を練り歩き始めた。

「こんにちは！今日も野菜クズもらっていくね。」

そう言って何処から取り出したのか、コクリコはバケツを手に片っ端から店の野菜クズをもらっていった。
剥いたジャガ芋の皮。ニンジンの先っぽ。ひん曲がったキュウリ。
市場を一周する頃には、バケツいっぱいに野菜クズが溜まっていた。

「じゃあイチロー、これ運んでね。」

「こんなに沢山……、どうするんだ？」

野菜クズなど集めて、一体何に使うというのか。
大神が尋ねると、コクリコは笑って答えた。

「みんなのゴハンなんだ。さあ、イチロー頑張って！」

そう言って大神を励ますコクリコ。
すると、そこに声がかかった。

「おや、コクリコじゃないか。またお仕事かい？」

「あ、おひげのおじさん！」

それは、実に優しい表情をした老紳士だった。
立派な白い口髭を蓄え、元気な印象がある。
コクリコは知り合いなのか、老紳士に手を振った。

「今日はどうしたの？」

「いや、リンゴでも買おうと思ってね。」

そう言うと、老紳士は一つの袋を取り出した。

「ところでコクリコ、お腹空いてないかい？パンを買ったんでね。君も如何です？」

「あ、ありがとうございます。」

初対面の老紳士にパンを差し出され、大神は戸惑いつつも受け取った。
すると、老紳士は大神の表情を読み取って自己紹介をしてくれた。

「私はロランス・ロランと申しまして、宝石商をしております。」

「俺は大神一郎です。テアトル・シャノワールのモギリをしています。」

そう答えて、大神はようやくいっちょ前に握手をした。
すると、不意にロランスが大神の目を見て言った。

「ほう、いい目をしていますね。」

「え？」

「人の目は宝石と同じ。その輝きで、善し悪しが分かるものなんですよ。」

それは、長年宝石と向き合って来たロランスだからこそ分かる事だった。

美しい宝石には誰もが惹かれる。

それと同じように、綺麗な目をしている者には、自然と輝くのだろう。

「大神君。君の目には美しい光があります。大切なものを守れる強い光が……。」

「はあ……、ありがとうございます。」

宝石の知識は持たない大神は満足な返事を返せず、一応の礼を述べるに留まった。

「ねぇねぇ、何の話をしてるの？早くパン食べようよ。」

話の内容が良く分からず、コクリコが急かす。

すると、ロランスは笑って答えた。

「そうだね。では、いただくとしようか。」

「……ここがシルク・ド・ユーロか……。」

大神とコクリコの二人と分かれた後、ダイゴはコクリコからもらったチラシを頼りにサーカスのテントの前まで来た。
コクリコの凄さは市場で十分理解した。
今度はそれを、サーカスで見たくなったのだ。
しかし、残念ながらサーカスはまだ始まっていないらしく、ガランとしている。

「……仕方ない、コクリコに挨拶でもしようか。」

そう呟き、ダイゴはサーカスの裏手に足を運んだ。
すると、そこにはオリの中の動物達に餌をあげる大神とコクリコの姿があった。

「……やあ、ダイゴじゃないか。」

ダイゴの存在に気付き、大神が声をかける。
すると、ダイゴは恥ずかしげに視線をずらしながら歩み寄った。

「いや、チラシをもらったからサーカスでも……って。」

「本当！ありがとうダイゴ！ボク嬉しいよ。」

よっぽどダイゴの言葉が嬉しかったのだろう。
コクリコはとびきりの笑顔を見せた。

「ところで、お二人はここで何を？」
「コクリコと一緒に、動物達のゴハンを市場で集めて来たんだ。」

そう言って、大神は手に持ったバケツを見せた。
市場で集めていた野菜クズは、動物達のゴハンだったのである。

「イチロー、ダイゴ、ほら見て。この間火の輪くぐりを失敗して……。」

そう言って、コクリコが一頭の虎を指差した。
見ると、右の前足に真新しい包帯が巻かれている。

「熱かったよね……、痛かったよね……。ごめんね、ボクがいたのに……。」

「コクリコ……。」

まるで自分の痛みのように、虎を優しく撫でるコクリコ。
その様子に、大神もダイゴもいたたまれない気持ちになる。
しかし、そこに別の男が現れた。

「コラ、コクリコ。練習だというのに何をサボっている？」

振り返ると、値段の高そうな葉巻を口にくわえた小太りの男が、コクリコを睨みつけていた。
その帽子には、高そうなダイヤモンドが光っている。
彼はドニクールと言って、このシルク・ド・ユーロの団長だった。

「は、はい。動物達のゴハンを貰いに行ってました。」
慌てて頭を下げるコクリコ。
すると、ドニクールは隅に置かれた野菜クズのバケツを見た。
「そうか、たっぷり貰えたようだな。」
満足げに笑うドニクール。
しかし彼は次の瞬間、とんでもない事を口にした。
「よし、明日から動物の餌代は半分に切り詰める。」
「そ、そんな！ムリだよ、みんなが可哀相だよ！」
ただでさえ野菜クズを貰わなければ動物達の空腹を凌いでやれない。
にも関わらず、これ以上餌を減らされては手に負えなかった。
だがしかし、ドニクールはコクリコの抗議を鼻で笑い、あろう事か
怪我した虎を蹴りつけた。
「なら、怪我した虎を売る。毛皮にすれば儲かるだろう。」
「や、止めてよ！！」
コクリコは虎を庇って叫んだ。
虎は怪我した患部をドニクールに蹴られ、苦しんでいる。
「止めろ！怪我をした動物を蹴る等、サーカスの、ましてや団長の
する事ではないぞ！」

流石の大神も腹を立て、コクリコを庇うように前に出た。

「ふん！部外者が口出しをするな。それともコクリコ、俺に文句でもあるのか？」

「……ありません。」

団長の権限を振りかざすドニクールに逆らえず、抗議の声を飲み込むコクリコ。

すると、ドニクールは満足げに笑った。

「なら良い。開幕までに腹ごしらえをしておけ。」

そう言って、ドニクールはテントから出て行った。

「……何だあの男は。」

「葉巻は吹かす、動物には手を出す……最悪だね。」

大神の言葉に同意するように、ダイゴもドニクールという男に対しての不快感を露にした。

サーカスは超人的な業を披露しておひねりをもらうショーだ。

当然本番までに大変な練習がいるし、失敗すれば大怪我どころでは済まされない。

だからこそ、サーカスは団員全員が一つにまとまり、互いに助け合う事が必要不可欠だ。

だが、ドニクールという男にはそれが塵程にもない。

葉巻は動物の身体に悪影響を及ぼすし、動物や団員に危害を加える等、人として言語道断である。

大神もダイゴも、よくあんな男が団長になったと不思議に思った。

それもそのはず。何故ならドニクールは、本来の団長である彼の弟が病気なのをいい事に、金でこのサーカスを乗っ取ったのだから。

「いいんだ……。もういいよ……。」

それを指し示すように、コクリコが小さい声で言った。

「イチロー、ダイゴ、ありがとう。ボク、凄く嬉しかったよ。」

そう言って、コクリコは夕飯を持って来た。

「……これがコクリコの夕飯なのか？たったこれだけが……。」

「……酷い……。」

パンが一口と、野菜のふやけたスープ。
まるで残飯のような酷い夕飯に、大神もダイゴも信じられない面持ちを見せる。
しかし、コクリコは笑っていた。

「ボクにはご馳走だよ？だって毎日食べられるもん……。」

「それで、奴に逆らえないんだね……。」

ダイゴの言葉が、全てを物語っていた。
確かに反発する事は出来るだろう。
しかしあのドニクールの事、そんな人間はすぐさまお払い箱にするはず。
そうなればどうやって生きていくのか。
そう考えれば、苦しくてもドニクールに従う他なかった。

「我慢なんてしてないよ。……ボク……幸せだよ……。」

その時、サーカスの開幕を知らせるベルが鳴った。

「あ、もう行かなきゃ。じゃあねイチロー、ダイゴ。」

「コクリコ……、我慢しているじゃないか……。」

大神がそう呟いた時、テントの方から動物達の叫び声が聞こえて来た。

「な、何だ!?」

「テントの方だ。行くぞ、ダイゴ!」

ショーにしては不自然な叫び声に、大神とダイゴはテントに急行した。

「みんな止めてよ!何でボクの言う事聞いてくれないの!?」

テントの真ん中でコクリコが叫ぶ。

何と、動物達が突然暴れ始めたのだ。

まるで、ドニクールに逆らえないコクリコの代わりに怒るように。

「ええい騒がしい!構わん、逆らう動物は殺してしまえ!」

「止めてよ!!ボクが何とかするから!」

ドニクールの言葉に血相を変えるコクリコ。

しかし、動物達は怒りを収めてくれない。

「お前達、お鎮まり！！」

その時、テント内に透き通る声が響いた。
すると、今まで怒りの咆哮を上げていた動物達が、それこそ蛇に睨まれた蛙のように大人しくなったのである。

「す、凄い……。」

その様子に、驚くコクリコ。
見ると、南国を思わせる衣裳を来た若い女性が歩いて来るのが見えた。

「お待たせしましたわ、ドニクール団長。今日から雇われる事になったカルチェラです。」

「あ、ああ。アンタが新入り予定だったカルチェラさんか。助かったよ。」

鼻の下を伸ばして、ドニクールが言った。

「凄い……、あの人動物と通じ合っているんだ……。」

「ふふ、よろしくお願いするわね。」

そう言って、カルチェラはこちらに微笑みかけた。

その夜、巴里の裏通りに悲鳴が轟いた。

「うわあああっ！！」

「イヒヒヒヒ……。素直に渡せば、苦しまずに済んだのにね……。」

そう言って現れたのは、全身が蛇の鱗に覆われた怪物だった。
怪物の目の前には、悲鳴を上げた男が謎の巨大な口に一呑みにされる姿がある。

「さて……。」

怪物は口が男を骨も残らず食い漁ったのを見届けると、残った服のポケットに手を入れ、何かを取り出した。
それは、高価なルビーだった。

「チッ、また違ったね。」

目的の物と違ったのか、怪物は落胆の表情を見せた。

「それにしても人間は、宝石を何だと思ってるんだろうね。自然の恵みに手を加えるなんてさ。……それを庇う裏切り者の気がしれないよ。」

そう言って、怪物はルビーを飲み込んだ。

「さて、証拠隠滅も済んだし、ずらかるかね。」

そう言って、怪物は男の服を丸呑みにしてその場を後にした。

「……待ってなよティガ。このピトン様は何処までも追い詰める。それこそ蛇のようにね……。」

夜の巴里に、不気味な笑い声が響いた。

翌日、ダイゴはチラシを持ってシルク・ド・ユーロに赴いた。昨日の一件から、コクリコの様子が気になったからだ。

「今日は凄い人気だな……。」

昨日とは打って変わり人に溢れるサーカスにダイゴは驚くと共に、シルク・ド・ユーロの偉大さを改めて感じた。

「ダイゴさ～ん！」

エリカの声が聞こえて来たのは、その時だった。
見ると、エリカを先頭に大神とグリシーヌ、メルとシーの姿もある。
大神の話を聞いたエリカ達も、コクリコのサーカスを見に来たのだ。

「もしかして、ダイゴさんもコクリコの様子を見に?」

「うん。昨日から気になって。エリカさんも?」

ダイゴが聞き返すと、エリカは満面の笑みで頷いた。
すると、それをフォローするように大神が言った。

「みんな、済まないが先に入っていてくれないか?俺達は後から行くよ。」

「仕方ないな。行くぞ、メル、シー。」

グリシーヌを先頭に、先に中に入る三人。
ダイゴは、エリカと大神の三人でコクリコのいるテントに向かった。

「……すっかり怪我も治ったみたい。ありがとう、カルチェラのおかげだよ。」

「獣医のまね事が役に立ったわ。もう団長も売るなんて言わないはずよ。」

そう言って、カルチェラは立ち上がった。
足元には、右足を治療してもらった虎が元気そうに二人を見ている。

「虎さん……。よかったね……。」

「……どうしたの？」

ふとコクリコの目に浮かんだ涙に気付き、カルチェラが尋ねた。
「この子とボクは同じだ……。一生懸命笑って芸をしないと、捨てられるかもしれない……。」

それは、コクリコが初めて明かした本心だった。
ドニクールは金のためならどんな犠牲も厭わない男だ。
逆らえばどんな仕打ちを受けるか、想像にかたくない。

「……大丈夫。貴女も動物達も、あたしが守ってあげるから。」

そんなコクリコに、カルチェラは母親のような暖かい声で言った。
すると、コクリコはいつになく甘えるような声で言った。

「……じゃあ、ボク、お願いがあるんだ。」

「何？」

そう言ってコクリコの顔を覗き込むカルチェラ。
すると、コクリコは赤い顔ではぐらかした。

「ううん、やっぱりいいや。また今度にするよ。……ボク、この子のゴハン持って来るよ。」

そう言って外に出たコクリコに声がかけられたのは、その時だった。

「やあコクリコ。遊びに来たよ。」

「あ、イチロー！エリカにダイゴも来てくれたんだ。」

今や友達となった三人の来訪に、コクリコははしゃいだ。

「そうだ、カルチェラに紹介してあげる！こっちに来て。」

興奮を抑えられない様子で、コクリコは三人をテントの中に案内した。

「カルチェラ！イチローとエリカとダイゴが来てくれたよ！」

「はじめまして、カルチェラと申します。コクリコから聞いていますわ。」

丁寧な挨拶をするカルチェラ。

大神達も、それに合わせて挨拶をする。

「それじゃあ、ボク虎さんのゴハンを持って来るね。」

そう言って外に出るコクリコ。

その様子に微笑んだのち、カルチェラが大神に尋ねた。

「今日はサーカスを観に?それとも、コクリコに会いに来て下さったのかしら?」

「両方です。前はコクリコの元気がなかったので。」

「でも、貴女のおかげで元気になったみたいですね。」

「とんでもない。元気になったのはあたしの方ですわ。」

大神の言葉にダイゴが続くと、カルチェラは笑って答えた。

「へ？何でですか？」

「実は、あたしにも娘がいたんです。生きていればちょうど、コクリコと同じ年に……。」

生きていれば。

つまりは死んだという事だ。

カルチェラにとってコクリコは、娘に等しい存在なのだろう。

「今日はコクリコのステージもありますの。是非見てあげて下さいな。」

「あら、もう夜になってる。大神さん、楽しいサーカスでしたね。」

サーカスが大盛況で幕を降ろした帰り道、エリカが興奮の覚め止ま

ぬ様子で言った。

「冗談じゃない……、心臓が止まるかと思ったよ。」

その隣で、ダイゴが疲れた様子で言った。

今回コクリコが披露したマジックは、回転ノコギリによる切断マジックである。

会場の一人に手伝って貰おうとした所、手を上げたエリカが見事に当たってしまったのだ。

当のエリカは楽しかったようだが、客席のダイゴはエリカが斬られる様子を目の当たりにし、泡を吹いて倒れてしまった。

「さあ、今度は俺達だ。早く戻って開店準備をしよう。」

そう言って戻ろうとした時、ダイゴがふと口を開いた。

「それじゃ、僕は予定があるから。またね。」

「はい、ダイゴさん。よかったらシャノワールにも来て下さいね。」

そう言ってエリカ達と別れ、ダイゴは一人サーカスに戻った。

コクリコと話がしたかった。

……いや、そうではない。

一人になる理由があった。

それは……。

「やっぱり……、スパークレンスが反応してる。」

ポケットの中で光る彫刻を握り締め、ダイゴはテントを見た。

スパークレンスが輝くという事は、その近くに何かがあるという事。

つまり、テントに何かがあるという事だった。
そっとテントに近づき、ダイゴは中を覗き込んだ。

「……毎日眺めても見飽きないなあ、このダイヤモンドは……。
これさえあれば、動物等クズ同然だ。」

中にいたのは、団長のドニクールだった。
帽子に輝くダイヤモンドを幸せそうに見つめている。
まさかあのダイヤモンドか。
ダイゴはそう思ったが、それは直後の声で間違いと分かった。

「本当だねぇ……、食べちゃいたいくらいさ……。」

「何っ？なっ！？何だお前は！」

振り返ったドニクールは見てしまった。
蛇のように長い舌で目の前に立つ怪物、ピトンを。

「ヒィィィ……！！こ、このダイヤモンドは渡さねぇぞ！」
「いいよ。それなら……一緒に奪うまでだ！！」

「グ、グアアア……！！」

逃げ出そうとしたドニクールに、何処からか現れた巨大な口が襲い掛かった。
血も肉も皮も残さず食い荒らされるドニクール。
その様子を満足げに眺め、ピトンはダイヤモンドを手に取った。

「やっぱり違うねぇ……。この近くに間違いないんだけど……。

」

そう言いつつ、ピトンはダイヤモンドを飲み込んだ。

「何だか宝石ばかり飲み込んで、クセになりそうだよ。早い所奴を見つけないとねぇ……。」

「……！！」

一部始終を目撃し、ダイゴは恐怖で身体が震えた。
その時だ。

「……ん？誰だい！そこにいるのは！！」

ドスの利いたピトンの声が飛んだ。
もしや見つかってしまったか……。
そう思ったダイゴだったが、別の声にそれは勘違いと分かった。

「あ、ゴメンね。コクリコだよ？」

「（……！！コクリコ！？）」

ダイゴはハッとした。
ピトンが気づいたのは、ダイゴではなくコクリコだったのだ。
このままではコクリコまで……。
いっそ出て行こうか迷ったダイゴだが、次の言葉で三度驚かされる事になる。

「あらコクリコ、どうしたの？」

「（なっ……！？）」

ダイゴは驚きで目を見張った。
何故ならそこにいたのは、怪物ピトンではなく、カルチェラだったからだ。

「あのね、カルチェラ……。さっきのお願い聞いてくれる……？」

「ええ。言ってご覧なさい？」

先程の怪物は別人だったのか？
いや、そんなはずはない。
だとすれば……。

「あのね……、カルチェラの事、ママって呼んでもいい？」

「ええ、もちろんよ。あたしの可愛いコクリコ……。」

そう優しい口調で答えて、コクリコを抱きしめるカルチェラ。
一見すると美しい家族愛である。
しかし、もしダイゴの想像が的中しているとするならば、これ程残酷な愛の形はなかった。

「……。」

ともかくばれずに済んだ事に胸を撫で下ろし、ダイゴはその場を後にした。

「……。」

その様子を、後ろから見る視線に気づかずに……。

その頃、シャノワールもシルク・ド・ユーロに負けない程の盛況ぶりを見せていた。
それもそのはず。何故なら……、

「今宵はプログラムを変更して、皆様に新しい仲間を紹介します！」

「彗星の如く現れた新人ダンサー、その名もブルーアイ！」

司会のメルとシーの紹介で中央の階段から現れたのは、何とグリシーヌだった。
彼女もまた、エリカのように舞台に立つ事を決意し、華々しいデビューを決めたのである。

「す、凄い！まるで緊張していない！」

ボーイの仕事に従事していた大神は、グリシーヌの様子に驚いた。
普通初めて舞台に上がる者は、どうしても緊張してしまい、それが客にばれてしまうものだ。
しかし、グリシーヌからは全く緊張が見えない。もしかしたら、緊張すらしていないのかもしれない。
そのくらい堂々とレビューを見せていた。

本人の言葉を借りれば当然なのだろうが、周りから見れば圧巻である。
すると、隣に現れたグラン・マが言った。

「花形スターの誕生さ。最も、本名は出せないけどね。」

グリシーヌは巴里の名門ブルーメール家の一人娘である。
そんな大事な娘を舞台に上げたと知れれば、血気盛んなブルーメール家の事、怒鳴り込んで来るに違いない。
そこで、ブルーアイという偽名でデビューしたのである。

「ほう、これは美しい。まるで極上のブルーサファイアですな。」

「おやロランス卿、ご無沙汰だね。」

そう言って現れた人物に、グラン・マが笑いかける。
一方、大神はその人物に驚いた。

「あ、貴方は市場の……！」

「おや大神君。覚えてくれたんですね。」

市場で会った時と変わらない笑顔で、ロランスが笑った。

「ところでロランス卿、今回の獲物は何だい？」

意地悪そうに尋ねるグラン・マ。
すると、ロランス卿もそれに合わせて感慨深げに答えた。

「やっと手に入れたんですよ。あの幻の巨大ルビー、『赤い少女の

涙』を。」

そう言ってロランスが取り出したのは、掌程にもなる巨大なルビーだった。
上の部分が尖っていて、確かに涙の雫のようにも見える。

「ほら、これがそうです。見事な輝きでしょう？」
「これは見事なもんだね……。ロランス卿が必死になるのも分かるよ。」

その大きさと輝きに、流石のグラン・マも驚きを見せる。
正しく人類の宝というべき宝石が、そこにはあった。

「今、コンコルド広場で開催中の宝石展に展示してもらう事になっているんです。」

「なるほど。その時は店の子達も連れて行こうかね。ムッシュ、その時は……。」

「……留守番ですか？」

「ああ、分かってるじゃないか。アンタに宝石は、猫に小判だからね。」

その言葉に、三人は思わず笑った。

辺りは薄暗くなり、不気味な三日月が巴里の街を照らしていた。
その巴里の人気のない裏通りを、ダイゴは歩いていた。
そして、辺りに人がいない事を確認し、声を発した。

「……隠れてないで出て来たら？」

「ばれてたのかい？」

そう言ってダイゴの背後に現れたのは、先程ドニクールを殺してダイヤモンドを奪った怪人ピトンだった。
あれからピトンはダイゴの後を尾け、口を封じるチャンスを伺っていたのである。

「やっと見つけたよ。さあ、光の証をおよこし！」

「やっぱり。狙いはスパークレンスか！」

ダイゴはポケットからスパークレンスを取り出した。
中心にしまい込まれたクリスタルは、淡い光を放っている。

「イーッヒッヒッヒ！素晴らしい輝きだねぇ。そいつをおよこし！」

「……嫌だと言ったら？」

答えはさっきの事で分かっているが、ダイゴは敢えて言った。
すると、予想通りピトンが叫ぶ。

「なら仕方ないねぇ……、覚悟おし！」

その声と共に、地中から巨大な口が現れる。
しかし、ダイゴは薄く笑ってスパークレンスを掲げた。
すると、クリスタルから閃光が放たれ、口を消滅させてしまった。

「さっきのドニクールの時に見て気付いたんだ。今の怪物は常に地中に潜っている。ならば光に弱いとね。」

「チッ！やるじゃないか。」

一筋縄ではいかないと感じ、ピトンは攻撃の手を一旦止める。
その時、裏通りに別の影が現れた。

「そこまでだ！宝石泥棒め！」

それは、何と大神だった。
グラン・マから宝石盗難事件の調査を命じられた大神は、夜の巴里を一人捜査していたのである。

「大神さん！」

「来るんじゃないよ！お前も死にたいのかい？」

こちらへ走って来る大神を威嚇するピトン。
すると、今度はピトンにマシンガンが浴びせられた。

「そこまでです！ダイゴさんには指一本触れさせません！！」

それは、マシンガンを持ったエリカだった。
エリカもまた、宝石盗難事件を聞いて捜査していたのである。

「チッ、覚えておいで！」

流石に形勢不利と見たか、ピトンは背を向けて逃げ出した。

「逃がすものか！エリカくん、ダイゴ、奴を追い掛けるぞ！！」

ピトンを追って三人がたどり着いたのは、シルク・ド・ユーロの前だった。

「くそっ、見失ったか……！」

辺りを見渡す大神。
すると、そこにカルチェラが現れた。

「あら、大神さん。こんな時間にどうなさったの？」

「カルチェラさん。実は、宝石盗難がこの辺りに……。怪しい人

物を見ませんでしたか？」

「怪しい人物……。」

大神の問いに僅かに考えるそぶりを見せ、カルチェラは思い出したように口を開いた。

「そういえば、確かに誰かがテントの近くをうろついてましたわ。」

「本当ですか！？どちらです？」

ようやく尻尾を掴んだとばかりに尋ねる大神に、カルチェラは笑って答えた。

「はい、ご案内しますわ。さあ、こちらです。」

「その必要はない！」

しかしその時、待ったの声がかかった。
ダイゴである。

「どういう事だ、ダイゴ。早く探さないと犯人が……。」

「そんな必要ないよ、もう目の前にいるんだもん。」

そう言って、ダイゴはカルチェラを睨んだ。

「そうだよねカルチェラさん。……いや、怪人ピトン……かな？」

「……ふっ、優しく始末してやろうと思ったのに……！」

ダイゴに指摘され、大神とエリカが驚きの表情でカルチェラを見る。
すると、カルチェラは不気味に笑い、遂にその笑顔の仮面を剥ぎ取った。

「イーッヒッヒッヒ！！」

「キャーッ！！　カ、カルチェラさんが……！！」

衝撃の事実に、エリカが思わず悲鳴を上げた。
無理もない。
目の前で知り合いの女性が突然怪物になったのだから。

「そうか、宝石盗難事件の犯人はお前だったんだな！」

「そうさ、宝石は美味しくいただいたよ。持ち主の人間はみんな食い殺しちまったけどね！！」

今までのカルチェラからは想像もつかないような残忍な笑み。
これこそが、ピトンの真の素顔だった。
しかし、ここでとんでもない事態が発生した。

「あ、ママお帰りなさい。何処に行ってたの？」

何と、事もあろうかコクリコが出て来たのだ。

「コクリコ！近寄るな！！」

「チッ！コクリコはあたしがいただくんだよ！」

大声で叫ぶ大神。
しかし、それより早くピトンが動いた。

「ふふふ……、可愛いコクリコ……、ママのために人質になって頂戴ね。」

「ど、どうしたのママ!?」

突然後ろから肩を捕まえられ、困惑するコクリコ。
大神は、意を決してコクリコに真実を告げた。

「コクリコ、落ち着いて聞くんだ。そいつは人間じゃない。巴里を襲う怪人だったんだ!!」

「か、怪人……!?……ママ、嘘だよね?優しいボクのママだよね?答えてよ、ママ!」

自分を娘のように可愛がってくれたカルチェラが怪人のはずがない。
きっと見間違いか、疑われているだけだ。
そう信じ、一縷の望みをかけてコクリコが尋ねた。
しかし、健気で無垢な少女に突き付けられたのは、残酷なまでの真実だった。

「コクリコ……。その言葉、この顔を見ても言えるのかい?」

「そ、そんな!?マ、ママ……!!」

「止めろ怪人!今すぐコクリコを離せ!」

「動くな!一歩でも動けば、この子の首が引き千切れるよ!」

コクリコを救出しようとする三人を、ピトンが脅した。
鋭い爪が、コクリコの首に向けられる。
これでは助けに行く事もできない。

「バカ正直め。そのまま立ってなよ！」

その時、大神の真下から数多の犠牲者を食い殺した巨大な口が襲い掛かった。

「うわあっ！！」

何とか食われずに済んだものの、大神は今の一撃で左膝を斬ってしまった。

「大神さん！」

「くっ！……怪人、コクリコを放せ！」

鮮血が流れる膝を手で包み、大神がピトンを睨んだ。
その時だった。

「……ハハ……ハハハ……。」

どういう訳か、コクリコが突然笑いはじめたのだ。

「コクリコ……、何で笑ってるんだい？」

人質にされ、命さえ危うい状況なのに、何を笑っているのか。
大神やエリカ、ダイゴのみならず、ピトンすらも呆気に取られてし

まった。
すると、コクリコは笑ったままで言った。

「ボク、泣かないんだ。どんな時でも、笑ってるんだ。」

すると、不思議な事が起こった。
コクリコの身体を、淡い光が包み込んだのである。

「な、何何だい？この光は！？」

「だから、ボクは笑うんだ。泣いても辛いままだから、笑うんだ……。」

ピトンの驚く声も聞こえていないのか、コクリコは譫言のように言った。

「ねぇ、イチロー……、ボク笑ってるよね？泣いてなんかないよね？」

「もういい、コクリコ！もういいんだ！！」

好きだった人に、ましてや一人だった自分を救ってくれたはずの者に裏切られて、どうして笑ってられようか。
コクリコが笑顔の仮面の下で泣いているのが、大神には分かった。

「イチロー……、ボクは……、ボクは！！」

コクリコが叫んだ。
その時、コクリコの身体を覆っていた光が、まばゆい閃光となってピトンを襲った。

「くっ！？しまった！！」

その拍子に、ピトンがコクリコから離れた。
それと同時に、ダイゴが割って入る。

「コクリコに近づくな！怪人！！」

「チッ、覚えておいで！」

捨て台詞を吐き捨て、ピトンは夜の闇に消えた。

「コクリコ、コクリコ！大丈夫か！？」

倒れたコクリコを抱き上げて呼びかける。
しかし、失神しているのか返事はない。

「大神さん！とりあえずシャノワールの医務室に！」

「……この子かい？ムッシュが見つけた霊力の持ち主は。」

「はい。怪人を吹き飛ばす程の、強い霊力でした。」

グラン・マの問いに、大神が答えた。
目の前には、ベッドに横たわるコクリコの姿がある。幸い霊力の発動によるショックで気を失っただけらしい。
おそらくママと呼び慕っていたカルチェラが、怪人ピトンだったショックによるものだろう。
コクリコの心の傷は、深いものだった。

「……で、ムッシュ。この子は戦力になりそうかい？」

「そ、そんな！コクリコを隊員にするって言うんですか！？」

グラン・マの発言に、エリカが反発した。
無理もない。
コクリコはまだ１１歳なのだ。
そんな幼い頃から戦場に立たせるなど、エリカには考えられなかった。
一方グリシーヌも、根拠こそ違うがエリカに賛成した。

「同感だ。こんな子供に何が出来る？足手まといもいい所だ。」

「口を慎みな。巴里華撃団はただでさえ人手不足なんだ。子供だろうと関係ない。」

二人の意見をバッサリ切り捨てるグラン・マ。
すると、大神が口を開いた。

「司令、俺はコクリコ自身に選ばせたいと思います。」

「そんな、大神さんまで！こんな子供に戦わせるって言うんですか

！？」

珍しく大神を睨むエリカ。
しかし、大神はキッパリと言った。

「コクリコは今までずっと戦ってきた。辛い事も悲しい事も、笑顔を作って必死に乗り越えて来た。そうだろう？」

「……。」

大神の言葉に押し黙るエリカ。
グリシーヌも、無言だが大神の考えには納得したようだ。

「じゃあコクリコの事はムッシュに一任するよ。……ムッシュ、側にいてあげな。」

「はい。」

他の仲間が医務室を出る中、大神は一人コクリコを見た。
すると、不意にコクリコが目を開いた。

「……イチロー……。」

「コクリコ……、気がついたのかい？」

大神が優しく笑いかけると、コクリコは上半身を起こした。

「……本当はね、さっきから起きてたんだ。……話、聞いちゃった……。」

巴里華撃団の存在を知られた事は、一向に構わない。
もしかしたらコクリコも、共に戦うかもしれないんだから。

「俺達と一緒に戦うかは、コクリコが好きに決める事だ。でも、俺はコクリコの味方だよ。」

あくまでもコクリコを尊重してくれる大神。
傷ついたコクリコにとって、これ程救われるものはなかった。

「イチロー……。」

「笑わなくていいよ……。」

胸に顔を埋めるコクリコを抱きしめ、大神が優しく言った。
笑わなくていい。もう涙を飲み込む必要はないのだ。

「イチロー、ありがとう……。」

コクリコは、大神の胸でおそらく初めて泣いた。

翌朝、大神が医務室に迎えに行くと、笑顔を取り戻したコクリコの姿があった。

「コクリコ、元気になったみたいだね。何か食べに行こうか。」

「うん！！」

元気な声で答えるコクリコ。
しかしその時、けたたましい警報が鳴り響いた。

「緊急事態発生！巴里華撃団隊員は、大至急作戦司令室に集合して下さい！」

それを耳にして、大神の表情は一変した。

「怪人が現れたのか！コクリコ、君はここで待っているんだ！いいな？」

「あ、イチロー！」

コクリコの返事も聞かず、大神は走り出した。

モニターに映し出されたのは、コンコルド広場だった。
確かロランスが、赤い少女の涙を展示する予定である。
おそらくそれを狙っているのだろう。

「あ、おひげのおじさんだ！」

コクリコが作戦司令室に飛び込んで来たのは、その時だった。

「コクリコ、待ってるように言っただろう？」

慌てて大神が窘めようとすると、グラン・マが口を挟んだ。

「おひげのおじさん？ロランス卿の事かい？」

「うん！いつもボクに優しくしてくれたんだ。おじさん、どうしたの！？」

コクリコは頷いて、大神に尋ねた。

「ねぇイチロー、おじさん、怪人に狙われているの！？」

「大丈夫だコクリコ。ロランスさんは絶対助ける。」

大神が元気づけるように言ったその時、コクリコは遂に決断した。

「ボクも戦う！おじさんを助けたいんだ！」

「ふざけるのもいい加減にしろ！貴様ごときに一体何が出来る！足手まといだ！！」

たまり兼ねたグリシーヌが怒鳴るが、コクリコは聞かなかった。

「足手まといなもんか！ボクだって力があるんだ！イチロー、いい

でしょ？」

「……分かった。コクリコ、一緒に戦おう！」

一瞬考えたのち、大神はコクリコの申し出を受け入れた。
カルチェラが敵と分かった今、ロランスはコクリコに残された大切な人なのだ。
守れる力があるなら、守りたい。大神は、そんなコクリコの想いと勇気を尊重したのだ。

「ありがとう！ボク、頑張るよ！」

「コクリコ、一つだけ言っておくよ。誰のためでもなく、自分のために戦うんだ。いいね？」

「はい！」

グラン・マの忠告に素直な返事で頷くコクリコ。
その様子に満足そうに微笑み、大神は命令を下した。

「よし！巴里華撃団花組、出撃！目標地点、コンコルド広場！！」

「「了解！！」」

いくつもの宝石が並ぶコンコルド広場の展示場。
そこにピトン率いるポーン達が現れたのは、突然の事だった。
急いで逃げ出す人々。
その中に、コクリコの大切なおひげのおじさん、ロランスの姿があった。
奴らの狙いは、おそらく自分の持つ赤い少女の涙。
そう考えたロランスは、他の人々を危険から守るために敢えてポーンの真ん中を突っ切っての脱出を敢行したのだ。

「イーッヒッヒッヒ！逃がしはしないよ！さあ、赤い少女の涙を渡して貰おうか？」

「あれは人類の宝だ！お前のような奴にくれてやる訳には行かん！！」

ピトンやポーンに囲まれても毅然と言い放つロランス。
すると、ピトンはニヤリと笑った。

「そうかい。ならアンタごと食ってやるよ！」

「そうはさせないよ！！」

「な、何っ!?誰だ!!」

突然の声に驚いて左右を見渡すピトン。
すると、ピトンとロランスの間に割って入るように、四つの光武Fが現れた。

「巴里華撃団、参上!!」

刹那、先頭に立つピンク色の光武Fが叫んだ。

「おじさん、伏せて!!」

ロランスが退避したのを確認するや、コクリコが両肩の大砲を撃った。
その攻撃を至近距離で食らったポーンは、たちまち炎上する。

「お、おのれ……!!ポーン達、あの邪魔者を蹴散らしておしまい!!」

言うや、ピトンは素早く姿をくらました。

「よし、敵蒸気獣を全滅させるぞ!!」

「「了解!!」」

コンコルド広場の戦闘は、前回の凱旋門に比べて戦いにくかった。
ショートソードという砲台をピトンが設置していた事もあったが、何より建物が入り組んでいて、中々敵を発見できないのだ。
しかし、それを打ち消したのがコクリコだった。
持ち前の身のこなしで建物の屋根を飛び移り、ポーンを片っ端からやっつけたのである。
宝石を回収したのち、砲台を全滅させ、巴里華撃団はロランスのもとへ急いだ。

「おじさん、大丈夫?」

「ああ、私は大丈夫だが、あそこに……。」

光武Fに乗って現れたコクリコに多少驚きつつも、ロランスは真上のオベリスクを指差した。

「あのオベリスクにまだ、赤い少女の涙が……!!」

「分かりました。我々が保護しますから、貴方は避難して下さい!」

大神がそう答えた時だった。
突然地中から巨大な鮫のような怪獣が現れ、オベリスクごと赤い少女の涙に噛み付いたのだ。

「しまった!みんな、あの鮫を止めるんだ!!」

大神の指示で、花組は一斉に飛び掛かるが、鮫は凄まじいスピードで光武Fを跳ね退け、ピトンの下にたどり着いてしまった。

「イーッヒッヒッヒ！よくやったよゲオザーグ。さて、赤い少女の涙はいただくからね。」

勝ち誇ったように笑ってゲオザーグの頭を撫でるピトン。
しかし、配下の鮫が口にくわえた物を手に取るや、その笑いが凍りついた。

「な、何なんだいこれは？赤い少女の涙じゃないじゃないか？」

「ええっ！？」

何と、ゲオザーグがくわえていたのは、飴玉だった。
確かにオベリスクをかみ砕いたはずなのに、一体どういう訳なのか。
それは、一人の天才マジシャンの仕業だった。

「さあさあ、お代は見てのお帰りだよ！」

何処にしまっていたのか、コクリコが巨大なハットとバトンを取り出した。

「アン、ドゥ、トロワ！」

掛け声と共にバトンを振るとあら不思議。
ハットの中から巨大なルビーが出て来たのだ。
コクリコはゲオザーグにしがみついた瞬間、一瞬の早業で飴玉と宝石を入れ替えていたのだ。

「はい、本物はこちら！！」

途端に周囲から拍手が巻き起こる。
すると、コクリコが大神に声をかけた。

「笑顔がこんなに……。イチロー、みんな笑ってるね。」

「そういうコクリコも、いい笑顔をしているよ。」

「本当？イチローだって、笑ってるよ。」

それは、仮面などではない。
コクリコの心を偽らない、本当の笑顔がそこにはあった。
「グリシーヌさんが言う程、足手まといになってませんよ？」

「うむ……。まあ、少しは役に立ったな。」

エリカに肘でつつかれ、グリシーヌがそっぽを向く。
相変わらずだが、グリシーヌもコクリコを認めたのだ。
しかし、この状況に怒る者がいた。
ピトンである。

「おのれ巴里華撃団！あくまでも邪魔するなら、容赦しないよ！！」

すると、ゲオザーグと並ぶように一体の蒸気獣が現れた。
両腕がなく、代わりに蛇の形をしたロボットが腕になっている。

「お前らだけでも絞め殺してやる！この蒸気獣『ベルスーズ』と、
可愛いゲオザーグでね！！」

「来るぞ！全員戦闘配置につけ！！」

「「了解！！」」

大神の指令で、花組は直ちに戦闘体勢に入った。

ピトンの操るベルスーズとゲオザーグ。
この二体の怪物に、花組は劣勢を強いられる事となった。
ゲオザーグが地面に潜り、花組に地中から奇襲を仕掛けているのだ。
そのゲオザーグに気を取られていると、今度はベルスーズが攻撃を仕掛けて来る。
しかし、浮足立つ巴里華撃団を救う者が現れた。

「やはり怪人の仕業だったか……。」

騒ぎを聞いてコンコルド広場に駆け付けたダイゴは、ゲオザーグとベルスーズに苦戦している花組を見た。
いずれもベルスーズの毒にやられ、動きが鈍っている。

「ピトン……、光の力を見せてやる……！」

正義の怒りと共に、ダイゴはスパークレンスを取り出した。
メルバを倒した光の力。
今一度それを示すかの如く、クリスタルは光っている。
ダイゴはスパークレンスを構えて時計回りに回転させ、光の名を叫んだ。

「ティガーーーーーーーッ!!」

それはやはり突然現れた。

「チャッ!!」

空から飛来した巨人がベルスーズを蹴り飛ばし、コンコルド広場に降り立つ。
その姿に、巴里華撃団は驚きを露にした。

「ウルトラマンティガ!!」

それは正しく、凱旋門でメルバを倒した伝説の巨人。
ウルトラマンティガであった。

「イーッヒッヒッヒ！待ってたよティガ！ここで暴れていればアンタが来ると踏んでいたからね。」

「チャッ……！」

巴里華撃団と対照的に、ピトンはティガの登場に不敵な笑いを見せた。

コンコルド広場の襲撃は前座に過ぎない。

ピトンの目的は、ティガを誘い出して抹殺する事だったのだ。

「さあゲオザーグ！あの裏切り者を噛み千切っておやり！」

ピトンの命令で、地中鮫ゲオザーグがティガに襲い掛かった。

「ハッ！」

前方から背鰭を出した状態で突っ込んで来るゲオザーグ。

ティガはそれを前転で避けると、右手を突き出した。

ハンドスラッシュ……突き出した右手から爆発する光弾を連射する、ティガの必殺技だ。

「ハッ！」

右手から打ち出された青白い光弾は、ゲオザーグの背鰭を直撃した。

それに伴い、ゲオザーグは苦しみながら地中に潜る。

「凄い……、あれがウルトラマンなんだ……。」

初めて見る光の巨人に、瞳を輝かせるコクリコ。

今まで自分達が苦戦していた敵の片方を難無く退けたその力は、正

に救世主の三文字が相応しい。

「チャッ！」

次の目標をベルスーズに定め、ティガが構えを取る。
しかし、ピトンはニヤリと笑った。

「いいのかい？あたしばかり見て……。」

そう笑った時、大神はベルスーズの異変に気づいた。
ベルスーズの腕の蛇がいない。
それと同時にベルスーズの目が赤く光り、ゲオザーグ以外に地面を揺らす震動を感じる。

「まさか……、ティガ！下だ！」

大神が気づいて叫ぶが遅かった。

「ジュワッ！？」

突然地中から現れたベルスーズの腕が、ティガに巻き付いてがんじがらめにしてしまったのだ。

「イーッヒッヒッヒ！罠にかかったねティガ。」

ピトンが凶悪な顔で笑う。
ゲオザーグがやられて油断した隙に、腕でティガを捕まえる作戦だったのだ。

「さあ、巴里華撃団と共にあの世へお行き！ル・シャ・ドゥ・デラ・

テール！」

蛇の口から、緑色の猛毒ガスが浴びせられた。
ガスは勢い良く飛散し、ティガと花組を瞬く間に包んでしまった。

「くそっ、これじゃあ助けに行く事も……。」

動かない光武Ｆに、大神が悔しげに拳を握る。
すると、ベルスーズに走る一つの影が目に入った。

「コクリコッ！？」

それは、何とコクリコだった。コクリコは持ち前のジャンプで毒ガスをかわしていたのだ。

「えい！」

屋根からジャンプすると同時に、コクリコはベルスーズの顔面にドロップキックをかました。

「よくもみんなを騙したな！絶対許さない！」

「フン、調子に乗るんじゃないよ！お前から絞め殺してやる！」

「やれるもんならやってみろ！みんなはボクが守るんだ！」

ピトンに言い返し、コクリコはバトンを取り出した。

「イッツ、ショータイム！みんな、出ておいで！マジーク・ボンボン！！」

バトンが振られると同時に沢山の猫が現れ、ベルスーズを引っ掻き回した。

「クワッ!?くそ、ガキが……!」

その一撃で、ベルスーズは赤い目を潰された。
すると、蛇の締めが急に緩んだ。

「ティガ!今だよ!」

「チャッ!」

コクリコの言葉に頷き、ティガは蛇を振りほどく。
そして、両腕を額のクリスタルの前で交差させた。

「ンゥゥゥ……、ハッ!」

勢い良く両腕を振り下ろすティガ。
すると、ティガの体色が赤と銀に変わった。
スカイタイプと対を成し、超怪力で敵をたたきのめすパワータイプだ。

「チッ!ゲオザーグ!早くティガを片付けておしまい!」

ピトンの命令を受け、ゲオザーグがティガに迫る。
しかし、今度は違った。

「チャッ!」

ティガはどっしりとゲオザーグを待ち構えると、その牙を掴んで地

上に引っ張り上げたのだ。
全身を太陽の光に曝され、苦しむゲオザーグ。

「デュアッ！！」

ティガはゲオザーグを高々と持ち上げると、ベルスーズ目掛けて投げつけた。

「クワッ！？」

たちまちベルスーズは、ゲオザーグの下敷きになって身動きを封じられる。
その時、ティガのカラータイマーも点滅を始めた。

「チャッ！」

ティガは胸のカラータイマーに両手を合わせ、下に降ろした。
すると、その二つの掌に赤い光が宿る。

「ハァァァ……！」

そのまま両手を大きく外側から回し、膨大なエネルギーが圧縮される。
デラシウム光流……エネルギーをボール状に圧縮し、敵にぶつけるパワータイプの必殺技だ。
発動まで僅かに時間がかかるが、威力はランバルト光弾を大きく上回る。

「ダァッ！！」

胸の前で圧縮された光のボールが、裂帛の気合いと共にゲオザーグに直撃した。
刹那、ゲオザーグを光が包む。

「クワッ！！あ、あたしはまだ死ねない……！」

死期を悟ったか、ピトンが吠えた。

「ティガ……、貴様を倒してその宝石を食らい尽くすまで、死ねないんだよ！！」

そう叫ぶと同時に、ベルスーズはゲオザーグ諸とも大爆発した。

「……終わったね。」

「ああ、大活躍だったなコクリコ。」

「凄い！初めてなんて信じられない！」

「……霊力の高さだけは認めてやろう。」

光武Ｆから降りたコクリコに、花組が労いの言葉をかけた。
ゲオザーグから赤い少女の涙を取り戻しただけでなく、ティガの窮

地までも救ったのだ。
これを大活躍と言わずして何と言おう。

「エヘッ。」

恥ずかしそうにコクリコが笑う。
すると、エリカが大神に言った。

「それじゃあアレ、やりましょうか！」

「アレって……？」

初めての戦いで知らないコクリコが尋ねる。
すると、グリシーヌが呆れた口調で説明した。

「巴里華撃団には、勝利した後の約束事があるらしいのだ。私は不本意なのだが。」

「ふーん、そうなんだ。それじゃ、いくよ！」

「勝利のポーズ、決めっ！！」

「チャッ！」

その様子を見届け、ティガは空高く飛び立った。

それからしばらく、コクリコの姿はシャノワールにあった。
それも、レビュー服を着て。

「へへへ、これからボクもシャノワールのステージに立てるんだって。」

正式に巴里華撃団のメンバーに迎えられたコクリコは、グラン・マの提案でシャノワールでも働く事になった。
最も、昼はサーカスがあるため、夜しか出演できないが。

「それとね、市場の手伝いも続けるつもりなんだ。」

「おいおい……、それじゃ身体がいくつあっても足りないぞ？」

「あ、そうか。アハハ……！」

大神に言われ、コクリコは笑った。
今までのような仮面の笑顔ではなく、心からの笑顔で。

笑顔の仮面（後書き）

《次回予告》

私はブルーメール家の名誉と誇りにかけ、巴里を守る。

光の巨人だか何だか知らぬが、そのような者の出る幕はない！

次回、サクラ大戦３！

《サムライの誇り》

愛の御旗のもとに……

貴公のようには……なれん……

サムライの誇り（前書き）

ゲームで言うと第3話。

こうして見ると、プチミントの話もよく似たくだりだった気も……

…

「……エリカさんが？」

コンコルド広場の一件からしばらくが経ち、巴里が梅雨の時期に差し掛かった頃、ダイゴはレノ神父の話に驚きを見せた。
エリカが屋敷へメイドの仕事に行った……。
ダイゴの耳が正しければ、レノ神父はそう言ったはずだ。

「ハイ……。何でも大神さんがブルーメール家のメイドをしていると言うので手伝いにと……。」

「メイド……？大神さんってそんな趣味だったねのかな？」

あの真面目を絵に描いたような男が女装趣味とは、流石にダイゴも考えづらい。
エリカの情報だけにやや信憑性に欠けるが、もし事実なら大神も随分恐ろしい趣味だ。

「しかし、大神さんは真面目で誠実な方ですから……。何か事情がおありかも知れません、ハイ。」

確かにレノ神父の言う通りだった。
エリカは嘘はつかないが、内容に大事な事が抜けている事が多い。
大神も趣味と言うより、何か理由があったと考える方が自然だ。
特にエリカが向かったのはグリシーヌの屋敷という。
もしかしたらお人よしの大神の事、メイドを手伝うように言われて断れなかったのかもしれない。

「ダイゴさん。気になるなら行かれてみては如何ですか？今日のボランティアは、構いませんから。」

「……そうだね。ありがとう、神父様。」

レノ神父に礼を述べつつ、ダイゴはグリシーヌ邸に向かって歩きだした。

ブルーメール家は、巴里の貴族の中でも名門中の名門だ。
世界の歴史の中でも名高いノルマンディの血を引く事に由来する。
これに唯一肩を並べられる存在が、シャドーブリアン家であった。
武のブルーメールと、商のシャドーブリアン。
この二つが、巴里の双璧を成す名門貴族だった。
当然、その名門の息女たるグリシーヌの屋敷は豪勢な訳で。

「お、大きい……。」

何度か遠目に見た事があるとはいえ、その巨大な威圧感に圧倒されるダイゴ。
そのダイゴの耳に声が届いたのは、その時だった。

「ダイゴさ～ん！！」

その声と共に、エリカが煙を上げて走って来た。

「やっぱり来てくれたんですね！エリカ信じてました！」

「え？あ、そうなの……。」

とりあえず自分が来た事を喜んでくれたらしく、ダイゴも笑顔を返す。

すると、エリカがダイゴの腕を掴んだ。

「ほら、何突っ立てるんですか？早く来て下さい！」

「へ？ち、ちょっとエリカさん！？」

訳の分からないまま、屋敷の中に連れ込まれるダイゴ。

そして、屋敷につくや否やエリカはエントランスで大声を張り上げた。

「タレブーさ～ん！」

その声を聞いて現れたのは、グリシーヌ邸でも最もキャリアの長いメイドのタレブーだった。

かなり年を召されてはいるものの、その仕事の手際のよさは誰にも負けない、現役バリバリのメイドだ。

「何ざますかエリカ、騒々しい。」

指示棒を手に階段を降りてきたタレブーは、ダイゴの姿に目を丸くした。

「まあエリカ！本当に連れて来たざますね！？」

「はい！ダイゴさんはこういう時、必ず駆け付けてくれる人ですから！」

何やら自慢げに胸を張るエリカ。

どうやら自分がここに来ると、タレブーに宣言していたらしい。

「それではダイゴ、貴方も早速着替えて来るざます。」

そう言って、タレブーはダイゴに一着のメイド服を渡した。

「……へ？」

「当屋敷で働くからには、所定のメイド服を着用してもらうざます。」

「そ、それじゃあ……。」

まさかと思ってダイゴはエリカに目を向ける。

すると、エリカは張り切った表情で言った。

「はい！これからダイゴさんも、私達と一緒にがんばりましょうね！！」

やはりそうか、とダイゴは思った。

来た時から薄々と予感していた。

恐らくエリカの事、自分にもメイドをやらせるつもりだろうと。

そして、幸か不幸か＃＃ＮＡＭＥ１＃＃の予感は的中した。

「……男用はないの？」

タレブーから渡されたメイド服は、何処からどう見ても女用だ。
どう考えても、自分には合わなさ過ぎる。
しかし、タレブーは首を横に振った。

「それはないざます。ブルーメール家は代々、メイドは女の仕事ざます。」

「あ、そうなの……。」
「そもそもオオガミも、お嬢様との決闘に負けてここにいるざます。オオガミもダイゴも、この名誉ある仕事に携われるのは、例外中の例外ざます。」

「……決闘？」

やはり趣味ではなく事情だったとしても、まさか決闘をしていたとは思わず、ダイゴは驚いた。

「さあ、早く着替えて仕事ざます。ダイゴはエリカと二人で、庭の掃除ざますよ。」

「……やっぱり、こうなるのか……。」

有無を言わせぬ状況に、ダイゴはため息をつくしかなかった。

何故大神がメイドをやる事になったのか。
そのいきさつは、隣にいるエリカが作業しながらかい摘まんで説明してくれた。
何でも今朝、大神はみんなを集めてこんな事を言ったらしい。

「今日は思い切ってみんなで遊ぼう。」

何でも日本の遊びを教えると言う事だったらしい。
そして、エリカ、コクリコ、グリシーヌの四人で遊んでいたのだが、グリシーヌは乗り気でなかったせいか怒りだしたという。
しかし、コクリコに羽つきで負けて墨を塗られそうになったと聞き、ダイゴは思わず納得した。
顔に墨を塗られるという事は則ち、羽つきに負けたという事。
グリシーヌにとってそれは、コクリコが相手だった事も含めて堪え難い屈辱だったのだろう。

「……それで、大神さんと決闘なんて言い出したんだね？」

芝刈り機を動かしながらダイゴが言うと、エリカは石床を箒で掃きながら答えた。

「そうなんです。それで大神さんも受けて立つなんて言い出して……。」

どういう訳か、グリシーヌ邸の隣の湖には何隻もの船がある。
決闘はそのマストで行われた。
互いに命綱を足につけ、最も得意とする武器で相手を倒した方が勝ちというものだ。

大神もグリシーヌも斧を使って戦い、最初は大神が優勢だったらしいのだが、一瞬躊躇った隙にグリシーヌに負けてしまったらしい。
何とも大神らしい事だと、ダイゴは思った。
そして、大神一人に働かせては可哀相だからと、エリカとコクリコも手伝う事にしたらしい。

「よく手伝う気になったね。得する事なんてないのにさ。」

決闘に負けた大神は自業自得として、エリカもコクリコも何故手伝う気になったのか、ダイゴは不思議でたまらなかった。
すると、エリカはさも当然の如く言ってのけた。

「だって私もコクリコも、大神さんの役に立ちたかったですから……。」

「……。」

その一瞬、ダイゴの口元が引き攣った。
恐らく大神の笑顔でも想像したのだろう。
エリカの顔は赤く染まっていた。

「……そんなにあの人が好きなんだ。」

「はい。……ダイゴさんは、大神さんの事嫌いですか?」

探るようにエリカが尋ねた。

「別に。ただ、やたら女受けするなと思って。」

初めて会った時から、ダイゴは大神に対してあまり良い感情を持っ

てはいなかった。
加えて、大神がどの女性にも目につく程に優しい点が、拍車をかけていた。
フェミニストとは違うのだろうが、それでもどの女性にも優しくしている様子は、男から見て気分の良いものではない。

「女性だけじゃないですよ。大神さんは巴里のみんなに愛されてます。」

「みんな？あの人が？」

「ダイゴさんだって、大神さんのために来てくれたじゃないですか。」

そう言って、エリカはダイゴの手を両手で優しく包んだ。
その両手の暖かさに、ダイゴは思わずエリカから目を逸らす。

「ダイゴさん……、貴方はきっと、まだ気づいていないだけなんです。大神さんの素晴らしさに……。」

「……。」

ダイゴは答えようとしなかった。
人々を分け隔てなく笑顔にできるのは、確かに大神の魅力だろう。
しかし、ダイゴは認めたくなかった。
それを認めれば、エリカが自分を離れて大神の下へ行ってしまうような、そんな気がしたからだ。

「（そんなにアイツがいいのか？僕よりも……。）」

ダイゴが口には出せない言葉を心で訴えた時、俄かに玄関が騒がしくなった。

「……何があったの？」

「さあ？私もよく分かりませんけど……。」

ダイゴに尋ねられて首を傾げるエリカ。
すると、その後ろから声が聞こえてきた。

「あれはリッシュ伯爵。巴里の中でも五本の指に入る名門貴族の一人だ。」

「あ、グリシーヌさん。」
そこに立っていたのはグリシーヌだった。
何か考え事でもしていたのか、いつにも増して表情が険しい。
そしてその表情は、ダイゴを見て更に険しくなった。

「……やはりお前も来ていたのか。」

「……。」

明らかに快い歓迎とは違う言葉に、ダイゴは無言でグリシーヌを見返した。
どちらも顔見知りではあるものの、仲良しという訳ではない。
グリシーヌはあからさまにダイゴを避けているし、ダイゴも大して気にしていなかった。

「まあ良い。ほら、さっさと行け。隊長とコクリコにばかり働かせるな。」

「は～い。行きましょ、ダイゴさん。」

「……うん。」

グリシーヌに言われ、ダイゴはエリカについて行く形でその場を後にした。

大広間の前の扉の前には、既に大神とコクリコの姿があった。

「あれ、ダイゴ！ダイゴも来てたの？」

二人を見つけるや、コクリコが驚いた。

まさかダイゴが来ていたとは、夢にも思わなかったのだろう。

見ると、大神も意外そうな顔をしていた。

「そうなんです！＃ダイゴさんも大神さんを助けるために駆け付けてくれたんです！」

得意そうに胸を張るエリカ。

どうやらみんなにダイゴが来ると宣言していたようだ。

「エリカくんの言う通りだったな。ダイゴ、ありがとう。」

エリカの言葉を真に受けたのか、礼を述べる大神。
ダイゴはそれには答えず、コクリコに尋ねた。

「二人は、ここで何してるの？」

「うん。さっきリッシュ伯爵って人が来たんだ。それで広間に通したんだけど……。」

すると、エリカが興味深そうに尋ねた。

「ねぇコクリコ。そのリッシュ伯爵って、どんな人だった？」

「え？別に普通だったけど……。」

コクリコが答えた時だった。
エリカが広間の扉に手をかけたのである。

「ち、ちょっとエリカさん！？」

「駄目だよエリカ！怒られちゃうよ！」

慌てて止めようとするコクリコとダイゴ。
一応自分達は今グリシーヌ邸のメイドなのだ。
そのメイドが客を盗み見るのはマナー違反も甚だしい。
しかし、エリカは二人の説得を聞かなかった。

「大丈夫です。ほら、何事もまずは調べる事が大事って言うでしょ？」

そんな言葉は聞いた事もないが、ともかく扉を開くエリカ。
しかし、ここでもエリカの天才的ドジが発揮された。
何とエリカは扉の前で躓き、派手に扉にダイブしてしまったのだ。
当然扉はけたたましい音と共に全開になる訳で……。

「あ……。」

異口同音の声と共に三人の顔を冷や汗が伝う。

「まあ、あなたたち！のぞき見はマナー違反ざますよ！」

「す、すみません！」

すかさずタレブーに一喝されて頭を下げる大神。
すると、奥のテーブルから笑い声が聞こえてきた。

「ハッハッハッ、構いませんよ。この私の姿に見とれての事でしょうから。」

それは、グリシーヌにも劣らない豪華な装飾品で着飾った男だった。
恐らくは彼がリッシュ伯爵だろう。
そんな事を考えていると、リッシュ伯爵はタレブーに尋ねた。

「……随分むさ苦しい輩共ですな。マダム、こちらはグリシーヌ嬢のペットですかな？」

「いいえリッシュ伯爵様。お嬢様のお戯れにございます。」

律儀にそう答えると、タレブーは四人を叱り付けた。

「客人に失礼を働く事は、以っての外ざます！四人共お仕置きざます！」

しかし、ここで止める声が上がった。
リッシュ伯爵である。

「その必要はございませんよマダム。こういう時は叱るより……。」

そう言いつつ一番近いコクリコの方に歩み寄るリッシュ伯爵。
刹那、ダイゴはリッシュ伯爵からただならぬ殺気を感じた。

「身体に覚えさせるべきです！！」

「コクリコっ、危ない！！」

大神が叫んでコクリコとリッシュ伯爵の間に割って入る。
その直後、リッシュ伯爵の拳が深々と大神の鳩尾に減り込んだ。

「ぐふっ……！」

「イチロー！？」

目の前でうずくまる大神に驚くコクリコ。
しかし、リッシュ伯爵はその大神の頭を掴み上げ、顔面を膝にたたき付けた。

「！！」

声にならない叫びと共に床に倒れる大神。
更にその腹を蹴りつけようとしたリッシュ伯爵だったが、間一髪の所でダイゴが止めた。
「……言葉より先に暴力に訴えるなんて、貴族の名折れだね。」
「それを貴族というんだよ少年。君もその生ゴミのようにされたくなかったら、その汚い手を退けて貰おうか？」
そう言いつつリッシュ伯爵はダイゴを殴ろうとするが、その前にタレブーがその場を諌めた。
「この屋敷内の乱闘は固くお断りするざます。」
「……仕方ない。確かにマダムの言う通りですな。」
タレブーに諌められ、リッシュ伯爵は拳を降ろした。
「そもそもこの私が、このようなクズに触れる等、あってはなりません。さあ、早くその生ゴミを片付けてくれたまえ。」
顎で三人に命令するリッシュ伯爵。
その言葉にコクリコは言い返そうとしたが、ダイゴに止められた。
今ここで騒ぎを大きくしては、グリシーヌにも迷惑がかかるからだ。
ともかく気を失った大神を運ぼうとした時、別の声がかかった。
「あの……。」
振り返った三人の目に飛び込んできたのは、自分達に近い年齢の少女だった。
短く切り揃えられた黒い髪と黒い服が特徴的な、大和撫子を絵にし

たような姿。
三人はその清楚な佇まいに、一瞬見とれてしまった。

「よろしければ、私の部屋で休ませませんか？ここから近いですし……。」

端正な顔で優しく微笑み、少女が言った。

「あ、うん。そうだね……。」

その声で我に還ったダイゴが答え、三人は大神を抱えて少女の後を追った。

少女に案内された部屋は、落ち着きのある日本風の和室だった。
豪勢な屋敷とは対照的に、畳や屏風などで心の休まる空間になっている。

「ありがとう。おかげで助かったよ。」

ダイゴが礼を言うと、少女は恥ずかしげに頬を染めた。

「大した事ではありませんよ。」

「……そういえば、自己紹介がまだだったよね？僕はダイゴ＝モロボシ。さっきの二人は、エリカとコクリコって言うんだ。」

今はその場にいない二人を含めて、ダイゴは簡単に自己紹介をした。
エリカもコクリコも、今は部屋にいない。
というのも、先程の騒ぎのお仕置きとしてすぐに仕事が割り当てられてしまったからだ。
よって今この部屋には、少女の他はダイゴと寝ている大神しかいなかった。

「やはり日本の方だったのですね。私は、北大路花火と申します。」

「花火さんって言うんだ……。よろしくね。」

同じ日本人だからか笑顔で言うダイゴに、花火も笑顔を見せた。

「うふふ、やっぱりグリシーヌに聞いた通りの方ですね。」

「グリシーヌに？」

「はい。年の割に鋭い方と聞いていますわ。」

その言葉に、ダイゴのグリシーヌに対する印象は、少なからず変化した。
グリシーヌはいつも、事ある毎に自分を威嚇するように睨みを効かせてくる。
そんな彼女が、まさか自分をそう評価していたとは思いもよらなかった。

「ダイゴさんは、何時から巴里に？」

ふと、花火が尋ねた。

「生まれてすぐだよ。物心ついた時から、僕は巴里にいた。」

「まあ、私と同じなのですね。」

ダイゴが巴里育ちと思わなかったのか、花火は意外そうに驚いた。

「それではダイゴさんも、留学か何かで?」

「いや……、そんなのじゃない。」

忘れかけたあの雨の日を思い出し、ダイゴは表情を暗くした。
すると、花火は聞いてはならない事を察して謝った。

「あ、すみません……。余計な事を……。」

「いや、いいよ……。」

花火に悪気がない事は分かっている。
ダイゴは、別の話で雰囲気を紛らわせる事にした。

「それじゃあ、花火さんも巴里育ちなの?」

「はい。家の意向で、古くから親交のあったブルーメール家に居候させていただいてます。」

北大路家は、日本でも有名な男爵家の一つだ。
しかしその仕事柄日本を離れる事が多く、花火は幼い頃からフランスで生活していた。
その為まだ知らない故郷に思いを馳せ、日本について様々な事を学

んでいた。
そんな中、寄宿舎で出会ったのがグリシーヌだった。

「グリシーヌとは、両家の親交もあってすぐに打ち解けて、すぐに親友になりました。」

「へぇ～、じゃあグリシーヌとは長い付き合いなんだ。」

元々親交の深かったブルーメールと北大路。
その両家の令嬢ならば、同様に仲良しなのは自然な事だ。それにグリシーヌが勇猛な性格なのに対し、花火は物静かな性格でぶつかり合う所がない。
恐らく衝突の少ない二人の性格も、親友になった要因だろうと、ダイゴは納得した。

「でも、グリシーヌは私にも話さない事もあります。」

「例えば？」

「自分の誇りについてとか……。グリシーヌは、人に弱みを見せない性格ですから。」

その言葉に、ダイゴはまたも納得した。
グリシーヌは貴族としてのプライドを非常に大事にしている。
それを揺らぐ事を決して許さず、斧を振り回して黙らせる事もあった。
そんな彼女の事、自分の弱みを見せる以前に、弱みがあってはならないと考えていたのかもしれない。

「グリシーヌはこうも言ってましたわ。完全無欠の花婿を見つける

と。」

「完全無欠……。」

何ともグリシーヌらしい考えだと、ダイゴは思った。

「でも、そんな人っているのかな……？」

完全無欠。全てにおいて非の打ち所が存在しない人間。
しかし人間である以上、何処かに必ず欠点はある。
そんな中で完全無欠など、ある意味気の長い話だ。
実際の所、花火も似た考えだった。

「さあ……。彼女の理想というだけですから。実際に今日来られたリッシュ伯爵も、縁談目的だったようですし。」

「……あの男と？」

リッシュ伯爵という名前に、ダイゴはあからさまに不快感を示した。
コクリコのようにか弱い少女に平気で暴力を振るい、大神をゴミ扱いするあの名ばかり貴族。
ダイゴの考えからすれば、最も完全無欠とは掛け離れた人物である。

「先の一件を見る限り、私も縁談に賛成しかねます。しかし……。」

やはりリッシュ伯爵の行いを目の当たりにしていたために、花火も縁談に不服の表情を見せる。

「貴族社会には、やはり地位や身分を尊重して、軽はずみな行動が

取れません。もしかしたらグリシーヌも……。」

確かにそうだ。

プライドが高いとはいえ、グリシーヌは目下のものを見下すような事をしない。

そんな彼女がリッシュ伯爵の本性を知れば、すぐにでも斧を突き付けるだろう。

しかし、貴族社会では簡単にはいかなかった。

貴族というのは、古くから伝わる家のしきたりや風習を重視し、地位や身分を末永く後世に伝えなければならない。

そのため、不用意な行いで先代の者が築いた栄光に泥を塗る事は貴族社会からの抹殺を意味する。

リッシュ伯爵は、ブルーメール家より下とはいえ、巴里でも五本の指に入る名門貴族だ。

たとえブルーメール家といえども、そんな名門中の名門との縁談を断れば、リッシュ伯爵に恥をかかせる事になってしまう。

それはブルーメール家の今後にも深く関わるために、強く言い出せないのが現状だった。

「……この人、お願いね。」

そう言いつつ、ダイゴは思い立ったように立ち上がった。

「ダイゴさん、どちらへ？」

「ちょっと用事が出来てね。」

花火にそう答え、ダイゴは部屋を後にした。

屋敷の前に広がる庭。
その隅にあるテラスに、グリシーヌの姿はあった。

「ここにいたんだ。」

「……そなたか。」

いつもと違い、明らかに無気力な返事が返って来た。
何かに悩み疲れているような、そんな様子だ。

「……ダイゴ。」

背中を向けたまま、グリシーヌが語り始めた。

「鋭いそなたの事、私の言わんとしている事が分かるであろう？」

「リッシュ伯爵との縁談……だね？」

「そうだ。……正直な所、迷っている。」

表情は見えないが、暗い顔である事は容易に想像できる。
背中を向けるのも、その表情を見られたくないためだろうか。

「先の件、そなたが正しいと思う。だが、ブルーメール家を危うくする訳にはいかん。……だが、それが本当に名誉ある事かと問われると、解らぬ。」

「どういう事？」

「ブルーメール家は、今でこそ貴族を名乗っているが、元々はバイキングだったのだ。荒れ狂う海と戦い、家族を守る。そうして生き抜いた時代を思うと、今の地位や名誉を守る事が虚しくてな……。」

あながち驚くような話ではなかった。
グリシーヌは麗しい外見と裏腹に勇猛な強さを持つ。
それがかつてのバイキング時代の先祖の名残と考えれば、納得がいく。

「結局は私も、家の一部に過ぎんのだ。」

「……そうかなぁ？」

ここに至り、ようやくダイゴが口を開いた。
「地位や名誉が虚しいって分かってるなら、断ればいい事じゃない？」

「そなた、話を聞いていたのか？私はブルーメール家の一部なのだぞ？」

「そんな事言って、本当は自分の意志を貫くのが怖いだけじゃないの？」

ダイゴのその言葉に、グリシーヌは肩を震わせた。
そして、いつものように斧を取り、ダイゴに突き付けた。

「貴様……、もう一度言ってみろ！この私が怖いだと？」

「だったら地位とか名誉とか気にしないで、断ればいいじゃない。
あの人完全無欠に見えるの？」

気の弱い者なら逃げ出しそうな形相のグリシーヌに、面と向かって言い返すダイゴ。
すると、グリシーヌは頭をふった。

「ええい黙れ！貴様のような平民に何が分かる！？」

「うん、分からない。」

「……何？」

思いも寄らない言葉に、グリシーヌは一瞬怒りを忘れた。
その彼女に、ダイゴはハッキリと告げた。

「地位とか家とか誇りとか言って逃げるような人の気持ちなんて、分かりたくもないよ。」

「なっ……！！」

怒りのあまり固まるグリシーヌを冷ややかに見て、ダイゴは歩きだした。

「待てダイゴ！！この私を愚弄するつもりか！？」

「悔しかったら考えて見れば？今のグリシーヌは、愚弄されて当然だと思うよ。」

平然と言ってのけ、ダイゴはテラスを立ち去った。

「……。」

その後ろ姿を、グリシーヌは無言で睨みつけていた。

「……。」

テラスを離れた後、ダイゴはふと玄関前で足を止めた。

理由は簡単。

いつものようにポケットのスパークレンスが、光り始めたからだ。

シゾーとピトンの事例を踏まえると、近くに怪人の潜む可能性が高い。

「……隠れてないで出て来たら？」

確証はないが、ダイゴは試しにかまをかけてみた。

予想が正しければ、敵は姿形を変えてこの屋敷に来る程の周到さを持っている。

もしかしたらこんな場所では正体を現さないのかもしれない。

まあダイゴにしてみれば、その方がすぐに襲われない分都合が良いのだが。

「……やはり貴様か。」

ダイゴの言葉に答えるようにして現れたのは、何とリッシュ伯爵だった。
その姿は表情こそそのままだが、こちらに向けられた殺気は並々ならぬものがある。

「それはこっちの台詞だよ。暴力なんて、まともな人間のする事じゃないもんね。」

「フッ、貴様こそよく言う。この私が人間に何故躊躇わねばならん？」

明らかに人間という種族を下に見た物言いに、ダイゴは目の前の男があの怪人と同種である事を確信した。
最も、相手も隠すつもりなどないのだろうが。

「一つ聞きたい。貴族を狙う理由は？」

「簡単な事だ。人間に上下などない。あるのは愚かという事実だけだ。」

「そんな奴らは、みんな自分の下に生きろと……？」

探るようにダイゴが言うと、リッシュ伯爵は不敵に笑った。

「そういう事だ。人間に味方する貴様には一生分からんだろうがな。

」

その時、屋敷の方から声が聞こえて来た。

「ダイゴ！ダイゴ！何処ざますか！？」

「どうやら今回の話はこれまでのようだな。」

タレブーの声に、リッシュ伯爵はニヤリと笑った。
確かにここで下手に遅れては、自分まで怪しまれてしまう。
ダイゴは薄笑いを浮かべたリッシュ伯爵をその場に残し、屋敷に戻って行った。

「……時が経つのは早いざます。オオガミ、エリカ、ダイゴ、コクリコ。あなたたちの仕事も終わりざます。」

四人を玄関に集め、タレブーが言った。
グリシーヌが大神に要求したのは、一日メイドとして働く事。
その長いようで短い一日が、ようやく終わったのだ。

「あなたたちがこのブルーメール家で得た技術は、末永くあなたたちの糧になるざます。」

「（ねぇダイゴさん。タレブーさんって、意外といい人でしたね。）」

「それを生かし、これからは礼儀と気品を身につけるざますよ！」

「（……やっぱり嫌な人じゃない？）」

ヒソヒソ話をする二人に気づかず、タレブーは感慨深げに一人頷いた。

「それでは四人共、よく頑張ったざます。元気に頑張るざますよ。」

翌日、大神達はグラン・マの召集を受けて作戦司令室に集まっていた。

「……集まったみたいだね。」

周囲を見渡し、グラン・マが言った。

今回、グリシーヌはいない。

昨日同様、リッシュ伯爵が来ているからだ。

「司令、話とは……？」

「ああ、まずはこの写真を見とくれ。」

開口一番に尋ねる大神にそう答えると、グラン・マは机の上に写真を並べた。
それに写っていたのは、巴里でも指折りの貴族達だった。
着飾った装飾品や高貴な服装から、かなりの上流貴族と分かる。

「実は最近、上流階級の貴族が失踪する事件が相次いでね。これはその貴族達なんだよ。」

フランスの首都である巴里には、沢山の貴族がいる。
しかし最近になって、その貴族が次々と行方をくらませていた。
写真はざっと十数枚。
つまり、その数の貴族が行方不明になっている事になる。
その時、写真を見ていたコクリコが何かに気付いた様子で一枚の写真を手に取った。

「イチロー！この写真！」

「どうした、コクリコ？……こ、これは！！」

コクリコに渡された写真を見て、大神も驚きの声を上げた。
何故ならその写真の人物は、自分達も知る人物だったからだ。

「こいつは昨日グリシーヌの屋敷にいた、リッシュ伯爵じゃないか！」

「そいつは妙だね。リッシュ伯爵は一週間前から行方不明になっていたはずだよ？」

大神の言葉に、グラン・マが眉をひそめた。
一週間前から行方が分からないはずのリッシュ伯爵が、昨日グリシーヌの屋敷に現れた。
グラン・マの話が嘘でなければ、これは矛盾している。

「じゃああのリッシュ伯爵は……！」

昨日現れたリッシュ伯爵が本人である可能性は薄い。
だとすれば、昨日の暴力的な態度も納得がいく。

「大神さん、もしかしたらグリシーヌさんが……！」

大神も予想した不安を、エリカが口にした。
もし大神の予想が当たっていれば、リッシュ伯爵は偽者で、尚且つ一連の貴族失踪事件に関与している可能性が高い。
だとすれば、次に危ないのは巴里屈指の名門貴族であるグリシーヌだった。

「しかしまだ証拠がない。ムッシュ、下手に動くんじゃないよ。」

今にもグリシーヌ邸に急行しようとした花組に、グラン・マが釘をさした。怪しいとはいえ、リッシュ伯爵が犯人である決定的な証拠が手元にない以上、軽はずみな行動はとれない。
場合によっては、ブルーメール家に悪い印象を与えてしまい、立場を悪くしてしまうからだ。
大神はわずかに考えたのち、決断した。

「……よし、ここは俺が一人で行く。大人数より単独の方がやりやすい。」

大人数で乗り込んで騒いでは、逆にこちらが悪者扱いされてしまう。
それに、大神には一つの考えがあった。

「よし、決まりだ。あたしらは何処に貴族が捕まっているか調べるから、ムッシュはグリシーヌを頼んだよ！」

「了解！」

力強い返事を返し、大神は作戦司令室を飛び出した。

「グリシーヌ！」

屋敷につくや否や、大神は中庭に駆け付けた。
そこには、驚いた様子のグリシーヌと、邪魔された様子のリッシュ伯爵の姿がある。

「どうした？屋敷内で騒ぐなど珍しい……。」

「グリシーヌ！奴から離れろ！そいつは……！」

訝しむグリシーヌに構わず、大神はリッシュ伯爵を指差した。

「私が何だ?言ってみなさい。」

自信があるのか、余裕の表情を見せるリッシュ伯爵。
大神はその表情を一点に見据え、言い放った。

「リッシュ伯爵!貴方に決闘を申し込む!貴方も誇りある貴族として、断れないはずだ。」

証拠はないが、リッシュ伯爵は限りなく黒だ。
大神は証拠云々に関係なく、決闘で白黒をハッキリさせる事にした。
そうすれば自尊心の固まりであるリッシュ伯爵は断れないし、更に自分が勝てば、東洋人に負けた事でブルーメール家から縁談を断られる。
リッシュ伯爵が決闘を受けて自分が勝たなければならないが、大神に勝算はあった。

「……いいでしょう。誇りを賭けてその挑戦、受けてあげますよ。」

案の定決闘に応じたリッシュ伯爵に笑みを見せ、大神はグリシーヌを見た。

「グリシーヌ。君は俺が絶対に守ってやるからな。」

「……隊長……。」

その言葉に、グリシーヌは少なからず驚いた。
以前大神に、リッシュ伯爵と望まない縁談を相談していたが、まさか大神が断れない自分を助けに来てくれるとは、思いもしない事だ

った。

「決闘はブルーメール家の伝統に従う。異存はないな!?」

「いいでしょう。」

大神とリッシュ伯爵の決闘の舞台は、以前グリシーヌとの決闘に使用した船のマストの上だった。
昨日と同じように足に命綱を巻き、各々武器を手にする二人。
しかし、グリシーヌは昨日と全く違う何かに気付いた。

「あの抜き身の太刀のように鋭い姿勢……。間違いない、あれが隊長の真の姿か……。」

斧を使っていた前回と異なり、大神はその手に愛用の太刀を握っていた。

「随分と珍妙な武器ですね。まあ、一分で終わらせてもらいましょう!」

先に動いたのはリッシュ伯爵だった。
細身のレイピアを突きの体勢に構え、大神の心臓目掛けて突き出して来る。
その速さはグリシーヌをも越えるほどのものだったが、大神は最小

限の動きで難無くかわして見せた。

「……あのスピードを見切るだと……！」

以前とはまるで動きが違う。

もし今の大神と勝負をしようものなら、自分は瞬殺されていただろう。

大神の華麗なる太刀さばきに、グリシーヌはそう思わずにいられなかった。

そして、それに驚いたのはグリシーヌだけではなかった。

「む……。私の突きを避けるとは、中々やり手のようだ。」

言いながら、更にリッシュ伯爵は攻撃を仕掛けて来た。

「これはかわせまい！」

右から左への払い。

確かに狭いマストの上では避けようがないが、大神にして見れば大した問題ではなかった。

「これしき！」

大神は横から来る刃を避ける事なく、真上に弾き返した。

「なっ……！？」

「もらった！！」

レイピアはリッシュ伯爵の手を離れて宙を舞う。

大神はすかさず、リッシュ伯爵に切り掛かった。

「ぐおおっ……！」

右肩を浅く斬られ、リッシュ伯爵が片膝をつく。
それと同時に、レイピアがグリシーヌの足元に突き刺さった。

「……これは……！」

それを見たグリシーヌは、またも驚いた。
レイピアは根本の辺りで、真っ二つになっていたのだ。
大神はあの一閃で、レイピアを斬っていたのだ。

「これが……、隊長の真の力なのか……。」

昨日とは別人のような雰囲気を漂わせる大神。
その姿に、グリシーヌは真に完全無欠を見た。

「リッシュ伯爵！貴方の負けだ！」

リッシュ伯爵に、大神が鋭い声で叫んだ。
すると、リッシュ伯爵は自分が負けたという事実が信じられない様子で、ワナワナと震え始めた。

「馬鹿な……！この私が負けただと……！！」

刹那、大神はリッシュ伯爵の周囲に凄まじい妖気の集まりを感じ、後ろへ下がった。
すると、それまで大神のいた場所が、突然爆発を起こした。

「認めん！断じて認めんぞ！」

「くっ……！」

煙の奥から聞こえるリッシュ伯爵の声に、大神は煙を挟んだ向こう側のリッシュ伯爵に目をこらす。

しかし、そこにいたのはリッシュ伯爵ではなかった。

百獣の王、ライオンを思わせる鬣と牙。そして金色に光る獰猛な肉食獣の眼。

そこにいたのは、シゾーやピトンのように、巴里の平和を脅かす怪人だった。

「そ、そんな……！リッシュ伯爵が……！！」

「貴様、やはり怪人だったのか！！」

刀を突き付ける大神。

すると、怪人は本性を現したように言った。

「そうだ。私の名はレオン。貴様ら人間を支配する、真に高貴なる者だ！」

「そうか、貴族達を誘拐したのはお前だな！？」

その言葉に、大神は確信した。

やはり一連の貴族失踪事件は、このレオンと名乗る怪人の仕業だったのだ。

「覚えていろ、大神一郎とやら！この屈辱は倍にして返してやる！！」

そう捨て台詞を吐き捨てると、レオンは煙を上げて消え失せてしまった。

「くそっ、逃げられたか……。」

大神は急いでロープをほどき、下に降りた。
予想通りリッシュ伯爵の正体が怪人レオンと分かった以上、早急にグラン・マに報告しなければならない。
しかし、それを止める者がいた。
グリシーヌである。

「待て、隊長！一体どういうつもりだ！？」

「……何の事だ？」

「貴公、私が女だからと手加減をしただろう！」

今の決闘を見る限り、自分と大神の力量の差は歴然としている。
もし大神が今のような力を出せば、自分は一瞬でやられていた。
そもそも大神は昨日わざわざ太刀ではなく斧を選んでいる。
これが手加減と言わずして何と言うのか。
しかし、大神は首を横に振った。

「残念だが、俺はそんな理由で手加減はしない。」

「では、私を守るためにわざと負けたというのか！？」

「それも違う。」

「なら何故だ！答えろ！！」
そう叫んで、グリシーヌは大神の目の前に斧を突き付けた。
だが、大神はその切っ先を眼前にして、微動だにしなかった。

「……強いな。その太刀を抜くかと思ったが。」

鞘に納められたままの太刀を見て、グリシーヌが言った。
すると、大神はゆっくりと口を開いた。

「俺は自分の誇りのために相手を傷つける刀は持たない。リッシュ伯爵に決闘を申し込んだのも、君を助けるためだ。」

「あくまで護るために戦うのか……。それが貴公の……、サムライの誇りなのだな……。」

思えば、大神はグリシーヌに決闘を申し込まれて受けたのであって、自分から言い出した事ではない。
それに今まで、大神は何かを守るために戦いこそすれ、自分から争いを始める事は全くなかった。
あの決闘でグリシーヌに手加減したのも、勝つ理由がなかったからだ。
その佇まいは、見かけばかりを大事にする輩より余程気品に溢れていると、グリシーヌは思った。

「さあグリシーヌ、シャノワールに戻って司令に報告だ。」

「了解した！」

バスティーユ牢獄。
かつてフランス革命の際に最初の戦場となった、外界と断ち切られた世界。
その巨大な入り口に、ダイゴの姿はあった。
その手には、淡い光を放つスパークレンスが握られている。

「やはりここか……。」

リッシュ伯爵に化けた怪人はここにいる。
それを指し示すように光るスパークレンスの光が俄かに強まった。

「クックックッ……。やはり来たか。」

突如真後ろから聞こえた不敵な笑い声。
それに振り向いたダイゴの目に、一人の怪人の姿が移った。

「しかしここまでだ。このレオンが、貴様を地獄に突き落としてやる。」

そう笑い、レオンは片手を高々と上げた。

「いでよ我がしもべ！我等に盾突く裏切り者を押し潰せ！」

すると、牢獄の近くの地面が割れ、中から一匹の怪獣が姿を現した。

全身黄土色の皮膚に、髑髏のような顔。
そして今までにないほどの強い闘争本能に、ダイゴは震えた。

「貴様ごとき私の出る幕はない。行け、髑髏怪獣レッドキング！！」

言うや、レオンは煙と共に姿をくらました。
一方、レッドキングは獲物を見つけたように咆哮を上げる。

「ガオオオッ！！」

地面が揺れるほどの声に我に還り、ダイゴはスパークレンスを掲げて叫んだ。

「ティガーーーーッ！！」

「……ここか。」

暗く下水の流れるバスティーユ牢獄の地下に、巴里華撃団の姿はあった。
あれから作戦司令室に、ティガが怪獣とバスティーユ牢獄前で戦っているとの連絡が入り、大神はレオンが貴族をここに幽閉したと判断して、今回の出撃に至った。

「ここに貴族の人達が閉じ込められてるんだね……。」

「可哀相……、大神さん、早く助けてあげましょう！」

下水の流れる牢獄内は、悪臭などはないが、衛生的に悪い事は間違いない。
幽閉された貴族達が弱っていない事を祈りつつ、大神は指示を出した。

「よし、ティガが怪獣を足止めしてくれている間に、貴族を救助するぞ。」

「「了解！」」

巴里華撃団が牢獄内に侵入した頃、ティガはレッドキングと激しい肉弾戦を繰り広げていた。

「ガオオオオ！」

「チャッ！」

二つの巨体が激しくぶつかり合い、大地を揺るがす。
しかし、腕力に限定すればレッドキングの方が上だった。

「ジュワッ！？」

まるで紙屑のように放り投げられるティガ。
すると、ティガは両腕を額のクリスタルの前で交差させた。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

そしてクリスタルが発光し、ティガの体が赤と銀に変わる。
コンコルド広場でゲオザーグを倒した、パワータイプである。

「ガオオオオー！！」

闘争本能のままに襲い掛かってくるレッドキング。
しかし、パワータイプにチェンジしたティガは、先程のようにはいかなかった。

「ハッ！」

レッドキングの剛腕を捕まえ、ティガはレッドキングを高々と抱えて地面にたたき付けた。
更に倒れたレッドキングの尻尾を掴み、ジャイアントスイングの要領で投げ飛ばす。

「チャーッ！！」

頭から再び地面に激突するレッドキング。
ティガは両手を胸のカラータイマーで重ねて真下に下ろし、ゆっくりと外回りに回転させた。パワータイプの必殺技、デラシウム光流だ。

「ハァァァ……！」

圧縮されたエネルギーがボールになって、ティガの両手に包まれる。
しかしその光のボールをレッドキング目掛けて投げつけようとした時、思わぬカウンターが返ってきた。

「ガオオオオッ！！」

何とレッドキングは、起き上がると同時に巨大な岩石をティガに向かってぶん投げたのである。

「ジュワッ！？」

その反動で光流が暴発し、ティガは後方へ吹き飛ばされる。
そこに、レッドキングは更に巨大な岩石でラッシュを掛けてきた。

「ガオオオオオ！」

「チャッ……！！」

両手で何とか岩石を押し返そうとするティガだが、いかんせんレッドキングは力が強く、パワータイプでもひけをとってしまう。

「（それなら……！）」

形成不利と見たティガのクリスタルが輝きを放った。

「ンゥゥゥ……、ハッ！」

それと同時に、ティガの体が赤と紫と銀に戻る。

パワー、スピード、バイタルのバランスがとれた基本形態、マルチタイプである。

そして、ティガはマルチタイプに戻ると同時に胸のカラータイマーを発光させた。

「チャッ！！」

タイマーフラッシュ……カラータイマーを発光させて敵を威嚇する、マルチタイプの技の一つだ。

「ガオオッ！？」

そのまばゆい閃光に、レッドキングが一瞬怯む。

その隙にティガはバク転で距離を置き、両手を胸の前に突き出した。

そして両手をそのまま左右に広げると、その軌道に沿って光の筋が現れる。

ゼペリオン光線……膨大な光エネルギーを集約し、L字に組んだ腕から放つ、マルチタイプの必殺技だ。

「ハッ！！」

白い光線が、一直線にレッドキングの胸を直撃した。

「ガオオオオ……！！」

レッドキングは最期の咆哮と共に仰向けに倒れ、大爆発した。

「よし……、後はレオンだ……。」

既に牢獄内部から剣戟や銃声が聞こえている。
おそらく例の巴里華撃団だろう。
ティガは両腕を胸の前で合わせ、エネルギーを集中した。

「ンゥゥゥ……！」

すると、ティガの体が無数の光の粒に変わり、牢獄内部へとテレポーテーションしていった。

その頃、巴里華撃団は牢獄内に徘徊していたポーンを全滅させ、貴族達が捕われているであろう牢獄内部へ移動を開始していた。
しかし、グリシーヌの青い光武Fだけは、入り口で立ち止まっていた。
万一レオンが先に戻って来れば、自分達まで閉じ込められる可能性

があるからだ。
そこで大神は、メンバーの中で取り分け戦闘力の高いグリシーヌに見張りを頼んだのだ。

「……やはり下水など、躊躇いもしないか。」

大神達の姿が見えなくなり、グリシーヌはふと呟いた。
この牢獄の下水道は深く、光武Ｆでも半身が沈んでしまう。
そうなると、蒸気を排出する機関部や、下手をするとコックピットにまで下水が流れ込む事になる。
衛生的に良くないために自分は思わず躊躇してしまったが、大神はそれがどうしたと言わんばかりに突き進む。
正義のためなら、自分の身体など二の次と言う事だろう。
グリシーヌは大神の侍気質に感心すると同時に、一瞬でも下水に入る事を躊躇した自分を恥じた。

「貴族達を救おうと決意しながら、躊躇いを感じるとは……。」

その時だった。
グリシーヌは背後から、強烈な殺気を感じ取った。

「な、何だ!?」

振り返った一瞬、グリシーヌは左からの衝撃を受け、壁にたたき付けられた。
その勢いに、悲鳴も出ない。
すると、グリシーヌの耳に殺気の主の声が聞こえてきた。

「フン、たわいのない。飛んで火に入る夏の虫とはこの事だな。」

それは、巨大な獅子の形をした蒸気獣に乗ったレオンだった。
ティガをレッドキングに戦わせ、自分は巴里華撃団を迎え撃つために牢獄内に戻って来たのだ。

「さあ、貴族共々閉じ込めてくれる。」

言うや、レオンは右手を翳して魔力を集中した。
すると、大神達が入って行った下水道の門が下がり始めたではないか。

「（まさか、下水道の門に封印を……！！）」

そんな事をさせる訳にはいかない。
気がつけばグリシーヌは、不意打ちで傷付いた身体のまま下水道に飛び込み、下がりかけた鉄格子の門を両手で持ち上げていた。

「ほう、まだ立ち上がる力があったか。」

仕留めたと思った光武Ｆの抵抗に、レオンが意外そうな顔をした。

「だが、その体では長くももつまい。」
確かにレオンの言う通りだった。
先程左の脇腹に受けた一撃は決して軽いものではなく、加えて１トンにもなる鉄の塊を支えるのは無謀な行為。
おそらく今の状態では１０分ももたないだろう。
しかし、グリシーヌは苦しい表情を我慢して、弱みを見せなかった。

「フン、貴族を名乗っても所詮は獣だな。この程度で勝ったつもりか！？」

すると、レオンは余裕の表情から一転し、怒りを見せた。

「小賢しい！ならばこれでどうだ！！」

そう言ってレオンは、身動きの取れないグリシーヌに激しい攻撃を浴びせ始めた。

「くっ、……ううっ！！」

「クックックッ、どうした？しっかりせねば門が閉まるぞ？」

たちまち苦悶の表情を見せるグリシーヌを楽しむように、レオンは一層攻撃を激しくした。

反撃の一つでも出来ればいいが、両手で門を押さえているこの状況ではそれも不可能だ。

「どうだ。貴族のお前には薄汚れた下水は耐えられまい。」

勝ち誇った様子でレオンが言った。

しかし、グリシーヌは決してそれを認めなかった。

「下水がどうした。そんな事で仲間を見捨てる私ではない！あの男が、それを教えてくれたのだ。」

自分を傷つける事になっても、自らの意志を貫く。

ダイゴが指し示し、大神が身を以って教えてくれた事だ。

その仲間を助けるために下水に汚れる事など、何を躊躇うというのか。

「強がりはよせ。命ごいをすれば、助けてやらん事もないぞ？」

「貴様ごときに屈する私ではない。……吠えていろ！」

レオンの言葉を軽く突っぱねるグリシーヌ。

すると、レオンの殺気が俄かに高まった。

「そうか……、ならば望み通り死ね！！」

炎が宿った拳が眼前に迫る。

しかし、その一撃がグリシーヌに届く事はなかった。

何故なら、二人の間に割って入った巨大な影が、その一撃を受け止めたからである。

「な、何！？」

「……ティガ……。」

その姿に、レオンもグリシーヌも驚きを隠せなかった。

グリシーヌを庇うようにレオンの攻撃を押さえていたのは、これまで二度自分達を助けてくれた光の巨人、ウルトラマンティガだったからだ。

「ハッ！」

ティガは押さえていたレオンの拳を振り払い、その腹部に蹴りこんだ。

「グオッ！？」

その反撃で、レオンの蒸気獣は大きく後ろに倒れる。

しかし、これで状況が好転したとは言い難い。
何故なら、今の一撃と同時にティガのカラータイマーが赤く点滅を始めたからだ。
何せレッドキングとの激戦の直後にテレポーテーションを使ったのだ。
エネルギーの消費は半端なものではない。

「チャッ！」

しかし、ティガは真後ろの鉄格子にハンドスラッシュを放ち、鉄格子そのものを破壊した。
その姿にグリシーヌは、大神に見たものと同じ強さをティガに見た。

「ティガ……、そなたもか……。」

おそらくティガは、グリシーヌを助けるために自分の身体など二の次なのだろう。
その姿に、グリシーヌは胸が熱くなった。

「ティガ……、この私を守ってくれるのか……？」

すると、ティガはグリシーヌに振り向き、しっかりと頷いた。

「小賢しい！弱った貴様など、この蒸気獣マルシュで捻り潰してくれる！！」

「チャッ！！」

再び襲い掛かるマルシュに、ティガは真正面からぶつかった。
激しい衝撃が、牢獄内を揺るがす。

「ティガ！」

グリシーヌは援護しようとしたが、レオンに痛め付けられたダメージからか、光武Fは動いてくれない。
その間にも、ティガとレオンは激しい格闘戦を展開していた。

「ハッ！」

ティガが渾身の右ストレートを打ち込む。
しかし、それはマルシュの左手に軽く止められてしまった。

「どうした、この程度で私と張り合うつもりか？」

「チャッ……！」

ティガの基本形態であるマルチタイプは、パワー、スピード、バイタルのバランスに優れた隙のない点が長所だ。
しかしそれに伴い、差し当たって抜きん出た特徴がなく、レオンのように力が強い相手には、押し負けてしまう弱点があった。
本来こういう相手にはパワータイプにチェンジするべきなのだが、今度ばかりはそうはいかない。
パワータイプはマルチタイプ以上に、エネルギーを激しく消費してしまうからだ。
ただでさえカラータイマーが点滅しているこの状況でチェンジすれば、たちまちエネルギーが尽きてしまう。
そうなれば、自分だけでなくグリシーヌもやられてしまうだろう。
しかし、ティガの戦いも長くは続かなかった。

「悪いが貴様とはこれ以上遊んでおれん。そろそろ終わらせてもら

うぞ。」

そう言って、マルシュがティガを殴り飛ばした。

「ジュワッ!?」

その勢いで後ろに下がるティガ。
そこに、レオンが必殺技を放って来た。

「血に飢えし千の獣よ、我に従え!!ロイヤルラージュ!!」

ライオンを象った炎がティガに襲い掛かる。
もはやこれまでか……。
しかし、またしてもそれを食い止めるものがいた。
巴里華撃団である。

「グリシーヌ、ティガ、大丈夫か!?」

マルシュの攻撃を二刀で防ぎながら、大神が叫ぶ。

「ふっ、遅いぞ隊長。」

エリカに治療してもらいながら、グリシーヌが言った。
その隣には、コクリコの姿もある。
大神達は貴族達を無事に救出し、間一髪で戻って来たのだ。

「おのれ巴里華撃団!こうなればまとめて始末してくれるわ!」

計画を台なしにされ、怒りに震えるレオン。
すると、グリシーヌがすかさず言い返した。

「ほざけ！正々堂々と戦う事の出来ぬ輩に負ける巴里華撃団ではないわ！」

言うや、グリシーヌは斧を構えてマルシュに切り込んだ。
怒りで周りが見えなくなったからか、レオンは一瞬反応が遅れ、グリシーヌの一撃を真正面から受けてしまう。

「グオッ！？」

斧を叩き込まれたマルシュの左腕が宙を舞い、石床に転がった。
そこに、グリシーヌの霊力を集中した更なる一撃が見舞われた。

「大いなる荒波の力を我が手に！　グロース・ヴァーグ！！」

凄まじい高波がマルシュを包み、真後ろの壁に勢い良くたたき付けた。
先程までボロボロだった者の攻撃とは思えない程に強烈な一撃。
その一撃が致命傷になったのか、マルシュは全身から煙を上げ始める。

「ティガ、今だ！」

グリシーヌの言葉に頷き、ティガは一連の動作で腕をL字に組み、マルシュ目掛けてゼペリオン光線を撃ち込んだ。

「ば、馬鹿な！？私は認めんぞ！私こそ……、私こそ真の貴族なのだぁぁ……！！」

最期まで己を貴族と信じ続け、マルシュは轟音と共に大爆発した。

「……フッ……。」

「どうした、グリシーヌ？」

戦いを終えて微笑むグリシーヌに、大神が尋ねた。
すると、グリシーヌは何処か吹っ切れた様子で答えた。

「隊長。貴公のサムライの誇りというもの、学ぶ所が多い。これからもよろしく頼むぞ？」

「……ああ、よろしくな！」

以前の彼女ならまず口にしなかっただろう言葉。
グリシーヌが心を開いてくれた事に感謝し、大神は笑顔で答えた。
すると、グリシーヌは更に意外な言葉を口にした。

「では、いつものをやるとしよう。みな、遅れるでないぞ！」

何と、前回まで嫌がっていた決めポーズを自分からやると言い出したのだ。
その変わり様に、大神を含めて三人は互いに顔を見合わせる。

「グリシーヌ、どうしたのかな？」

「何かいい事でもあったんじゃないですか？」

「まあいいじゃないか。それより、俺達もやるぞ？」

「勝利のポーズ、決め！」

次の日、ダイゴの姿は近くの公園にあった。
何でもまた大神がみんなで遊ぼうと言い出したらしく、起きるや否やエリカに連れ出されたのだ。

「あ、イチロー！エリカが来たよ～！」

最初に気付いたコクリコが、二人に手を振った。
手に羽子板を持っている事から、羽つきをしていたと分かる。

「やあ、エリカくん。ダイゴも来てくれたのか。」

「はい！大人数の方が楽しいですから！」

「ハハハ……。」

完全にペースに呑まれ、力無く笑うダイゴ。
すると、グリシーヌが声をかけて来た。

「ちょうど良い。ダイゴ、私と勝負だ。」

見ると、コクリコと羽つきをしていたのか、顔に墨が塗られている。

「負ければ奴と同じく、またメイドを手伝ってもらうぞ？」

「え……！？」

「グ、グリシーヌ……。」

意地悪そうに笑うグリシーヌに異を唱えようとする大神。

すると、グリシーヌは突然真顔に戻って言った。

「……冗談だ。」

その一言に、またも四人は固まった。

まさかあのグリシーヌが冗談を口にするとは、思いもしなかったからだ。

「本当にどうしちゃったのかな、グリシーヌ。」

「今までと全然違いますよね？」

「よかったじゃないか。前より明るくなったし。」後ろで三人がそう言っている事にも気付かず、グリシーヌはダイゴに羽子板を突き付ける。

「その顔を真っ黒に塗り潰してくれる！勝負だ！」

「やれやれ……。」

ぼやきつつも羽子板を構えるダイゴ。
この勝負の行方がどうなったかは彼らしか知らないが、ただ一つ言えるのは勝負の後、二人とも真っ黒な顔で笑っていたという事であった。

サムライの誇り（後書き）

《次回予告》

窃盗、傷害、強盗……。

課された懲役は巴里最長の１０００年。

そのアタシに、平和のために戦えだ？

次回、サクラ大戦３。

《闇よりの使者》

愛の御旗のもとに……

ハラワタまで、焼き尽くしてやる……！

闇よりの使者（前書き）

ゲームでいう第４話。

ロベリアって今までにないヒロイン像でしたよね。

あのラストがとにかく衝撃だった。

闇よりの使者

それは草木の眠る真夜中の事だった。

「……いい月だ……。」

屋根の上に立つ一つの影が、徐に呟いた。
夜空に浮かぶ満月が、その姿を怪しく照らす。

「ここがレイモンの屋敷か……。」

影はそう呟き、眼下の建物を見る。
そして次の瞬間、何もない掌に炎を生み出した。
揺らめく炎が、影の顔を悍ましく照らし出す。
影はその炎を、屋敷目掛けて投げつけた。
刹那、屋敷の一角からたちまちにして火の手が上がる。

「フフフ……、楽しいねぇ……。」

その様子を満足げに眺めつつ、影は更に大きな炎を生み出し、屋敷に放つ。

「アーッハッハッハ……！！」

全てを燃やし尽くす様に笑う影。
すると、そこら中からけたたましいサイレンの音が聞こえて来た。

「何だ、もう感づきやがったのか？警察も暇なこって。」

お預けを喰らったような口調で吐き捨て、影はその場を立ち去ろうとした。
しかしその時、目の前に別の気配を感じて立ち止まった。

「……誰だ？」

殺気を漲らせた声で威嚇する。
自分は一人のため、仲間などというのは有り得ない。
こんな夜更けに屋根の上に立っているのは、大方同業者か裏の人間だ。
それを熟知している影は、油断なく身構える。
すると、ややあってもう一つの影が答えた。

「……相手より先に、自分から名乗らない？」

「悪いがこっちはそんな常識を重んじる気はない。早く答えな。」

予想より若い子供のような声に驚きつつも、先程よりも殺気を込めて迫った。
既にサイレンの音はすぐ近くまで来ている。
早くここを離れなくては、警察に見つかるかも知れない。
沸き上がる焦燥感を抑えて睨みつける影だが、相手も素直には答えなかった。

「それじゃこっちも答えられないよ。」

「アンタ、消し炭にされたいのか？」

言うや、影は痺れを切らして炎をちらつかせた。
炎は影の殺意を代弁するかのように、激しく燃える。

しかし、子供はそれを笑って返した。

「名前も教えてくれない人には遠慮したいなぁ……。」

「だったら覚えておきな。この巴里一番の大悪党、ロベリア・カルリーニをな！！」

そう叫び、ロベリアと名乗った影が炎を放とうとする。

だがその時、ロベリアの首筋を鋭い激痛が走った。

「うぐっ……！？」

激痛と共に全身を痺れが駆け巡り、ロベリアはそのまま崩れ落ちた。

「……何だ、先にやっちゃったんだ。」

倒れたロベリアの奥に立つ三つ目の影に、子供はやれやれという口調で呟いた。

三つ目の影は無言のまま、血のように赤い二つの目を光らせた。

「まあいいや、早く行こうよ。五月蝿くなってきたし。」

そう言って子供がその姿を消すと、赤い二つの目もまた見えなくなる。

その直後、屋根一体を無数のサーチライトが照らし出した。

そこには、アシンメトリーのコートを身に纏った一人の若い女性が、首筋に傷を残して倒れていた。

『ロベリア・カルリーニ、遂に逮捕。』
その見出しで始まった記事は、新聞の一面を完全に占領していた。

「……昨夜未明、レイモン氏の邸宅で火事が発生。巴里市警は放火の犯人としてロベリア・カルリーニを逮捕。」

ゆっくりと記事を読み上げたのち、大神は奥の席に座るグラン・マに尋ねた。

「司令、この記事は……？」

「今朝の朝刊だよ。巴里華撃団の戦力向上には、うってつけだろう？」

この日、大神以下三人の隊員は作戦司令室に顔を揃えていた。
グランマの提案で、新隊員について話し合うためだ。
今現在の巴里華撃団の戦績は三戦全勝。
ティガの助力もあって、白星をあげ続けている。
しかし裏を返せば、巴里華撃団が単独で敵を撃滅出来た例は存在しない。
そのため、次の戦いにティガがなくして勝てるかと問われると、大神は自信がなかった。
怪人や蒸気獣は大した問題ではない。
しかし奴らの従える怪獣は強力で、ティガなしで勝てる可能性は、

少なくとも今の自分達にはなかった。
そこで新隊員を加えて戦力向上を計る訳だが、集まって早々グラン・マは大神にこの朝刊を渡したのだ。

「司令、この記事と新隊員に何の関係が……？」

「何言ってんだい、ムッシュ。そこに名前が書いてあるじゃないか。」

意図が分からず尋ねる大神に、グラン・マはさも当然の如く言う。
すると、大神はグラン・マの考えを理解すると同時に驚愕の表情を見せた。

「まさか……、このロベリア・カルリーニを隊員にするんですか！？」

正義を貫く巴里華撃団に犯罪者を入れるなど、聞いた事がない。
しかし、グラン・マはあっさり頷いた。

「そうさ。ロベリアはかなり腕の立つ霊力の持ち主らしいからね。加わってくれれば戦力は著しく上がるよ。」

「でも、悪者が簡単にボク達に協力してくれるのかな？」

コクリコが的確な意見を述べた。
相手は巴里の平和を脅かす悪党である。
そんな人間に平和のために協力を求めた所で、断られるのがオチだ。
しかしグラン・マは、主張を曲げなかった。

「簡単な事さ。何らかの条件をつけて交渉するんだよ。相手は懲役１０００になる悪党だからね。飛び付いてくると思うよ？」

「１０００年!?長生きな人ですね～！」

あからさまに驚くエリカ。

ロベリアは巴里で最も最悪と言われた大悪党だ。

窃盗、傷害、強盗……。

その数え切れない程の罪状を並べると、懲役は途方もないものだった。

すると、ここでグリシーヌが反論した。

「私は反対だ。このような極悪人を仲間にするなど、巴里華撃団の名折れではないか。」

「俺もグリシーヌの意見に賛成です。改心させるならともかく、取引では信用できません。」

相手は悪党だ。当然正義感もなければ、協調性もない。

いつ裏切られるやも知れぬ人物を仲間に加えるなど、正気の沙汰とは思えなかった。

が、しかし。ここでエリカが意外な事を口にした。

「だったら大神さん、今からロベリアさんを正義に目覚めさせればいいんじゃないですか?」

「え?いや、でもエリカくん……。」

「大丈夫です!私がロベリアさんを正しい道へ導いて見せます!」

大神の言葉を無視して、一人意気込むエリカ。

どうやら今の会話を聞いて、ロベリアに人としての道を説き伏せる

使命感に駆られてしまったらしい。
しかし大神は、素直には喜べなかった。
改心させるというエリカの決意は素晴らしいのだが、ドジなエリカの事、また何か失敗をやらかす可能性は限りなく１００％に近い。
そんな事になれば、どんな被害を被るか想像も出来なかった。

「決まりだね。ロベリアは今、サンテ刑務所に服役中だよ。」

それを知ってか知らずか、グラン・マはエリカの申し出に便乗して決定を下してしまった。
こうなっては仕方がない。
大神はエリカが大きな失敗をしないように、祈る事しか出来なかった。

サンテ刑務所は、巴里郊外に位置する刑務所の一つだ。
中では多くの囚人が集まり、出所の時を待っている。
ロベリアは、その一番奥に位置する特別牢獄に収監されていた。

「ここにロベリアが……。」

先が暗闇に包まれた螺旋階段を、ライトの明かりを頼りに下りていく大神達。
そこは、完全に外界と遮断された、奈落の底にも見えた。

「……。」

最下層にて、大神は奥に気配を感じてライトを向けた。

「あれが……ロベリア？」

薄汚れた囚人服を着せられ、足は鎖で壁に固定されている。
恐らくは目的の人物と見ていいだろう。

「……あ、怪我をしてますよ？」

ふと、エリカがロベリアの首筋を指差した。
そこには、何か鋭いもので突き刺されたような刺し傷がある。
多分逮捕のどさくさでついたのだろう。
ろくな手当てもされなかったらしく、血が滲んで僅かに腫れていた。

「悪人だけど、可哀相だね……。」

「確かに……。」

同情を見せるコクリコに、グリシーヌが同意する。
その時、ロベリアの目が四人を睨みつけた。
刹那、何処からともなく炎が現れ、一直線に襲い掛かってきた。

「なっ……！」

「危ない！！」

咄嗟に前に出たエリカが、霊力のシールドで炎を止める。
やがて炎は、数秒四人に牙を剥きつづけて消え去った。

「……君が、ロベリア・カルリーニだな？」

炎が収まった事を確認して、大神はロベリアに声をかけた。

「……。」

「単刀直入に言う。ロベリア、俺達の仲間になってほしい。」

沈黙を保つロベリアに、大神は単刀直入に申し出た。
すると、ロベリアは沈黙から一転して苦しみ出した。

「うっ……！ううう……！！」

「大変！ロベリアさん、大丈夫ですか！？」

慌てて駆け寄るエリカ。
しかしその瞬間、苦しみに耐えるはずのロベリアの顔が笑ったのを、大神は見逃さなかった。

「駄目だ！行くな、エリカくん！！」

ロベリアの狙いに気付いた大神が叫ぶ。
が、それより早くロベリアが動いた。

「動くな！動いたらこの女を殺すよ？」いつの間にか手錠を外した

ロベリアの腕がエリカの首を捕まえ、フォークが突き付けられる。
やはり大神の読み通り、ロベリアは演技でエリカをおびき寄せたのだ。

「待てロベリア！俺達の仲間になれ！」

「仲間だと？」

「そうだ！そうすれば君は自由になれる！！」

「……悪いがノンだ。アタシはアタシ自身のためにしか動かない。」

大神の予想通り、ロベリアは聞く耳を持たない。
すると、ここでエリカが動いた。

「大神さん、ここは私に任せて下さい！」

「エ、エリカくん！？」

こんな人質にされて命まで危うい状況だと言うのに、一体何をすると言うのか。
しかしこの後、大神達三人はエリカが文字通り奇跡を起こす瞬間を、目の当たりにする事になる。

「ロベリアさん、貴女は本当は悪い人じゃないはずです！」

「馬鹿言うな！アタシは巴里の悪魔だ。その気になりゃ、お前を殺す事も出来るんだぞ！」

「大丈夫、貴女の罪は私が許します。」

「別にお前に許して貰わなくていい！」

「神は申されました。右の頬を叩かれたら左の頬を差し出せと。」

「いい加減にしろ！それ以上喋ったら心臓ブチ抜くぞ！」

「だから私も、左の心臓を刺されたら右の心臓を差し出します。」

「お前アタシをナメてるな！？心臓は左にしかないだろうが！！」

「そうすれば、きっと貴女も真人間になれるはずです。」

「心臓と真人間に何の関係がある！」

「あ、それと話は変わりますけど……。」

「こら、勝手に変えるな！」

「ロベリアさんの何処が真人間かと言いますとね……。」

「変わってねぇじゃねぇか！！」

「す、凄い……。ロベリアがエリカくんのペースに巻き込まれている。」

先程までの緊迫した状況から一転、奈落の底はエリカによって漫才

劇場になってしまった。
ロベリアは予測不能のエリカのボケに突っ込むあまり、完全に周りが見えなくなっている。

「よし！コクリコ、グリシーヌ、今の内にロベリアを取り押さえろ！」

「任せろ！」

「分かった！」

大神の指示で、三人は一斉にロベリアに飛び掛かった。

「し、しまった……！！」

エリカを人質に脱獄を試みた巴里の悪魔は、何とも情けない形でお縄についた。

「……よく分かった。ロベリア、君に会う事は二度とないだろう。」

「貴様にはその格好がお似合いだ。」

再び手錠と鎖で拘束されたロベリアに、大神とグリシーヌが鋭く言い放つ。
所詮悪党と正義は裏表。
この現状が何よりの証拠だ。
ロベリアを加える事は不可能であると分かった以上、ここには用はない。

「あ、ちょっと待って下さい。」

三人が牢獄を後にしようと背を向けた時、エリカが再びロベリアの方に駆け寄った。
そして、ロベリアの首筋に手を翳し、怪我の治療を始めたのだ。

「お前……！」

驚きの表情でエリカを見るロベリア。
その顔が、ふと大神の目に止まった。

「あれ……、さっきと違うような……。」

最初に睨みつけて来た時のロベリアの表情は、刃物のように鋭く冷たい印象を受けた。
しかし今エリカを見るロベリアには、その印象がない。
悪人特有の暗い感じが、彼女からは感じなかったのだ。

「はい、これで大丈夫です。」

「そんな奴、放っておけばいいのに。」

先程の騒ぎの心配からか、コクリコが悪態をつく。
ロベリアの怪我は、エリカの治癒能力のおかげで完治していた。

「エリカ、あまり不用意な事はするな。」

「は～い。さ、行きましょっか。」

本当に分かったのか怪しい返事で戻って来るエリカ。
その様子を、ロベリアは無言で見つめていた。

「ご苦労さん、ムッシュ。」

牢獄から出て来た四人を、グラン・マが出迎えた。
「で、どうだった?あっちの反応は。」

あっちとは言う間でもなくロベリアの事だろう。
その問いに最初に答えたのはグリシーヌだった。

「やはり悪党に過ぎん。話すだけ時間の無駄だ。」

「ボクもやだよ。あんな奴を仲間にするの。」

グリシーヌに便乗して意見するコクリコ。
すると、ここでエリカが反論した。

「そんな事ありません。ロベリアさんだって、本当は悪い人じゃないはずです。」

「エリカ、先程の事を忘れたのか?そなたこそ命が危うかったのだぞ!」

呆れた様子でグリシーヌが怒鳴る。
しかし、大神は考える様子を見せて言った。

「俺は……、出来ると思います。」

「隊長!貴公まで何を言うのだ。」

先程までロベリアの参入に反対していた大神の意外な一言に、グリシーヌが驚きを見せる。

「エリカくんに怪我を治療された時のロベリアの表情は、犯罪者特有の冷たさや暗さを感じなかった。あれがもし彼女の本当の姿なら……。」

「やっぱり!大神さんも分かってくれたんですね!」

一転してロベリア参入に賛成した大神に、エリカが感激する。
それと対照的に、コクリコやグリシーヌは不快感を露にした。

「イチロー、あんな悪い奴を仲間にするの?」

「正気か！？」

「まだ結論を出すのは早い。もう少しロベリアを観察してみるべきかと。」

ロベリアを隊員に迎えるかは隊長である大神に絶対的権限がある。
まだ彼女の参入を認めた訳ではないが、今の時点でその選択肢を切り捨てるのは、些か拙速感があった。
先程暗がりの中で放った炎の威力はかなりのもので恐怖すら感じたが、仲間になればこれ程心強いものはない。
巴里華撃団の今後を考えるなら、ロベリアは是非加わってほしい人材だった。

「なるほどね。ま、相手が相手だし一筋縄じゃ行かないよ。アタシもムッシュと同意見だよ。」

そう言った後、グラン・マは思い付いたように続けた。

「それならムッシュ。アンタ、ここにしばらく世話になったらどうだい？」

「いいっ！？俺が刑務所ですか！？」

突然の宣言に驚く大神。
つい先月、グリシーヌ邸のメイドをさせられたばかりだというのに、冗談ではない。
すると、グラン・マはさも当然の如く言った。

「ロベリアを観察するんだろ？だったら四六時中同じ建物がいいじゃないか。」

「そ、そんな～……。」

大神は今になって自分の言葉を後悔したが、あとの祭である。
かくして巴里華撃団隊長大神一郎は、めでたくサンテ刑務所に収監される事となった。

巴里には沢山の芸術がある。
それこそ世界にその名を知らしめた巨匠の作品がいくつも眠る巴里の美術館は、芸術の宝庫だ。
その一角に、不穏な影が現れた。

「……随分夜が静かになったわ。」

高い声色から、女性と推察できる。
胸元から大きく露出した服を身に纏う妖しい魅力を携えた女性。
その後ろに、赤い二つの目が光った。

「ロベリアとかいう小悪党が捕まったからね。流石はあたしのペットだわ。」

そう言って、女性は赤い二つ目を褒める。

「フフフ……。芸術の都と呼ばれた巴里の芸術、全部ズタズタにしたら、人間共はどんな顔するかしらね？」

そう言って、女性は目の前にある絵画に爪を立て、真っ二つに引き裂いた。

「……にしても、人間の芸術センスは酷いわね。壊し甲斐がないわ。」

無残に引き裂かれた絵画を前に、女性が呟いた。
人間と口にしている辺りから、やはり怪人の一人と推測できる。

「……そうだ。もっと有名な奴を引き裂くのよ。巴里の誰もが知るアイツを、このナーデルがね。」

ナーデルと名乗った女性が、残忍な笑みを浮かべた。
すると、それに合わせて赤い二つ目も輝きを増した。

「フフフ……、哀れな裏切り者。あたしが芸術にしてあげるわ。」

「……刑務所？」

レノ神父の口にした一言に、ダイゴは思わずマヌケな声を出してしまった。

今朝から教会にエリカの姿がない事が気になってレノ神父に尋ねた所、神父はこう返したのだ。

「はい。今朝から二人の友人と連れ立ってサンテ刑務所の方へ。何故か張り切っていたので、失敗しなければ良いのですが……。」

その言葉に、ダイゴは思わず苦笑いを浮かべた。

エリカのドジはどういう訳か、張り切っている時に限ってよく発生する。

そのジンクスが働けば、エリカは刑務所で少なくとも一度は何かしらの失敗をするだろう。

小さいミス位ならいいのだが、下手をすれば囚人を脱走させてしまったり、不用意に近付いて人質にされたりするかもしれない。

「……ですからダイゴさん……。」

レノ神父もダイゴと同じ事を考えていたらしく、申し訳なさそうに言った。

「でもいいの？僕まで抜けて……。」

「それなら大丈夫です。今日から新しくボランティアの方が見えますから。」

そう言った時、タイミング良くその人物が姿を見せた。

「お待たせしました、レノ神父。」

そう言って教会の入口に立っていたのは、ダイゴと同じくらいの歳の少年だった。
白い肌と金髪が特徴的な美少年で、そこら辺のパリジェンヌなら悩殺されそうな笑みを浮かべている。

「ああ、ピエールさん。よく来て下さいました。」

レノ神父が笑顔で迎えると、ピエールと呼ばれた少年はこちらに歩み寄って来た。

「ダイゴさん。こちらが今日からボランティアに加わってくれる事になったピエールさんです。」

「よ、よろしく……。」

人とは違う神秘的な魅力を持つピエールに驚きつつ手を差し出すダイゴ。
すると、ピエールは笑いながらダイゴの手を握った。

「ボンジュール、君がダイゴか。ピエール・タバルニエだよ、よろしく。」

エリカとはまた違った笑顔。
それに会えた嬉しさからか、ダイゴもまた笑顔になった。

「ダイゴさん、エリカさんを頼みます。」

「うん、分かった。ピエール、またね。」

そう言って、ダイゴは急ぎ足でサンテ刑務所へと向かって行った。
ピエールという新しい友人が出来た事に喜びながら。

「……。」

目的地のサンテ刑務所に着くや、ダイゴは固まった。
無理もない。
けたたましいサイレンの中を、沢山の警官達が走り回っているのだから。

「エリカさん……。」

まさかもう何かやらかしたのではなかろうか。
そんな不安を抱きながら、ダイゴは刑務所全体が混乱しているのをいい事に刑務所内に入り込んだ。

「ふぇ～ん！助けて下さぁ～い！！」

刑務所内に入るや否や、エリカの声が耳に入った。

「エリカさん！？」

慌てて牢獄の奥に走るダイゴ。

しかし次の瞬間、ダイゴは別の意味で驚く事になる。

「エリカさん！大丈夫……って、ええっ！？」

てっきり脱走した囚人に人質にされたと思っていたダイゴは、目の前の状況は全く違って驚いた。

「助けてぇ～！！」

泣きながらこっちに走って来るエリカ。

しかしそれを追い掛けているのは、何と警棒を持った警官だった。

それもそのはず。

何故ならエリカの手には、十字架を摸したマシンガンが握られていたからだ。

「待ちなさい！凶器準備罪だぞ！？」

「そんな～！私何もやってないのにぃ～！！」

マシンガンを持って刑務所に入れば怪しまれるのは当たり前だ。
ダイゴはとりあえずエリカが無事だった事に胸を撫で下ろして、事態の収拾を行った。

「待って。彼女は脱走犯とかじゃないよ。」

「ダイゴさん！」

助けに来てくれた事が嬉しかったのか、エリカは両目に涙を溜めてダイゴの背中に隠れた。

「本当か？じゃあそのマシンガンは……。」

「護身用だよ。囚人に襲われるかもしれないでしょ？」

「そうです！私、グラン・マの使いで来ただけです！」

「グラン・マからの！？これは失礼いたしました！」

ダイゴと全然話が噛み合ってないが、とりあえずグラン・マの名前が上がった事で誤解が解けたらしく、警官は頭を下げて走って行った。

「ありがとうございます、ダイゴさん。助けに来てくれたんですね。」

「うん。まさかこういう形になるとは思わなかったけど。」

まさかエリカがマシンガンを携帯しているとは思わず、意外そうに

マシンガンを見るダイゴ。
すると、エリカが辺りを見渡して尋ねた。

「あ、そうだ！ダイゴさん、ロベリアさん見ませんでした？」

「ロベリア？誰それ？」

初めて耳にする名前にダイゴは首を傾げる。すると、エリカはロベリアについて簡単に説明した。

「ロベリアさんは、昨日逮捕された大泥棒さんなんです。」

「ど、泥棒……？」

「はい！でも本当はいい人なんです！そのロベリアさんが逃げ出しちゃって……。」

あまりよく分からない説明だが、とりあえずこの刑務所に収監された人物と分かる。
何のためかは知らないが、とりあえずはそのロベリアという人物に用があるのだろう。

「それにしても、何でまた刑務所なんか……。」

囚人に教えを説きに来た訳でもないのに、何故こんな場所に来たのか。
すると、エリカは驚いた表情で答えた。

「ダイゴさん、知らないんですか？大神さんが昨日からここで厄介になってるんですよ。」

「……、ハァ！？」

ダイゴはまたしてもマヌケな声を上げてしまった。
先日のメイドから一転して囚人になるとは、一体彼に何があったというのか。
ダイゴは改めて、大神という人物が分からなくなった。

「それじゃ、私ロベリアさんを探して来ますね！」

「あ、ちょっとエリカさん！」

マシンガンもしまわずに走り出すエリカを、ダイゴは慌てて追い掛けた。

その頃、大神の姿はロベリアが収監されていた特別牢獄にあった。
昨日と同様に暗い闇を覆われた奈落の底。
しかし、そこにロベリアの姿はない。
彼女を拘束していた鎖も断ち切られていた。
炎を使ったのか、断面が溶解している。

他に牢獄内で身を隠せる場所はない。
しかし、ロベリアはここにいるはずだった。

『ロベリアは探さない所にいる』

混乱に乗じて脱獄を試みた囚人の情報だ。
探さない場所、それに当て嵌まるのは、ロベリアが元々いたこの奈落の底である。
脱獄を成功させるには、とにかくスピードが命である。
グズグズしていては、たちまち退路を塞がれてしまうからだ。
そのため脱獄を開始したら、すぐさま建物から屋外に逃亡を計るのが常套手段である。
普通は誰でもそう考えるだろうし、警官達もそう考えて、ロベリアを追跡するべく次々と外に出ている。
そうなれば刑務所内は必然的に手薄になる。
それまでここで待っているつもりだろう。
囚人の情報から、大神はそう推理した。

「ロベリア、出てこい！そこにいるのは分かっているぞ！」

奈落の底に、大神の声が響く。
すると、その背後から返事が返って来た。

「……中々鋭いじゃないか。」

振り向くと、囚人服から普段着に着替えたロベリアが鋭い目つきで笑っていた。
アシンメトリーのコートが闇に溶け込むように見える様は、巴里の悪魔という異名を連想させる。

「脱獄なんてよせ！懲役が増えるだけだ！」

「ハッ、１０００年だろうが２０００年だろうが、アタシには関係ないさ。……どいて貰おうか？」

大神の説得を鼻で笑うロベリア。
やはり無理なのか……。
大神が一瞬諦めかけた時、上から声がした。

「勇ましい事だね。ますます気に入ったよ。」

「支配人！」

それは、何とグラン・マだった。
話を聞いたグラン・マも、ロベリアに直談判すべく刑務所に急行したのだ。

「単刀直入に言うよ。ロベリア、巴里華撃団にお入り。」

「巴里華撃団？」

「巴里の平和を守る秘密部隊さ。警察や軍隊の介入もない。アンタの自由も保障できる。」

流石に大神より数段口の上手いグラン・マ。
しかし、それでもロベリアは首を縦には振らなかった。

「それがどうした？巴里の平和なんて興味ない。自由だってアンタに貰わなくても……！」

「簡単に手に入る、かい？今のアンタじゃ、説得力ないよ。」

言葉の尻を食って、グラン・マが言い返す。

確かに今のロベリアは何もない。

自力で脱獄すれば、一時の自由は手に入るだろう。

しかし、それでも完全な自由ではない。

ロベリア自身もそれを理解しているらしく、舌打ちを返した。

「だったら、もっと別なものをよこしな。」

今までノンの一点張りだったロベリアが、初めて答えを変えた。

大神は改めてグラン・マの話術に驚くと共に、ロベリアの求める別の条件を打ち出した。

「巴里華撃団に入れば、君の懲役を減らしてやる。どうだ？」

ロベリアの自由を拘束しているのは無数の軽犯罪から生まれた１００年もの懲役。

ならばその鎖を断ち切れば、ロベリアも納得してくれるのではなかろうか。

大神はそう考えたのだ。

「……なるほど。悪くないね。どのくらい減らしてくれるんだい？」

ロベリアも大神の予想とかなり近い反応を返す。

すると、今度はグラン・マが口を開いた。

「手柄一つにつき、１０年でどうだい？内容によっては、ボーナスもつけるよ？」

一回の活躍につき１０年。
つまり、最大でも百回手柄を上げれば、刑期が満了する計算になる。
しかし、ロベリアは何か引っ掛かった様子で言った。

「うますぎる話だね。……何か裏があるだろう。」

「そう、巴里華撃団は命懸けの仕事さ。でも、あくまで自分のために働けばいい。」

「自分のためねぇ……。」

巴里の平和を守るためでなく、自身の懲役を減らすため。
グラン・マの提示した条件は、自分のスタンスと十分噛み合っている。

「……。」

ロベリアは目を閉じ、一瞬考えるそぶりを見せた。
そして……。

「……さっきまで刑務所にいたとは思えないダンスだな。」

ステージに立つ新入りのダンスを見て、大神が呟いた。
あれからロベリアは、グラン・マの提案を受けて巴里華撃団参入を承諾したのだ。
そして今夜、シャノワールの新しいダンサーとしてステージに立ったのである。
ロベリアは何処で覚えたのか、華麗なステップでステージを舞い、観客達を瞬く間に虜にしてしまった。
すると、大神の後ろからよく知る声が聞こえて来た。

「やあ大神君。席は空いてるかな?」

「エビヤン警部!」

それは何と、巴里市警の筆頭であるエビヤン警部だった。
何やら何時にも増して機嫌がいい。

「ロベリアも逮捕出来たし、巴里も平和になったよ。今日はそれを祝おうと思ってね。」

「は、はぁ……。」

そのロベリアが今まで踊っていた事など知る訳もないエビヤン警部に、大神は引き攣った笑いを返す。
しかし次の瞬間、大神や後ろにいたエリカ達は、信じられない光景を目の当たりにする事になる。

「いらっしゃ〜い、一名様ですか?」

「ロ、ロロ、ロベリア！？いつ脱獄したんだ！！」

笑顔だったエビヤン警部が突然に凍り付く。
確かに今日捕まえたばかりの悪党がシャノワールにいるとは、誰も思わないだろう。
すると、そこにグラン・マがやって来た。

「おや、警部。紹介するよ、今日入ったダンサーだ。」

「サフィールと申します。よろしくお願いしますね。」

グリシーヌとはまた違った意味で、ロベリアの名前を公にする訳にはいかない。
そこでロベリアは、サフィールという偽名でステージに立つ事になったのだ。

「サフィールさん……。これは失礼しました。……なるほど、ロベリアと性格はまるで別人ですな。」

「ウフフ、ありがとうございます。」

「それにしても美しい。」

「あら、警部さんも素敵よ？」

幸いあっさり信じたエビヤン警部。
しかし、後ろに控える大神達は唖然としていた。
無理もない。
ロベリアの態度が別人のように変わってしまったからだ。
ちょっとでも不用意な事をすればたちまち炎に焼かれるような鋭い

視線が、今は全く感じられない。
演技なのかもしれないが、目の前にいるロベリアは最早別人だった。

「……！」

その時、ロベリアが鋭い目つきで客席の入口を睨んだ。

「ん？どうかされましたか？」

「……いえ、何でもありませんわ。」

何でもないといいつつも、入口を一点に見るロベリア。
大神は素早くその空気を読んで、エビヤン警部の注意を逸らす事にした。

「そういえば警部、巴里で変な事件は起こっていませんか？」

すると、サーモンムニエルを味わっていたエビヤン警部の表情が俄かに固くなった。

「そういえばここ最近、夜中に美術館の名画を切り裂く事件が相次ぎまして……。」

一流の名高い名画ばかりが無残に切り裂かれる事件。
被害額は既に３０００万フランを越え、巴里市警は頭を抱えている。
かくいう昨日も、名画が十数枚切り裂かれてしまった。

「私はてっきりロベリアの仕業と思っていたんですが……。」

「それはないさ。ねぇ、ムッシュ。」

「はい、俺も違うと思いますよ？」

グラン・マも大神も即答した。

ロベリアは盗みこそすれ、金目のものをわざわざ壊すような真似はしない。

何より本人の前で確証もなしに言えるはずもない。

「確かに、そうですな。あの守銭奴なら、売っぱらうでしょうな。」

「そうですわ。ロベリアなら切り裂くなんて事しませんわ。」端から聞けば実に恐ろしい会話である。

ロベリアが入口を睨んだ視線を気にしつつ、大神はその様子に苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ここがシャノワールか。賑やかな場所だね。」

「そう？喜んでくれて嬉しいよ。」

瞳を輝かせるピエールに、ダイゴは笑顔を返した。

この日、ダイゴはボランティアを代わりにしてもらったお礼に、ピ

エールをシャノワールに連れて来たのだ。

「……。」

「どうしたの？」

ふと黙って奥のテーブルを見つめるピエールに声をかける。

すると、ピエールは変わらぬ笑顔を返した。

「何でもないよ。それより、店の中を色々教えてよ。」

「うん、いいよ。」

ピエールの笑顔は、他の人達のそれと違うものがあった。

まるで昔同じものを見たような、懐かしさを感じさせる笑顔。

それに、ダイゴは引き込まれていた。

最もそれがエリカに勝る事はないのだが、もしエリカが大神に取られたとしても孤独ではないという安心感が、ダイゴの心に芽生えつつあった。

その時、懐のスパークレンスが僅かに光った事に、ダイゴは気付かなかった。

その日の夜、巴里華撃団の姿はルーブル美術館にあった。
エビヤン警部の話した事件に怪人が絡んでいると見たグラン・マが、次に狙われるだろう美術館を警護するように指令を出したのである。
当初ルーブルかオランジュリーのどちらの美術館を警護するかで意見が別れてしまったのだが、餅は餅屋という事から大神はロベリアの意見を尊重し、ルーブル美術館を警護する事に決定したのである。

「……まだ現れないな。」

警護を始めて小一時間。
巴里で最も有名だけに１００人近い警備員がいる中、刻々と時間が過ぎていく。

「やっぱりルーブルに来るつもりないんじゃない？」

「その時はロベリア、分かっているだろうな？」

オランジュリーを警護すべきと意見していたグリシーヌとコクリコが口を挟む。
すると、ロベリアは遠くを見たまま言葉を返した。

「来るさ。こんな空気の冷たい夜はね。」

その時、ロベリアの予想が現実に変わった。

「グアァ！？」

「うっ……！」

「ギャアァァ！！」

入口を警護していた警備員達が、突然苦しみながら倒れたのだ。

「お、大神さん！警備員さん達が……！」

「いや待て、エリカくん。」

隠れていた茂みから警備員を助けに行こうてするエリカを、大神が止めた。

どういう方法を使ったか知らないが、相手は警備員の数をものともしていない。

下手に姿を現せば、こちらまでやられてしまう危険があった。

すると、倒れた警備員の近くに人影が現れた。

ナーデルである。

「フフフ……、ルーブル美術館の警備もこの程度ね。まあ人間だから仕方ないけど。」

「……来やがったな。」

獲物を見つけたように、ロベリアが目つきを鋭くした。

どうやら美術館を襲撃している怪人に間違いないらしい。

「待て！！」

大神の一喝と共に、隊員達は一斉にナーデルの前に現れた。

「ん？まだ生き残りがいたのかしら？」

「貴様が名画を狙う怪人だな！これ以上好きにはさせないぞ！」

意外そうな反応を見せるナーデルに、大神が吠える。
しかし、怪人相手には大した威嚇にもならなかった。

「フフフ、このナーデルに刃向かうつもり？」

「何！？」

不敵な笑いを見せるナーデルに警戒する花組。
すると、ナーデルが満足げに笑った。

「ちょうど良いわ、遊び相手をあげる。出てらっしゃい、蠍怪獣アンタレス！」

高々と上げた右手の指をスナップしたその時、大神達とナーデルを割るように地面が裂け、中から巨大な怪獣が現れた。
茶色の皮膚と先が尖った長い尻尾。
そして顔には赤い二つの目が光る。
ナーデルの使役する蠍怪獣アンタレスだ。

「わぁ！出たぁ！！」

「大神さん、どうしましょう！？」

初めて生身で相対する怪獣に、思わずたじろぐ隊員達。
そんな中、ロベリアだけは表情が違った。

「コイツ……、何でアタシを攻撃しない？」

身体の大きさを活かしてこちらを追い詰めるアンタレスだが、どういう訳かロベリアを無視している。
まるで敵意を示さないのだ。

「ウフフ、仲良く食べられてちょうだい。」

「いかん！ロベリア、奴を追ってくれ！！」
美術館に向かって走り出したナーデルに気づき、大神が叫んだ。
幸いアンタレスはロベリアを攻撃しないので、自分達が怪獣を引き付けている間にロベリアなら追跡ができる。

「……チッ！分かったよ。」

やれやれといった表情で答えると、ロベリアはナーデルを追って走り出した。

「……何だこりゃ。警備員がまるで役立たずじゃねぇか。」

美術館の外を走りながら周囲を見て、ロベリアは悪態をついた。
無理もない。
巴里で一番厳重な警備をしていた警備員達が、揃ってナーデルにやられていたからである。

「見つけたぞ、ナーデルとやら！」

壁を蹴って跳躍し、ナーデルの前に立ちはだかるロベリア。
すると、ナーデルは何かに気付いたように笑った。

「あら……、誰かと思えばロベリアじゃない。捕まったんじゃな

かったの？」

「成り行きでね。で、どういう訳だい？」

「何の話かしら？」

「とぼけんじゃないよ。」

白をきるナーデルを一蹴し、ロベリアが倒れている警備員を指差した。

「コイツらの首や背中の傷、アタシがレイモンの屋敷を襲った時と同じものだ。多分さっきの怪獣だろうが……。」

おそらくアンタレスとかいう怪獣によるものだろう。
怪獣の殺気は、正にレイモンの屋敷で感じたそれだった。

「そうよ。貴女があんまり巴里で騒ぎを起こすから、警戒が厳重になっちゃってね。」

これでロベリアの推理は確定した。
あの夜、レイモンの屋敷でロベリアを襲ったのは、ナーデルだったのだ。

「しかしまさか、ここで会うとは思わなかったわ。おかげであの子も攻撃してくれないし。」

その言葉に、ロベリアはある程度の察しをつけた。
蠍の中には、体内に持つ毒素を感知して仲間を見分ける種類がいる。
アンタレスも同様なら、以前毒を受けている自分を仲間と勘違いし

たのだろう。
それなら、自分だけ攻撃されないのも納得がいく。

「ちょうど良いわ、ロベリア。話があるの。」

ナーデルが、再び不敵に笑った。

「……これは！！」

スパークレンスの輝きに導かれたダイゴは、目の前の状況に驚きの声を上げた。
ルーブル美術館に現れた巨大な怪獣。
その足元には、どういう訳かエリカや大神の姿がある。

「まさか、また怪人が現れたのか……。」

ダイゴは懐のスパークレンスを取り出した。
古代の彫刻は、ダイゴに戦う事を促すように光を放っている。
ダイゴはキッと怪獣を見据えると、スパークレンスを大きく時計回りに回転させ、夜空に掲げた。

「ティガーーーーーーー！！」

夜空を舞うように現れたティガが、アンタレスに空中から蹴りつけた。

「チャーッ！！」

いきなりの不意打ちに、アンタレスは真後ろへ吹っ飛ぶ。
そして、ティガは大神達を守るように地面に降り立った。

「ガアアアアッ！！」

「チャッ！」

アンタレスを前に身構えるティガ。
アンタレスも標的を大神達からティガに変えたらしく、こちらには目もくれない。

「よし、ティガが戦っている間にロベリアと合流するぞ！」

「「了解！」」

アンタレスをティガに任せ、大神達は手分けしてロベリアとナーデルを探した。

何せ辺りは真っ暗である。

二人が何処をどう走ったのか皆目見当がつかない。

そこで大神は四つに分かれてロベリアを探す事にした。

これならナーデルが更に援軍を呼んでいなければ間違いなく二対一になるので、効率が良い。

そして、最初にロベリアを見つけたのは大神だった。

「ロベリア、大丈夫か！……って、あれ？」

ロベリアと言えど生身で怪人を相手には出来ない。

先程は見失わないために追跡させたが、ナーデルの確保よりもロベリアの安否が心配だった。

が、大神の不安は一瞬で消えた。

「よぉ隊長。何息切らしてんだ？」

「ロベリア……、何呑気な事言ってるんだ？」
怪獣まで差し向けて来た怪人を前に何の余裕をかましているのか。
呆気に取られる大神に、今度はナーデルが言った。
「心配ないわよ。あたしはロベリアと、大人の話をしていたんだから。」
「大人の話？」
「ああ。手を組まないかと誘われてね。」
「何だって！？ロベリア、まさかそれを受けたのか！？」
信じられない面持ちで尋ねる大神。
すると、ロベリアはいつものように曖昧に返した。
「条件次第さ。言ったろ？巴里の平和なんてどうでもいいってね。」
「ロベリア……！」
「どうするんだい？何か条件をつけるなら考えても……。」
そうロベリアが笑った時だった。
突如大神が刀を抜き、白銀に輝く刃をロベリアの眼前に突き付けたのだ。
「そんな事、俺が許すものか！！」
「なっ……！」

「答えろロベリア！返答いかんによっては、俺が君を切り捨てる！！」

「……！！」

その瞬間、辺りの空気が震えた。
もし怪人と手を組むと言えば、大神は本気で自分を斬る。
大神の視線から、ロベリアは確信した。

「大丈夫よロベリア。そんな奴あたしが先に殺してあげるから。」

ナーデルはそう言ったが、そんなもので安心できる程の殺気ではない。
言うなれば、ここで死ぬか否か。
それが、ロベリアを決断させた。

「……ったく、冗談の通じない奴だねアンタは。言ったろ？コイツよりエリカがマシだって。」

「な、何ですって！？」

今度はナーデルが驚く番だった。
巴里の大悪党が、自分よりあの男につくとは信じられなかったからだ。

「当たり前だろ？元はと言えばアンタのちょっかいで捕まったんだ。そんな奴と対等に交渉してやるようなアタシじゃないよ。」

「だったら交渉決裂ね。きっと後悔させてあげるわよ！」

そう吐き捨て、ナーデルは夜の闇に消えた。

「あ～あ、もう少しで捕まえられたのに。空気読んだら分かるだろ？」

「ロベリア……。」

呆れた表情で言ってのけるロベリアだが、ふと大神に笑みを見せた。

「でもね、さっきのアンタ格好よかったよ。……惚れそうな位にね。」

「え……？」

普段は絶対に見せない表情に、思わず見とれる大神。

すると、ロベリアは途端に元の呆れ顔に戻った。

「嘘に決まってんだろ！何照れてんだよ、馬鹿だからか？」

そうは言うものの、赤いままの顔で言われては説得力がない。

残りの三人が駆け付けたのは、その時だった。

「二人とも、無事でしたか！？」

「ああ、それよりナーデルが美術館にポーンを呼び出すらしい。大至急シャノワールに戻るぞ！」

「「了解！」」

その頃、ティガと戦っていたアンタレスにも異変が生じた。

「ガアアアッ！」

何と、突然地面に穴を掘って逃走を始めたのだ。

「チャッ！」

ティガは逃がさんとばかりにアンタレスの背中に馬乗りになって殴り掛かった。

「ハッ！ハッ！チャッ！」

しかし何度目かのパンチを浴びせようとした時、ティガの背中に何かが突き刺さった。

「ジュワッ！？」

それは、ロベリアさえも倒した尻尾の先にある猛毒の針だった。
途端に全身を痺れと激痛が襲い、ティガは地面をのたうつ。
その間に、アンタレスは地中深くに逃げ去ってしまった。

「チャッ……。」

無念そうにその様子を見つめ、ティガは姿を消してしまった。

ルーブル美術館には、既に裏口からかなりの数のポーンが侵入していた。
ちょうど特別展示の日だったために、たくさんの芸術文化財が並んでいる。

「……ティガも始末した事だし、早速始めましょうか。」

ナーデルの爪が一つの絵画を切り裂こうとした時、別の声がそれを制止した。

「やれるもんなら、やってみな！！」

「なんですってぇ……！？」

声のした入口に睨むナーデル。
すると、別の声と共に五つの光武Ｆが現れた。

「でも出来ればやらないで下さいね！」

「巴里華げき……「お前は黙ってろ！！」」

見事に決めを失敗しながら。

「ロベリアさん、ここの台詞は『巴里華撃団、参上』って教えたじゃないですか。」

「やかましい！お前のせいでしくじったんだろ！！」

注意するエリカに爪を立てて威嚇するロベリア。
すると、ナーデルが冷たい笑みを浮かべて笑った。

「ロベリアじゃない。もしかして手を組みに来てくれたの？」

「お前馬鹿か？美術品の価値も分からねぇ馬鹿と組む訳ねぇだろバーカ！」

呆れた口調で頭を叩いて見せるロベリア。
その行為が気に障ったのか、ナーデルは表情を一変させた。

「キーッ！よくも言ったわね！ポーンども、やっておしまい！！」

言うや、ナーデルは転移魔術でその場を離れた。
同時に美術館内にいたポーン達が一斉にこちらに向かってくる。たちまち館内は、激しい剣戟の音に包まれた。

ルーブル美術館内での戦闘は、様々な意味で戦いにくかった。
ポーンの数が多い事もそうだが、何よりそこら中にある展示品を気にして戦わなければならないため、攻撃に躊躇いが生じるのだ。
大神は的確に指示を出し、美術品を傷つけないように勤めた。
そして、中央に位置する高級美術品を含む全ての美術品を保護する事に成功した。

「よし、あとはナーデルだけだな。」

美術品を保護したら、あとは主犯であるナーデルを倒すだけだ。
その姿を探して辺りを見渡すと、ロベリアが一点を指差して叫んだ。

「隊長、ナーデルならあそこだ!」

それは、美術館の奥だった。
ナーデルは特に逃げようともせず、ポーンが全滅したこの状況において尚、余裕をかましていた。

「残りはアンタだけだ。どうする?助けでも呼ぶかい?」

「あら、それはこっちの台詞よ?これでも戦えるつもり?」

ロベリアの凄みを嘲笑で返し、ナーデルは真後ろの絵画に爪を突き

立てた。
その絵に、グリシーヌは見覚えがあった。

「あれは、『モザ・リナ』！フランスを代表する名画だぞ！」

「な、何だって！？」

フランスの代表的な文化遺産。
そんなものに傷をつけられてはたまらない。

「さあ、この絵に傷をつけられたくなかったら、道を開けなさい。」

「くそっ……！」

二択を迫られ悩む大神。
確かに『モザ・リナ』を傷つける訳にはいかない。
しかし、それではナーデルにまたも逃げられてしまう。
すると、ここでロベリアが口を挟んだ。

「簡単な引き算さ。こうすればいいんだよ！」

言うや、ロベリアはとんでもない行動に出た。
掌から炎を放ち、絵をまるごと焼いてしまったのである。

「きゃっ！？」

「『モザ・リナ』が、灰に！！」

止める間もなく、フランスを代表する名画は跡形もなく消し炭になってしまった。

「ロベリア、何て事を！」

「そうよ！せっかくあたしが素敵に作り変えようとしてたのに！」

「あとでグラン・マに怒ってもらうからね。」

ナーデルを含め口々に非難を浴びせる一堂。
すると、ロベリアはキッパリと言い放った。

「何言ってんだ！怪人の撃破が最重要任務なんだろ？絵の一つや二つ、切り捨てちまえよ！」

それは、かつてのロベリアからは考えられない言葉だった。
自分のためなら何でも簡単に切り捨てる彼女が、フランスの宝を灰にしてまで正義を貫こうとは。

「……君が怪人に見えるよ。」

「褒め言葉にしといてやるよ。」

大神の言葉にニヤリと笑い、ロベリアはナーデルに向き直った。

「ほらほらナーデルちゃん、次は何を人質にするんだい？全部燃やしてやるよ？」

すると、その言葉が逆鱗に触れたらしく、ナーデルは地団駄を踏んだ。

「キーッ！馬鹿にしないでよ！アンタ達、絶対許さないんだから！

！」

「へぇ？許さないならどうするんだよ？」

「こうするのよ！！」

そう言い返し、ナーデルは魔法陣を出現させた。
たちまち辺りの妖気が高まる。

「まずい！みんな、光武に戻るんだ！」

大神の指示で素早く光武Ｆに乗り込む隊員達。
それと同時に、ナーデルが叫んだ。

「出て来なさい！蒸気獣『ノクテュルヌ』！！」

すると、真後ろの魔法陣から深紅の蒸気獣が現れた。
鋏のような両腕と長い尻尾は、猛毒の蠍を連想させる。
しかし、ナーデルが呼んだのはそれだけではなかった。

「こ、これは！」

突如震動が美術館全体を襲ったかと思うと、床を突き破ってアンタレスが現れた。

「この美術館ごと芸術に変えてあげるわ！覚悟なさい、巴里華撃団！！」

ナーデルの叫びと共に、アンタレスが襲い掛かって来た。

「ガアアアッ！」

「まずい！みんな、双方に注意しながら戦うんだ！」

「「了解！」」

大神の指示を受け、五つの光武Ｆは別々の方向に動いた。
目標をばらけさせる事で、相手の狙いを分散させる作戦だ。
結果それは上手くいき、アンタレスは大神の狙い通り辺りをキョロキョロしている。

「よし、今の内にナーデルを仕留めるぞ！」

二刀を握り、大神が叫ぶ。
アンタレスより先に指揮官のナーデルを倒せば、アンタレスも僅かに戦いやすくなるはず。
大神はアンタレスの注意を逸らし、その上でナーデルを倒す事にしたのである。

「喰らえっ！」

振りかぶった二刀をノクテュルヌ目掛けて振り下ろす大神。
しかし、それでやられてくれる程相手も甘くはなかった。
「フフフ……、かかったわね？」

「何っ！」

ナーデルが不敵に笑った時、大神は周囲の状況にハッとした。
自分を含め、全ての光武Ｆがナーデルの眼前に集まっていたのだ。

「赤は血の色、死は闇の色、妖艶なれ！　ル・フラール・デュ・マル！！」

刹那、ノクテュルヌの尻尾から超高圧電流が発射された。

「くっ、しまった！」

電流を受け、大神はハッとした。
光武Ｆは構造上、霊力を霊子水晶に反応させて動かす。
その動力部分は、希少な金属で覆われている。
つまり……。

「大変です大神さん！光武が動きません！」

最初に叫んだのはエリカだった。
見ると、他の光武Ｆも動きが完全に停止している。
大神の予想が、現実に変わった瞬間だった。
光武Ｆの弱点は霊子水晶にダメージを受ける事だ。
そうなれば、霊力が光武Ｆに伝わらないため、攻撃どころか身動きすら取れないのである。

「このナーデルを甘く見たわね。先にあたしを狙って来る事くらい計算済みよ。」

沈黙した光武Ｆを前に、ナーデルが勝ち誇ったように笑う。
対する大神は、悔しげに顔を歪めた。

「くそっ……。」

状況は完全に絶望的だ。

このままでは光武Fの機能が回復する前にやられてしまう。
しかし、ここでナーデルは意外な事を口にした。

「さて、アンタ達はしばらくそのままでいて貰うわよ？」

「何？どういう事だ！？」

せっかくのチャンスだというのにトドメを刺そうとしないナーデルに、大神が問う。
すると、ナーデルは笑って答えた。

「あたしの狙いはもう一つあるのよ。アンタ達はその後。」

そして、ナーデルは美術館全体に響く大声を上げた。

「さあ出て来なさい！ウルトラマンティガ！」

「くっ……！」

柱の影に隠れていたダイゴは、ナーデルの言葉に身震いした。

アンタレスに逃げられてすぐ、変身を解除したダイゴは美術館を離れようとしたのだが、背中から全身に痛みが走って思うように動けず、美術館内に身を潜めていたのである。

「そこにいるのは分かってるのよ？大人しく姿を見せなさい！」

おそらくこちらの居場所はばれているだろう。
ナーデルの声は明らかにこちらを向いていた。

「（どうする……？この身体で勝てるか……？）」

先程のダメージは色濃く残っている。
この状況で、怪獣と蒸気獣の二体を相手に勝てる自信はない。
しかし、スパークレンスはダイゴの意志に反して、光を放っていた。
まるで、ダイゴに戦えと言わんばかりに。

「ティガ……、それが君の意志なの……？」

勝てる見込みはない。
だが、目の前に巴里を脅かす存在がある限り自分は戦わなければならない。
それが、光を継いだダイゴの宿命だった。

「ティガ……、僕に勇気を授けてくれ……！」

ダイゴは傷付いた身体で立ち上がると、その光に従い、スパークレンスを天に掲げた。

「ティガーーーーッ！！」

そして、光は再び戦場へ舞い戻った。

「チャッ！」

「ティガ！！」

「……現れたわね。」

姿を見せた光の巨人に、花組は驚き、ナーデルは笑った。
獲物を見つけた蠍のように、悍ましい顔だ。

「フフフ、やはり現れたわねティガ。最高の芸術に変えてあげるわ。」

言うや、アンタレスが襲い掛かって来た。

「ガアアアッ！」

「チャッ！」

真正面から体当たりして来た首を捕まえ、一本背負いの要領で投げ飛ばす。

しかし、仰向けに倒れたアンタレスに攻撃を仕掛けようとした時、ティガは背中に激痛を感じた。

「ジュワッ！？」

激痛の余り立っていられなくなり、片膝をつくティガ。
そこに、起き上がったアンタレスが襲って来た。

「ガアアアッ！」

「チャッ……！」

首を締め上げる両腕を外そうと、ティガがアンタレスの両腕を掴む。
しかし、毒にやられて弱った身体に十分な力が入らない。

「そうよアンタレス……。そのままティガを離さないでね……。」

身動きの取れないティガの様子を楽しむように笑い、ナーデルがティガに迫る。

「さあ、その首を撥ねてオブジェにしてあげるわ！」

「ティガ！！」

ティガの身を案じてエリカが叫ぶ。しかし、ナーデルの攻撃は意外な人物によって阻止された。

「何正義の味方がやられてんだ？」

「なっ！ロベリア！？」

何と、ロベリアの光武Ｆがノクテュルヌの前に割って入り、右手の三本の鉤爪で攻撃を防いだのである。

「どういう事！？あたしの電撃が効かなかったって言うの！？」

動きを封じたはずのロベリアからの反撃に、呆然となるナーデル。

すると、ロベリアはニヤリと笑った。

「馬鹿が。このアタシを見て分からないのか？」

その言葉に、ナーデルは顔を凍りつかせた。

「なっ……！！」

何と、ロベリアの光武Ｆは腰から下が地面に溶け込んでいたのだ。

あの時、ロベリアは全身を床に沈める事でナーデルの攻撃をやり過ごしたのである。

「ほら、いつまで情けない格好してんだ？早いとこケリつけちまえ！！」

ノクテュルヌを押し返しながらロベリアが叫ぶ。

すると、その言葉に奮起されたティガは全身に力を集中した。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

額のクリスタルを発光して、ティガはパワータイプにチェンジする。

そして、その凄まじい握力でアンタレスの両腕を握りしめた。

「ンゥゥゥ……！！」

「ガアアッ！？」

突然のティガの反撃に驚いたアンタレスは腕を外そうとするが、パワータイプの握力からは逃げられない。

「ハッ！」

ティガが気合いの一声を発する。
すると、アンタレスの両腕が音をたてて粉々に握り潰された。

「ガアアアッ！！」

「チャッ！」

両腕を潰されて苦しむアンタレスに、ティガはここぞとばかりに反撃に出た。
逃げようとする怪獣の尻尾を捕まえ、ジャイアントスイングの要領で投げ飛ばす。

「チャーッ！！」

美術品を展示していた台を薙ぎ倒しながら、倒れるアンタレス。
ティガは両手を大きく外側から回してエネルギーを圧縮する。

「ハァァァ……！」

そして、アンタレス目掛けて渾身のデラシウム光流を放った。

「ダァーッ！！」

超高熱の光球は一直線にアンタレスを捕らえ、一気に包み込む。

「ガアアア……！！」

アンタレスは断末魔の叫び声と共に大爆発した。

「そ、そんな……！あたしのアンタレスが……！」

自分の可愛いペットが目の前で倒され、呆然とするナーデル。

そこに、ロベリアが襲い掛かった。

「よそ見してる暇あんのか！？」

血に飢えた爪でノクテュルヌに切り掛かる。

気付いたナーデルは慌てて避けようとするが間に合わず、爪はノクテュルヌの腹を深々と引き裂いた。

「キーッ！卑怯じゃない！少しは手加減しなさいよ！」

「ハン、ここで死ぬ奴が何言ってんだ？いい加減諦めな！」

そう吐き捨て、ロベリアは凄絶な笑みでナーデルを睨んだ。

右手の鉤爪が、灼熱の炎に包まれる。

「……！！」

その悪魔にも似た恐ろしい視線に魅入られ、ナーデルの身体が固ま

る。
そこにらロベリアは殺意に満ちた鉤爪を振り下ろした。

「炎を見る度思い出せ、火の恐怖を！　フィアンマ・ウンギア！！」

鉤爪はノクテュルヌの脳天を直撃した。
たちまちに赤い蠍の全身を煙と火花が包む。

「こんなの……、こんなの、認めないわ！あたしの芸術を分からない、無能な……、人間共に……！！」

無念の声と共に、ナーデルは地獄の業火に蒔かれて灰になった。

「チャッ。」

その様子を確認し、ティガは静かに消え去った。

「……今回はロベリアのお手柄だったな。」

ルーブル美術館を後にして、大神が口を開いた。
今回の任務におけるロベリアの功績は素晴らしいものがあった。
ルーブル美術館が襲撃される事をピタリと言い当て、ナーデル撃破に貢献し、ティガのピンチまで救ったのだ。

これを大活躍と言わずして何と言うのか。
悪党だとか言う事は関係なく、ロベリアは立派に巴里華撃団としての存在をしらしめたのである。
最も、本人にそのつもりは全くないが。

「そうだ！『モザ・リナ』燃やしちゃったけど、どうしよう！」

ふと思い出したように、コクリコが叫んだ。
ナーデルを追い詰めるためにやむを得なかったとはいえ、フランスの宝を灰に変えてしまった責任は重い。
すると、シャノワールから通信が入って来た。

「それなら、ご心配には及びません。」

「あの絵画は全部、美術館が用意した偽物だそうですぅ。」
「ロベリアさんの事ですから、最初から知ってたんですよね？」

「当然さ。眉毛のない『モザ・リナ』が、本物な訳ないだろ？」

得意そうに腕を組むロベリア。
確かに偽物と見抜いていたなら、先程の行動も頷ける。
しかし、ここでグリシーヌがある事に気付いた。

「……待てロベリア。元々『モザ・リナ』に眉毛はないぞ。」

元々眉毛はない。
と言う事は、眉毛の有無では本物と偽物の判断が出来ない事になる。
つまり……、

「あ～ら、そうだったっけ？まあ良いじゃねぇか。」

「ふざけるな！本物だったらどう責任を取るつもりだったんだ！」
無責任なロベリアの言動にすかさず噛み付くグリシーヌ。
すると、エリカがそれを宥めながら言った。
「はいはい落ち着いて。いつものアレがまだですよ？」
「……いつものアレ？」
「はい。私達は戦いに勝った後、必ずポーズをキメる事に……。」
刹那、ロベリアの表情は一変した。
「なっ！？じ、冗談じゃねぇ！！そんな子供みたいな真似出来るかよ！！」
「こらロベリア、逃げるんじゃない！」
嫌がるロベリアを押さえ付け、大神が言った。
「行くぞ、勝利のポーズ……」

「キメるかぁーーー！！」

闇よりの使者（後書き）

《次回予告》

いつまでも覚めない夢……。

私は貴方と、愛に揺らめきたい。

そう、いつまでも……

次回、サクラ大戦3。

《揺らめく想いは》

愛の御旗のもとに……

それでも貴方を、忘れられない……

揺らめく想いは（前書き）

フランの相場がイマイチ分からないという……。
勉強不足か……。

揺らめく想いは

巴里の街は、全てが華やかという訳ではない。
この花屋の近くにも、そういう場所があった。
墓地。
このフランスで生涯を終えた魂達が、静かに眠る場所。
その一番奥に、彼女はいた。

「フィリップ……、貴方の好きな花を持って来ました。」

漆黒の喪服に身を包み、静かに微笑みながら、彼女は花束を墓の前に置く。
その墓標には、「フィリップ・マールブランシュ」と彫ってある。
おそらくフィリップという人物の墓参りだろう。
喪服の少女は、静かに微笑んでいた。

「今日も二人で、楽しく過ごしましょうね……。」

「はぁ……、身体がだるい……。」

教会の掃除をしながら、ダイゴが呟いた。
何せ前回は蠍怪獣アンタレスに毒針を刺されるという深手を負ったのだ。
背中の痛みは無くなったが、今だに身体を動かすとだるさを感じてしまう。
今日も教会の前を箒で掃くだけなのに、すぐにこうして疲れが出てしまった。

「ダイゴ、大丈夫かい？少し休んだ方が……。」

「いや、大丈夫だよ……。」

心配そうに言うピエールに空元気な返事を返し、ダイゴはため息をついた。
疲れているのは事実だが、怪獣にやられたとは口が裂けても言えない。
訝しげにこちらを見る親友の痛い視線を浴びながら掃除を再開するダイゴに声がかけられたのは、その時だった。

「やあ、ダイゴじゃないか。」

「……ああ。」

それは、モギリ服姿の大神だった。
大方エリカ狙いだろう。
そう判断するや、ダイゴの顔は反射的に険しくなる。
一方、大神とは初対面のピエールは珍しげな表情で口を開いた。

「ダイゴ、この人は知り合いなの？」

「ああ、紹介するよ。大神一郎さん。僕と同じ日本人なんだ。」

「へぇ～、日本人か。ボンジュール、ムッシュ大神。僕はピエール・タバルニエ。よろしくね。」

渋々ながらも紹介するダイゴと対照的に、笑顔で右手を差し出すピエール。

すると、大神もいつものようににこやかな笑顔でピエールの手を握り返した。

「俺は大神一郎。シャノワールでモギリをしているんだ。よろしく、ピエール。」

自己紹介も済んだ所で、大神は辺りをキョロキョロしながらダイゴに尋ねた。

「ところでダイゴ、エリカくんを見てないかい？」

「……ここにはいないよ。」

やはりそうか。

ダイゴはあからさまに不快な表情で言った。

「そうか……。ん？」

ダイゴに言われて立ち去ろうとした時、大神は何かに気付いたように立ち止まった。

そして、何やら不思議な形をした機械を取り出した。

「……？」

「済まないダイゴ。ちょっといいかな？」

そう言って、大神は不思議な機械をダイゴに向けた。
すると、何やら音がして機械の下にあるカウンターが動いた。

「……何それ？」

訳の分からない機械を突き付けられ、不快感を更に募らせるダイゴ。
一方、大神は難しい顔でカウンターの針を見ていた。

「あ、いや、済まない。もういいよ。」

そう言ってダイゴから機械を退ける大神。
すると、ピエールが物珍しそうに尋ねた。

「ムッシュ大神、それは何かの道具？」

「ああ、そんな大したものじゃないよ。」

そう曖昧に返し、大神は機械をしまいかける。
しかしまた何かに気付いた様子で、しまいかけた機械を今度はピエールに向けた。

「……？」

「……う～ん、やっぱり違うか。」

そう言って機械をしまい、今度こそその場を後にする大神。

その様子に、ピエールは穏やかに笑った。

「何だか変わった人だね？」

「うん。僕もよく分からない人だよ……。」

大神が何故あんな不思議な機械を持って街をうろついていたか。
それは、約一時間前に遡る。

「ふう、少し休憩にするか……。」

大神はそう呟いて、目を通していた書類を机の上に置いた。
それは、巴里華撃団最後の隊員の候補を載せた極秘リストだった。
巴里華撃団の隊員数は、賢人機関の決定によりあと一人となった。
つまり、今いるエリカ、グリシーヌ、コクリコ、ロベリアに一人を加えた五人が、巴里華撃団最終メンバーという事になる。
秘密部隊としてはちょうど良い人数だ。
そこで、候補に上がった人物のリストを一枚ずつ見ているのだが、めぼしい人物は未だに見つからなかった。

確かに一般人の中では霊力に秀でた人物が集まっているが、霊力ばかりが隊員を決めるのではない。
過酷な戦いに挑むゆるぎない覚悟と、巴里を守りたいという想いが揃って初めて隊員と呼べると、大神は考えている。
残念ながら、それに該当する人物はない。

「よう隊長さん。新隊員選考は順調かい？」

そこに、ジャン班長が顔を出した。

「あ、ジャン班長。残念ながら、これと言える人物はありません。」

「だろうな。そこでよ隊長さん、さっき地下で面白いモン作ったんだ。」

「面白いもの？」

「おうよ。こいつを見てみな。」

おうむ返しに聞く大神の前に、ジャンは地下で作った道具を見せた。
見た目は蓄音機に近い構造だが、中心にカウンターがついていたり、端からアンテナが伸びていたりと、何やら複雑な道具に見える。

「こいつはアンテナを向けた相手の霊力を計る霊測機だ。」

「霊測機？じゃあ、これを持って街を歩けば……。」

「そう。誰が高い霊力を持っているか一目瞭然だ。後はそいつが相応しいが隊長さんが判断すればいい。」

ジャンにとっても自信作らしく、満足げに頷いている。
そして、大神は意気揚々と隊員探しに繰り出した訳だが……。

「やっぱり簡単には見つからないか……。」

花屋の前を通りかかり、大神はため息をついた。
意気揚々と巴里市内を歩き回って一時間。
霊力のある人物は数人見かけたが、いずれも光武Ｆを扱える程ではないし、隊員にするにはイマイチ足りない気がした。
今のところ、カウンターに計測されるだけの霊力を持つのは三人。
グリシーヌ邸で掃除をしていたタレブーと、教会にいたピエール。
そして、同じくダイゴである。
しかし、タレブーの霊力は掃除をしていた時にしかカウンターに計測されなかったし、ピエールとダイゴも光武Ｆを扱えるかはやや怪しい。
その時、視界の隅に見覚えのある人物が写った。

「あれは……、花火くんか？」

あの黒い喪服からして間違いない。
花束を手に、花火は墓地へ向かっているようだ。

「（お墓参りでもするのかな……？）」

個人的に人のプライベートを覗くのは趣味ではないが、どうも様子が違う花火が気になった大神は不本意ながらも花火の後を追いかけた。

墓地は花屋の隣に位置していた。
大抵の人は花屋で購入した花を墓に手向けるため、位置的には都合が良い。
見ると、花火はその墓の一つに寄り添っていた。

「……。」

花火の様子に大神は声をかけようとして、やめた。
墓参りに来ているはずの花火が、やけに幸せそうな表情でいる事に訝しさを感じたからだ。

「（……仕方ない。一度シャノワールに戻ろう。）」

流石に後ろめたさを感じて立ち上がる大神。
すると、花火が大神の存在に気付いた。

「あ、大神さん……。」

こちらに歩いて来る花火。
その表情も、やはりいつもより幸せそうに見える。

「どうなされたんですか？こんな所で。」

「いや……、それより花火くんは、誰かのお墓参りかい？」

痛い所を聞かれ、大神は上手くはぐらかした。
流石に目の前で尾けて来ましたとは言えない。
幸い、花火は疑いもせずに言葉を返した。

「私ですか？私はただ、人に会いに来ていただけです。」

「え……？」

人と言っても、ここには自分と花火の二人しかいない。
自分な訳はないし、一体誰と会うというのか。

「それでは、失礼します。」

眉をひそめる大神をよそに、花火は一礼してその場を後にした。

「……ここがお参りしていた墓か。」

花火が見えなくなると、大神は彼女がお参りした墓の前に立った。
先程の花火の様子は何処かおかしい。
墓参りなのに人に会いに来たと言うし、顔を赤くしている。
常識的に考えて、墓参りに来た人の顔らしくなかった。

「フィリップ・ディ・マールブランシュ……。」

おそらく花火の知り合いだろうか。
名前の下には、『フィリップは花火のために生きた』と彫ってある。

「ん？これは……。」

大神は手向けられた花束の影に何かを見つけた。
拾って見ると、それは一枚の写真だった。
おそらく花束を置いた時に落としたのだろう。

「もしかして、この人がフィリップか……？」

写真には、花火と一人の金髪の青年が微笑ましげに写っていた。
写真の花火は喪服を着ていない事を除いて今と変わらない。
つまりこの写真は最近のもので、この青年がフィリップなら、彼はかなり若くして命を落とした事になる。

「……とりあえず、花火くんに返そう。」

フィリップは花火にとって、少なからず大切な人物のはず。
ならばこの写真は、花火が持っているべきだった。
大神は、花火を追いかけて墓地を後にした。

「……遅いなぁ……。」

そうぼやきつつ辺り見渡すダイゴ。
エリカが教会に活ける花を買いに行ったきり戻って来ないので、心配になって探しに来たのだ。

案の定花屋はとっくに後にしたらしく、ダイゴはだるい身体で歩き回る事になった。

「それじゃ、また遊ぼうね～！」

その捜し求めた声が耳に届いたのは、ちょうど公園の辺りを歩いていた時だった。

「あ、エリカさん……。」

疲れと喜びの入り混じった、陰りのある笑顔でダイゴはエリカを見た。
すると、エリカもこちらに気がついた。

「あ、ダイゴさん！どうしたんですか？缶蹴りならもう終わっちゃいましたよ？」

「いや、別に缶蹴りがしたい訳じゃないから……。」

見ると小さな子供達が向こうへ走り去って行く様子が見える。
おそらく今まで、あの子供達と缶蹴りをして遊んでいたのだろう。
やれやれとため息をつくダイゴ。
その時、エリカの右膝から血が出ている事に気がついた。

「エリカさん、怪我してるよ！」

「ああ、それなら平気です。さっき大神さんが治してくれましたから。」

「……え？」

エリカの口から出た『大神』という言葉に、手当てを始めようとしたダイゴは固まった。
その顔は、遠目から見ても分かる程に引き攣っている。
しかし、肝心のエリカはダイゴの表情に全く気づかず、更なる追い撃ちをかけた。

「大神さんって優しいんですよ～！痛いのを抑えるおまじないしてくれて。エリカますます大神さんが好きになっちゃいました！」

ダイゴは答えなかった。
いや、答えられなかった。
大好きなエリカから目の前で他の男を好きと言われたのだ。無理もない。

「それじゃ、私は先に教会に戻りますね。」

やはりダイゴの様子に気づく事なく、エリカはさも嬉しそうにスキップして公園を後にした。

「……。」

残されたダイゴはしばらくの間、身体のだるさも忘れて立ち尽くしていた。

「えっと……、見失ったかな……。」

辺りを見渡して、大神が呟いた。
花火を追いかけて来たはいいものの怪我をしたエリカに捕まってしまい、適当におまじないでごまかしたものの、公園を過ぎた橋の辺りで見失ってしまったのだ。

「あ、あそこか……。」

見ると、花火は橋の真ん中で眼下を流れる川を眺めていた。
しかし、やけに悲しげな表情が気になる。

「（さっき墓地で会った時といい、様子がおかしいな……。）」

そう思いつつも写真を渡そうと大神が歩き出した時だった。
何と花火が、突然橋から身を乗り出したのである。

「は、花火くん！早まるな！！」

慌てて止めようと走り出す大神。
すると、その叫び声に反応した花火がこちらに気付いた。

「え……、お、大神さん！？」

必死で走ってくる大神にびっくりしたのか、花火は橋の淵から離れる。
しかし、今度は大神が危なかった。
勢いを付けすぎて、止まれなくなってしまったのだ。

「わ！わ！しまった……！！」

サムライの熱血が裏目に出て、大神はある意味華麗に川へとダイブしてしまった。
その時、

「嫌あああぁぁぁ……！！」

大神の耳に、誰かの叫び声が聞こえた。

「……あれは！」

突然聞こえた叫び声を聞き付けて公園を飛び出したダイゴは、橋の上で倒れている花火を発見した。

「花火さん！しっかりして、花火さん！」

急いで抱き起こし、身体を優しく揺する。
その真下の川でもがいている大神を無視する辺りは、ダイゴらしい所だろうか。

「う……ん……、……フィリップ……。」

譫言で誰かの名前を呟く花火。
すると、そこに川からはい上がった大神が姿を現した。

「花火くん！じゃあさっきの悲鳴は……。」

「僕も聞いた。多分花火さんだよ……。」

一体何があったというのか。
二人が揃って首を傾げていると、花火がようやく意識を取り戻した。

「あ……、大神さん……、ダイゴさん……。」

「花火くん、気がついたんだね。」

優しく笑いかける大神。
すると、花火は虚ろなままの表情で尋ねた。

「私……、まだ生きてるんですか……？」

「え……？」

その言葉に、ダイゴの顔から安堵の表情が消えた。
花火の様子が、初めて会った時と違うのだ。
まるで生きる事を無力に思い、生きる事すら拒むような様子に見える。
現に今の一言も、本当は死ぬはずだったのに生き残ってしまったように聞こえる。

「え？別に怪我とかはないけど……。」

その事に気付いていないのか、戸惑った様子で答える大神。

「そうですか……。まだ、生きてるんですね……。」

「花火くん……、どうしたんだい？さっきから様子が変だよ？」

生気のない表情で立ち上がる花火に、大神が心配そうに声をかける。
しかし、花火は表情を変えずに首を振った。

「ご心配には及びませんわ。それでは……。」

そう言って歩き出そうとする花火を、大神が止めた。

「あ、ちょっと待ってくれ。この写真、花火くんのだろう？」

「え……？」

墓地で拾った写真を花火に差し出す。
幸い水には曝されなかったらしく、濡れたりふやけたりはしていな

い。
しかし、その写真を見るや、花火は表情を一変させた。
「それは……！か、返して下さい！！何処でそれを！？」
余程大切な写真だったのか、花火は大神の手から写真を引ったくった。
「あ、いや……墓地で拾ったんだけど……。」
やはり戸惑いながらも律儀に答える大神。
すると、花火はハッと我に還った。
「あ……すみません。取り乱してしまって……。し、失礼します……。」
気まずくなったその場の空気に耐えられなかったのか、花火は早足で橋から立ち去った。
「な、何だったんだ……？」
イマイチ状況が飲み込めない大神が呟く。
すると、ダイゴが言葉を返した。
「少なくとも、以前とは様子が違うよね。」
「ああ。花火くん……、一体どうしてしまったんだ？」
いくら考えても、答えが出て来る様子はなかった。

「で、どうだった？新隊員は見つかったの？」

「いや、これと確定できる程の人物はなかったな。」

コクリコの言葉に、大神は些か残念そうに返事を返した。
あれからシャノワールに戻った大神は、コクリコに呼ばれて新隊員についての会合に参加する事になった。
今現在霊力が確認されたのは、タレブー、ピエール、ダイゴの三人。
しかし、いずれも光武Ｆを動かせる程の霊力を維持出来るかに疑問が残る。
すると、ここでエリカが申し出た。

「それじゃあ大神さん。花火さんなんてどうですか？」

「花火くん？どうだろう……、きちんと霊力を測れなかったから……。」

確かにあの時、霊測機のカウンターは測定不能にまでなっていたが、それが本当に花火の霊力によるものなのかは怪しい。

「花火は戦いには向かん。それより、新隊員であろう？」

「どうでもいいじゃねぇか、そんなもん。アタシの給料二倍にしたら二人分働いてやるよ。」

ぶっきらぼうに言って、ロベリアがテーブルの上の菓子をつまむ。
一方、グリシーヌは大神に念を押すように言った。

「新隊員には霊力と共に、巴里を守るという理想が必須だ。そこは、分かっておろうな?」

「もちろんだ。そこはグリシーヌと同意見だよ。」

「だったらやっぱり花火さんですよ!みんなも知ってますし、優しいですし……。」

「エリカくん……、そこまで花火くんに固執する事ないと思うぞ?」

あくまでも花火を推薦したがるエリカを抑える大神。
すると、唯一花火を知らない人物が口を開いた。

「花火?誰だそいつは?」

「あ、そっか。ロベリアさん、メイドしてませんでしたね。」

「エリカ、今は新隊員についての話だぞ?」

脱線を続けるエリカをグリシーヌが窘める。

「おいおい、せめてその花火って奴について先に教えろよ。」

「えっとね、グリシーヌの友達の日本人なんだ。」

「ふ～ん、日本人ね……。」

しつこく尋ねるロベリアに根負けして、コクリコが簡単に花火について説明する。

「……じゃあ、話を戻すよ。」

いい加減隣のグリシーヌの視線が痛くなって来た大神が、冷や汗をかきながら言った。
あくまで本題は花火ではなく新隊員である。

「支配人によると、新隊員はあと一人だけなんだ。」

「だったら花火さんでいいじゃないですか。」

「うん。ボクも花火と一緒がいいな。」

「なら、もうそいつでいいじゃねぇか。さっさと隊員にしちまおうぜ?」

新隊員があと一人と聞くや、三人は揃って花火を推薦した。
が、グリシーヌだけは頑なに反対を示した。

「花火は戦いなど向かん。ごり押しをするな。」

「は～い……。」

残念そうにコクリコが俯く。

すると、ロベリアがふと大神に尋ねた。

「そういや隊長。霊力はどうやって調べるんだ?」

「ああ、この霊測機だよ。アンテナを向けた一人人の霊力が、このカウンターに表示されるんだ。」

そう言って、大神は霊測機を取り出した。
幸い直っているらしく、カウンターは0に戻っている。

「面白そうだな。隊長、アタシの霊力を計ってみてくれよ。」

「ああ、いいよ。」

言われるままにアンテナを向ける大神。
すると、驚きの結果が現れた。

「す、凄い!針が振り切れている!測定不能だ!!」

「当然さ。アタシは危ない橋を何度も渡って来たからな。」

大神が驚く様子に満足したのか、ロベリアは得意げに腕を組む。
すると、エリカが尋ねた。

「ねぇ大神さん。その機械で花火さんも測ったんですか?」

「うん。でもきちんと測る事はできなくって……。」

「隊長、会合の主旨を忘れたか?」

釘を刺すようにグリシーヌが睨んだ。
まるで花火の話をやめろと言わんばかりだ。

「じゃあイチロー、他に霊力のある人はいなかったの？」

「そうだな……。強いて挙げるならダイゴくらいか……。」

「ダイゴ？またよく分からない奴が出て来たな。」

「ダイゴも日本人だよ。エリカの友達なんだ。」

「じゃあ花火って奴が駄目ならそいつはどうだ？」

余程会合を早く終わらせたいらしく、ロベリアがダイゴを新隊員に提案する。
すると、今度はエリカが猛反対した。

「駄目です！ダイゴさんを戦わせるなんて、神様が許しません！！」

「……じゃあ、結局は地道に探すしかないな。」

花火やダイゴが却下された以上、候補は０に戻った。
やはり再び出直す必要がありそうだ。

「よし、結論は出たな。今後はみなで街を見回るぞ？」

「みんな、よろしく頼むぞ？」

「もちろん！ボクに任せてよ！」

「ま、アタシも気をつけてやるよ。」

「エリカもがんばります！」

力強い返事を返す隊員達。
大神はその様子に心強さを感じた。

「隊長……。」

そうして開店準備に取り掛かろうとした時、グリシーヌがふと声をかけて来た。

「少しいいか？花火の事で話がある。」

「ああ。俺も聞きたい事があった。」

「では場所を移そう。ついて参れ。」

大神がグリシーヌに連れてこられたのは、楽屋だった。
確かに開店前なら、楽屋に来る者はそういない。

「……よし、まずは貴公の話を聞こうか。」

「ああ。フィリップという名前について、知らないかい？」

「フィリップ？貴公、何故その名を！？」

刹那、グリシーヌは表情を一変させ、大神の胸倉を掴んだ。

「吐け！その名前を何処で聞いた！！」

「は、墓参りをしていた花火くんに会ったんだ。その墓に名前が彫ってあった……。」

「では貴公が知るのは名前だけか？」

「ああ、他には何も……。」

そう答えると、グリシーヌはようやく手を離した。

「ならば話しておこう。フィリップは……、花火のフィアンセだ。」

「な、何だって！！」

予想もしなかった答えに、大神は仰天した。

知り合いか友達だろうと思っていたが、まさかそれ以上の関係だったとは……。

「花火の婚約が決まった頃、私もよく二人に会っていた。花火とフィリップの仲の良さは、私から見ても微笑ましいものでな。」

つまりは相思相愛。

花火とフィリップは、既に一生を約束した仲だったのだ。

「二人は末永く幸せにあると思っていた……。あの日までは……。」

おそらくはフィリップの命日の事だろう。

何らかの事情でフィリップは命を落としてしまった。

それが一生を誓ったフィアンセであるなら、花火のあの様子にも納得がいく。

「それで、花火くんはフィリップさんの墓に寄り添っていたのか。」

「そうだ。あれ以来、花火はショックから喪服を脱ごうとはしなくてな……。」

花火の様子を思い出したか、グリシーヌは悲しげな表情で俯いた。

「グリシーヌも、話があるって言っていたけど……。」

「いや、貴公と同じ話だった。失礼する……。」

そう言って、グリシーヌは足早に楽屋を後にした。

「そうか……。あれはフィアンセの墓だったのか……。」

愛した人に先立たれ、残された苦しみがどれだけ大きいか。

それは、大神自身もよく知っていた。

巴里は華の都。
芸術を始めとする様々な文化が軒並み名を連ねている。
その一角が、オペラであった。
役者が舞台を舞い歌う様は、さながら生きた芸術である。
しかし、それを真上から冷ややかな視線で見る者がいた。

「ああ、なんと悲しく滑稽なるかな。享楽に溺れる愚かな人間共よ。」

芝居がかった口調で、声がした。

「教えてやろう、幾千の灯を点しても、消えぬ闇がある事を。見せてやろう、幾千の朝を迎えようとも、醒めぬ悪夢がある事を……。」

目の前で演じられる悲劇の舞台に嘲笑を浴びせ、跡形もなく消えた。

「闇に生まれながら、幾重の闇を打ち消したる我が裏切り者よ。見せてやろう……、その見せ掛けの光では救えぬ、底なき闇を！」

夜の闇に包まれた巴里を疾駆する影。
その足が止まったのは、一つの豪邸の前だった。

「感じる……、ここに。引き裂かれし心が……、闇を求める乙女の心が……。」

「フィリップ……、覚えていますか？あの日の事を……。」

漆黒の身体を闇に溶け込ませ、二つの目がギラリと花火を捉えた。
まるで、獲物を見つけた猛禽類のように。

「見せてみよ、その永久なる願いを。」

影の目が光った。

そこは目の前と同じ部屋。

今見える少女が笑顔を見せている。

唯一違う事があるとすれば、身に纏う服が黒ではない事だろうか。

「フィリップ、来てくれたの。お茶を煎れるから、座って待ってて。」

少女が嬉しそうに誰かの名前を呼ぶ。

すると、一人の青年が姿を見せた。

「花火、お茶なんかいいよ。さぁ、こっちへおいで……。」

「は、はい……フィリップ……。」

顔を赤く染め、フィリップと呼ばれた青年に寄り添う少女。

すると、フィリップは少女を抱きしめて囁きかけた。

「可愛い花火……。素敵な笑顔を、僕を見せておくれ。」

「はい……、フィリップ……。」

「ついに、ついに見つけたぞ！この乙女こそ、我が捜し求めた君！！」

影は歓喜に震えた。

「黄泉の国へ旅立った恋人を愛するが故に望まれる死。そのか弱き心に、そのあどけなき胸に、何と深い闇が渦巻いている事か……。」

影は喝采を上げた。

捜し求めていた闇が、ついに見つかったのだ。

芝居の役者を発掘した監督にも似た様子で、影は喜びにうち震えた。

「見るがいい、愚かな人間共。見るがいい、哀れな裏切り者。そのかりそめの光を、我が君の闇に沈めてくれるわ！」

冷たい夜空に、漆黒の羽が羽ばたいた。

「……。」

その夜、ダイゴは中々寝付けずにいた。

原因は分かっている。
エリカの事だ。

「エリカ、ますます大神さんの事が好きになっちゃいました！」

昼に公園で聞いた一言が、しつこく耳に残る。
自分の見ていない所で、エリカは確実に大神に靡きつつあった。

「本当に、あの人がいいのかな……。」

ほんの数ヶ月前に現れた自分と同じ日本人。
そんな奴に、自分は負けるのか。
そう考えると、無性に悔しくて仕方がなかった。

「……。」

ダイゴは黙ったまま、懐からスパークレンスを取り出した。
月の光を反射し、優しい光を放っている。

「ねぇ、ティガ……。」

ダイゴは、彫刻に眠る巨人に問い掛けた。

「君にも消せない闇はあるの？例えば……、」

僕の心のように。
そう言いかけ、ダイゴは止めた。
返ってくるのは沈黙だけ。
また心の傷を深いものにするだけだ。
しかしダイゴは気付かなかった。

夜空に輝く星の一つが、ダイゴを慰めるように輝きを増した事を。
ウルトラの星……。
その星の名前を、ダイゴはまだ知らない。

「ああダイゴさん。いい所に来て下さいました、ハイ。」

ダイゴが教会に来るや、レノ神父が慌てた様子で走り寄って来た。

「どうしたのレノ神父?」

「じ、実は……エリカさんがいきなり花火さんという方にプレゼントをするとか言って、市場の方へ大張り切りで……。」

そう言って市場を指差すレノ神父。
その方角を見て、ダイゴも冷や汗を流した。
エリカは一日に一回必ず何か失敗をする。
特に張り切っている時は、不思議と失敗の可能性が倍増してしまうのだ。
つまり……、

「私はこれからミサがありますので、どうかエリカさんを……。」

「分かった、エリカさんの事は任せて！」

エリカがまだドジを踏んでいない事を祈りながら、ダイゴは一目散に市場へと駆け出した。

「……ん？あれは……。」

不意に窓の外を過ぎった影に、大神は目を凝らした。
物凄く急いだ様子で走り抜けた黒い影。
もしやダイゴではなかろうか。

「どうかされましたか？大神さん。」

「え？あ、いや、何でもないよ……。」

向かい側の席に座る花火にそう答え、大神は食べかけの豆腐の冷や奴を一口頬張った。
この日、大神は昨日と同じように墓参りをしていた花火と会い、一緒に少し早めの昼食を取っていた。

フィアンセを失った悲しみから立ち直れずにいる彼女を少しでも励ましてあげようと考えたからだ。
そこで、巴里に来てからよく行くレストランで食事を提案した。
幸い花火もグリシーヌとよく来るらしく、殿方の頼みは断れないと了承してくれた。

「ありがとうございます。わざわざ日本食を選んでいただいて。」

「いや、たまたま今日のオススメ料理が日本食だっただけだよ。」

大神はそう言うが、半分は花火の言う通りだ。
フランスのレストランは決まったメニューがない。
基本的にシェフが朝から食材を買い揃え、その食材からメニューを考えるのだ。
中でも今日のオススメ料理は、シェフがその日に仕入れた食材をふんだんに使用している最高の一品。
味は当然の如く絶品だが、その分値段も高い。
特に今日の日本食は、フランスでは中々手に入らない食材のために値段も高い。
加えて大神も、巴里華撃団の隊長とはいえ普段はシアターのモギリである。
当然の事ながら、給料はそんなに高くない。
実際に今日の食事で、大神の財布はかなり寒い事になっていた。

「（良かった。花火くん、少し元気になってくれたみたいだな。）」

墓地で会った時と比べて、僅かだが花火に笑顔が増えた。
そのための代償は大きかったが、彼女が元気になってくれるなら大した事ではない。

しかし、その安心も長くは続かなかった。

「お食事、美味しかったです。ありがとうございました。」

昼食を食べ終え、外に出た花火が大神に礼を述べた。
どうやら大分元気を取り戻してくれたようだ。

「それじゃあ、グリシーヌ邸まで送って行くよ。」

「はい。お願いいたします。」

そう言って歩き出そうとした時だった。
突然辺りに黒い羽根が舞い降りて来たのである。

「な、何だ!?」

驚きつつも花火を守ろうと警戒する大神。
すると、二人の前に黒い不気味な影が現れた。

「貴様……、怪人か!?」

その姿を見るや、大神が吠えた。
漆黒のマントとシルクハット。
そして黒く尖った嘴。

まさに闇に溶け込む姿に対し、獲物を捉える二つの目はギラリと光っている。

「我が名はマスク・ド・コルボー。お初にお目にかかります。黒き衣のマドモアゼルよ。」

「黒き衣のマドモアゼル？花火くんの事か！？」

芝居がかった口調で迫るコルボーなる怪人から花火を庇うように立つ大神。

すると、コルボーは打って変わって大神に殺気を漲らせた。

「愚かなる男よ！貴様になど用はない。」

その時、花火が信じられない事を口にした。

「……フィリップ……？フィリップなのね……？」

「なっ！花火くん！？」

振り返った大神は驚きに目を見張った。

それもそのはず。

何故なら花火は、目の前に立つ怪人に怖がる様子もなく、むしろ微笑みながら近付いて行くからだ。

どういう事かと訝しむ大神だったが、次にコルボーが放った一言で全てを理解した。

「待たせてしまったね、花火。さあ、僕の側へおいで。」

「はい……、フィリップ……。」

コルボーの異なった口調と、コルボーをフィリップと呼ぶ花火。コルボーは幻術が何かで、花火が自分をフィリップと錯覚させているのだ。
花火もフィリップへの思いからか、正常な感覚を失っている。

「行くな花火くん！うわっ！」

大神は花火を止めようとするがその瞬間、周りの黒い羽根が一斉に烏に変身して大神に襲い掛かって来た。

「さあ花火、僕らだけの世界へ行こう。誰にも邪魔されない世界へ……。」

「はい、フィリップ……。」

その間にも、花火はコルボーに抱かれて連れ去られてしまった。

「花火くん！くそっ……！！」

何とか烏の群れを追い払い、大神は空を行くコルボーを追い掛けた。

その頃、ダイゴの姿は市場にあった。

「……また随分とやっちゃって……。」

「クスン……、ごめんなさい……。」

ため息をつくダイゴに、半ベソで謝るエリカ。
二人の手には、揃って包丁とジャガ芋が握られている。
実はエリカが何かしらのミスをして八百屋の屋台を一つ壊してしまい、罰としてジャガ芋の皮剥きを手伝わされていたのだ。
そこにちょうどダイゴが到着し、仲良く二人で皮剥きをする事になったのである。

「それにしても、本当にこのカゴ全部剥くように言われたの？」

そう言って、ダイゴはまたカゴから一つジャガ芋を手に取った。
既に１００個近い数のジャガ芋を剥いているが、山積みにされたジャガ芋は一向に減る気配がない。
そもそも売り物のジャガ芋をこんなに剥いていいのかも怪しい。
しかし、エリカはキッパリと言った。

「本当です！ダイゴさん、エリカの事信じてくれないんですか？」

「いや、疑ってる訳じゃないよ。変な事頼むと思って……。」

常識的に考えて、このカゴ全部のジャガ芋を剥くのはおかしい。
もしかしてエリカの事、また何か聞き違いをしているのではなかろうか……。

また一つジャガ芋を剥き終えてダイゴがそう思った時、聞き覚えのある声が耳に届いた。

「おやおや、いつかの猿君。今度は市場のお手伝いかな？」

それは、以前ダイゴを猿呼ばわりしてけなした巴里の貴族、ダニエルだった。
前にグリシーヌに一喝されて懲りてないのか、ふてぶてしい態度は以前のままだ。

「……！」

「おやおや、どうしました？ミーの華やかさに、声も出ないかな？」

何かに気付いた様子で目を見張るダイゴに、ここぞとばかりに胸を張るダニエル。
しかし、ダイゴが見ていたのはそんなものではなかった。

「（あれは……、花火さん！！）」

何と雨雲が立ち込める空に、黒い影に抱かれた花火が見えるではないか。
それと同時に、懐のスパークレンスが光を放った。

「（間違いない！怪人が現れたんだ！！）」

「まあ、君にも人を見る目があったとして、ミーも何か買ってあげよう。」

「え！本当ですか！？エリカ大感激です！」

気を良くしたダニエルに、エリカは剥いたジャガ芋を全部押し付けた。

「さあどうぞ！剥いてあるので、すぐに料理出来ますよ！」

「なっ！？ち、ちょっと待て！ミーは一つで……！」

「遠慮しないで！お店の人も喜んでくれますよ！」

「冗談じゃない！ほら、そこの猿君！君も何か言って……！」

ダニエルがそう言って振り向いた時、ダイゴの姿は忽然と消え、代わりに店の主人が立っていた。

「おう嬢ちゃん。ジャガ芋は剥き終わったか？」

「はい！この方が全部買いたいと……。」

「待て！ミーは……！！」

「本当かい？ありがとよ。ジャガ芋１２０個で１２００フランな。」

「そ……、そんな～！！」

かくして、ここに赤い修道服に涙を呑む者がまた一人増えた。

オペラ・ガルニエ。
数ある巴里の舞台の中でも、「オペラ座」という二つ名を持つ程の人気を集める舞台だ。
コルボーは、追い掛けて来る大神ともう一人の人物を冷ややかに見下ろしつつ、黒き衣のマドモアゼルと共にこのオペラ座にやって来た。

「待て！花火くんをどうするつもりだ！」

「フハハハハ！男の嫉妬程醜いものはないな。そうだろう、花火。」

妨害をかい潜って追跡して来た大神に、コルボーが侮蔑を吐き捨てる。

「大神さん、私達の邪魔をなさらないで下さい。」

「は、花火くん！」

完全にコルボーをフィリップと信じ込んでいる花火までも、大神を睨む。

「フハハハハ！美しきマドモアゼルよ。貴女の願い、叶えましょう。このマスク・ド・コルボーが！」

言うや、コルボーは花火を連れてオペラ座の中に消えた。

「待て！」

その後を追い掛けようとする大神。
しかし、オペラ座の入口で何かが大神を弾いた。

「くそっ、結界か！」

おそらくコルボーの仕業だろう。
これではオペラ座の中に侵入出来ない。

「大神さん！」

市場から走って来たダイゴが到着したのは、その時だった。

「ダイゴ！何故ここに！？」

思いもしない人物の登場に驚きを隠せない大神。
すると、ダイゴは肩で息を切らしながら言った。

「市場で花火さんが怪人に連れて行かれる所を見たんだ。奴は？」

「この建物の中だ。しかし、結界が張って……。」

そう言いかけた大神だったが、それより先にダイゴがオペラ座に向かって駆け出した。

「ま、待てダイゴ！そこから中には……！」

慌ててダイゴを止めようとする大神。
しかし、ここで更に驚くべき出来事が起こった。
何と、ダイゴは大神が弾かれた結界を事もなげに素通りしてしまったのだ。
結界の存在に気付いていないのか、ダイゴはそのままオペラ座の中に入って行く。

「くっ……、ここはシャノワールに戻らなくては……！」

このままでは花火はおろか、中に入ったダイゴも危険だ。
大神は急いで、シャノワールに取って返した。

外界から遮断され、漆黒の闇に閉ざされたオペラ座の舞台。
その舞台の中央に、スポットライトが当てられた。

「ああ……、フィリップ……。」

亡き恋人の笑顔にまどろみ、その場に立ちすくむ花火。
ダイゴがその舞台に駆け付けたのは、その時だった。

「見つけたぞ！花火さんをどうするつもりだ！？」

「やはり来たか、かりそめの光に縋る裏切り者よ……。」

ダイゴの姿に、コルボーの目が光った。

「我はマスク・ド・コルボー！愚かな人間共に裁きを与え、哀れな裏切り者を闇に沈める者なり！」

「何！？」

その時、闇に閉ざされた周囲が急激に歪みはじめた。

「舞台は作られ、役者は揃った、さあ、死のオペラの開幕だ！！」

「……くっ！こ、これは……！？」

目の前に広がる光景に、ダイゴは絶句した。

闇に覆われていたはずの舞台。

それが、豪雨に曝される船の甲板に変わっていたからだ。

「……。」

虚ろな表情で座り込む花火。
おそらく目の前の状況すら、見えていないに違いない。

「ククク……、哀しき黒衣のマドモアゼル。この悲劇の舞台に幕を降ろせるのは、奴の、そして貴女の死を以ってのみ！」

そんな花火にぬけぬけと言うコルボー。
しかし、そこに別の声が割り込んで来た。

「そうはさせん！！」

「あ、あれは……！」

後ろには、五つの光武Ｆが立っていた。
グリシーヌに続き、全員が声を合わせる。

「巴里華撃団、参上！！」

「怪人！花火くんを幻から解放しろ！！」

二刀を突き付け、大神が叫んだ。
すると、コルボーはヒラリと五人の前に立つ。

「幻？この雨を、幻と思っているのかね？」

「何！？」

大神を尻目に、コルボーはヒラリと甲板に降り立ち、語りはじめた。

「これは、美しくも悲哀に満ちた物語。オペラ座は、裏切り者と共に冷たい海へ沈んでいくのだ。」

コルボーが再び移動した。今度は煙突の上だ。

「そう……、かつてこの海に沈んだ、一隻の船のように……！」

その言葉に、人一倍反応する者がいた。
巴里華撃団の中で唯一花火の過去を知るグリシーヌだ。

「まさか……、あの日の花火の記憶を再現しようというのか！？」

「あの日？グリシーヌ、どういう事だ？」

大神に尋ねられ、グリシーヌは躊躇いながらも話しはじめた。

「あれはちょうど一年前。花火とフィリップの船上披露宴の時だ……。」

あの日、雲が立ち込めていたが、二人の幸せな笑顔で披露宴は盛り上がっていた。
だが、フィリップが花火に指輪を嵌めたその時、船を衝撃が襲った。
隣国の水爆の誤認発射事故と言われている。
船は揺られ、笑い声は悲鳴に変わった。

そして折悪く嵐が来て、船が傾いたのだ。

「花火、この柱に掴まれ！！」

フィリップは咄嗟に、花火を近くの支柱に掴まらせた。
だがその瞬間、激しい衝撃が再び船を襲ったのだ。

「フィリップ！」

船は大きく傾いた。
柱に掴まった花火は平気だったが、フィリップは雨で滑った甲板にしがみつく状態になってしまった。

「フィリップ！もう少し手を伸ばして！！」

「人を呼んでくる！フィリップ、花火！それまで待つんだ！！」

今思えば、それが失敗だったかも知れん。
花火は必死に手を伸ばしたが、僅かに届かん。
私は、一刻も早く助けを呼びに船に戻った。

「フィリップ！もう少しだけ頑張って！！すぐにグリシーヌが助けを呼んでくれるから！！」

花火はフィリップを泣きながら励ましたそうだ。
すると、フィリップにこう言われたらしい。

「花火……、泣かないで。花火は、笑顔が一番綺麗なんだから……。」

「フィリップ！」

「だから、微笑んでいておくれ。花火……、愛してるよ……。」

「フィリップ……！？フィリップ！！
嫌あああぁぁぁ……！！」

私が人を連れて甲板に戻ったのは、ちょうど花火の悲鳴が聞こえた時だった。

「花火！フィリップは、フィリップは無事か！？」

まさかとは思ったが、私は一縷の望みを賭けて尋ねた。
だが、花火の答えは予想を裏切ってくれなかった。

「フィリップ……。」

力のない返事。
何よりそこにフィリップがいない事が全てを物語っていた。

「まさか……、フィリップが……！？……花火、済まない！
私がもう少し早ければ……！！」

謝って済むような事ではない。
しかし、花火の口から出た言葉に、私はハッとした。

「いいのよ、グリシーヌ……。」

「花火……？何故笑っているんだ……？」

雨に濡れた花火の顔は、涙を流しながら笑っていた。
理由が分からず尋ねる私に、花火はこう答えた。

「フィリップが言ったの。ずっと微笑んでくれと……。」

花火はそう言って、フィリップの名前を呼んだ。
笑顔のまま、泣きながら。

「……そうよね……、フィリップ……。」

「そんな……、結婚式の日に恋人を亡くしたなんて……！」

予想だにしない花火の悲しい過去に、エリカも表情を暗くする。

「その通り。これは彼女が一年前に愛する者を失った記憶。」

それとは対照的に、コルボーは高らかに笑った。
まるでこの悲劇に酔いしれるかのように。

「今ここに蘇らせよう！幸せに満ちた結婚式の夜を！そこに訪れた悲嘆劇の夜を！悲哀のマドモアゼルは幻に微笑みながら、冷たい海の底で永久に眠るのだ！！」

それと同時に、激しい衝撃が船を襲った。
一年前に悲劇の始まりを告げた、あの時のように。

「大神さん！花火さんを助けないと！」

「そうだな。よし、急いで花火くんの所へ行くぞ！」

エリカの提案を受け、大神が指示を出す。
しかし、ここで異を唱える者がいた。
グリシーヌである。

「いや、私はあの怪人を斬る！花火の心を弄ぶ外道を、許してはおけん！」

「あんな所まで行ったら危ないよ！イチローが海に落ちちゃうじゃない。」

「おいおいどうすんだ？バラバラじゃねぇか。」

ロベリアの指摘通り、エリカ以外は大神の指示を聞こうとしない。
確かにコルボーの卑劣な手口は許し難いし、直接波に曝される甲板は危険だろう。
しかし、大神は何よりも花火の救出を優先した。

「頼む、今は俺の指示を聞いてくれ。誰かが指揮を取らなければ、本当にバラバラになる。」

部隊が分裂してしまえば、チームワークどころではなくなる。
ただでさえ一刻を争う状況なのだ。
こちらからピンチを招く余裕はなかった。

「確かに。では隊長、指揮を任せるぞ。」

「イチロー、無茶しないでね。」

「アンタもやるねぇ。決まったんなら早いとこ動こうぜ？」

「よし、甲板に移動して、花火くんを救出するぞ！」

大神の指示を受け、五つの光武Ｆは一斉に動きはじめようとした。
だがその時、コルボーの怪しい笑い声が聞こえて来た。

「フハハハハ！そんな事をしても無駄だ。さあ、来るがいい。宇宙を蹂躙する、魔の大怪獣よ！！」

コルボーが腰に下げたレイピアを抜き、雲に覆われた空に向けた。
その時、真上から微かに鳴き声が聞こえて来たかと思うと、巨大な黒い影が物凄い勢いで船の側に現れた。

「あ、あれは……！！」

その姿に、大神は戦慄した。
何故なら……。

「ポキャーッ！！」

怪獣の咆哮が海を揺らし、船を揺るがした。
間違いない。
いや、間違いようがない。
五角形の身体と、ペンギンのような顔。
そして腹部にあるもう一つの口。

「べ……、ベムスター……！！」

まさに3年前の悪夢を彷彿とさせる、宇宙大怪獣ベムスターがそこにいた。

「……そういう事か……。

船の煙突からベムスターを見下ろし、ダイゴが呟いた。

すると、その後ろからコルボーが口を開く。

「あの愚かなる男から逃げている時に少し記憶を覗かせてもらった。かの男が最も強かったと戦く大怪獣。貴様に奴が倒せるか！？」

それは、ダイゴがティガである事を見越しての、コルボーからの挑発だった。

花火の生きる事に絶望して生まれた闇の中で、巴里の平和を守る巴里華撃団とウルトラマンティガをまとめて始末する。

それがコルボーのシナリオだったのだ。

「やってやるさ。光の力、見せてやる……！」

ダイゴは決意と共に、スパークレンスを暗黒の空に掲げ、叫んだ。

「ティガーーーーーッ！！」

「チャーッ！！」

大空を舞い、ティガがベムスターの前に降り立った。

「ウルトラマンティガ！！」

突然の巨人の登場に驚く大神。
すると、隣にいるエリカが叫んだ。

「大神さん！今の内に花火さんを！」

「よし、分かった。みんな、行くぞ！！」

「「了解！」」

ティガは、ベムスターを船に近付けないよう船を背中に庇い、ベムスターと対峙した。
怪獣の大きさで生まれる波の高さは半端ではない。
そんな波が船を襲えば、たちまち甲板にあるもの全てが流されてしまう。
絶対にベムスターを船に近付かせる訳にはいかなかった。

「チャッ！」

ティガはベムスターの注意をこちらに向けさせるべく、ハンドスラッシュを放った。
青白い小さな光弾が、ベムスターの顔を掠める。

「ビィー！！」

すると、狙い通りベムスターは標的をティガに変えて襲い掛かって来た。

「チャッ。」

ティガは避ける事もなく、突進して来るベムスターの片腕を捕まえ、横に投げ飛ばした。

「ビキュッ！？」

一回転して海にたたき付けられるベムスター。
そこに、ティガが馬乗りになって追い撃ちをかけた。

「ハッ！ハッ！チャッ！」

激しいパンチのラッシュを浴びせるティガ。
形勢がティガに傾いたかと思われたが、そう簡単に勝たせてくれるような相手ではなかった。

「ビィッ！！」

何とベムスターは、腹部の口に海水を吸い込ませ、一気に吐き出したのである。

「ジュワッ！？」

思いも寄らぬ反撃に吹き飛ばされるティガ。
すると、ベムスターは両翼を羽ばたかせて空に舞い上がった。

「ポキャーッ！」

そして頭からミサイルの如く、ティガ目掛けて飛び込んで来たのである。

「ジュワッ！？」

大きく後ろに吹き飛ばされるティガ。
ベムスターは更に追い撃ちをかけるべく、再び空へ舞い上がる。
しかし、ティガもやられてばかりではなかった。

「ンゥゥゥ……、ハッ！」

額のクリスタルを発光させ、パワータイプにチェンジする。

そこに、ベムスターがまた頭から突っ込んで来た。

「ポキャーッ！！」

しかし、パワータイプにチェンジしたティガには、ベムスターは格好の的だった。

「チャッ！」

何とティガは、マルチタイプの時は吹き飛ばされた程のベムスターの一撃を、いとも容易く受け止めたのである。

それだけではない。

ティガはそのまま脳天から、ベムスターを地面にたたき付けたのだ。

ウルトラヘッドクラッシャー……敵を持ち上げて脳天から地面に沈める、パワータイプの豪快な力技だ。

「チャーッ！！」

「ビキュッ！？」

凄まじい轟音と共に、ベムスターの頭が海中に消える。

「ハァァァ……！！」

ティガは弱ったベムスターにトドメを刺すべく、胸の前に圧縮したエネルギーボールを生み出す。

「あっ！デラシウム光流だ。」

気付いたコクリコが叫んだ。

ゲオザークやアンタレスを倒して来たティガの必殺技。
しかしその場の誰もがティガの勝利を確信する中、大神がハッとした様子で叫んだ。

「駄目だティガ！デラシウム光流は使うなっ！！」

だがそれはもう遅かった。

「ダアッ！！」

赤く光るエネルギーボールが、一直線にベムスターに撃ち込まれる。
だが次の瞬間、信じられない事が起こった。

「ビィーッ！」

ベムスターが待ってましたと言わんばかりに腹の口を広げた。
すると、腹の口がデラシウム光流をまるごと吸い込んだのである。

「う、嘘……！」

「馬鹿な！デラシウム光流を吸収したと言うのか！？」

驚愕の表情を浮かべる巴里華撃団。
しかし、ベムスターは更なる反撃に転じた。

「ポキャーッ！！」

何と、先程吸収したデラシウム光流のエネルギーを、角から打ち出して来たのである。

「ジュワッ！？」

不意打ちに近いカウンターに吹き飛ばされるティガ。
すると、胸のカラータイマーが点滅をはじめた。
大技のデラシウム光流の直後にカウンター攻撃を受けたために、エネルギーが大幅に減少してしまったのだ。

「ビィーッ！！」

これを好機と見たか、ベムスターは再び空に舞い上がり、ティガに襲い掛かって来た。

「ティガがあれ程までに苦戦するとは……。何者なのだ、あの怪獣は？」

これまで負け無しだったティガの苦戦する様子に、グリシーヌがポーンを切り捨てながら呟いた。
すると、唯一その怪獣を知る大神が答えた。

「それがベムスターだ。奴は様々な光線のエネルギーを吸収し、自分のものにできるんだ。」

3年前に明治神宮でウルトラマンジャックを撃破した唯一の大怪獣。
それがまさかこんな状況で現れるとは。

「大神さん、あそこ！」

エリカが甲板の奥を指差した。

そこには、豪雨に曝されずぶ濡れになった花火の姿があった。

「花火くん！！」

大神は周囲にポーンがいない事を確認すると、光武Ｆから飛び出した。

「……フィリップ……。」

「花火くん、目を覚ませ！奴はフィリップさんなんかじゃない！君は騙されているんだ！」

虚ろな表情のまま恋人の名前を呟く花火に、大神は肩を揺すって語りかけた。

しかし、そこにコルボーが襲い掛かった。

「あくまでも邪魔だてする気か、愚かなる男！」

「うわっ！？」

横から突き出されたレイピアを避けたその時、船を激しい震動が襲い、甲板が大きく傾いた。

「大神さん！」

「イチロー！」

バランスを崩して甲板に張り付く形になった大神。
エリカ達は助けに行こうとするが、傾いた甲板の上では思うように動けない。
すると、ここで花火が叫んだ。

「フィリップ！死なないで、フィリップ！！」

おそらくフィリップが波に呑まれた時の事を思い出したのだろう。
花火は泣いていた。

「大丈夫だ、花火くん！俺は絶対に死なない！！」

「え……？ハッ……お、大神さん！！」

大神の叫びが心に届いたのか、花火はハッとした表情で大神を見た。
コルボーの幻術が解け、正気に戻ったのだ。

「花火くん……、気がついたんだね。」

大神が安堵の表情で花火を見た。
一方の花火は、突然変化した周りの状況に戸惑ったが、少なくとも危険な状態である事は分かる。
自分は一体どうしたというのだろうか。

レストランでコルボーに幻術をかけられた時から記憶が飛んでいる。
先程まで目の前にいたフィリップはなく、目の前には大神が一年前のフィリップと全く同じ状況に立たされていた。

「花火くん、俺は絶対に死なない……。だから、君も死ぬ事なんて考えるな！」

大神は甲板にしがみついたまま、花火に語りかけた。

「もしフィリップさんが生きてここにいれば、俺と同じ事を言ったはずだ！」

「フィリップが……。」

その時、花火は気付いた。

「いつまでも微笑んで。」

フィリップが遺した言葉の意味。
それは天国でフィリップに微笑みかける事ではなく、これから出会うであろう沢山の人にフィリップの愛した微笑みを見せてほしい……。
つまり、生きてほしいと。

「大神さん！」

花火は近くの柱に掴まり、大神に手を伸ばした。
大神を助け、この状況から生きて脱出するために。

「花火くん……！」

差し出された手を掴もうと手を伸ばす大神。
しかし、それを許さない者がいた。

「おのれ……！戯れ事はそこまでだ！！ベムスター！あの愚かなる男を先に始末しろ！」

「ポキャーッ！」

コルボーの命令を受け、ベムスターは今まで戦っていたティガに背を向け、船に向かって来た。

「チャッ！」

船に近付かせまいと、ティガは後ろから掴み掛かった。
しかし、エネルギーを消耗して弱った身体ではベムスターの進撃を食い止められない。

「ポキャーッ！」

ベムスターはティガを翼で軽く払いのけ、更に船に近付く。
すると、ティガは再び額のクリスタルを発光させた。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

ティガの身体が紫に変わる。
パワータイプからスカイタイプにチェンジしたのだ。
そして、ティガは赤く点滅するカラータイマーに右手を当て、ハンドスラッシュの要領で青白いエネルギーをベムスターの頭上に放った。

ティガフリーザー……凍てつく冷気を敵の頭上で爆発させ、凍らせてしまうスカイタイプの光線技だ。

「ビィッ！？」

船の眼前に迫っていたベムスターは、完全に凍り付いた。

「ハァァァ……！」

ティガはトドメを刺すべく、両手を左右に水平に伸ばし、頭上でエネルギーを集中させた。

「ジュッ！！」

ベムスターの背中に、必殺のランバルト光弾が発射された。
青白い光の矢がベムスターの背中に深々と突き刺さる。
そして、そこから四方に亀裂が入り、ベムスターは粉々に砕け散った。

「無駄だ！マドモアゼルが死を選ばぬ限り、この悲劇に幕は降りん！」

コルボーの叫びと共に、かつてフィリップを飲み込んだ高波が迫って来た。
しかし、幻から目を覚ました花火は、コルボーの思い通りにはならなかった。

「大神さん……、私も……私も……生きたい！」

花火が今までにない大声で、そう叫んだ時だった。

突然花火を目に見える程の霊力が包み、一気に爆発したのだ。

「な、何!?グアアア……!!」

その霊力の波動はコルボーを吹き飛ばし、オペラ座の壁にたたき付けた。

すると、その拍子に幻が消え、周りは沈み行く船はオペラ座のステージに変化した。

花火の霊力の波動と生きる事への希望が、コルボーの幻を打ち消したのだ。

「（花火くんに、これ程までの霊力があったなんて……。）」

やはりあの時の霊測機の反応は故障などではない。

花火は、コルボーの幻を打ち消せる程の霊力を秘めていたのだ。

「おのれ……、我が最高の舞台を汚しおって……!」

「黙れ!乙女の心を弄ぶ不届き者めが!」

憤怒の表情を見せるコルボーに、毅然と言い放つグリシーヌ。

大神はそれに続くように花火を庇った。

「貴様に花火くんは渡さない!花火くんは、俺達が守る!!」

「お、大神さん……!」

目の前で大胆な発言をする大神に、思わず頬を赤く染める花火。

すると、その隣によく知る人物が姿を見せた。

「大神さん！花火さんの事は僕に任せて！」

「ダイゴ！無事だったのか！」

それは、大神より先にオペラ座に潜入していたダイゴだった。
特にコルボーに襲われた様子もなく、大神達は胸を撫で下ろす。

「よし、ダイゴは花火くんを連れて、そこにあるダストシュートで避難してくれ！」

「分かった。気をつけてね！」

「大神さん、ご武運を……！！」

そう言い残してオペラ座を脱出する二人。
それを見届けた後、大神は二刀を構えて叫んだ。

「みんな気をつけろ！蒸気獣が現れるぞ！」

「愚かなる者共よ！我が漆黒の闇に沈むがいい！行け、ポーン共よ！」

コルボーの指令で、ポーン達が一斉に襲い掛かって来た。

「こ、ここは……？」

「シャノワール……だよね？」

ダストシュートを抜けて出た場所に、ダイゴと花火は仰天した。
そこは、自分達もよく知っているテアトル・シャノワールだったからだ。

「大丈夫かい？ここなら、もう安全だよ……。」

「グラン・マ！じゃあここはシャノワール！？」

「もしかして、あなたが……。」

目の前に広がる机には見た事もない設備が施されているし、真ん中には巴里の地図が映し出され、ちょうどオペラ座の地点が赤く光っていた。

「そう。このシャノワールが、あたし達巴里華撃団の本部なのさ。気付かなかったろう？」

その言葉に、二人は唖然とするしかなかった。

「観客が舞台に上がる……！？そのような事、断じて許さんぞ！！」

観客席に降り立ち、コルボーが舞台の上を睨んだ。
そこには、配下のポーン達を全滅させた大神達の姿がある。

「花火の心を弄ぶ不届き者め！その罪、万死に値する！」

斧を突き付け、猛然と言い放つグリシーヌ。
すると、コルボーが言い返す前にロベリアが言い返して来た。

「友情ゴッコはもういいからさ、さっさと片付けようぜ？」

「何だと！？もう一度言ってみろ！！」

すかさず食いつくグリシーヌ。
しかし、これが敵に付け入る隙を与えてしまった。

「仲間割れか？……面白い。この我が演出してやろう。無知にして無能な観客共の、愚かなる最期を！」

刹那、周りの空間が一瞬大きく歪んだ。

「ん……？こ、これは！！」

後ろを振り返った大神は顔を凍りつかせた。
何故なら、後ろにいたはずの仲間達がいつの間にか、ポーンにすりかわっていたからである。

「そ、そんな！いつの間に！？みんな、何処にいるの！？」

辺りを見渡しても、仲間の姿は見えない。

エリカが慌てる中、グリシーヌは斧を手に笑った。

「ふっ、小賢しい！この程度の数、すぐに切り伏せてくれる！！」

しかし、今度ばかりはそうもいかなかった。

「チッ、雑魚のくせに何て強さだ！？」

切り掛かってきたポーンの一撃を爪で防ぎ、ロベリアが悪態をついた。

強いのは当たり前だ。

何故な、今ロベリアを攻撃したのは、外ならぬグリシーヌなのだから。

コルボーは大神達に幻術をかけ、仲間をあたかもポーンに見せ掛けたのだ。

「フハハハハ！最高の茶番だ。仲間同士、醜く殺し合うがいい！」

たちまち仲間同士で戦いはじめた巴里華撃団に、コルボーが高笑いを上げた。

本来なら姿がポーンとはいえ、動きのクセなどから仲間を判断する事は可能だ。

しかし先程のロベリアとグリシーヌのように、巴里華撃団にはチームワークが低いという致命的な弱点があり、仲間の動きなど思い付きもしないのが現状だった。

しかし、その企みを阻止する者がいた。

「グガァァッ！な、何事だ！？」

突然肩を掠めた何かにコルボーが怯んだ。
見ると、目の前の床に矢が突き立っている。

「わっ！？……そうか、幻だったんだ！」

その拍子に幻術が解け、コクリコが叫んだ。
周りにいたはずのポーン達は、仲間に戻っている。
一体誰が助けてくれたのか。
疑問に思う大神達だったが、グリシーヌには心当たりがあった。

「この暗闇の中で正確に狙うあの腕前……、まさか！！」

見ると、テラスの上に光武Ｆが佇んでいた。
そしてもう一人……、

「北大路花火、参ります！！」

戦闘服に着替え、弓を構えた花火の姿がそこにあった。
あれから作戦司令室で大神達のピンチを知った花火は、グラン・マに頼んで予備に置いてあった光武Ｆに乗り込み、出撃したのである。

「おお、我が黒衣のマドモアゼルよ……。我のもとに戻るのだ……。」

花火が戻って来た事に安堵してか、コルボーは再びフィリップに姿を変えて花火の前に現れた。

「さあ、花火。こっちにおいで……。」

「……。」

花火は無言で目の前の恋人を見た。
それが本物でない事は十分承知している。
どんなに愛しいあの声に囁かれても、応える訳にはいかなかった。

「長い間、一人で淋しかったろう？僕の側においで……。」

「フィリップ……。」

花火は弓を下ろすと、静かに目を閉じた。
胸に手を当て、心を落ち着かせる。

「フィリップ……、私に貴方を忘れる事は出来ない……。」

「そうだろう？さあ花火……。」

笑いかけるフィリップ。
すると、花火はしっかりとその顔を見据えて言った。

「でも、いつまでも貴方の笑顔に縋る訳には行きません。フィリップも、それを望んではいないでしょうから。」

「花火？何を言うんだ。僕は君を迎えに来たんだよ！」

「ごめんなさい……、私はまだ、貴方の許へは行けません。」

それは、過去との完全な決別だった。
花火は自ら、コルボーの幻を打ち破ったのだ。

「……それと、フィリップに会わせてくれて、ありがとうございました……。」

コルボーに一礼を返す花火。
その瞬間、彼女の胸の中の闇が急速に消えていくのを、コルボーは感じ取った。

「マドモアゼル……、貴女までも我を拒み、光を見出だすというのか……!?」

コルボーは態度を一変させ、花火にレイピアを突き付けた。

「幕だ!貴様達の死を以って、幕を降ろしてくれる!!」

「怪人が嫉妬か?見苦しいぞ、マスク・ド・コルボー!!」

ここぞとばかりに言い返す大神。
すると、その言葉がコルボーの逆鱗に触れた。

「黙れ!蒸気獣『セレナード』、夢幻の闇よりいで、我が漆黒の翼となれぃ!!」

言うや、コルボーはマントを空に放り投げた。
すると、マントはたちまちに烏の形をした蒸気獣へと姿を変える。

「巴里華撃団！貴様らの朱き血で、このオペラ座を染めてくれるわ！！」

その叫びと共に、今度はコルボーの真後ろに黒い光が集まった。
すると、黒い光はたちまちに一匹の怪獣へとその姿を変えた。

「我がしもべ、変形怪獣ガゾート！我と共にあの愚かなる者共を引き裂くがいい！」

「グワーッ！！」

コルボーの声に応えるように、ガゾートが咆哮を上げる。
大神はガゾートとセレナードを見据え、指示を出した。

「目標、敵蒸気獣及び怪獣の撃破！行くぞ！！」

「「了解！」」

「オーナー、敵は新たに敵怪獣を放って来ました！」

「生体反応がありませぇん！怪人が生み出した人工生命体みたいですぅ！」

「……多分負の感情や心の闇を実体化させたんだろうね。となると、ベムスターもあの怪獣の生み出した幻と見るべきか……。」

メルとシーの報告を元に、グラン・マはモニターに映し出されたガゾートなる怪獣を分析した。
相手は幻でオペラ座を包む程の力を持っている。
特に大神の記憶からベムスターのデータを盗み出してコピーする手際の良さは、敵ながらあっぱれだ。
おそらくコルボーにとって、闇を形に変える事など造作もないのだろう。
瞬時にあの怪獣を召喚して見せたのが、何よりの証拠だ。

「まあ、いくら闇を集めようがムッシュと彼の前には無力だよ。」

「彼？誰の事ですぅ？」

首を傾げるシー。
すると、メルが気付いたように笑った。

「オーナー、その彼が到着したようです。」

見ると、モニターにはガゾートの前に立ちはだかる光の姿があった。

「あー、ウルトラマンティガだ！！」

「（頼んだよ……ダイゴ……。）」

再び現れたティガは、ガゾートの姿を見つけるや掴み掛かった。

「チャッ！」

「ガアアアッ！」

激しくぶつかり合うティガとガゾート。
その隣で大神達もまた、コルボーの操るセレナードど戦っていた。

「おのれウルトラマンティガ！貴様も我の舞台を邪魔だてするか！」

怒りを隠そうともせず、セレナードは翼を羽ばたかせて突風を巻き起こす。

「命の瞬きを見せておくれ！ああ、夜ね闇よ！レ・デスフィネス！！」

身を切り裂く突風が襲い掛かった。
大神達は反撃を試みるも、強い向かい風に押し返されて近付けない。
一方でティガもまた、ガゾート相手に苦戦を強いられていた。

「ハッ！」

気合いと共に正拳突きを繰り出す。
しかし、その一撃はガゾートの身体を突き抜け、そのままティガの腕を捕らえてしまったのだ。

「ジュワッ！？」

ティガは慌てて引き抜こうとするが、ガゾートの身体は復元されてしまい、中々引き抜けない。
その間にガゾートは、満足に動けないティガに攻撃をはじめた。

「ガアアアッ！！」

口から黒い光弾を次々と連射する。
至近距離からの激しい攻撃に、ティガのカラータイマーは程なく点滅をはじめた。

「フハハハハ！ガゾートは闇より生まれし我がしもべ。貴様ごときに倒せはしない！」

勝ち誇ったようにコルボーが笑う。
しかし、それが裏目に出てしまった。

「（闇から……？それなら……！）」

ティガは何かに気付いたように動きを止める。
そして、胸のカラータイマーを発光させた。
まばゆい閃光で敵を牽制する、タイマーフラッシュである。

「ガアアッ！？」

突然の光に驚き、ガゾートはティガの腕を離して後ろに下がった。

「ハッ！」

ティガは発光するカラータイマーの前に両腕を交差させた。
すると、カラータイマーに四方八方から光が集まってくる。
タイマーフラッシュスペシャル……光に弱い相手に限定して、凄まじい光量の光を浴びせるタイマーフラッシュの強化盤だ。

「チャッ！！」

両腕が降ろされ、目が眩む程の光がガゾートに浴びせられた。
闇が形を変えたものなら、まとめて光で掻き消す事が出来る。
ティガはそう考えたのである。

「ガアアア……！！」

光に全身を貫かれ、ガゾートは断末魔の叫び声と共に跡形もなく消滅した。

「ば、馬鹿な……！！我の操る闇が、そのまがい物の光に負けたというのか……！？」

自らが闇から生み出した怪獣が容易く敗れ去り、コルボーは呆然となる。
その隙を、花火は見逃さなかった。

「今です！北大路花火、一の舞……、金枝玉葉！！」

ボウガンから放たれた矢は、寸分の狂いなくセレナードの翼を射抜く。

「なっ……！！」

飛行能力を失い、落下するセレナード。
その下で、大神が二刀を抜いて待ち構えていた。

「狼虎滅却……、刀光剣影！！」

青白い稲妻が大神の二刀からほとばしり、セレナードの胸を×の字に切り裂いた。

「かりそめの光に負けるとは……、我が闇も、かりそめに過ぎなかったというのか……！！」

予想もしなかった舞台の結末に驚きつつ、コルボーはセレナード諸とも爆発四散した。

「……申し訳ありません。私のために、皆さんを危険に晒してしまって……。」

戦いを終え、花火が大神達に頭を下げた。
元々の始まりは、自分がフィリップの過去を引きずっていたから。
そう思い、自責の念に駆られたのだろう。

「そんな事はないよ、花火くん。君のおかげで、俺達は勝てたんだ。」

「胸を張れ、花火。そなたの今の姿に、きっとフィリップも喜んでいるだろう。」

その事を察し、大神もグリシーヌも花火に笑顔で答える。
すると、ようやく花火も笑顔を返した。

「は、はい……。」

「よし、隊長。いつもの締めをやらねばな。」

花火の笑顔に頷き、グリシーヌが大神に言った。

「そうだな！おいで、花火くん。」

「え、ええっ……？」

手招きする大神に、躊躇いながらも近付く花火。
そして……、

「勝利の……ポーズ……」

「決めっ！！」

「チャッ。」

その様子を見届け、ティガは静かに消え去った。

その日の夕方、大神は花火と共にフィリップの眠る墓地に足を運んだ。

「フィリップはいつも優しくて……、私も彼に甘えてばかりでした……。」

正に相思相愛。

フィリップは、花火にとって運命すら感じさせる人だったろう。

大神の隣で、花火はポツリポツリと呟くように言った。

「でも、甘えてばかりではいけないんですね……。」

「ああ。フィリップさんが安心出来るように、強く悲しみを乗り越えるんだ。」

大神が花火の肩に手を置いた。

「君はフィリップさんに心から愛を受けた。今度は君の番なんだ。」

「私の……？」

「そう。君が誰かを愛する番だよ。君は、それが出来る人なんだから……。」

優しく笑う大神。
その笑顔に、花火はフィリップとはまた違う温かさを見た。

「大神さん……。」

花火は、大神の胸に顔を埋めた。
その胸の温もりは、フィリップに抱きしめられた時の思い出を彷彿とさせた。

「今だけ……泣かせて下さい。……これで最期にしますから……。」

「ああ、いいよ……。」

大神は、優しく花火の黒髪を撫でた。
花火の頬を伝う涙が、揺らめく夕陽に照らされて光った。
揺らめく想いを断ち切ろうとする彼女の様子を、見守りながら……。

「ほら、ピエール急いで！」

客で賑わうシャノワールの客席に、ダイゴがやって来た。
その後ろには、親友のピエールの姿もある。
二人はエリカから花火も舞台に立つと聞いて、シャノワールにやって来たのだ。

「今宵はプログラムを変更して、新しいメンバーを紹介します！」

「あ、始まるよ！」

「ハハハ、ダイゴ。そう慌てないで。ここからでもよく見えるよ。」

司会のメルの声に、客席の視線が一斉にステージに向く。
すると、今度はシーが続いた。

「東洋の黒真珠！その名もタタミゼ・ジュンヌ！！」

その言葉と共にスポットライトが照らされ、タタミゼ・ジュンヌこと花火が姿を現した。
タタミゼ・ジュンヌ……フランス語で大和撫子という意味だ。
日本流の着物を纏い、奥ゆかしさを表現した踊りで客を魅了する花火に、ダイゴやピエールはもちろん、観客達全員が釘付けとなった。

「へぇ……、綺麗だね。」

「花火さん……。」

初めて会った時は、細い小枝のようにか弱かった花火。
しかし、今の彼女は違う。
悲しい過去を断ち切り、明日を見る強さを得た。
その姿が、どれだけ美しいか……。

「……私は、もうしばらくみんなと頑張って行こうと思います。悲しい事や辛い事も、逃げずに受け止めて見ます。」

拍手に包まれる中、花火は心の中でフィリップに語りかけた。
今までのように甘えるのではなく、しっかり自分の決意を以って。

「だから……、見守っていて下さい……。フィリップ……。」

フィリップの愛した微笑みで、沢山の人々に笑顔や喜びを与える花火。
そんな彼女に、フィリップが何処かで笑いかけた気がした。

「……光の巨人。まさか我等に反旗を翻すとは……。」

闇の中に、野太い声が響いた。

「ウルトラマンティガ……。我等に刃向かった罪、万死と心得い！」

揺らめく想いは（後書き）

《次回予告》

メル、聞いた？オーナーがお休みくれるんだって！

それなら、シャンゼリゼにお買い物に行きましょうか。

あ、大神さん！その人お友達ですかぁ？

次回、サクラ大戦３！

《燃ゆるシャンゼリゼ》

愛の御旗のもとに……

巴里はいいなぁ～！

……パン硬いけど。

燃ゆるシャンゼリゼ（前書き）

前半部のターニングポイントに当たります。
しかし毎度毎度デートの度に負け戦って……。

「いい朝だなぁ……。」

大きく背伸びをして、大神は爽やかな朝の日差しを満喫した。
オペラ座におけるマスク・ド・コルボーとの戦いの後、怪人達の事件はパッタリとなくなってしまった。

「米田司令なら、こんな時『治にいて、乱を忘れず』と言うだろうな。」

大神は、今や遥か東の地にいる恩師の言葉を思い出した。
平和な時にこそ油断しない。
以前もそのために、降魔に敗退した苦い思い出がある。
あのような二の舞になるのは、真っ平御免だ。

「さて、今日の昼はみんなでランチだったな……。」

カレンダーを見て、大神は支度をはじめた。
ちょうど今日の日付の所に、赤い丸印が付けられている。

「大神さ～ん!!」

「お、もう来てしまったか……。」

下から聞こえるエリカの声に、大神は支度を急いで下へ向かった。

「遅いぞ隊長。あまり人を待たせるな。」

下には既に、五人の隊員が揃っていた。

「それじゃあ、何を食べに行こうか。」

巴里にはフランス料理だけでなく、様々な国の料理がより取り見取りに揃っている。
人気の店では並ぶ事もあるので、出発前にある程度決めてかかるのがセオリーというものだ。
しかし……、

「北欧料理はどうだ？バイキングの本場の味を教えてやろう。」

「ベトナム料理がいいな。辛いけど、とっても美味しいんだよ！」

「何言ってんだ。ここは酒だろ。近くにいいバーがあるんだ。」

「駄目ですよロベリアさん。ここはお酒よりもプリンです！」

「そ、そうか……。じゃあ花火くんは？」

「私ですか？大神さんのお決めになったものなら何でも構いませんわ。」

計ったかのようにバラバラになる隊員達。
この巴里華撃団というチームにおいて、大神の抱えている不安はそれだった。

「（巴里華撃団は、何かしようとするとすぐバラバラになってしまう。隊長として考えなければ……。）」

これまでの戦いも、チームワークの低さからピンチを招いた事があった。
ティガの助太刀もあって乗り切れたが、今度もまた同じように勝てる保障はない。
そして大神の不安は、この後現実に変わる事になる。

「……今日から二日間の休日か。何をして過ごそうかな？」

翌日、大神は行きつけのカフェでクロワッサンを頬張っていた。
実は昨日の夜、グラン・マから二日間の特別休暇を貰ったのだ。
グラン・マは隊員達とデートを楽しめと言っていたが……。

「ん……？」

そう考えていた時、大神の耳に聞き慣れたギターの音が聞こえて来た。

「巴里はいいなぁ～。……パン硬いけど。」

帝都でも以前あったシチュエーションに、まさかと思い振り返る。
すると、そこには大神のよく知る人物が東京タワーの書き割りをバックにフランスパンをかじっていた。

「元気そうだなぁ大神！！」

「か、加山じゃないか！！いつフランスに来たんだ！？」

そこにいたのは、士官学校からの大神の親友、加山雄一であった。
帝都では花組を支援する諜報部隊、月組の隊長として活躍してくれた、頼もしい戦友である。
こんな呑気な性格に見えて、加山は危険な裏の仕事をこなすプロフェッショナルなのだ。

「実は海軍の研修旅行で、スイスに来てるんだ。」

「そうだったのか……。ありがとう加山、会えて嬉しいよ。」

懐かしい友との再会に、大神も笑顔を見せる。
すると、加山はいつもの調子で笑った。

「そうだろ、そうだろ！！じゃあ大神、今日は俺に花の都巴里を案内してくれよ！」

「いいとも。俺もちょうど休暇が貰えたからね。」

せっかく友人と再会したのだから、今日はデート云々よりその喜びに浸りたい。
大神はその思いから、加山の頼みを快諾した。

「古人曰く、『善は急げ』だ。さあ大神、連れてってくれ！」

相変わらずの親友に笑いながら、勘定を済ませる大神。

すると、そこにエリカとコクリコが現れた。

「大神さ～ん！おはようございます！！」

「おはようイチロー。まだ朝ご飯食べてたの？」

「おはよう二人共。今日はお出かけかい？」

大神が尋ねると、コクリコは嬉しそうに答えた。

「えへへ、今日はね、エリカを遊園地に連れてってってあげるんだ。」

「そうなんです。コクリコに連れてってもらうんです。」

何だか立場が逆な気がしたのは大神だけだろうか。

「ところで大神さん。もしかしてそちらの方は、生き別れのお兄さんですか？」

不意にエリカが加山に気付いた。

コクリコも物珍しそうな表情で尋ねた。

「もしかして、イチローの友達？」

「ああ、紹介するよ。彼は加山雄一。俺の親友なんだ。」

月組の任務は極秘調査が基本。

従って、不用意にその正体を明かす訳にはいかない。
大神はその空気を読み、あくまで加山が自分の親友である事だけを伝えた。
すると、加山もそれに合わせて自己紹介を始めたのだが……。

「ボンジュール！ミーの名前はユーイチ・加山。日本で貿易商をやってるザンス！どうぞよろしくザンス！！」

「（ザ、ザンスって……！？）」

「どうぞ、よろしくザンス。私は、エリカ・フォンティーヌというザンス。」

「ボクはコクリコっていいます。よろしくね、加山さん。」

無言のまま固まる大神だったが、意外にも二人の受けは良かった。
特にエリカに至っては、ザンス口調を真似した程である。

「二人は、俺が世話になっているテアトル・シャノワールのダンサーなんだ。」

「なるほど、そうだったザンスね。二人共綺麗と思ったザンスよ。」

うんうんと頷く加山。
すると、エリカが尋ねた。

「それはいいとして大神さん。明日の休みは何してるんですか？」

「え？まだ決めてないけど……。」

唐突な質問に答える大神。
すると、コクリコが目を輝かせた。

「本当!?へー、そうなんだ……。」

「それじゃ、先に失礼しますね。」

そう言って、何やらニコニコ顔でカフェを後にする二人。
その後ろ姿が見えなくなると、加山がふと真顔に戻った。

「な、なんだあのエリカという娘は。なんか掴み所がないな……。」

「エリカくんは、そういう娘なんだよ。」

流石の加山もザンス口調を真似されるとは思わなかったらしく、呆然とする。
それが痛い程分かる大神は、したり顔で答えるしかなかった。

「隊長ではないか。こんな所で何をしているのだ?」

「おはようございます、大神さん。」

最初に加山をシャノワールに案内した大神は、入口の所でグリシーヌと花火の二人に出くわした。
やはり見慣れない日本人が後ろにいるためか、二人の表情はいつもよりやや硬い。

「ああ、帝都から友達が来たから、巴里を案内しているんだ。」

その空気を読み、加山を紹介する大神。
すると、加山は再びザンス口調で自己紹介をはじめた。

「ミーの名前はユーイチ・加山！どうぞよろしくザンス！」

「は、はい……私は北大路花火と申します。」

「私はグリシーヌ・ブルーメール。巴里を守る貴族だ。」

やはりザンス口調が気になるのか、花火は僅かに戸惑いながら返し、グリシーヌは鋭い視線で加山を見た。

「ところで大神さん、明日の予定は決まっていますか？」

「え？」

「わ、我々は休みとはいえ気を抜けん！貴公の予定を聞くのも任務だ。」

そうは言うものの、赤い顔でそっぽを向かれては説得力に欠ける。
大神は微笑みつつも余計な口出しをせず、一言で返した。

「いや、予定はないよ。」

しかし、返って来たのは意外な人物の返事だった。

「そうか……、明日は暇なんだね。」

「ロベリア！いつの間に！？」

それは、何とロベリアだった。

今まで影も形もなかった人物の登場に大神は驚く。

その表情を満足げに眺めながら、ロベリアはヌケヌケと言った。

「アタシは神出鬼没が信条さ。覚えときな。」

そう言ってその場を立ち去るロベリア。

しかし、それをよしとしない者がいた。

グリシーヌである。

「ロベリア！盗み聞きなど許さん！成敗してくれる！！」

毎度毎度どこから出したのか、斧を振り回してロベリアを追いかけるグリシーヌ。

流石の加山もその様子に呆然としている。

「……それでは大神さん、加山さん、失礼しますね。」

花火も一礼してその場を後にする。

「ず、随分個性的なメンバーの揃った店なんだな……。頑張れよ、大神。」

「ありがとう、加山……。」

気遣かってくれる加山に、大神は心から礼を述べた。

その日、ダイゴとピエールは近くの公園で草むしりのボランティアをしていた。

やたら広い公園の淵にある花壇の雑草を抜いていくだけの簡単な作業なのだが、やたら日差しが厳しく、すぐに体力を奪われてしまう。

そんな中、ピエールがふとダイゴに尋ねた。

「どうしたんだい、ダイゴ。やけに楽しそうだけど？」

「え？そうかなぁ……？」

振り向いたダイゴの顔は、いつにも増して上機嫌に笑っていた。

それもそのはず。

実はダイゴは今日の朝、外ならぬエリカからこう言われたのだ。

「ダイゴさん、明日は予定入れてますか？ないなら私と何処かお出かけしましょう！」

つまりは、エリカにデートに誘われたのだ。
今まで大神にのめり込んでいたエリカが久しぶりに自分を誘ってくれた事に、ダイゴはこの上ない喜びを噛み締めていた。

「あのエリカさんがねぇ……。」

手を休めないまま、ピエールが呟いた。

「でも、お出かけでしょ？本当にデートなのかな？」

「きっとそうだよ。何か今からワクワクしちゃうなぁ……。」

ようやく大神からリードを奪える状況が来た事に意気込むダイゴ。
その影響からか、ダイゴの草むしりのスピードはピエールのそれを大きく上回っていた。

「……それならいいんだけど。」

エリカは他の人間と比べて何処かズレた所がある。
お出かけと言う事が果たしてデートと結び付くかどうか。
相手がエリカではその保障はなかった。
そんな心配をするピエールをよそに、ダイゴはせっせと草むしりを進めていた。

「さて……。」

その夜、部屋に戻った大神はキマネトロンの前で考えていた。
内容はずばり、明日の予定だ。
元々デートなんて考えてなかったのだが、あの後加山に言われた言葉が印象に残っていたのだ。

「隊員達の事を知るのも大事な事だぞ？その努力もなしに、チームワークは語れないはずだ。」

確かに加山の言う通りだった。
かつての帝国華撃団でも、積極的なコミュニケーションをやって初めて、自分を中心に花組が一つにまとまったのだ。
裏を返せば、強力なチームワークが生まれるのには時間がかかる。
まだ結成して間もない巴里華撃団にチームワークが備わっていないのは、当然の事と言えた。
そこで、誰と交遊を深めるかなのだが……。

「……よし。」

しばらくキネマトロンを眺めていた大神は、何か決断した表情でスイッチを操作した。
すると、程なくして通信が繋がった。

「……ったく、誰だ？人が急いでる時に。」

右側のモニターに、ロベリアの顔が写った。

大神が選んだのは、ロベリアだったのだ。

「ロベリア。大神だけど……。」

「何だ隊長か？どうしたんだよ。」

上の大きな画面に変わり、ロベリアが尋ねた。
何か急ぎの用事でもあるのか、焦っているようにも見える。

「ロベリアこそ、何を急いでるんだ？まさか悪い事じゃないだろうな？」

「夜の仕事にヤバくないもんなんてねぇだろうが。」

呆れ顔のロベリアに、大神は小さく笑った。

「で、アンタは？聞くだけ聞いてやるよ。」

「ああ。ロベリア、明日は暇かい？」

そう尋ねると、凄絶に笑っていたロベリアの表情が驚きに変わった。

「は！？……もしかしてアンタ、アタシを誘ってんのか？」

「ああ。せっかくの休みだし、二人で何処か行こうかなと……。」

ロベリアは巴里華撃団の隊員ではあるが、戦闘時以外は常に一人で行動し、他の隊員達と関わりを持とうとしない。
そこで、彼女に少しでも協調性を持ってもらう事が、巴里華撃団のチームワーク向上に繋がると、大神は考えたのである。

「ふうん……。まあ、いいんじゃないか？」

幸いロベリアは、了承ととれる返事をしてくれた。
あの合理主義のロベリアの事、軽くあしらわれるかと心配していた大神は、内心胸を撫で下ろす。

「それじゃあ明日の１０頃に、シャノワール前まで来てくんな。」

「ああ。それじゃ……。」

そう言ってキネマトロンを閉じる大神。
すると、再びキネマトロンに通信が入った。

「……ここは……？」

そこは、緑色の光に包まれた空間。
自分の他には何もない空間に、ダイゴは漂っていた。

「……パリシィの守護神……それは、光の使者……。」

「！？」

ダイゴの耳に、何者かの声が聞こえて来た。

「闇に覆われた悪しき都市を、何故守る……？」

「だ、誰だ！？」

謎の声に正体を問うが、返事はない。

「パリシィの御霊は都市を憎む。都市を守る者を憎む。」

「パリシィ……？何の事だ！？」

そう叫んだ時、辺りがまばゆい閃光に包まれた。

「哀れな裏切り者……。悪しき都市と共に滅びを迎えるがいい……。」

辺りが見えなくなる中、ダイゴが最後に聞いたのはその言葉だった。

「……変な夢だったな……。」

朝日が差し込む窓を開け、ダイゴは呟いた。
目の前にはいつものように、平和で長閑な巴里の街が広がっている。

「哀れな裏切り者……。悪しき都市と共に滅びを迎えるがいい……。」

脳裏に夢で聞いた言葉が蘇る。

「この街が……、滅びる……？」

所詮夢と言えばそれまでの話。
しかし、ダイゴにはどうしてもその一言であの夢を片付ける事ができなかった。

「……。」

不安げな表情で巴里の街を見下ろすダイゴ。
やがて彼の不安は、恐るべき形で現実になる。

「……ここがデート場所か？」

ロベリアの後ろに続く大神が尋ねた。
そこは、裏通りの奥にある一件のカジノだった。
ロベリアは大神に有無を言わせず、ここに連れて来たのだ。

「どうせアンタの安月給じゃ、ろくに遊べないだろ？だから資金を増やさないとね。」

「いいっ！？でも俺、ギャンブルなんてやった事ないぞ！？」

ギャンブルは当たれば一攫千金だが、負ければ何も残らない。
特にこういった所では、イカサマが平然とまかり通っている。
素人の大神は奴らにとって、絶好のカモだった。

「アンタは金を出しゃいいんだよ。アタシがやるんだから。」

やはり大神では全額巻き上げられる事を見越してか、ロベリアが言った。

「何だか財布扱いだな……。」

「何言ってんだ。女はデートにまで金を使う。男はデートに金を使うのさ。」

そう言って、ロベリアは大神を店内に引っ張り込んだ。

「……凄い店だな。」

「いいだろ？不健康そうで。」

店はさほど大きいものではなかったが、店に立ち込める酒やタバコ、弾薬の臭いが鼻につく。
最もそれを気にするのは大神だけで、ロベリアも他の客も平然としている。
つまりこの店にいるのは、大神を除いて全て裏の人間という事だ。

「アタシはポーカーで稼いでるから、アンタはそこでワインでも飲んでな。ただし……。」

ロベリアが顎で大神の座る位置を示した。

「アタシが眼鏡を触った時だけ、ワインを飲むんだよ。」

「眼鏡を触った時……？何故だ？」

怪訝な顔で尋ねる大神。
すると、ロベリアが大神の耳元で忠告した。

「こういう店にはね、ある種のしきたりがあるんだ。アタシの言う通りにしないと、命の保障はないよ？」

「わ、分かった。」

大神が頷くと、ロベリアは満足げに笑ってポーカーの席についた。

「（ロベリア……、大丈夫かな……？）」

大神はワインの継がれたグラスを片手に、ロベリアの様子を見た。
相手は背後に二人のＳＰをつけている事から、かなり裏の社会で高い地位にいる人間と分かる。

「……。」

その相手がカードを交換した時、ロベリアの手が眼鏡に触れた。

「（……あ、今だ……。）」

大神はロベリアに言われた通り、ワインを一口飲む。
すると、ロベリアはニヤリと笑った。

「二枚チェンジだ。」

「よし、ジャックの３カード。」

「残念、アタシはキングの３カードだよ？」

同じ３カードなら、数字の高い方が勝ち。
つまり、ロベリアの勝ちである。
それから、ロベリアは不自然な位に連勝を続け、大神の元本の３０倍までに資金を増やしていた。

「（おかしい……、俺がワインを飲んでから、ロベリアは全く負けていない。）」

ロベリアの連勝には、間違いなく自分のワインが関係している。
そう不審に思った大神は、ワインを飲む姿勢でチラッとグラスを見た。

「（こ、これは……！）」

大神は仰天した。
何と自分のグラスに、相手のカードが写っているではないか。
ロベリアはこうする事で、コールとドロップを使い分けていたのだ。

「ロベリア！俺をイカサマに利用したな！？」

大神は乱暴にグラスをカウンターにたたき付け、ロベリアを睨んだ。
彼女の行為が、不正を許さない大神の侍精神に障ったのだ。

「なっ！？バ、バカ！アタシは知らないよ……！」

ロベリアは慌てて言い逃れようとするが、無駄だった。
驚いた様子と途切れた口調が何よりの証拠だ。
たちまち周りの店員達が、二人に銃を突き付けた。

「この店でイカサマを働くとは、どこの田舎者だ？」

「ふん、そのイカサマに引っ掛かる奴に、田舎者呼ばわりされたくないよ。」

四方から銃口を向けられたこの状況で尚、ロベリアは言い返す。
すると、男は凄絶に笑った。

「ほう、言ってくれる。どうやらここで死にたいらしいな。」

「止めろ。ばらしたのは俺だ。しきたり通りなら、俺を殺すのが筋じゃないのか？」

ロベリアを庇うように、大神が口を開いた。
イカサマ自体はばれなければ構わない。
ばれる、もしくはばらすような不届き者を始末するのがしきたりだ。
男は大神の顔に、意外そうに笑った。

「兄さん、いい目をしてるな。死線を潜って来た目だ。そういう奴は大好きだぜ。」

普通このように囲まれれば、大抵の人間は情けなく怯える。
しかし、大神は違った。
周りの銃を怯える様子もなく、しっかりと男を見据えている。
話し方も対等だ。
肝っ玉のある人間は、裏では好かれていた。

「よし、兄さん。ここは俺と引き勝負といかないか？」

「勝負？」

「二つのカードの山から一枚を引くんだ。相手よりでかい数字なら勝ち。分かりやすくていいだろ？」

言うや、男はトランプの山を二つ、テーブルに置いた。
勝負である以上、イカサマはないようだ。

「兄さんが勝てばイカサマはチャラ。負ければセーヌ河に沈む。どうだ？」

「いいだろう。」

大神は即答した。
ここで拒めば間違いなく自分達は死ぬ。
ならば、自分の運にかけて勝つ。
これまでの戦いのように……。

「よし、なら俺から引くぜ？」

男は左の山から一枚のカードを引いた。
出て来たのは、ダイヤのキングだった。

「キング……。兄さん、エースを引かなきゃ勝てないぜ？」

つまり、ここにある１０３枚の中から、一発で８枚のエースのいずれかを引き当てなければならない。
かなり追い詰められた状況に、大神の顔を一筋の汗が伝った。

「よし……！」

大神は数秒考えた後、右のカードを引いた。
考えなどない。あるとすれば、右が正々堂々と考えたから。
大神は自分の運に全てを賭けた。
そして……、

「……スペードのキング……。」

大神が引いたのは、男と同じキングだった。

「引き分けか……。」

ガックリと肩を落とす大神。
しかし、男は首を振った。

「いや、同じ数字の中で、スペードは一番強い。」

トランプにおいて、同じ数で引き分ける状況はよくある。
そんな時は、カードのスーツで勝敗が決まる。
その順番は、スペード、ダイヤ、ハート、クラブ……。
つまり……。

「この勝負……、兄さんの勝ちだ。」

男はやや驚いた様子で言った。

「やるじゃないか隊長!!流石アタシの見込んだ男だ!」

この結果に、ロベリアまでもが驚いた。
まさかギリギリのキングを一発で引き当てるとは……。

「参ったぜ、兄さん。……名前を聞かせてくれ。」

「大神一郎。隣の彼女はロベリア・カルリーニだ。」

すると、男は納得したように笑った。

「ハッハッハ……、なるほどな。あのロベリアの男なら、負けても不思議じゃねぇよ。」

「フフフ……、気づくのが遅いんだよ。」

満足げに笑うロベリア。

すると、大神が徐に立ち上がった。

「行こうか、ロベリア。」

「いや～、あのつき方はただ者じゃない！流石は隊長だ。見直したよ！」

店を出るなり、ロベリアが満面の笑みを浮かべて見せた。

あの状況で同じキングを引き当てるのは、エースより難しい。

一体大神はどれだけ悪運が強いのか。

ロベリアは嬉しそうに笑っていた。

「ハハハ、ロベリア、随分ご機嫌だな？」

「あ、いや……え～と……。」

大神に言われ、ロベリアは珍しくばつが悪そうにそっぽを向く。

「で、でも元はと言えば、隊長がイカサマをばらすから……。」

「でも、あれもチームワークの一つかも知れないな。」

ふと、大神が呟いた。
イカサマは卑怯な行為だが、相手に気付かれないように神経を使う。
特に今回は、大神がタイミング良くワインをのまなければ成立しない。
事実上、チームワークに当て嵌まると言えば当て嵌まる。

「この期に及んでまだ仕事かい？アンタって本当に真面目だね……。見損なったよ。」

言葉と裏腹に、笑顔を見せるロベリア。
その笑顔に、大神も自然と笑顔になった。
その時、街に１２時を知らせる鐘が鳴った。

「そろそろ、次のデートに行く時間だろ？」

「え！？知っていたのか！？」

突然の一言に驚く大神。
すると、ロベリアはやれやれとため息をついた。

「おいおい、かまかけに決まってんだろ？」

「な……！」

大神はしまったと思った。
ロベリアは知らない事をさも知っているように見せ掛けるかまかけが上手い。

今回もデートとは知らないが、時間を気にする大神にもしやと思ったのだ。

「にしても、人のイカサマに怒る奴がデートの梯子なんだ……。」

「う……。」

「見直したよ。じゃあな！」

痛い所を突かれて押し黙る大神にそう言って、ロベリアはさっさと裏通りを走り去って行った。

「……で、ちゃっかり財布はするんだな……。」

いつの間にか空になった服のポケットに手を突っ込み、大神はポツリと呟いた。

「あ、ダイゴさん遅いですよ！」

公園でダイゴを待っていたエリカが、大きく手を振った。

それを見て、ダイゴも手を振って走り出す。

「ごめんごめん。準備に時間かかっちゃって……。」

とは言っても、そんなに整えた訳ではない。
いつもの黒いシャツに白いズボンと、ラフな格好のままだ。
エリカは妙に着飾るより、普通の格好が好きなのだ。

「……で、何処に行くの？」

昨日エリカは、行きたい所があると言っていた。
ダイゴが尋ねると、エリカはキョトンとした顔で言った。

「あら、ダイゴさん忘れちゃったんですか？」

「いや、場所は聞いてないから……。」

相変わらずのズレた返事に疲れを感じつつ、ダイゴは返事を返す。
すると、エリカは思い出したように手を叩いた。

「あ、そうだ思い出しました！さあダイゴさん、行きますよ！」

言うや、エリカはダイゴの手を掴んで走り出した。

「ち、ちょっとエリカさん！？」

「ほら早く！時間がないんですから！」

ダイゴはそのまま、エリカに引っ張られる形で公園を後にした。

「……遅いな。」

場所を再びシャノワール前に移し、大神は腕時計で時間を確認した。
既に約束の時間にはなっている。
確か昨日のキネマトロンでの通信では、待ち合わせは昼頃と言っていたはずだ。
別に遅れる事は構わないが、待ち合わせる相手が相手だけに来るかどうかが心配だった。

「まさか……、忘れてたりしないよな。」

心配そうに呟いた時、大通りの奥から声が聞こえて来た。

「大神さ～ん！！」

「あ……。」

見ると、大通りの奥からその人物がやって来た。
いつものように周囲を薙ぎ倒しながら現れる様に、大神は自然とため息を漏らした。

「エリカくん……、いつにも増して張り切ってるね……。」

「もちろんです！何たって大神さんと一緒なんですから！」

大神の前で胸を張って見せるエリカ。

すると、大神はその手に繋がれたもう一つの手に気付いた。

「ところでエリカくん……。何でダイゴも一緒なんだ？」

どうやら引きずられて来たらしく、ダイゴはボロボロの状態でエリカの手にしがみついていた。

「……え？」

何でアンタがいるんだという表情で、ダイゴが大神を見た。

どうやら向こうもこちらと同じ気持ちらしい。

「何言ってるんですか、大神さん。今日はダイゴさんも一緒ですよ？さあ、行きましょうか！」

「え、ちょっとエリカくん！？」

言うや大通りを逆走するエリカを、大神は慌てて追いかけた。

エリカを追いかけて大神がやって来たのは、子供達で賑わう公園だった。

「……結局公園なら来て貰えばいいじゃない……。」

シャノワールと公園を一往復引きずられたダイゴが、ボロボロの状態で言った。

確かに行き先が公園なら、わざわざ行くより大神を待てばいい事だ。

しかしエリカは気にもとめない様子で言った。

「ほらほらダイゴさん、今から疲れてちゃもちませんよ？」

「え……？」

「じゃ、みんなに入れてもらえるように頼んで来ますね。」

そう言ってサッカーを楽しむ子供達の方へ走っていくエリカ。

どうやら子供達と一緒にサッカーがやりたいらしい。

「サッカー……？」

「まあ、エリカくんらしいと言えばらしいけど……。」

急過ぎる展開についていけない二人をよそに、エリカは満面の笑みを浮かべて戻って来た。

「大神さ～ん、ダイゴさ～ん、早くぅ～！！」

その様子に、二人は顔を見合わせてため息をついた。

それからおよそ2時間。
大神、エリカ、ダイゴの三人は、子供達に混ざってサッカーを楽しんでいた。
いや、大神とエリカはともかく、ダイゴはそうは言えなかった。

「（せっかくのデートだと思ったのに……。）」

やはりピエールの言う通り、エリカの申し出はデートなんかではなかった。
それどころか、これはお出かけと言えるのだろうか。
そう考えると、一人だけ期待していた自分が馬鹿みたいに思えた。

「お～いダイゴ！ボールいったぞ！！」

そんな事を考えていたダイゴは、眼前に迫るボールに気付かなかった。

「ぶっ！？」

顔面に激突したサッカーボールは、ダイゴを薙ぎ倒して真後ろのゴールに見事に入った。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「トンガリ兄ちゃん、手加減してやれよ～。」

「ありがとう……、僕は大丈夫だよ。」

ダイゴを見兼ねて助け起こしてくれる子供達。
ダイゴは子供達にお礼を言いつつ起き上がる。
しかし次の瞬間、ダイゴは固まってしまった。
何故なら……、

「大神さん、ナイスシュートです！トレビアンです！」

「え、そ、そうかなぁ……？」

「そうですよ！エリカ感激しちゃいました！！」

「そうかい？エリカくんに言われると、何だか照れるなぁ……。」

エリカにベタ褒めされ、思わず照れながら頭をかく大神。
シュートを受けてすっ転んだ自分ではなく、シュートを決めた大神に注意どころか瞳を輝かせて褒める様子に、ダイゴは何かが音を立てて崩れていくのを感じた。

「（やっぱりそうなんだ……、エリカさん、僕よりあの人がいいんだ……。）」

自分の心配ではなく、大神にばかり寄っている今のこの状況が、何よりの証拠だ。
ダイゴは、顔の痛みも忘れて力無く立ち上がった。

「……。」

まるで二人の仲を見せつけられたような気分になり、ダイゴは子供達に「ごめん」と謝りながら公園を後にする。

「あ、ダイゴさん！」

それに気付いたエリカが、ダイゴに駆け寄って来た。

「何処行くんですか？まだゲームは続いてますよ？」

「……もういいよ。なんか邪魔みたいだから。」

「どうしたんですか？急に……。」

「見せつけられるのはもうたくさんなんだ！！」

笑顔のまま尋ねて来るエリカに腹が立ち、ダイゴは思わず怒鳴り返した。
その拍子に、エリカの肩がビクッと震える。

「よく分かったよ！僕の事なんてどうだっていいんだろ……。それでいいんだろ！？」

「待て、ダイゴ！！」

ダイゴの背中で別の声がした。
見ると、大神がダイゴを睨みつけている。

「今のはあんまりだぞ！エリカくんに謝れ！！」

「……。」

「一体どうしたんだ？前々から君は俺をそうやって睨んでくるが。言いたい事があるなら言ってみろ！日本男児として恥ずかしくないのかっ！！」

「……アンタにそれを言う資格があるの？」

普段見せない剣幕で怒鳴って来る大神に、ダイゴは冷ややかに言った。
今の態度が間違っている事くらい、ダイゴにも分かっている。
しかし、その元凶に言われる筋合いはなかった。

「アンタに僕の何が分かるって言うんだ。同情なら止めてよ。」

そう吐き捨て、ダイゴはエリカが呼び止めるのも聞かずに公園を出て行ってしまった。

「ダイゴさん、どうしちゃったんでしょう……。」

公園のベンチに腰掛け、エリカがポツリと呟いた。
いつもの元気は消え失せ、悲しそうな表情で俯いている。

「エリカくん……。」

「ダイゴさんと大神さんに、仲良くなってほしいだけなのに……。」

エリカが大神とダイゴをサッカーに誘った理由。
それは、二人にもっと仲良くしてもらうためであった。
今までダイゴが大神の話題で笑った事は一度もない。
そこでエリカは、ダイゴにも大神の素晴らしさを見せてあげようと考えたのだ。
しかし、結果は逆効果。
ダイゴは大神と仲良くなるどころか、ますます仲を悪くして帰ってしまった。

「俺にも分からないけど、今はそっとしておくべきだと思う。」

「はい……。」

「……そういえば、ダイゴとエリカくんは、いつから知り合ったの？」

落ち込んだままのエリカに、大神が話題を変えた。
すると、エリカは懐かしむように話しはじめた。

私とダイゴさんが知り合ったのは、初めて教会に来た日です。
あの日、教会に初めて来た日、ダイゴさんは一人で女神像に祈っていました。
黒い髪が印象的で、私は試しに声をかけてみました。
そしたら、ダイゴさんは恐々と尋ねたんです。

「君は、気味悪がらないの？」

ダイゴさん、それまで自分の黒い髪と黄色い肌にコンプレックスを持ってたみたいで……。
神父様以外で、私が初めて話し掛けてくれたと言ってました。
私も、その時はまだ他に友達もいなかったので、ダイゴさんは最初の友達でした。
それからずっと、ダイゴさんは暇さえあれば私と一緒にいてくれました。
ダイゴさんが側にいると安心できて、彼に逢わせてくれた神様に感謝しました。

「……でも、私が大神さんと一緒にいるようになってから、ダイゴさんは私から離れていっちゃって……。」

要するに大神に対するヤキモチである。
エリカがダイゴより大神に夢中な事と、大神が何にしてもダイゴに勝るスーパーマンな事に、ダイゴはヤキモチを焼いていたのだ。
最も、その手のものに鈍感なエリカと大神には全く気づいていない

が。

「大神さん……、ダイゴさんの事……。」

「分かってるさ。責めたりはしないよ。俺はダイゴも、友達と思っているからね。」

安心させるようにそう言った時だった。
大神の携帯キネマトロンに、緊急の通信が入ったのだ。

「エリカくん、作戦司令室に急行するぞ！」

「了解！」

先程までの表情を捨て、二人はシャノワールに急いだ。

「くそっ！くそっ……！！何で……！」

部屋に戻ったダイゴは、溜め込んでいた涙を流して壁を殴った。
怒りの原因も矛先も分からない。
ただひとつ分かるのは、自分の心に深い大きな傷が出来た事くらい。

「僕は……、僕は……！！」

何日もの月日を共に過ごしてきた部屋の壁は、その部屋の主の悲しみを無言のまま受け止めていた。

「エリカさん……、どうしてなんだ！？」

今までエリカは側にいてくれる唯一の存在だった。
ダイゴが唯一、心を許せる存在だった。
そして、ダイゴが光を感じた存在だった。
彼女の喪失はダイゴにとって、闇に墜ちる事を示していた。

「……。」

ふと、ダイゴは壁を殴り続けていた手を止めた。
どちらも赤く腫れ上がり、爪は掌に食い込んで血が流れている。

「……！」

その時、ダイゴの懐から淡い光が溢れ出した。
見ると、スパークレンスが光を放っている。
巴里に仇なす闇の存在が、現れたのだ。

「こんな時に……！」

吐き捨てるように呟き、ダイゴは部屋を飛び出した。

昼下がりのシャンゼリゼは、5分と経たずに火の海に変わった。
つかの間の平和が終わりを告げたのだ。
助けを求めて逃げ惑う人々。
そこに、巴里を守る光の使者が現れた。

「巴里華撃団、参上！！」

これまで連戦連勝。
無敗を誇る巴里華撃団である。

「ああ……何て酷い……。」

変わり果てたシャンゼリゼに、花火が言葉を失う。
その時、何かが凱旋門を過ぎった。

「何だ、今の光は！？」

「歓迎の挨拶じゃなさそうだね……。」

炎の中を過ぎった一筋の光。
もしやあれが犯人か。
そう考えた大神の耳に、今度はコクリコの声が聞こえてきた。

「こっちにも来るよ！みんな、気をつけて！！」

見ると、先程の光が一直線にこちらに襲い掛かってくるではないか。
大神達は素早く左右に避けてやり過ごしたが、光はシャンゼリゼの真ん中に深々と爪痕を遺している。

「みんな、大丈夫か!?」

大神が叫んだ。
すると、エリカが凱旋門を指差した。

「大神さん、あそこ!」

「何っ!?」

大神が振り向くと、凱旋門の前に青白い光が見えた。
それは、紛れも無い人ならざる者……。
則ち怪人であった。

「よく来たのう、巴里華撃団……。」

これまでの怪人とは比較にならない妖気を発しながら、怪人が口を開いた。
豪華な椅子に腰掛け、足元からはイカを思わせる青い触手が見え隠れしている。

「貴様が……シャンゼリゼを、こんな……!!」

グリシーヌが怒りに拳を震わせる。

「貴様、何が目的だ!?」

今にも飛び出しそうなグリシーヌを抑えつつ、大神が叫んだ。
すると、怪人は野太い声で笑った。

「ヌハハハハ……、知ってどうする？余を止めるか？」

「当たり前だ！俺達巴里華撃団が、この街を守る！」

二刀を構えて大神が吠える。
すると、怪人は更に大きな笑い声をあげた。

「ヌハハハハ！ならばその力、見せてみよ！」

刹那、怪人の妖気が急激に跳ね上がった。
その強さからは、威厳すら感じさせる。

「さまよえる御霊よ……、裏切り者に滅されし、哀れなる魂よ……、今再び、余の元に蘇るのだ！」

怪人が怪しげな呪文を唱える。
すると、怪人の周りで五つの光の玉が現れた。
何かの攻撃かと身構える巴里華撃団。
しかしこの直後、大神達全員は、目の前の出来事に驚愕する事になる。

「さあ来い、同胞よ！」

凄まじい閃光と共に、五つの光が形を変える。
それは、大神達のよく知る姿だった。

「ウーサッサッサッ！シゾー様の復活だピョン！」

「イーヒッヒッヒッ！呼んだかい？このピトンを……？」

「人間共よ！このレオンが今度こそ、貴様らを根絶やしにしてくれる！」

「愚かなる人間共、ナーデルの芸術になれる事……、光栄に思いなさい！」

「光に生き続ける裏切り者よ！このマスク・ド・コルボーが、地獄に突き落としてくれようぞ！！」

シゾー、ピトン、レオン、ナーデル、そしてマスク・ド・コルボー……。

いずれも巴里華撃団とウルトラマンティガに戦いを挑み、敗れていった怪人達だ。

「ば、馬鹿な！怪人達が蘇っただと！？」

驚愕の事態に目を見開く大神。
すると、怪人は満足げに笑った。

「聞けい、同胞よ。余に忠誠を誓い、裏切り者を血祭りにあげ、巴里を破壊するのだ！」

「やるピョン！人も街も切り刻んでやるピョン！」

「裏切り者のクリスタル。今度こそいただくよ！」

「ナーデルの芸術が分からない人間共……、まとめて引き裂いてやるわ！」

「聞かせてあげましょう！子を失った親鳥が如き、美しき葬送の歌声を！！」

「カルマール公爵、我等全員、あなた様に忠誠を誓います。」

「……どうかね、巴里華撃団の諸君。我が同胞との再会は。驚く程嬉しいか。」

レオンにカルマールと呼ばれた怪人が、ニヤリと笑った。

「では手始めに、我等に半旗を翻した裏切り者の処刑といこうかの。」

「待て！この街を好きにはさせないぞ！？」

凄まじい妖気に圧倒されながらも、大神が言い返す。
しかし、カルマールの余裕は変わらなかった。

「面白い。ならば少し相手をしてやろう。」

すると、大神達の前に数体のポーンが現れた。

「ん……？」

モニターに写るポーンの姿にひっかかる点を感じ、大神はポーンの一体を拡大してみた。

何だか以前のものより一回り程大きい。

見ると、腕や足が太くなっている。

「（まさか……、強化したポーンか！？）」

怪人を復活させたカルマールの力だ。

ポーンを強化改造させるくらい造作もない事。

しかし、他の隊員達はそれに気付いていない。

「ふざけるな！この程度の雑魚、纏めて片付けてくれる！！」

「ほう？珍しく気が合うね。これがチームワークって奴か？」

「あっ、ロベリア！グリシーヌ！」

大神の制止を無視して、二人は同時にポーン目掛けて突進を始めた。

途端にポーン達も動き出す。

「マズイ！みんな、二人を援護するんだ！」

大神の指示で、残る三人が続く。

そして大神の予感は現実に変わった。

「何……？」

「わ、私の斧を受け止めただと……。」

何とポーンの一体が、ロベリアとグリシーヌの攻撃を、それぞれ片手で受け止めてしまったのだ。
これまでのポーンなら一撃で倒せたというのに……。

「あのポーン、桁違いに強い！みんな、連携して戦うんだ！」

大神がチームワークを呼び掛ける。
しかし、返って来たのは大神の期待に反する返事だった。

「考える間でもない。全員が私の指示通りに動けば良いのだ！」

「そんな！ボクが戦えるようにフォローしてよ！」

「場慣れしてない奴の指示なんて聞けるか！アタシの言う通り動け！」

「大神さん……、誰に従えば……。」

「みんな、チームワークを自分中心に考えるな！そんな事ではチームプレイなど不可能だぞ！？」

チームワークは自分の事を考えては成り立たない。
相手の立場に立ってこそ、初めて呼吸を合わせる事ができるのだ。
しかし今の巴里華撃団は、さながら分裂寸前。

これではまともな戦いすら出来ない。

「ヌハハハハ。そんな状態で、余に刃向かうつもりか？」

カルマールはそう言って、口から墨を吐き出した。
すると、その中からイカを模した巨大な蒸気獣が現れた。
その大きさ、凱旋門に匹敵する程である。

「余自らが、この蒸気獣『サンフォニー』で相手をしてやる。来るが良い！！」

「くっ……！」

今の状態で勝てる相手ではない。
それは分かっているが、大神も退く訳にはいかない。

「狼虎滅却……！」

精神を集中し、ありったけの霊力を二刀に込める。

「刀光剣影！」

そして、全身全霊の力で二刀を振るった。
……だが、

「なっ……！？」

何とサンフォニーは大神の光武Ｆを、まるで玩具のように触手で弾き飛ばしたのである。
その一撃で、大神の光武Ｆは激しく地面にたたき付けられる。

すると、その近くに大神の刀の片方が、光武Ｆの腕をつけたまま突き刺さった。
切断部からは、黒い煙が上がっている。

「フン、この程度か。後はお前達にやる。行けい！！」

露骨に落胆の色を浮かべるカルマール。
そして、命令を受けたポーン達が、大神に駆け寄る残りの光武Ｆに襲い掛かった。

「……シ、シャンゼリゼが……！！」

スパークレンスの導きに従い、シャンゼリゼにやって来たダイゴは、目の前の惨状に目を疑った。
巴里を代表する大通りはいくつもの穴が空き、周りの建物からは火の手が上がっている。
そして何よりダイゴを驚かせたのは、その奥でポーン達に袋だたきにされる巴里華撃団の姿だった。

「そんな……、エリカさんや大神さんが……。」

凱旋門前に立つ不気味なイカの蒸気獣はおろか、ポーンにも勝てないとはどうした事か。
ダイゴはスパークレンスに目を向け、そして思った。

「僕は……、勝てるの……？」

たとえティガに変身したとして、巴里華撃団が手も足も出ない相手に太刀打ちできるのか。
これまでの怪獣に苦戦した自分だ。
その怪獣よりレベルの違う敵に敵う訳がない。
それでも、スパークレンスの輝きは強いものへと変わっている。
まるでダイゴに、戦う事を促すように……。

「スパークレンス……、でも僕には……。」

力無く呟いた時だった。
ダイゴの視界に、一人の少年の姿が見えたのだ。

「……、危ない！」

シャンゼリゼに入ろうとする少年を、ダイゴはすんでの所で止めた。
すると、少年はダイゴに言った。

「離してよ！僕の家を化け物から守るんだ！」

「駄目だ！君も無事じゃ済まないんだぞ！？」

凱旋門からの金属音はかなり強く、離れた所にいるダイゴの耳にもよく聞こえてくる。
そんな所に生身で行けば一たまりもない。

しかし、少年はダイゴを見て言った。

「だって、巴里華撃団もやられちゃうし、ウルトラマンティガも来ないじゃないか！」

「！？」

ダイゴはハッとした。

確かに自分が奴に勝てる可能性は限りなく低い。

しかしそれでも、可能性は０ではない。

もし自分が諦めれば、そのなけなしの可能性も０になってしまう。

そうなれば、更に多くの悲しみを生んでしまい、多くの命を危険に曝してしまうのだ。

例えば、この少年のように……。

「……大丈夫。ティガは絶対に来る。だから君は安全な所にいるんだ。」

「……本当？」

「本当さ。だってティガは、巴里の光なんだから！」

まるで自分に言い聞かせるように、ダイゴは少年に笑顔を見せた。

すると、少年の顔も笑顔になる。

「うん……、そうだよね！僕、信じるよ！」

そう言ってその場を離れる少年。

その背中を見送り、ダイゴはスパークレンスに視線を移した。

「……巴里の光……か……。」

さっきは少年を元気づけるために言ったが、果たして自分は本当にそんな存在なのか。

ダイゴは小さく笑った後、スパークレンスを巴里の空に掲げ、光の名を叫んだ。

「ティガーーーーーッ!!」

「ええい、止めい!面白くも何ともないわ!」

ポーン達が巴里華撃団をたたきのめす様子を見ていたカルマールが、たまり兼ねたように叫んだ。

と、今まで大暴れしていたポーン達がピタリと大人しくなる。

「公爵様、こいつらにトドメは刺しませんの?」

意外そうに尋ねるナーデル。

すると、カルマールは笑って答えた。

「こやつらなど塵程度の存在。余と刃を交える資格はないわ！それに……、真に我等が討つべき者が現れおったぞ？」

その時だった。
巴里華撃団を守るように光の柱が現れ、中から巴里の守護神が姿を現したのだ。

「ティガっ！！」

沈黙した光武Ｆの中で、エリカが驚く。
炎に蒔かれて燃ゆるシャンゼリゼに今、ウルトラマンティガが降臨したのである。

「チャッ！」

「ヌハハハハ、現れおったなウルトラマンティガ……。」

不敵に笑うカルマールに、油断なく構えるティガ。
すると、カルマールは更に高笑いを上げた。

「面白い！裏切り者の分際で、我に勝負を挑むつもりか？」

「チャッ……。」

「ヌハハハハ！勇ましい事よのう。ならばその力、見せてみるが良い！」

言うや、カルマールが再び墨を吐き出した。
その量は先程サンフォニーを呼び出した時の倍近くある。
たちまち辺りの視界を遮る闇に、ティガは警戒を強めた。

すると、ティガの耳にカルマールの叫び声が聞こえて来た。

「来い、我がしもべ！超古代怪獣レイキュバスよ！！」

その声と共に墨が消え失せ、中からサンフォニーと同じくらいに巨大な大怪獣が現れた。
エビのような尻尾に、カニのようなハサミ。
そして赤く光った目は、さながら海の化け物を想起させる。

「あれが……、カルマールの操る怪獣なのか……？」

その巨体から溢れる力に、大神は思わず身震いした。
これまでティガが倒して来た怪獣とは格が違う。
そう感じさせる威厳が、レイキュバスにも感じられた。

「行けいレイキュバス！あの裏切り者を八つ裂きにしてしまえ！！」

「ギィーッ！！」

主の言葉に応えるように、レイキュバスはハサミを鳴らして咆哮を上げた。
そして、右手の大きなハサミをティガ目掛けて振り下ろす。

「チャッ！」

ティガはその一撃をバク転で避け、すぐさま反撃に移った。

「ハッ！」

突き出した右手からハンドスラッシュを放つ。

しかし、光弾は僅かに煙を上げた程度。
レイキュバスの外骨格には傷一つついていない。

「ギィーッ！！」

レイキュバスは徐に首を擡げると、口から火炎弾を吐き出して来た。

「ジュワッ！？」

咄嗟に右に飛んで避ける。
目標を見失った火炎弾は、その奥の建物を直撃した。

「チャッ！」

これ以上火炎弾を使わせる訳にはいかない。
ティガは不利だと分かりながらも、レイキュバス　相手に接近戦を挑んだ。
左右から襲ってくるハサミをかわし、その腹に渾身のストレートパンチを叩き込む。

「ギィーッ！」

しかし、レイキュバスの身体はティガのパンチを全く受け付けなかった。

「ジュワッ！？」

至近距離からハサミで殴り倒されるティガ。
そこに、レイキュバスが上からのしかかって来た。

「ギィーッ！！」

その凄まじい重量に押し潰されるティガ。
押し返そうとするが、レイキュバスはビクともしない。

「ヌハハハハ、巴里の守護神もぶざまよの。その程度の力で我等に刃向かうとは、身の程知らずめ！」

しかし、ティガも負けてばかりではなかった。

「ンゥゥゥ……ハッ！！」

ティガの額のクリスタルが赤く光り、ティガの身体が赤と銀に変わった。
パワータイプである。

「ギィーッ！」

お構いなしにハサミを振り下ろすレイキュバス。
しかし次の瞬間、そこにいる誰もが驚く事となる。

「ハッ。」

何と、ティガは先程まで苦しめられていたレイキュバスのハサミを、いとも簡単に掴んで押し戻したのである。

「チャーッ！！」

そして、がら空きになった腹部に再び右ストレートパンチを叩き込む。

「ギィッ！？」

その一撃で、レイキュバスは大きく後ろに吹き飛ばされる。

「ヌハハハハ、そうでなくては張り合いがないわ。」

部下のピンチにも関わらず、カルマールは楽しげに笑った。
まるで目の前で繰り広げられる死闘に、無上の喜びを見出だしているかの如く……。

「ギィーッ！」

レイキュバスが真正面からハサミを突き出した。
しかし、ティガはそれを片手で受け止め、巴投げの要領でレイキュバスを蹴飛ばした。

「チャーッ！」

「ギィッ！？」

土煙を上げて、地面にたたき付けられるレイキュバス。
最早形勢は、完全にティガに傾いた。
……かに見えた。

「ギィーッ！」

レイキュバスが再び火炎弾を吐き出してくる。
すると、ティガは両腕を胸の前で交差させて左右に広げ、赤い光の膜を生み出した。

ウルトラシールド……
敵の攻撃を光の膜で防御する回避技だ。
超高温の火炎弾は、ことごとくシールドに吸収される。

「ハァァァ……！」

そして、ティガはシールドを張ったまま、両腕を胸の前で交差させて外回りに回転させる。
すると、デラシウムのエネルギーが外側からシールドごと火炎弾を包み込んだ。

「ハッ！！」

高温の火炎弾を吸収した事により、圧縮されたエネルギーから炎がほとばしる。
その様は、まるで手の中に小さな太陽が輝いているかのようだ。

「チャーーーッ！！」

気合いの声と共に、太陽のごときデラシウム光流がレイキュバスに殺到する。
そして接触と同時に、太陽は肥大化してレイキュバスを包み込み、想像を絶する大爆発が起こった。

「や、やった……！」

爆音と黒煙に、ティガの勝利を確信する巴里華撃団。
しかし、その余韻は一瞬で消えた。

「ジュワッ！？」

黒煙から突如、青い煙のようなものが吹き出した。
たちまちに煙に蒔かれるティガ。
すると、何とティガの身体が手足を中心に凍りついてしまった。

「う、嘘……！どうして！？」

「馬鹿な！あの怪獣の能力は火炎弾のはず……。何故冷気が……？」

まさかレイキュバス以外に怪獣がいたというのか。
戦慄に震える大神達。
しかし幸か不幸か、その予想は外れた。

「ギィーッ！！」

煙の中から現れたのは、たった今デラシウム光流を喰らったレイキュバスだった。

「おいおい……、こいつは反則だろ？」

ロベリアが悪態をついた。
目の前の怪獣は、致命傷どころかかすり傷一つついていなかったからだ。
あのデラシウム光流すら通じない固さは、最早鎧と言う言葉が似合う。
しかし、驚くべきは他にあった。

「見て！怪獣の目が……！」

最初に気付いたコクリコが、レイキュバスの目を指差して叫んだ。
何と、最初は赤かったはずのレイキュバスの目が、青く光っていたのだ。
その色は、冷たい氷河を連想させる。
つまり……、

「そうか……、奴は火炎弾と冷気を使い分けているんだ！」

大神の言葉こそが真実だった。
レイキュバスはティガのデラシウム光流に対抗し、冷気を浴びせたのである。

「今頃気付いたか。さて、ウルトラマンティガ。そろそろ危ういのではないかな？」

カルマールがニヤリと笑った。
見ると、ティガのカラータイマーが赤く点滅を始めていた。
デラシウム光流の直後に冷気によるダメージを受け、エネルギーが急激に減少してしまったのだ。

「（くそっ……！！）」

完全に凍りついて動かない身体に、ティガは焦った。
既に時間がない。
しかし、これでは反撃のしようがない。
何とか動こうともがくティガを見捨てるように、カラータイマーの点滅が早いものへと変わっていく。

「（こうなったら……！！）」

ティガは体内に残る全てのエネルギーを集中した。
すると、ティガの身体を仄かな赤い光が包み込む。

「無駄な足掻きを……。レイキュバス！あの死に損ないを始末しろ！」

「ギィーッ！」

カルマールの命令を受け、レイキュバスはティガを完全に凍らせるべく再び冷気を吐き出す。
だが次の瞬間、カルマールは遂にその余裕が消える事になる。
何と絶対零度の凍てつく冷気がティガに触れた瞬間、音を立てて蒸発してしまったのだ。

「な、何!?まだそれ程の力が残っていたというのか!?」

ウルトラヒートハッグ……
全身のエネルギーを燃やし、身体を高熱に包むティガの切り札だ。

「ンゥウゥ……、ハッ!!」

ティガは再度額のクリスタルを発光させ、マルチタイプにチェンジした。
その勢いで、全身の氷が粉砕される。
「ギィーッ!!」

尚もティガを氷付けにしようと冷気を吐き出すレイキュバス。
しかし、全身が高熱に包まれたティガには毛程にすら感じない。

「チャーッ!!」

ティガは冷気の真ん中を突っ切り、レイキュバスの顔面を思いっきり蹴りつけた。

「ギィッ!?」

その勢いで真後ろに吹き飛ばされるレイキュバス。

そして、ティガはレイキュバスを一点に見据え、両手を胸の前で合わせた。

そして左右に水平に伸ばし、光の筋を生み出してエネルギーを集約する。

マルチタイプの奥義にしてティガ最大の必殺技、ゼペリオン光線だ。

「ハッ!!」

L字に組まれた腕からまばゆい光線が発射され、レイキュバスに浴びせられた。

「ギィーッ!!」

凄まじいエネルギーを一点に受け、仰向けに倒れるレイキュバス。

そしてその直後、今度こそレイキュバスは粉々に大爆発した。

デラシウム光流に耐えたレイキュバスも、ティガ最大の必殺技には敵わなかったのだ。

「ほほう。まさか余の怪獣までも倒して見せるとは、中々楽しませてくれる。」

「チャッ……。」

カルマールに気付いて構え直すティガ。
しかし、激しいエネルギー消耗に耐えられず片膝をつく。
デラシウム光流にウルトラヒートハッグ、更に必殺技のゼペリオン光線まで使用したのだ。
既に戦いはおろか、立ち上がる事すら難しいのが現状だった。

「良かろう、ウルトラマンティガ。今回は退いてやるわ。貴様の処刑は次の楽しみにさせて貰うとしよう。ヌハハハハ……！」

「チャッ……！！」

そう言って魔法陣を出現させ、その場から消え去るカルマール以下怪人軍団。
ティガはゼペリオン光線を再び撃とうとしたが、その前に奴らは消え失せてしまった。

「ウルトラマンティガ、巴里華撃団の諸君、また巴里の戦場で会おうぞ！ヌハハハハ……！！」

「……負けたんですね。私達……。」

カルマールの笑い声が止んだ後、エリカがポツリと呟いた。
敗北。それも全く手も足も出ない完敗だ。
ティガの助けがなければ、命すらなかっただろう。
言わば自分達は、敵に負けた上に要らぬ情けをかけられたのだ。

「言うなっ！！」

「怒鳴ってどうする。事実なら仕方ないだろ？」

その事実を認めたくないのかグリシーヌが叫び、ロベリアがそれを窘める。

「ボク達……、ティガがいないと勝てないのかな……。」

コクリコがポツリと呟いた。
今まで自分達は、ティガがいたからこそ勝って来た。
逆を突けば、ティガなしで敵を倒した試しがないのだ。
無論、怪獣が自分達の手に余る存在である事は確かだが、今回に至ってはポーン一体すら倒せていない。

「……大神さん、何かおっしゃって下さい。」

たまり兼ねた花火までもが大神を見た。
大神もまた、今回の敗北に自身の失敗を痛感していた。

「みんな、済まない。今回の敗北は、全て隊長である俺の責任だ。」

今回の敗北の原因はチームワークの低さだ。
その事は以前から分かっていたにも関わらず、自分はそれを改善す

る事が出来なかった。
隊長として、それは恥ずべき事だった。

無惨に破壊された光武Fと、悲しげに佇む巴里華撃団。
その様子を、屋根の上から見下ろす影があった。
白いスーツと茶髪のオールバック。
大神の親友、加山雄一だった。

「待っていろ、大神……。お前に必ず、希望の光を届けてやるからな。」

希望の光。
大神は程なくして、加山の呟いたこの言葉の驚くべき意味を知る事になる。

燃ゆるシャンゼリゼ（後書き）

《次回予告》

いよう大神ぃ！
あれが巴里を守る守護神、ウルトラマンティガか。
中々貫禄ある奴じゃないか？

ところで大神、希望の光は他にもあるぞ？
ほら、お前もよく知っているだろう。

次回、サクラ大戦３！

《花の都に桜舞う》

愛の御旗のもとに……

お久しぶりです、大神さん！

花の都に桜舞う（前書き）

このあたりの展開は、前作を知る人がニヤリと出来る展開でしたね。

「こ……ここは何処だ……？」

そこは、何もない空間だった。
色も空気もない空間。
その中を、大神は漂っていた。

「……どうして？」

ふと、大神の耳に誰かの声が聞こえて来た。

「どうして奴らは、大地から全てを奪おうとするの？」

それは、ピエロのような格好をした少年だった。
あどけない顔に、金色の二つの目が光る。

「お前は一体何者だ？奴らとは一体……？」

大神が尋ねると、ピエロはニヤリと薄気味悪い笑みを浮かべた。

「どうしてって聞いても……、答えられないんだろ！！」

刹那、ピエロの金色の目が光った。

「なっ……！？」

光は瞬く間に視界を包み込んだ。

「……夢か。」

気がつけば、大神はシャノワールの秘書室にいた。
その事から、先程までの出来事が夢と分かる。

「俺自身、あの敗北から立ち直っていないんだな……。」

シャンゼリゼを炎に包んだ怪人カルマール。
これまで倒した怪人軍団を復活させたあの怪人に、自分達は手も足も出なかった。

「俺は、どうすればいいんだ……。」

いつまた奴らが襲って来るか分からない。
それまでに何かしらの対策を立てなければ、次の敗北は決定的だ。
しかし、大神には良い考えは思いつかなかった。

「……。」

大神はふと、ポケットにいれてある写真を手に取った。
そこには、かつて帝都を守るために共に戦った九人の仲間達が写っている。

帝国華撃団。
帝都に潜む魔の存在を打ち破った、大神のよき仲間達だ。

「……みんなならこういう時、どうするかな……。」

「みんなって誰の事だい？」

突然後ろから声がしたかと思うと、誰かが大神の写真を引ったくった。

「あっ、ロベリア！それにみんなも……。」

そこには、ロベリア以下巴里華撃団のメンバーが勢揃いしていた。
五人共大神の写真を物珍しそうに眺めている。

「何なんだ？この妙な女共は。」

「帝国華撃団の仲間達だよ。君達にとっては、先達に当たるかな。」

「綺麗な人達ばかりですねぇ……。はい、写真お返しします。」

ロベリアに説明する大神に、エリカが見とれた様子で写真を返す。
その表情は、輝いている先輩に憧れる後輩のそれだ。
しかしそんなエリカとは対照的に、グリシーヌやロベリアは帝国華撃団にいい印象を持っていないようだった。

「ふん、こんな貧弱な奴らが帝都を守れるとは思えんな。特にこの紫の服、下品の極みだ。」

「確かに。まだアタシらの方が秘密部隊らしくないか？」

「二人共、口が過ぎるぞ?仮にも君達の先輩なんだから。」

いつになく辛口な二人を、大神が窘めた。

第一印象だけで人の区別をつけるものではないし、彼女達は仮にも大神の仲間である。

共に帝都の未来を命懸けで勝ち取った仲間をけなされるのは、流石の大神も腹が立った。

その時、ロビーの方から何かが割れる音が聞こえて来た。

「な、何だ!?」

「さては、カルマールの襲撃か!?」

前回の敗北を根に持っているらしく、グリシーヌは斧を手に秘書室を飛び出した。

慌てて後を追う大神達。

すると、ロビーの窓ガラスが割れ、近くに一輪の薔薇が落ちていた。

「何だ?紙が巻き付けてあるぞ?」

大神は紙を広げて見る。

すると、紙には日本語でこう書かれていた。

「花の都に桜舞う」

「……一体、どういう意味なんでしょう。」

おそらく簡単な答えな気はするのだが、イマイチ思い当たる節がない。

怪人達の罠としても、わざわざ日本語で書かないだろう。
大神達が考え込んでいると、騒ぎを聞き付けたグラン・マがやって来た。

「ムッシュ、窓ガラスが割れたって？」

「あちゃー……、しまった……。」

巴里の裏通り。
そこで加山は、やってしまったという顔で身を潜めていた。
何の事はない。
自分が大神に向けた友情のメッセージが、あろう事か巴里華撃団の調査対象にされてしまったからだ。
既に巴里の街中を、グリシーヌを筆頭に各隊員達が探し回っている。
もし今見つかれば、あの加山曰く個性的なメンバーの揃った巴里華撃団の事、何をされるか分かったものではない。

「……こうなったら、あの三人が先に大神に会う事を祈るしかない。」

加山はそう呟き、その三人の到着をただひたすらに祈る事しかできなかった。

「……で、何で僕まで付き合わされる訳？」

テルトル広場にて、エリカの後ろに続くダイゴが、疲れた様子で尋ねる。

すると、エリカはしたり顔で答えた。

「だって、人手が多い方が早く見つけられるじゃないですか！」

その答えに、ダイゴはため息をついた。

何の事はない。

エリカからいきなり投げ文の犯人を探すという事で、無理矢理連れて来られたのである。

それにダイゴには、他に予定があった。

「（せっかくチラシを貰って来たのに……。）」

ダイゴの手には、『世界の花の博覧会』というチラシが握られている。

様々な国の花が一度に見られる夢のようなイベント。
それを今度こそエリカと楽しもうと考えていたのに……。

「別に僕らが探さなくても、大神さんが見つけるでしょ？」

「何言ってるんですか！大神さんは前の戦いで疲れてるんですから、私達が頑張らなくちゃ！」

ダイゴを余所に一人意気込むエリカ。
すると、エリカはその拍子にまた看板に頭をぶつけた。

「いった～い！」

「エ、エリカさん大丈夫！？」

頭を押さえてうずくまるエリカに駆け寄るダイゴ。
すると、広場の奥の方から話題の人物が走って来た。

「おーいエリカくん！大丈夫かい？」

「へ？大神さん？」

「……。」

流石にこのタイミングで大神が現れるとは思わず、エリカも＃＃ＮＡＭＥ１＃＃も驚いた様子で大神を見た。

「あ、そうだ。手紙の謎は解けました？」

「手紙？確か投げ文の……？」

手紙に書かれていた言葉。
よく考えれば答えが出そうなのだが、大神は分かっていないようだ。

「それがサッパリなんだ。犯人も見つからないし……。」

大神はそう言って肩を竦めて見せた。
あれから調査を開始して小一時間になるが、一向に手がかりはない。
すると、ここでエリカがある事に気付いた。

「そういえばダイゴさん。その手に持ってるチラシ何ですか？」

「え？あ、ちょっと……！！」

ダイゴの返事を聞く前に、エリカがチラシを引ったくる。
そして、エリカが何かに閃いた。

「あ～、分かった！大神さん！桜舞うってこれの事ですよ！」

エリカが大神にチラシを見せた。
そこには、端の方だが桜の絵が写っている。

「なるほど……、桜舞うとは、博覧会の事だったのか！」

大神も納得したように叫ぶ。
確かに『花の都』は巴里を連想させるし、巴里に桜が舞う様子が見られるのはここしかない。

「ありがとうダイゴ。よしエリカくん、行くぞ！」

「はい！大神さん！！」

そう言って、博覧会の会場へ急ぐ二人。
広場には、完全に放置されたダイゴだけが残った。

「……何でこうなるの！？」

そう叫びながら、ダイゴは二人の後を追いかけた。

世界の花の博覧会。
その名前の通り、世界の様々な花が飾られた会場は、言葉では言い表せない程の美しさを放っている。
その一番奥に、桜の木があった。

「へぇ……、これが桜の木か……。」

「何だか、吸い込まれそうですね……。」

初めて見る桜の美しさに目を奪われるダイゴとエリカ。
すると、大神が感慨深げに口を開いた。

「この桜の木にはね、大切な思い出があるんだよ。帝都のみんなとの……。」

あれは今から3年前。
初めて帝国華撃団に着任した日。
あの日の上野公園でさくらや紅蘭、そして花組のみんなと出会った。
その始まりの思い出が、今でも色鮮やかに蘇る。
まるで、彼女達が今でも側にいるような……。
そんな思いにふける大神の耳に、懐かしい声が聞こえた。

「……お久しぶりです、大神さん……。」

「……え？」

まさか……。
大神はハッとして桜の木を見た。
すると、そこに一人の人影が見えた。

「お元気そうで何よりです。」

自分が見ているのは幻なのか……。
大神は、目の前の出来事が信じられなかった。
見間違いか。
いや、そんなはずはない。
あの桜色の着物を、どうして見間違う事があろうか。
あの優しい声を、どうして聞き違えようか。
そう、桜の木の影から現れたのは……。

「……さくらくん……？さくらくんなのか！？」

紛れも無く、帝国華撃団花組、真宮寺さくらその人だったのだ。
しかしこの後、大神は更に驚かされる事になる。

「ボンジュール！アイリスもいるよ！」

「アイリス！君も……！？」

3年前と変わらない可愛らしい声でさくらの横に現れたのは、花組最年少のアイリスだった。
その腕には、友達のぬいぐるみ、『ジャンポール』の姿もある。

「あら中尉、驚くのは少し早過ぎてよ？」

「そ、その声はまさか……！！」

「その通り！帝劇のトップスター、神崎すみれのお出ましですわ！！」

紫の着物を纏った姿とスターのオーラは、3年前から全く色褪せていない。
そこにいたのは間違いなく帝劇のトップスター、神崎すみれだった。

「これは……、夢を見ているのか？……どうしてみんなが……。」

信じられない様子で、大神が呟いた。
遥か東の帝都にいるはずのさくら達が、何故ここにいるのか。
もしかしてまた夢を見ているのか。
そう思って頬を引っ張ると、やっぱり痛い。

「夢なんかじゃないよ。アイリス、お兄ちゃんに会いたくて巴里に来たんだもん。」

「そうですわ。夢のような出来事に、違いはありませんけど。」

「確かに、夢の中にいるみたいです。花の都で、大神さんに会えるなんて……。」

実に半年ぶりの再会に心を踊らせる大神とさくら達。
しかし、ここで場違いに興奮する人物がいた。
エリカである。

「きゃ～～～！！東京の花組の皆さぁ～ん！！」

「エリカさん、落ち着いて！！」

憧れの先輩に生で会えた興奮から、飛び掛かりそうな程喜ぶエリカを、ダイゴが何とか抑える。
すると、しばし呆気に取られていたさくらが尋ねた。

「あの、大神さん。こちらの方は……？」

「あ、ああ。彼女はエリカくんといって、巴里華撃団の隊員なんだ。」

「エリカ・フォンティーヌです！憧れの先輩達に会えるなんて、エリカ大感激です！！」

「僕はダイゴ＝モロボシ。隊員じゃないけど、一応関係者なんだ。」

大神の仲立ちで自己紹介をする五人。
すると、エリカが大神に提案した。

「そうだ大神さん。これからシャノワールで、さくらさん達の歓迎会やりませんか？」

「え？でも急には無理じゃないかな……。」

エリカの提案に難色を示すダイゴ。
最も彼としては、もう少しエリカと二人でいたかっただけなのだが。

「いや、楽屋を使えばすぐに準備できるさ。せっかく帝都から来てくれたんだ。おおいに盛り上がろう！！」

しかし、大神はあっさり了承してしまった。
それが失敗と後悔するのは、もう少し後の事になる。

「了解しました！ダイゴさん、行きますよ！！」

「ええっ！？ち、ちょっとエリカさぁ～ん！！」

意気揚々とシャノワールに疾走するエリカと、問答無用で引きずられていくダイゴ。
その様子にしばし呆然としながら、さくらが大神に尋ねた。

「大神さん……、エリカさんって……。」

「いつもああなんですの？」

「ああ、いつもああなんだよ。」

あの加山ですら驚く程の個性の持ち主であるエリカ。
初対面のさくら達が驚かない訳がなかった。

「お兄ちゃんも、大変だね……。」

優しいアイリスの言葉に、大神は僅かに心が癒された気がした。

遥か東の帝都からさくら達がやって来たというニュースは、シャノワールを大いに驚かせた。
すぐさまエリカとダイゴを中心に準備が進められ、歓迎会が催された。

「みんな、紹介するよ。帝国華撃団・花組の三人だ。」

「真宮寺さくらです。大神さんがお世話になってます。」

「帝劇のトップスター、神崎すみれと申します。よろしくして差し上げますわ。」

「ヤッホー、アイリスで～す！この子はクマのジャンポール！よろ

しくね！」

三者三様の挨拶に和む一同。
その様子を、大神は微笑ましく見ていた。
前回の敗北から立ち直れていないのは自分だけではない。
隊員達もまた、しかりなのである。
そんな状況でさくら達が来てくれたのは、実にタイムリーだった。
最も、本当はそう仕組んだ人物がいるのだが……。

「（帝国華撃団と巴里華撃団が一堂に会するなんて、本当に夢みたいだ……。）」

喜びを噛み締めながら、メルとシーの手伝いをする大神。

しかしこの後、歓迎会はとんでもない事態を招く事となってしまう。
それは、大神が厨房でショコラケーキを作るシーの手伝いをしていた時だった。

「大神さん！」

その始まりは、厨房に飛び込んで来たエリカだった。
その様子から、何か急な事態と分かる。

「どうした、エリカくん？」

「実は、グリシーヌさんがすみれさんと喧嘩を始めちゃって……！」

「な、何だって！？」

大神は目を丸くして驚いた。

ついさっきまであんなに仲よさ気に話していたのに、一体どうしたというのか。

「二人は今何処だ！？」

「ロビーです。花火さんが止めてるらしいんですけど……。」

エリカの返事が終わらない内に、大神は厨房を飛び出した。

ロビーでは、既に二人が睨み合っていた。

その目からは、バチバチと火花が散っているようにも見える。

「……グリシーヌさんとやら。もう一度おっしゃっていただけま

せん事？」

「民を守るのは我々貴族の責務だ。高が東洋の成金風情が、この私に意見するな！」

「あら、ご立派な考えです事。そのカチコチの石頭が、フランスの貴族ですのね？」

「貴様！高が東洋の成金の分際で、私を愚弄するつもりか！？」

「貴女こそ何様のおつもり？先輩に対する礼儀も知らないなんて、名門貴族が聞いて呆れますわね？」

「黙れ！！それ以上ブルーメールを侮辱するならば、この場で成敗してくれる！！」

「民も守れない貴女に、一体何が成敗できて？自惚れ甚だしいですわ。」

その言葉に、遂にグリシーヌは爆発した。

「貴様……、生かしてはおかん！覚悟しろ！！」

愛用の斧を手に取るグリシーヌ。
しかし幾多の死線をくぐり抜けたすみれは、眼前に迫る刃にも全く動じなかった。

「……やっぱり。この程度の力では怪人とやらに負けるのも分かりますわ。」

「ぐっ、おのれ……！？」

相変わらずのすみれの口撃に言い返せないグリシーヌ。
その怒りようはロベリアの時と比べものにならない。

「……大神さん、どうしましょう……。」

二人を交互に見遣る花火が、オロオロして尋ねた。
どちらかが引き下がればいい話ではあるのだが、当事者が当事者だけにそれは絶望的だ。

「やはりここは命をかけてお止めするしか……！」

「いや、花火くん……。別に命を懸ける事じゃないよ、これは。」

何を考えたか弓を構える花火を大神が宥める。
確かに喧嘩程度でいちいち命を張っていては体がもたない。
すると、そこへ血相を変えたさくらが走って来た。

「大変です大神さん！アイリスが……！！」

「な、何ぃ！？」

帝劇でもよくカンナと喧嘩していたすみれならまだしも、アイリスまでどうしたというのか。
さくらに連れられて楽屋に戻った大神を、ロベリアが待っていた。

「やっと来たのか。見なよ、面白いもんがあってるぜ？」

言われるままに楽屋に入る大神。

そこでは、アイリスとコクリコが互いに睨み合っていた。

「お兄ちゃんの事、呼び捨てなんかにしないでよ！」

「嫌だよ！イチローはイチローなんだよ！」

「また言ったなぁ！！お兄ちゃんの事、馬鹿にしてるんでしょ！？」

「馬鹿になんかしてないよ！アイリスこそお兄ちゃんなんて、まるで子供じゃないか！」

「アイリス子供じゃないもん！コクリコの方が年下じゃない！！」

要するに大神を『イチロー』と呼ぶか『お兄ちゃん』と呼ぶかで言い争っているのだ。

大神としては別にどっちでもいいのだが、二人は自分の呼び方を譲ろうとしない。

「どうするのさ。これじゃあ収拾がつかないよ？」

「そ、そうは言っても……。」

ダイゴに言われるが、一度に騒がれると中々上手い解決方法が見つからない。

「大神さん、グリシーヌさん達を早く！」

「大神さん、アイリス達を何とかして下さい！」

「そんな、一辺には無理だよ！」

さくらとエリカの両方から言われ、正論を述べる大神。
すると、エリカが頷いた。

「そうですね。じゃあさくらさん、先にどうぞ。でもすぐ返して下さいね。大神さんは私達のですから。」

「あ、ありがとうエリカさん。……誤解のないように言っておきますけど、大神さんはあたし達帝国華撃団の隊長ですから……。」

『私達の』という部分を不自然に強調するエリカに僅かに顔を引き攣らせ、さくらが言う。
すると、エリカは笑顔でとんでもない事を口にした。

「それは違いますよ、さくらさん。大神さんはあの夜、私に約束してくれました。いつまでも君の側にいると……。」

「なっ!?ななな何を言い出すんだ、エリカくん!!」

突拍子もない事を言い出したエリカに、大神は慌てた。
そんな事は身に覚えがないし、そんな目でエリカに近づいた事はない。
しかし、それを聞いたさくらとダイゴは表情を一変させた。

「大神さん……!それ、本当なんですか!?」

「あんた……、やっぱりエリカさんとそんな事を……!!」

「そ、そんな、デタラメだよ!さくらくんなら信じてくれるだろ?」

謂れのない怒りのオーラを放つ二人に、必死に弁解する大神。
しかし、今度はエリカが表情を悲しいものに変えた。

「ひどい！大神さん、あの言葉は嘘だったんですね……！？」

「エリカさん泣いてるじゃないですか……。大神さん、本当に違うんですね！？」

エリカの様子が演技に見えず、さくらが大神に問い詰める。
一方、ダイゴもエリカに尋ねた。

「エリカさん！本当にこいつに寝かされたの！？」

しかしエリカから返って来た答えに、事態は一気に終息を迎える事になる。
何故なら……、

「はい、確かに一緒でした……。夢で。」

「ゆ、夢……？」

途端に肩がずり落ちるさくらとダイゴ。
確かに夢ならば、大神本人ではないので何を言われても不思議ではない。

「それはないよ、エリカくん……。」

何ともたちの悪い夢に、大神はため息と共に疲労感を吐き出すしかなかった。

「ねぇ、ピエール……。」

その日の夜、ダイゴは部屋に戻ろうとするピエールを呼び止めた。

「何？」

「何で人は、夢を見るのかな……。」

躊躇いがちに尋ねるダイゴ。

すると、ピエールは微笑んだまま、僅かに目を見開いた。

「そうだな……。やっぱり欲があるからかな？心に思い描いている事が、夢になって現れるものだから。」

「欲……それじゃあ……。」

夢は、誰もが見る泡沫の世界。

心に描き、されど叶わぬ願いを見せてくれる幸福の世界。

ならば、あの夢は何を意味するのだろうか。

エリカが見たという、大神が甘く囁く夢は。

「でも、何でそんな事聞くんだい？」

「え？い、いや……、何でもないよ……。」

ピエールの質問をはぐらかし、ダイゴは暗い表情で俯いた。

「（そんなにあの人が好きなのか……。夢見るくらい……。）」

大神に抱かれる夢を語る時、エリカは今まで自分に見せた事のない、幸せな顔をしていた。

それを文字通り、エリカが夢見ていたとしたら……。

「ダイゴ……？」

怪訝な顔で見つめてくるピエールに、ダイゴは言葉を返す事が出来なかった。

脳裏に浮かぶ、エリカの幸せな笑顔。

その笑顔は、自分ではなく大神のものなのだろうか。

自分はそれを、受け入れるしかないのだろうか。

ならばいっそ……。

「……。」

ダイゴの胸中に渦巻く黒い感情。

それを抱きながらその場を立ち去るダイゴの後ろ姿を、ピエールは黙って見つめていた。

「何だか夢みたいだな。さくらくんにまた会えるなんて……。」

シャノワールから程近い運河の橋で、大神はさくらと並んで星空を眺めていた。

歓迎会は散々なものになってしまったが、それでもさくらは笑顔を見せてくれた。

「あたしもです。まだ半年くらいしか経っていないのに、とても懐かしい感じがします。」

半年前と変わらぬさくらの笑顔。

大神もまた、さくらの笑顔に沢山の思い出を蘇らせた。

「あれから、帝劇はどうだい？」

「少し寂しいですけど、平和です。すみれさんとカンナさんは相変わらずですけど。」

その答えに、大神は思わず吹き出した。

すみれとカンナは帝国華撃団結成時から犬猿の仲でとおっていた。

大神が来てからはかなり喧嘩は減ったが、それでも０ではない。

最も、喧嘩する程仲がいい間柄だから仕方ないが。

「……済まない、寂しい思いをさせてしまったな。」

「いいえ。みんな笑顔で頑張ってます。それに……。」

そう言って、さくらはふと夜空を見上げた。

空には幾つもの星が、光り輝いている。

「ほら、大神さん。巴里の空からも見えますよ？」

「……ウルトラの星……。」

大神は、さくらが指差す一つの星の名を口にした。

M78、ウルトラの星。

かつて帝都を魔の存在から守り抜いた、光の巨人が住まう星。

そして、さくらと永久の愛を誓った勇者の星。

遠く離れた巴里の空にあっても、その光は自分達を包むように温かかった。

「あたし、思うんです……。ウルトラの星とあたし達の地球は遠く離れているのに、少しも遠く感じない。だったら、帝都も巴里も遠くなんかないって……。」

「そうだね。俺達は同じ星にいる以上、離れてはいないんだ。」

さくらの言葉に頷く大神。

同じ地球という星にいる以上、離れてなどいない。

それは、人の心にも言える事だった。

同じ地球に住まう者。

増してや同じ華撃団の仲間なら尚の事、分かり合う事ができるはずだ。

そう信じる大神に応えるように、ウルトラの星が僅かに輝きを増した。

そこに、よく知る声が聞こえて来た。

「よう大神！久しぶりの再会はどうだ？」

「加山！まだフランスにいたのか。」

てっきりもうスイスに行ったものと思っていた大神が、驚きの声を上げる。

すると、さくらが笑って言った。

「大神さん、ご存知ないんですか？あたし達が巴里に来るよう手配してくれたの、加山さんなんですよ？」

「何だって？じゃああの手紙は……。」

「ああ。さっきグラン・マにガラス代を請求された。まあお前を助けるためなら、安いものさ。」

相変わらずの策士に、大神はやれやれと笑った。

あの手紙は、演出好きの加山による花組来仏の予告だったのだ。

「あ、そうだ。大神、歓迎会が荒れたそうだな。」

「ああ……。どちらも機嫌を直してくれなくてね……。」

やや陰りのある笑顔で応える大神。

あれから両方に声をかけたのだが、四人共『自分は悪くない』の一点張りで、全く話を聞いてくれなかった。

すると、加山はポケットから一枚のチラシを取り出して見せた。

「そこでだ大神！皆さんの仲直りに最適な方法を見つけて来た。」

「……ダンスコンテスト？」

加山の見せたチラシのタイトルを読み上げる大神。
それは、巴里で毎年開催されているダンスの祭典だった。
巴里にいる人間なら国や年齢、人数を問わず参加自由で、真にダンスを愛する者達が己の腕を競い合うというものだ。

「このダンスコンテストをきっかけに、皆さんに仲良くなってもらう。どうだ大神？名案だろう？」

「なるほど……。」

加山の提案に、大神は頷いた。
人が仲良くなる一番の秘訣は、共通点を探す事だ。
帝国華撃団も巴里華撃団も、普段は人前でダンスや芝居を見せている。
その共演という形でコンテストに参加すれば、互いに技量を認め合う事になろう。
そうなれば、互いに仲が深まるという訳だ。
そのきっかけとして、このダンスコンテストは正に絶好の口実だった。

「大神さん。これなら上手くいくかも知れませんね！」

「ああ。ありがとう加山！助かるよ。」

「礼には及ばん。お前を影で支えるのが、俺の役目だ。」

そう言って笑う加山。
大神はその頼もしさに、改めて帝国華撃団の熱い絆を感じた。

闇に覆われた地下神殿。
巴里のカタコンベに直結するこの場所に集うのは、闇を住処とする者達。
その一番奥の椅子に、カルマールの姿があった。

「ヌハハハハ、集まったな。余に従う下僕達よ。」

満足げに笑うカルマール。
すると、目の前にひざまずく五つの影が答えた。

「私レオン以下、常に控えております。」

「このナーデルをお呼びになるとは、何をなさるおつもりで?」

「シゾーも聞きたいピョンねぇ……。ラビッと斬るのがいいピョン。」

「偉大なるカルマール公爵。第二幕の栄光は、このコルボーに与えては頂けませぬか？」

「さて、カルマール様。ピトンに何なりと命じて下さいな。」

余程暴れたいのか、我先と名乗りを上げる怪人達。
すると、カルマールはその様子に笑って答えた。

「よし、シゾー、ピトン。我が配下が奴らの隠れ家を探している。その間に巴里華撃団とウルトラマンティガを誘い出し、時を見て抹殺しろ。」

「ウーッサッサッサ！今度こそあの裏切り者を、始末してやるピョン！」

「イーッヒッヒッヒ！ウルトラマンティガ。今度こそそのクリスタルを頂くよ！」

カルマールの命令を受け、二人は地下神殿を後にする。
そして入れ違いに、一つの影がカルマールの前に現れた。

「カルマール様……。」

「おお、来たか。我が右腕、イーヴィルよ。」

それは、ナーデルと同じくらいの背丈の怪人だった。
怪人達の中では人間に近く、人混みでは見分けがつかないだろう。

「して、見つかったか？」

期待を込めてカルマールが尋ねる。
すると、イーヴィルは畏まって答えた。

「奴らの隠れ家は見当をつけました……。後は時期を見て攻め込むべきかと……。」

「よし。その情報を確実なものにしてくるのだ。」

「はっ。」

カルマールの命令に即答し、イーヴィルは転移魔術でその場を後にした。

ダンスコンテスト当日。
会場となったエッフェル塔は、沢山の人々で賑わっていた。
エントリーは総勢１５組。
持ち時間は３分で、種類は問わない。
その中で巴里華撃団が選んだのは、フランスで一般的なフレンチカンカンだった。
その名の通りカンカンと靴が鳴るくらいの早いテンポが特徴的なダ

ンスで、複数で揃えるにはかなりの技量が必要なのだが、元々ダンス慣れしている巴里華撃団にはにわか仕込みで十分だった。

「成金女。本場のフレンチカンカンに腰を抜かすが良い！」

「謝ってたって、許してやらないからね！」

「ふん！アイリスだって負けないもん！」

「その自信、楽しみですわね。」

早くも勝利宣言をするグリシーヌとコクリコに、すみれとアイリスが負けじと言い返す。

みんなで一つにまとまるはずだった大神の考えに反し、巴里華撃団と帝国華撃団はダンスで白黒をつける事になったのである。

「はぁ……、先が思いやられるな……。」

仲直りどころか火に油を注いでしまい、大神はため息をつく。

その間に、先手の巴里華撃団のダンスが始まった。

横一列に並び、華麗に足並みを揃えている。

「こ、これが本場のフレンチカンカンなんですね……！！」

唯一仲たがいをしていないさくらが、素直に感想を述べる。

確かに足の長さの違いをものともせずに踊る様子は、華麗にして優雅。

花の都を象徴するダンスが、そこにはあった。

「どうだい？巴里華撃団のダンスは。」

返事を返さない二人に、大神が尋ねる。
すると、じっとダンスを観察していたアイリスが答えた。

「カッコイイんだけど……。」

「アンサンブルがまるでなってませんわね。」

口ごもるアイリスに代わって、すみれが鋭い評価を示した。
ダンスだろうと芝居だろうと、役者の一人だけがどんなに良い動きをしたとしても、作品は良いものにはならない。
芝居なら脇役が主役より存在感を出してはならないし、ダンスは均等に踊ってムラを出してはならない。
こと巴里華撃団は、それに気づいてすらいないだろう。
ダンス自体はシャノワールで稼ぐだけあって見応えはある。
しかし、それだけで喜ぶのはダンスを知らない三流の人間だけ。
本場のフレンチカンカンを語るには、巴里華撃団のダンスはレベルが低すぎる。
まず五人で横一列に並ぶなら、客に見やすい左右対称が基本だ。
従ってこの場合、身長が際立って低いコクリコを中心に置いたり、逆に端に置いて階段上に並ぶのが理想的だ。
しかし巴里華撃団は、それを全く考慮していない。
端のロベリアが無意味に目立ち、コクリコがエリカとグリシーヌに隠れてしまっている。
これでは一人一人が上手くても、全体として良い印象は与えられない。

「チームワークに欠ける……か。」

大神が呟いた時、ダンスを終えた巴里華撃団が、拍手に包まれて戻

って来た。

「どうだ！我々のフレンチカンカン、見とれて声も出まい！」

勝利を確信したように胸を張るグリシーヌ。

すみれの指摘した通り、彼女達は自分達のレベルの低さに気づいていない。

この時点で、もう勝負は決まっていた。

「その大口、私達のダンスを見た後も叩けまして？」

それを予告するようにすみれが軽く言い返し、三人はステージに上がった。

さくら達が選んだダンスは、巴里華撃団と同じフレンチカンカンだった。

こちらも僅か数日のにわか仕込みだが、芝居のキャリアの長さも手伝って、観客のどよめきは巴里華撃団以上のものがあった。

「どうだい？さくらくん達のダンスは。」

「スッゴイです！エリカ感動しちゃいました！！」

大神が尋ねると、エリカが即答した。
憧れの先輩が目の前で華麗なダンスを踊っているのだ。
後輩として、生で見られるのが嬉しくてたまらなかった。
一方、先程すみれに堂々と勝利宣言をしたグリシーヌは難しい顔で三人を見ていた。

「分からぬ……。ダンス自体は我々と同じだというのに、何かが決定的に違う。」

すると、隣にいた花火が口を開いた。

「立ち位置じゃないかしら？ほら、アイリスさんを真ん中に置いて……。」

花火の言葉が一部当たっていた。
さくら達は三人。
よって、一人を二人が挟む形になる。
そこでさくらとすみれの身長がほぼ同じ事を活かし、アイリスを中心にして見事に左右対称を作ったのである。
更にさくらもすみれも、ダンスの型に合わせてアイリスから同時に距離を詰めたり離したりして変化をつけ、観客に飽きがこないよう工夫をしている。
そのタイミングの良さにも、観客は目を奪われた。
しかしその時、アクシデントが発生した。
真ん中で踊っていたアイリスのシューズの踵が折れたのだ。

「（すみれさん！）」

「（お任せあれ！）」

その瞬間、さくらとすみれは一瞬互いにウインクを交わし、距離を詰めてアイリスを隠した。

「（さくら、すみれ、ありがとう！）」

その一瞬、アイリスは素早くシューズを脱ぎ捨て、何事もなかったように列に戻る。

「なるほどねぇ……、そういうアクシデントも考えて横一列に並んだのか。」

感心したように、ロベリアが呟いた。
今のアクシデントは間違いなくアドリブだが、三人共計ったかのようにタイミングがズレない。
巴里華撃団は、そこに自分達にない何かを見つけた。

「み、見事だ……。我らの完敗だ……。」

流石のグリシーヌも、それを認めざるを得なかった。
確かに個人のレベルは同じだろう。
しかし、自分中心の考えでは絶対に成長はない。
他人の身になり、考えられる事で、初めて真のチームワークを得られるのである。

「あれが、さくらくん達にあって君達にないものだ。本当のチームワークは、自分でなく相手の気持ちになる事なんだ。」

「……。」

大神の言葉に、返事を返せる者は誰もいなかった。

大トリのさくら達のダンスが終わり、いよいよ審査発表が始まった。
とは言っても、トロフィーが貰えるのは優勝チームのみ。
それだけに緊張も高まる。

「……。」

その緊張の中、発表を客席で待つ人物がいた。
ダイゴとピエールである。
エリカからダンスコンテストの話を聞いた二人は、彼女達を応援するべく会場に駆け付けたのだ。

「エリカさん、優勝するかな……？」

自分が踊った訳でもないのに、興奮に震えるダイゴ。
反対に、ピエールは疲れた表情でため息をついた。

「ダイゴ……。君が僕にその質問をするのはもう５４回目だよ？
少しは落ち着きなよ。」

よくも正確に数えきれたものである。

すると、ようやくドラムロールが終わり、優勝チームが発表される。

「それでは発表します。優勝チームは……。」

名前を読み上げようとする司会者。
しかしそこに突如、別の声が割って入って来た。

「シゾー様に決まりだピョン！」

「シ、シゾー！！また現れたのか！」

突然の怪人の奇襲に驚く大神。
シゾーの横にはピトンの姿もある。
会場は一瞬にして、悲鳴に包まれた。

「イーッヒッヒッヒ！アタシ達が来たからには、コンテストもおしまいだよ！！」

「ウーッサッサッサ！ここにいる人間共、皆殺しにしてやるピョン！！」

逃げ惑う人々に牙を剥く怪人達。
そこに、さくら達が立ちはだかった。

「大神さん！ここはあたし達に任せて、シャノワールへ！」

「お客さん達はアイリス達が安全な所に避難させるから、安心して！」

「中尉、急いで下さいまし！一刻を争いますわ！」

さくら達の言葉に頷き、大神は素早く指示を出した。

「分かった！みんな、シャノワールに戻るぞ！」

「了解！！」

大神達が会場を後にした直後、ダイゴは避難する人の波を掻き分けて奥へと進んだ。

怪人の狙いは自分。

ならば、目の前に姿を現せば標的をこちらに変えるかも知れない。

そう考えたのである。

「シゾー！ピトン！これ以上の悪事は僕が許さないぞ！！」

ステージに立つ怪人の前に現れ、ダイゴが叫ぶ。

すると、二人は目の前の裏切り者の存在に気付いた。

「ウサッ！現れたピョンね！」

「ちょうど良い……！巴里華撃団の先に始末してやるよ！」

言うや、怪人達は同時に襲い掛かって来た。

「くっ！」

素早く後ろに避け、エッフェル塔を目指して走り出す。

「ムム、逃がさないピョン！！」

「このアタシから逃げられると思うんじゃないよ！」

エッフェル塔を舞台に、壮絶な鬼ごっこが始まった。

その頃、シャノワールの作戦司令室もいつになく緊張感が漂っていた。

怪人達が本格的に動き出した事もそうだが、それ以上に驚くべき連絡が、さくら達から寄せられたのだ。

『ダイゴが怪人に追われてエッフェル塔内を逃げ回っている』

この連絡に、作戦司令室は驚きに包まれた。

「な、何でよりによってダイゴが会場にいたの!?」

訳が分からない様子でコクリコが叫ぶ。

しかも怪人に追われるとは、一体どうしたというのか。

「こりゃ急いだ方がいいね。ムッシュ、出撃命令を頼むよ!」

エッフェル塔内にいる以上、捕まるのは時間の問題。

最早一刻の猶予もなかった。

「巴里華撃団・花組、出撃!!ダイゴを救出し、怪人を撃破するぞ!!!」

「了解!!」

「くっそ〜、何処に隠れたピョン!」

エッフェル塔第一展望台。
そこでダイゴの姿を見失ったシゾーが、悔しげにハサミを鳴らした。
当初は逃げ場のないエッフェル塔内に入った時点で追い詰めたものと思っていたが、一向に見つからない。
しかもその間に、会場にいた人間は全員避難してしまった。

「どうする？このままじゃ埒があかないよ？」

やれやれと言った表情でピトンがため息をつく。
すると、シゾーが何かに閃いた。

「そうだピョン！このエッフェル塔毎ぶっ壊すピョン！」

見つからないならエッフェル塔そのものを破壊し、押し潰してしまえばいい。
シゾーはそう考えたのだ。

「イーッヒッヒッヒ！アンタも中々頭良いじゃないか。」

「ウーッサッサッサ！裏切り者め、今に見てるピョン！」

ピトンに褒められた事もあってか、乗り気で柱をハサミで切り付けるシゾー。
そこに、鋭い声が響き渡った。

「そこまでだ！」

見ると、怪人達の前に復活した6機の光武Fが現れた。

「巴里華撃団、参上！！」

前回のシャンゼリゼの敗北から実に一週間。
一度は敗退した光が、再び戦場に舞い戻って来たのだ。

「あらら、負け犬共がやって来たピョン。」

「どうやら、自分達の立場が分かってないようだねぇ。」

シャンゼリゼの圧勝からか、余裕を見せる二人の怪人。
すると、グリシーヌが余裕で言い返した。

「どうかな？我々とて以前のままではないぞ？」

「だったら試してやるピョン。ポーン共、行くピョン！」

シゾーの命令で、周囲にポーン達が姿を現した。
やはりシャンゼリゼの時と同じく、強化されたタイプである。

「よし、敵を撃破してダイゴを救出する。みんな、行くぞ！」

「「了解！」」

迫り来るポーンの軍勢に、巴里華撃団は一斉に攻撃を仕掛けた。

「……もう始まってるみたいだな。」

下から聞こえて来る激しい戦闘の音に、ダイゴは息を殺した。
ここはエッフェル塔の第二展望台。
シゾーとピトンの追跡を撒くべく、ダイゴは階段を上ってここに身を潜めていたのだ。

「……ん？」

ふと、ダイゴの耳に微かなシグナル音が聞こえて来た。
規則的に音をならす、まるでタイマーのような……。

「まさか……！」

ダイゴはハッとして、その音の方へ近寄る。
すると、黒い箱に覆われた何かがシグナル音を発していた。
如何にもそれらしい、時限爆弾である。

「マズイ……！早く知らせないと！」

最早隠れている場合ではなかった。
一刻も早く爆弾の存在を知らせるべく、ダイゴは走り出した。

「イーッヒッヒッヒ！どうした巴里華撃団？威勢の割に弱いじゃないか。」

「ウーッサッサッサ！いい気味だピョン！」

戦闘開始から数分。
巴里華撃団は強化されたポーンの前に、苦戦を強いられていた。
前回と違い、ある程度の数は倒しているものの、それでもポーン達は手強い相手である事に変わりなかった。

「くそ……！やはり機体の性能は覆せないか……！！」

悔しげに毒をつく大神。
以前と違って多少は戦えているが、機体の性能自体は意識だけでどうにかなるものではない。
おまけに敵は次々と展望台にポーンを送り込み、倒しても倒してもキリがない。
このままではじり貧になり、前回の二の舞になってしまう。

しかし、そんな大神に救いの手を差し延べる、希望の光が現れた。

「そこまでよ！！」

その声と共に、桜色の光武が太刀を手に現れた。
風に舞う桜のごとき華麗な動きで、次々とポーンを切り伏せるその正体を、大神は知っていた。

「さくらくん！」

まさか光武まで持って来ていたとは思わず、大神は驚きの声を上げる。
しかし、助けに来たのはさくらだけではなかった。

「イリス・グラン・ジャンポール！！」

展望台の吹き抜けにテレポートしたアイリスの金色の光武が光を放つ。
すると六体のジャンポールが現れ、ポーンの猛攻に傷付いた巴里華撃団を回復させた。
更に続けざま、下の方から声が聞こえて来た。

「神崎風塵流、不死鳥の舞！！」

すみれの紫色の光武が炎を纏った薙刀を振るう。
炎はたちまちエッフェル塔の下を焼き、控えていたポーンを焼き付

くした。
遥か東の戦乙女。
頼もしき仲間達だった。

「帝国華撃団、参上！！」

「帝劇のトップスター、神崎すみれ。巴里の街にも華麗にデビューですわ！」

「加山さんの話を聞いて、光武を輸送してもらったんです。」

「あれがお兄ちゃんの敵？ウサギだ、ウサギだ～！！」

高笑いを上げるすみれと、跳びはねてシゾーを笑うアイリス。
すると、シゾーがアイリスの言葉に敏感に反応した。

「ウサギと言うなピョン！お前ら、覚悟するピョン！」

言うや、シゾーが蒸気獣『プレリュード』を召喚する。
隣のピトンも、既に『ベルスーズ』を召喚していた。

「イーッヒッヒッヒ！帝国華撃団、ここを死に場所にしてやるよ！」

「望む所ですわ！皆さん、参りますわよ！」

「はい！」

「お兄ちゃん、ウサギはお願いね！」

下に飛び降りるベルスーズを追い、展望台から飛び降りる帝国華撃

団。
すると、シゾーがニヤリと笑った。
「ウーッサッサッサ！ちょうど良いピョン。奴らを纏めて始末してやるピョン！」
「馬鹿が。そんなのアタシらが許すとでも思ってんのか？」
爪を光らせ、ロベリアが凄む。
「ウーッサッサッサ！こいつを見るピョン！」
しかし、シゾーはそのロベリアに嘲笑を返した。
見ると、プレリュードの手に何かが握られている。
赤い大きなボタンが一つあるだけの小さなスイッチ。
何か仕掛けでもあるのだろうか。
大神がそう考えた時、後ろから声がした。
「大神さん！奴にスイッチを押させないで！！」
「ダイゴ！無事だったのか！」
それは、第二展望台にいたダイゴだった。
余程急いで走って来たのか、若干息使いが荒い。
「どういう事だ？あのスイッチには何かあるのか？」
「爆弾だ。奴はこのエッフェル塔に、爆弾を仕掛けていたんだ！」
「な、何だって！？」

ダイゴの報告に驚く巴里華撃団。
一体いつの間にそんなものを仕掛けたというのか。
だとすればシゾーの余裕にも納得がいく。

「ウーッサッサッサ！もう遅いピョン。エッフェル塔諸とも、地獄に堕ちるピョン！」

勝ち誇った様子でシゾーが笑う。
しかし、ここで一つの影が動いた。
ロベリアである。

「させるかよ！」

一直線にプレリュード目掛けて突進するロベリア。
その光武F目掛けて、ポーン達が銃を発射する。
しかし、それがロベリアを妨害する事はできなかった。
何故なら、青い光武Fが盾で銃弾を弾いたからだ。
更に、そこにエリカがマシンガンの連射を浴びせた。

「今だ、ロベリア！」

「任せときな！！」

グリシーヌに返事を返し、ロベリアは血に飢えた爪でプレリュードに襲い掛かった。

「ウサッ！？」

その拍子に、プレリュードの手からスイッチが離れた。

その宙に舞うスイッチを狙い撃つべく、花火がボウガンを構える。

「くっ……。」

遠く離れた小さなスイッチを正確に狙うのは、どんなに実力のある人物でも困難。
しかし、これだけは外す訳にはいかない。
全神経を集中させる花火。
すると、その後ろに生き残りのポーンが迫った。

「えいっ！！」

それに気付いたコクリコが、横からドロップキックを叩き込む。

「見えたっ！！」

それと同時に、花火のボウガンから矢が放たれる。
矢は、寸分狂わず爆弾のスイッチを射抜き、粉々にした。

「す、凄い……！みんな、チームワークを完全にものにしているじゃないか！！」

一連の出来事を目の当たりにし、大神が驚きの声を上げた。
そこにいるのは以前の我が儘な彼女達ではない。
先達の姿に真のチームワークを学び、進化した巴里華撃団の姿だった。
これが、彼女達の真の力なのだ。
勝てる。
彼女達の姿に、大神はそう確信した。

「ウサッ！巴里華撃団、絶対許してやらないピョン！」

計画をくじかれ、地団駄を踏むシゾー。
既に周りのポーンは全滅し、自身も巴里華撃団に包囲されている。
しかし、シゾーにはまだ切り札が残っていた。

「覚悟するピョン！来い、超古代怪獣メルバ？！」

するとその直後、展望台が巨大な影に覆われた。
まさか……。
そう思い空を見上げ、巴里華撃団は戦慄した。

「ガアアアッ！！」

それと同時に響く咆哮。
かつて凱旋門で耳にしたものと全く同じだ。
そして、超古代怪獣メルバ？はその姿をエッフェル塔前に現した。

「ガアアアッ！！」

翼が二枚から四枚に増え、顔はより醜悪なものへと変わっている。
おそらくポーンと同様、カルマールによって強化されたのだろう。
メルバ？からは、以前の比ではない圧倒的なエネルギーが感じられた。

「あ、あれが大神さんの言っていた怪獣……！？」

メルバ？の出現に、巴里華撃団のみならず、下で戦っていたさくら

達も驚いた。
怪獣に相対するのは、実に3年振りの事だ。
すると、対峙していたピトンが怪しく笑った。

「イーッヒッヒッヒ。じゃあこっちも、そろそろ本番といこうかねぇ！」

「何ですって!?」

その言葉に、すみれが反応した。
まさか、シゾーのみならずピトンまでも怪獣を有しているというのか。
果たして、すみれの予想は的中した。

「見せてあげるよ。おいで、地中鮫ゲオザーグ?!!」

ピトンが叫んだ直後、今度は大地を揺るがす震動が襲った。

「こ、これは……!?」

「地面の中から、凄い力が近づいてるよ!?」

すると、程なくして地面が真っ二つに割れ、中から巨大な鮫が現れた。
ピトンの使役する地中鮫、ゲオザーグ?である。

「グオオオッ!!」

その存在を知らしめるかの如く、地の鮫は咆哮を上げた。
やはりその身体はカルマールによって強化されたようだ。

前より太くなった背鰭に、三列に連なる牙。
そして何より、太陽に照らされて平然としている。
かつて巴里を震撼させた二大怪獣が、今またエッフェル塔に蘇ったのである。

「ウーッサッサッサ！これでお前達もおしまいだピョン！」

「可愛いしもべ達。奴らを食い殺しておしまい！！」

二大怪獣は、一斉に動き始めた。

二大怪獣の復活に、巴里華撃団と帝国華撃団は絶体絶命の窮地に立たされた。
展望台をメルバ？の光線が襲い、地面をゲオザーグ？が突き進むのだ。
更にそちらに気を取られれば、シゾーとピトンが激しい攻撃を加えてくる。

「くそっ！次から次へと……！！」

そんな中、ダイゴは展望台から下に降りていた。

ここなら誰にも気付かれる事なく、変身する事が出来る。

「エリカさんは、僕が守るんだ……！」

そう呟き、スパークレンスを取り出す。
二大怪獣を相手に勝てる自信はない。
しかし、この危機を脱する事が出来るのは自分しかいないのだ。
ダイゴは勇気を振り絞り、スパークレンスを空に掲げた。

「ティガーーーーーッ！！」

「ひ、光の巨人！」

突如現れたティガに、さくらが驚きの声を上げた。
姿形は自分の知る巨人と全く違う。
しかし、ティガからもあの勇者と同じ光の意志が感じられた。

「もしかして、あれが中尉のおっしゃっていた巴里の守護神……。

」

「カッコイイ～！あれがウルトラマンティガなんだ～！！」

その神々しさに目を奪われるすみれとアイリス。

そして、ティガは目の前にいるゲオザーグ？に対峙した。

「グオオオッ！」

「チャッ！」

標的をこちらに変えて突進して来るゲオザーグ？を捕まえ、腹に重いキックを叩き込む。

すると、その勢いでゲオザーグ？は仰向けに倒れた。

「チャッ！」

すかさず馬乗りになり、激しいラッシュを加えるティガ。

だがその時、背後からメルバ？が強襲した。

「ガアアアッ！！」

「ジュワッ！？」

背中を光線で狙い撃たれ、前のめりに倒れるティガ。

すると、ゲオザーグ？はその隙に地面に潜った。

「ハッ！」

メルバ？の光線をかわし、ティガはハンドスラッシュを発射する。

「ガアッ！？」

青白い光弾は、メルバ？の右の翼を直撃した。
たちまち飛行能力を失い、地面に墜落するメルバ？。
しかし、追い撃ちをかけようとしたティガは、背後から何かにのしかかられた。

「ジュワッ！？」

「グオオオオッ！」

それは、地面に潜ったゲオザーグ？だった。
ゲオザーグ？は地面に潜り、ティガの背後に回っていたのである。
空のメルバ？と地のゲオザーグ？。
この二大怪獣にティガもまた、かつてない苦戦を強いられた。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

ティガは額のクリスタルを発光させ、パワータイプにチェンジした。
そして、のしかかっているゲオザーグ？を跳ね退ける。

「チャッ！！」

「グオッ！？」

地面を転がるゲオザーグ？を捕まえ、ティガは再度攻撃を試みる。
しかし、またしてもメルバ？が妨害してきた。

「ガアアアッ！！」

マッハ6のスピードによる体当たり。
ゲオザーグ?に気を取られていたティガに、それを避ける余裕はなかった。

「ジュワッ!?」

およそ7万トンの重さを誇るパワータイプのティガが、高々と宙に舞い上がる。
そして、地面にたたき付けられたティガをゲオザーグ?が追撃した。

「グオオオオッ!」

「チャッ!」

しかし、今度はティガも身構えていた。
後ろから来たゲオザーグ?の口を掴み、持ち上げようとする。
だが次の瞬間、ゲオザーグ?はとんでもない方法で反撃して来た。

「グオオオオッ!」

何と、口から巨大な火球を吐き出したのである。
超高温の火の玉が、至近距離からティガにぶつけられた。

「ジュワッ!?」

たまらず手を離したティガを跳ね飛ばすゲオザーグ?。
そして、起き上がるティガを今度はメルバ?が突き飛ばす。
まるで玩具のような扱いに、ティガは大ピンチに陥った。

「ウーッサッサッサ！これでウルトラマンティガもおしまいだピョン！」

勝ち誇った様子でシゾーが笑った。
その奥では、二大怪獣に翻弄されるティガの姿がある。
既にエネルギーが尽きかけているのか、カラータイマーが赤く点滅を始めていた。

「どうしましょう大神さん、このままじゃティガが……！」

「くっ……！」

エリカの声に、大神は焦りの表情を浮かべた。
すると、下から声が聞こえて来た。

「負けないで、ティガ！！」

「さ、さくらくん！？」

それは、下でピトンと戦っているさくらだった。

さくらは、ピトンの攻撃をかわしながら必死にティガに訴えかけた。

「あたしには分かるわ！貴方にはあの人と同じ、光がある事を！お願い、立って！！」

「チャッ……。」

さくらの言葉に胸を打たれたか、ティガはよろけながらも立ち上がった。

そして、再び額のクリスタルを発光させる。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

そして、パワータイプからスピードのスカイタイプにチェンジし、空へと飛び上がった。

「ガアアアアッ！」

待ち受けていたメルバ？が、目から光線を発射する。

しかし、スピードに勝るスカイタイプのティガは難無くそれをかわし、超高速のティガスカイキックを叩き込んだ。

「ガアアアアッ！」

大きく後ろに蹴り飛ばされるメルバ？。

ティガは間髪入れず、地面にいるゲオザーグ？に視線を移した。

「グオオオオッ！！」

ゲオザーグ？は大きく首を擡げ、ティガ目掛けて火の玉を吐き出し

て来た。

「ハッ！」

ティガはそれを回転してかわし、そのまま急降下で勢いをつけたティガスカイキックをゲオザーグ?に炸裂させた。

「グオッ！?」

仰向けに倒れるゲオザーグ?。
ティガはカラータイマーに右手を当て、凍てつくティガフリーザーを放った。
たちまちの内に全身が凍りつくゲオザーグ?。
しかし、そこに蹴り飛ばされたメルバ?が戻って来た。

「ガアアアッ！！」

ティガ目掛けて急降下するメルバ?。
それを見て、ティガは三度額のクリスタルを発光させた。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

スカイタイプからマルチタイプにチェンジし、ティガは胸のティガブレスターに両手を添えた。
ティガスライサー……、ブレスターの形を模した青白いカッター状の光線を生み出し、敵は断ち切るマルチタイプの切断技だ。

「ハッ！」

ハンドスラッシュに似た青白い光線が、メルバ?目掛けて発射され

た。
メルバ？はそれに気づくが、自身のスピードが早過ぎて間に合わない。

「ガアッ！？」

スライサーはメルバ？の左側の二枚の翼を切り裂いていた。
完全に飛行能力を失ったメルバ？は、失速して落下する。
その真下には、氷漬けになったゲオザーグ？がいる。
メルバ？は、そのままゲオザーグ？を押し潰す形で地面に激突した。
氷漬けのゲオザーグ？は、その衝撃に耐え切れず粉々に砕け散った。

「ガアッ！？」

またしてもやってしまったという表情を見せるメルバ？。
それを一点に見据え、ティガは胸の前で両手を合わせ、左右に広げた。
すると、その軌道に沿って光の筋が現れ、エネルギーが集約される。

「ハッ！！」

L字に組まれた腕から、必殺のゼペリオン光線が発射された。
まばゆい光線は、一直線にメルバ？に炸裂する。

「ガアアアア……！！」

全身を光に包まれたメルバ？は、最期の咆哮と共に仰向けに倒れ、
そのまま大爆発した。

「そ、そんな馬鹿な!?アタシの可愛いゲオザーグ?が、またやられたって言うのかい!?」

ペットの最期を目の当たりにし、ピトンが狼狽した。
カルマールによって、その力を以前の数倍にまで高められたはずのゲオザーグ?が、またしてもティガに破れるとは。

「それが、光の力よ!」

凛と響く声がした。
ハッとして振り返るピトンの眼前には、桜色の光武が太刀を振りかぶる姿があった。

「破邪剣征……、百花繚乱!!」

刹那、桜の花びらを巻き上げながら、一閃の鎌鼬が襲い掛かった。

それと時を同じくして、シゾーもまた驚きを見せた。

「ウサッ!?ありえないピョン!オイラのメルバ?が負けるなんて……!!」

「我等を甘く見た結果だ。シゾー、貴様の命運もここまでだな!」

斧を構え、グリシーヌが叫ぶ。

ティガによって怪獣が倒された今、ポーンを全滅させられて孤立したシゾーの命は風前の灯だった。

「ええい、五月蝿い!五月蝿いピョン!」

その現実を認めたくないのか、シゾーは喚きながらハサミを突き出した。

「こうなったらお前達纏めて片付けるピョン!」

そう叫んで襲い掛かるシゾーだが、冷静さを失った状態では無謀な突撃にしかならない。

「狼虎滅却……、刀光剣影!!」

稲妻を帯びた大神の二刀が、すれ違いざまにプレリュードを×の字に切り裂いた。

「クワッ……!せっかく復活したのに、またやられるなんて……!」

「納得できないピョ～ン！！」

エッフェル塔を恐怖のどん底に陥れた二人の怪人は、無念の叫びと共に大爆発した。

「みんな、大丈夫だったか？」

戻って来たさくら達に、大神が尋ねた。
僅か三人でピトンを相手にしたのだ。
苦戦しなかったはずがない。
しかし、三人は爽やかな笑顔を見せた。

「うん！アイリス全然平気だよ？」

「アハハ、凄いやアイリス。さっきは助けてくれてありがとう。」

胸を張るアイリスに笑いながら礼を述べるコクリコ。
すると、隣に立つすみれが言った。

「この私達にかかれば、朝飯前ですわ。」

「流石だ。これからも後輩として、学ばせてもらうぞ。」

いつもの調子のすみれに、笑顔を返すグリシーヌ。
以前なら憎まれ口の一つでも叩いた彼女を考えれば、意外な発言だ。

「それでは皆さん、いつものやりませんか？」

「いつもの？……ふふっ、大神さん巴里でもやってるんですか？」

意外そうに笑うさくら。
すると、大神は笑顔で答えた。

「ああ、そうさ。みんな、行くぞ？せーの……！」

「勝利のポーズ、決め！」

「みんな、揃ってくれたみたいだね。」

楽屋に集まった顔を見渡し、大神が言った。

今日はさくら達の来仏最終日。
昼には巴里を発つという三人を含め、大神は八人をシャノワールに集めたのである。

「大神さん、話って何ですか？」

「実は今朝、コンテストのトロフィーが届いたんだ。」

さくらが尋ねると、大神が背中に隠し持っていたトロフィーを見せた。
金色のエッフェル塔を象ったトロフィーは、中々に威厳が漂う。
昨日の騒ぎで表彰式がお流れになったため、主催者が輸送してくれたのだ。

「それで大神さん、優勝は？」

今度は花火が緊張した面持ちで尋ねる。
すると、大神はにこやかに答えた。

「それが、帝国華撃団と巴里華撃団のダブル優勝だそうだ。おめでとう！」

そう言って、テーブルに優勝トロフィーを置く大神。
見ると確かに、優勝チームの欄に両方の名前が彫ってある。

「何だかいい加減だな。まあ、悪い気はしないけどね。」

口調と裏腹に笑うロベリア。
すると、それに釣られてその場にいる全員が笑った。
帝国華撃団との間に結んだ絆。

その強さを物語るように、九つの笑顔はどれも等しく輝いていた。

「……。」

その頃、シャノワールの前に佇む一つの影があった。

「……ようやく見つけたよ……ティガ……。」

影はニヤリと笑い、そのまま雑踏の中に姿を消した。

花の都に桜舞う（後書き）

《次回予告》

私って本当にドジ……。

みんなの足は引っ張るし、ダイゴさんにも嫌われちゃうし……。

私なんて……。

次回、サクラ大戦3！

《裏切りの果てに》

愛の御旗のもとに……

僕に……、笑顔をくれた人だから……

裏切りの果てに・前編（前書き）

４万字越えにつき、前後編分け。
元々一本のストーリーを急遽割ったので、次回予告は無しです。

裏切りの果てに・前編

その日、ダイゴは朝早くから教会に来ていた。

「おはよう、神父様。」

「ああダイゴさん。……おはようございます。」

いつものように交わす挨拶。
しかし、いつになくレノ神父の顔色が優れない様子に、ダイゴは気付いた。

「神父様、どうしたの？なんか元気ないみたいだけど……。」

すると、レノ神父はため息をついて答えた。

「はい……、最近エリカさんが妙に張り切っていると……。」

「……ああ。」

ダイゴは、納得したように呟いた。
エリカは張り切っている時に限って失敗をやらかすというジンクスがある。
そのエリカが張り切っている事は、ダイゴやレノ神父にとって何とも不安な事だった。

「一体何があったんでしょうか？エリカさんが張り切るなんて……。」

首を傾げるレノ神父。
しかしダイゴには、簡単に答えが分かった。

「大神さんだよ。エリカさん、大神さんがいるとすごく元気になるんだ。」

「なるほど……、大神さん。確かにエリカさんは、大神さんと仲がよろしいですからね。」

納得したように頷くレノ神父。
しかし、ダイゴは納得できない表情で俯いていた。

「（そうだ……。エリカさんは僕よりあいつがいいんだ……。）」

エリカの輝いた表情。
あれは今まで自分が見る事のできなかった表情だ。
それを見せるという事は、それだけ大神が大切な存在であるという事。
そして、あのデート騒ぎの時のように、自分は彼女を傷つけてしまう事を。
それを分かっていながら、ダイゴはエリカとの関わりを断ち切れずにいた。

「（エリカさん……。僕は、どうしたらいいんだろうね……。）」

自嘲するように、ダイゴは笑った。
すると、レノ神父が声をかけた。

「ダイゴさん。辛そうな様子ですが、どうかされましたか？」

「え？いや、何でもないよ……。」

「そうですか。……それでは、エリカさんの事をお願いできますか？」

適当にはぐらかすダイゴを気にしつつも、レノ神父はダイゴにエリカのフォローを依頼した。
特に理由はない。
今までがそうだったからだ。

「うん。それじゃ、行ってきます。」

そしてダイゴも、いつものように教会を後にした。

「ダイゴさん……、まだ本当の事を話されてないのですね……。」

ダイゴの姿がなくなった後、レノ神父はふと呟いた。
今は亡き#ダイゴの父が残した秘密。
それを継いで光になった事を、ダイゴはまだ自分以外の誰にも話していない。

「心に嘘を抱えているのは、辛いでしょうに……。」

そうため息をついた時だった。
ふと教会の入口から返事が返って来たのだ。

「それは、あなたも同じでしょう？神父様。」

「おや、ピエールさん。」

そこにいたのは、ダイゴの親友となったピエールだった。
いつものような笑顔で、ピエールはレノ神父に近づいて来る。

「聞きましたよ？エリカさんの事。早く伝えてあげないと。」

「た、確かにそうなのですが……、ハイ。」

ピエールに言われ、レノ神父は言葉を失った。
人の事は言えない。
実はレノ神父も、エリカの事で秘密にしている事があったのだ。

「ちゃんと伝えてあげないと、悲しむのはエリカさんなんですから。」

「そう……ですね。やはり、伝えた方が良いのかも知れませんね、ハイ。」

今まで黙っていた分、中々言いづらい事になってしまったが、後になればなる程悲しみは大きくなる。
そんな事を考えていたレノ神父は、後ろで笑うピエールの様子がいつもと若干違う事に気付かなかった。

「……ここか。」

その頃、大神の姿はシャノワールから程近いテルトル広場にあった。
グラン・マの話によれば、ここが特別コーチとの待ち合わせ場所だった。
あれから敵の強大さと帝国華撃団の強さを痛感した巴里華撃団は特訓を行う事を満場一致で決定し、そのための特別コーチをグラン・マに呼んでもらったのである。
そして、大神が出迎えに来た訳なのだが……。

「そろそろ時間だな……。」

腕時計を見て呟く大神。
すると、大神の耳に聞き慣れた声が聞こえて来た。

「誰か～、メロンを止めてぇ～」

「……メロン？」

すると、坂の方からメロンが転がって来た。

「エ、エリカくん？」

まさかと思い上を見ると、予想通りの光景が広がっていた。

「私も止めてぇ〜!!」

そこには、メロンに混じって坂を猛ダッシュで駆け降りて来るエリカの姿があった。
大神は驚きつつも、エリカを助けるために飛び出した。

「エリカくん!俺が受け止めるぞ!」

「大神さん!任せましたぁ〜!!」

言うや、エリカはそのままのスピードで大神に飛び込んで来た。
その勢いで、大神はエリカに押し倒される形で広場に倒れる。

「あたたた……、今日のエリカくんは、いつにも増して凄かったな。」

「ご……、ごめんなさい、大神さん……。」

やはりこの体勢が恥ずかしいのか、エリカも顔を赤くして大神から離れる。
すると、大神の目によく知る人物で、かつ今一番会いたくない人物が写った。

「ダイゴ!?」

「え!?ダイゴさん?」

そこには、引いた目で二人を交互に見るダイゴの姿があった。
何か誤解しているらしく、表情はショックで引き攣っている。

「……そっか。道端でやるくらいになったのか。」

「い、いや違う！これは違うぞダイゴ！」

必死に弁解を試みる大神。
その時だった。
巴里の街に不釣り合いな、尺八の音色が聞こえて来たのだ。
見ると、大神達の前に大きな虚無僧の姿があった。

「こ、虚無僧？何でこんな所に？」

こんな時代に、しかも虚無僧など巴里にいるはずがない。
不思議に思う大神の耳にまたしても聞き慣れた声が聞こえて来たのは、その時だった。

「……隊長、お久しぶりです。」

「そ、その声はまさか！？」

えらく畏まった言葉遣いと、特徴的なハスキーボイス。
聞き違うはずがない。
そして、虚無僧が深編笠を取り、その後ろから二人の人物が顔を出した。

「よ、大神はん！久しぶりにおもろい事してるやないか。」

「だらしねぇな、隊長。ちゃんと飯食ってるのか？」

「マリア・タチバナ、桐島カンナ、李紅蘭、ただいま着任しました。」

それは、帝国華撃団の最古参メンバー、マリア、カンナ、紅蘭だった。

「みんな、来てくれたのか。」

つい先日さくら達が来たばかりなのに、また帝都時代の仲間に会えるとは夢にも思わず、大神は喜びの表情を見せた。

「……でも、何で虚無僧なんだ?」

ふと、大神が虚無僧の格好をしていたカンナに尋ねる。
すると、カンナは昔らしく笑って答えた。

「ああ。あたいら、特別コーチとして来たからな。特訓の前に下調べをしとこうと思ってよ。」

「巴里華撃団のメンバーと、それぞれの特徴は、十分に分かりました。」

「それに、大神はんの様子も分かったみたいやしな。」

先程のエリカとのやり取りがやはり不服なのか、大神を肘で突く紅蘭。
すると、ここで再び不自然に興奮する人物がいた。
誰あろう、エリカである。

「きゃあ〜〜〜!!東京の花組の皆さぁ〜ん!」

「エリカさん!エリカさんってば!落ち着いてってば!!」

先日のさくら達の時と同様、今にも飛びつこうとするエリカを必死に止めるダイゴ。
そのエリカの様子に、花組メンバーはまたもドン引きした。

「な、なんだこのイキナリな奴は!?」

「……エリカくんだ。みんなにコーチしてもらう、巴里華撃団の隊員なんだよ。」

「そ、そうなんか。……なんや、難儀そうやなあ。」

ため息をつきながら説明する大神を気遣い、紅蘭が目を丸くする。

「でも、何で皆さんが東京に?巴里観光ですか?」

「で、ですから……、あなた達の特別コーチとして……。」

またもぶっ飛んだ事を言い出すエリカに、律儀に答えるマリア。
しかし、少なくとも今のエリカに常識は通用しなかった。

「特別コーチ!?つまり皆さんが、私達に特別コーチして下さる訳ですね!?」

「そのまんまやないか……。」

呆れた様子でため息をつく紅蘭。
すると、マリアが大神にぼやいた。

「隊長……、手強そうですね……。」

「頼むよ……、マリア達だけが頼りだ……。」

マリアの言葉に、大神はそう返事を返すしかなかった。
巴里華撃団の特訓は、難航しそうである。

それから一週間が過ぎ、特別コーチ三人と大神は支配人室にいた。
今日は特訓の最終日。
大神立ち会いのもと、特訓の成果を確認する簡易テストが行われた。

「……で、どうなんだい？あの娘達の成果は。」

グラン・マが尋ねると、マリアが成績表を見せた。

「はい。巴里華撃団全体としては、予想を上回りました。ですが……、」

歯切れの悪い返事を返しつつ、マリアは続けた。

「エリカ・フォンティーヌだけは、全ての訓練において合格ラインに到達していません。」

今回の特訓は三項目。
状況判断、実戦、光武F操縦だ。
テストはそれぞれ形式を変えており、状況判断は論述式のペーパーテスト。
実戦はペイント弾によるサバイバルテスト。
光武F操縦は紅蘭オリジナルのシュミレーターを使用した一連の操縦テストだ。
概ね結果は良好なのだが、エリカだけはひどい結果であった。
まず、ペーパーテストは『神に祈ります！』という一文で終わっているし、サバイバルテストは2秒で規定の三回ペイント弾を喰らって失格になっているし、シュミレーターテストに至っては、発進すらできなかった程である。
確かにこの成績で、合格を言い渡す事はできなかった。

「確かに、これはひどいな……。」

流石の大神も、エリカの成績にフォローができない。
すると、ここで紅蘭が助け船を出してくれた。

「せやけど大神はん、エリカはんを責めんといてな。花組の強さは、霊力だけちゃうやろ？」

「そうだぜ、隊長。アイツが何かすると、その場が明るくなるんだ。それって、成績より断然すげぇ才能だぜ？」

紅蘭の言葉を付け加えるように、カンナが笑った。
確かに失敗だが、そのおかげで場の空気が和んだのも事実。
それが他のメンバーの好成績に結び付いているならば、エリカも十分活躍したと言えるはずだった。
それは、大神も同じだった。

「もちろんさ。エリカくんには彼女にしかない素晴らしさがある。俺もよく知っているよ。」

エリカは自分より先に巴里華撃団にいた。
今まで誰よりも長くこの組織に属した人物だ。
そして、誰よりも人助けに燃える優しさを持った人物だ。
そんな彼女が、大切な仲間でないと何故言えようか。

「エリカの事は、隊長に任せるしかねぇな。あのドジは手強そうだが。」

「加えて言えば、内に秘めた霊力も……ですが。」

「どういう事だい？」

マリアの口にした意味深な一言に、グラン・マが反応した。
すると、マリアが真顔に戻って説明を始める。

「あくまでも私の直感ですが、エリカの霊力は、まだ完全に目覚めていないと思います。」

「本当かい？」

「はい。奥の深さを感じるのです。全てを包み込むような、大きな優しさに満ちた力を。」

マリアの言葉に、大神はハッとした。
エリカの治癒能力。
その力は、生身の状態でもかなりのものがある。

帝国華撃団に当て嵌めるなら、アイリスが近い。
確かアイリスも、幼さが手伝って花組一の霊力を誇っていた。
ともすれば、エリカも同様に高い霊力が眠っているかも分からない。
大神とはまた違った目線で人を見る事の出来る、マリアだからこその見解だった。
大神は改めて、彼女達に心の中で感謝した。

それからしばらく、ダイゴはシャノワールに来ていた。
夜になっても戻らないエリカを、レノ神父が心配したためだ。
エリカが特訓で遅くなっている事を知っているダイゴはそうでもないのだが、最近やたらと張り切っている事もあり、様子を見に行く事にしたのである。

「……にしても、シャノワールの地下ってこうなっていたんだ。」

始めて地下に通じるエレベーターに乗り、ダイゴが呟いた。
エリカはマシンガンを使うので、地下で特訓していると考えたのである。

「あ、着いた。ここかな……？」

とりあえず一番下の階で降りるダイゴ。
しかし、残念ながらそこは格納庫だった。

「あら、どちら様かいな？」

ふと、入口にいたチャイナドレスの女性が声をかけて来た。

「あれ……、確か紅蘭さん……だよね？」

先週広場で出会った時の事を思い出し、ダイゴが尋ねる。
すると、紅蘭もダイゴに気付いた。

「何やダイゴはんやないか。こないな所までどないしたん？」

「うん。実はエリカさんを探してて……。」

すると、紅蘭は何かを読み取ったように頷いて答えた。

「エリカはんな……、確か大神はんと二人で特訓や言うてたで？」

すると、ダイゴは紅蘭の口にした『二人』という言葉に反応した。

「二人で……？」

「そうや。……もしかしてダイゴはん、大神はんに嫉妬してるんちゃう？」

刹那、ダイゴの肩がビクッと震えた。
確かに紅蘭の言う通り、ダイゴは大神とエリカのそれらしい関係に

ある事に嫉妬し、ヤキモチを焼いていた。
そのせいで、エリカを傷つけた事もある。
すると、紅蘭は優しい笑みを浮かべてダイゴに語りかけた。

「ダイゴはん、ホンマにエリカはんが好きなんやね。」

「え!?あ、いや、まあ……。」

ズバリ言い当てられて驚きはするものの、否定はしないダイゴ。
否定した所で、どうせこの人はすぐ見抜く。
そう思ったからだ。

「せやけどダイゴはん……。そんな心配はないで?」

「え?」

ふと、紅蘭が意外な事を口にした。
心配ないとは、どういう事なのだろうか。

「簡単や。大神はんは、エリカはんに色目やら使っとらん。多分始めからな。」

「な、何でそんな事分かるの?」

ダイゴが当然とも取れる質問を投げかけた。
すると、紅蘭は小さく笑った。

「見た方が早いで。ほれ。」

そう言って、紅蘭が左手をダイゴに近付ける。

見ると、薬指に一つ、指輪が嵌めてあった。

「こ、これってもしかして……！！」

「そうや。ウチと大神はんの、婚約指輪や。」

その言葉に、ダイゴは仰天した。

まさか大神に将来を約束した人がいたとは、夢にも思わなかったからだ。

「じ、じゃあエリカさんとよく一緒にいるのは……？」

「何や、大神はん巴里でも相変わらずなんやなぁ～……。」

ダイゴの言葉に、紅蘭はやれやれと肩を竦めて見せた。

「ダイゴはん。大神はんはな、正義感が強くて優しいお人や。せやけど、たった一つだけ大神はんにも弱点があるんや。」

完璧な人間などこの世には存在しない。

人間である以上、必ず一つは欠点が存在するはずである。

それは、大神でも同じだった。

「大神はんはな、人一倍女性の涙っちゅうもんを見たがらないお人なんや。女性が傷付くんに、耐えられんお人なんや。」

良く言えばフェミニスト。

悪く言えば優柔不断。

それが、紅蘭の挙げる大神の唯一にして最大の欠点だった。

「加えて大神はんは恋愛に鈍感やからな。あんなんで、本人はウチ一筋や思っとるんやで？」

驚きの連続で、ダイゴは声も出なかった。
つまり自分は、大神とエリカがいい関係にあると勝手に思い込み、勝手に嫉妬していた事になる。
そう思うと、今まで大神に接して来た自分の態度が恥ずかしくて仕方がなかった。

「僕……、大神さんに謝らなきゃ……。」

「ええってそんなん。誤解させる大神はんが悪いんや。」

紅蘭は笑顔を崩す事なく、ダイゴの肩に手を置いた。

「せやからダイゴはん、まだ諦めたらアカン。大神はんの事はウチが保障するさかい、エリカはんをモノにしてみ。」

「……、うん！ありがとう、紅蘭さん！」

大神は単に優しいだけ。
紅蘭が教えてくれた真相に、ダイゴは胸の中に渦巻く黒い感情が消えていくのを感じた。

その頃、大神はエリカとの特訓を終え、カンナがいるという厨房へ向かった。
そこには、コクリコから大量の果物を貰い、ガツガツと食べるカンナの姿があった。

「カンナ、相変わらずよく食べるね……。」

「ああ、コクリコの奴が、色々くれるんでな。」

りんごを頬張りつつ、カンナが答えた。
カンナは姐御肌な性格から、帝劇時代から子供に絶大な人気があり、アイリスも懐いていた。
どうやらコクリコも、同じようにカンナに懐いたらしい。

「カンナって何でも美味しそうに食べるよね。友達のクレオパトラにそっくりだよ。」

懐かしむようにコクリコが呟く。
すると、カンナが瞳を輝かせた。

「クレオパトラ!?絶世の美女じゃねぇか!あたいも捨てたもんじゃないね!」

「クレオパトラって、サーカスの団員さんかい?」

大神が尋ねると、コクリコは首を振った。

「ううん、違うよ。クレオはボクと一緒にマジックをした動物なんだ。」

「でもよ、名前がクレオパトラなら綺麗な動物だよな？」

中々人に美人と言われる事がないためか、カンナが期待を込めた眼差しでコクリコを見る。

すると、コクリコは満面の笑みで答えた。

「うん！クレオは美人のゴリラなんだよ！食べてるとこなんか、もう本当カンナそっくりなんだから。」

コクリコ自身は褒めてるつもりなのだろう。

しかし、カンナにゴリラという言葉は禁句だった。

「ゴ、ゴリラ！？あたいがか！？」

大神の予想通り顔を凍りつかせるカンナ。

それもそのはず。

何故ならカンナは、すみれに毎日のようにゴリラ女と呼ばれて喧嘩していたのだ。

このコクリコの一言、殴られてもおかしくはなかった。

「す、済まないカンナ。コクリコに悪気はないんだ。」

「分かってるさ。すみれと違ってあんな顔されてちゃ、怒る気にもなれねぇよ。」

空気を読んで謝る大神に、カンナは苦笑いを返した。

すみれは完全に馬鹿にして言ってくるが、コクリコは違う。
本当にクレオが好きで、カンナも同じくらい好きと言っているのだ。
そんな少女に、どうして怒る事ができようか。
すると、カンナは帝劇では絶対やらないであろう姿を見せた。

「ウッホッホ、ウッホッホってか？コクリコ、お前本当にクレオが好きだったんだな。」

何と、コクリコの前でゴリラの真似をして見せたのである。
内心似てると思った大神だが、報復が怖いので口には出さない。
すると、後ろで皿が割れる音がした。

「ん？花火くん。どうしたんだい？」

見ると、驚いた表情で固まった花火が厨房の入口に立ち尽くしていた。
足元に割れた皿の破片がある事から、花火が皿を落としたと分かる。

「あ、あの……、カンナさんも日本人ですよね？」

怖ず怖ずと確認するように花火が尋ねた。

「ああ、日本人だよ？」

「では、やはりカンナさんも大和撫子なんですか？」

その言葉に、大神はようやく花火が驚いた理由が分かった。
大和撫子とは、奥ゆかしくもの静かで上品な、日本の女性を表す言葉だ。
しかし日本を知らない花火には、日本人が全て大和撫子に当て嵌ま

る先入観がある。
その先入観からして、どう見ても大和撫子と言うより豪放磊落と言う言葉が似合うカンナが先入観と矛盾したのである。
確かにカンナは大和撫子とは言えないと思う大神だが、報復が怖いのでやはり口には出さない。

「あたいはあたいさ。日本人がどいつもこいつも大和撫子って訳じゃないんだぜ？」

「そうなのですか？日本には行った事がありませんでしたから……。」

「じゃあ、日本の事教えてやるよ。こっち来な。」

「は、はい……。」

カンナに手招きされるまま、話に加わる花火。
その一方で、大神はステージに向かったマリアが気になった。
確かロベリアがダンスを見てもらうと言っていたが……。

「（マリアとロベリアか……、何か嫌な予感がするな……。）」

共に裏の世界を生きて来た二人。
何となく胸騒ぎがした大神は、急ぎめにステージへ向かった。

「……待ってたよ、マリア先輩。……いや、クワッサリーと呼ぶべきか？」

ステージに来たマリアに放ったロベリアの一言は、それだった。
その一言に、マリアは驚きもせずに目を細める。

「やはり、私の名前を知っていたのね。流石は巴里の悪魔かしら？」

ロベリアの名前が出た時点で、ある程度の予測は出来ていた。
『火喰い鳥のマリア』と、『炎使いのロベリア』……。
裏で有名な者同士で何をするかは分からない。
ただ一つ確かなのは、目的は明らかにダンスではないという事だ。

「最近ピリピリした空気が恋しくてね。ちょっとばかり相手をして貰おうか。」

「それはそれは。随分な命知らずね。」

ロベリアの焼き尽くす視線に、マリアの凍てつく視線が向けられる。
すると、ロベリアは楽しげに笑った。

「何、霊力を使う事じゃねぇよ。アンタとアタシ……、どっちが殺しのプロか知りたいだけさ。」

「……正気の沙汰とは思えない言葉ね？」

和気あいあいとしたシャノワールの空気は一転し、冷たい空気がス

テージを支配する。
大神がやって来たのは、その時だった。
「二人共、どうしたんだ？やけに殺気立っているが……。」
何かは分からないが、少なくともダンスをやる空気でない事は確かだ。
すると、ロベリアが怪しく笑ったまま言った。
「アンタは黙ってな。これはゲームなんだからさ。」
「ゲーム？私には殺し合いにしか聞こえないわ。」
いつになく低い声で、マリアが言った。
「どういう事なんだ、マリア？」
「私の銃と彼女のナイフ、どちらが上か試してみたいというのです。」
「ルールは簡単。相手を動けなくさせれば勝ちだ。」
マリアの説明に付け加えるようにロベリアが言った。
その顔は、今から始まる狂気のゲームが楽しくて仕方ないといった様子だ。
「そんな事は認めないぞ！怪我をしたらどうする！」
至極当然の反応を示す大神。
仲間同士が殺し合うなど、絶対にあってはならない。

しかし、そこに現れた人物は反対の意見を述べた。

「話は分かった。私が立会人をやろう。」

それは、何とグリシーヌだった。

やはり決闘というものが、彼女の中のバイキングの魂を揺るがすのだろうか。

「ルールを変えよう。隊長の頭の上にりんごを乗せ、それを撃ち抜く。……良いな？」

「ち、ちょっと待て！何で俺なんだ！？」

慌てて反論する大神だが、ロベリアは笑って了承した。

「何慌ててんだ？アンタなら運が味方についてるだろ？」

「……説得も無理のようね。」

それまで無言で事の成り行きを見守っていたマリアが、低い声で言った。

「隊長、隊長は私が守ります。」

「た、頼むぞ、マリア……！」

頭にりんごを乗せられ、固まる大神。

その様子に頷き、グリシーヌは一枚のコインを取り出した。

「コインが地面に着くのが合図だ。……行くぞ！！」

グリシーヌがコインを弾き、宙を舞う。
その一瞬、マリアはロベリアの手にあるナイフを見た。

「（複数投げる気ね……。）」

おそらくトランプのテクニックを応用したのだろう。
ロベリアの手の中には、見えているナイフの他に三本のナイフが隠れている。

「今だ！」

「そこっ！」

ナイフと銃弾が打ち出されたのは、ほぼ同時だった。

「うわあっ……！！」

眼前に迫るナイフと銃弾に、思わず目を閉じる大神。
しかし、目を開けば心配そうに見つめるマリアの顔が見えた。

「大丈夫でしたか、隊長？」

「あ、ああ。助かったよ。」

冷や汗を拭いつつ、マリアに礼を述べる大神。
すると、ロベリアが口を開いた。

「……で、りんごを撃ち抜いたのは？」

「ロベリアだ。……だがこの勝負、マリアの勝ちとさせてもらう。」

「……どういう事だ？」

グリシーヌの判定に、俄かに表情を不機嫌なものに変えるロベリア。
すると、グリシーヌはロベリアの眼前にナイフを突き付けた。

「このナイフを見ろ。マリアは隊長に当たるはずのナイフを撃ち落としている。」

「最初からやる気ゼロってか？……付き合ってらんんぇな。」

心底呆れた様子でロベリアが鼻を鳴らした。
おそらくマリアの事、最初から勝負するつもりなどなかったのだろう。

「……にしても隊長、アンタ何でナイフを避けなかったんだ？」

「簡単さ。マリアは絶対にナイフを撃ち落とす。そう信じていたからな。」

ロベリアの問いに、大神は即答した。
確かに避けるのが一番早いさ確実だ。
しかし大神は、それをマリアを裏切る行為と考えていた。
まあこの状況では、大神の方が命知らずな訳だが。

「チッ、面白くない……！」

「私も失礼する！」

大神の答えが不満だったのか、二人は足早にステージを後にした。

「二人とも、一体どうしたんだ？」

二人の様子に首を傾げる大神。

すると、マリアが尋ねた。

「隊長……、分かりませんか？」

「え？何の事だい？」

「なら、いいです。」

相変わらず鈍感な大神にため息をつき、マリアもステージから消えた。

残った大神は、二人の行動にひたすら首を傾げるしかなかった。

シャノワールの屋根裏部屋。

何もない殺風景なその部屋に、エリカの姿があった。

その表情は、いつになく暗く沈んでいる。

「私……、やっぱりみんなの迷惑なのかな……。」

誰もいない空間で、エリカは一人呟いた。
みんなで強くなると誓った特訓。
しかし、みんながメキメキと力を伸ばす中、自分だけは散々な結果になってしまった。

「あ～あ、嫌だな。どうすればいいんだろう……。」

一人呟くエリカに、答える者は、いなかった。

マリア達が巴里を後にしてから3日が経った。
巴里の街には雨が降り続け、憂鬱な時間が流れる。

「大神さん、夜に申し訳ありません。」

レノ神父がシャノワールを訪れたのは、そんな雨の降る夜の事だった。
隣には道案内か、エリカの姿もある。

「大神さん、折り入って話があるのです。」

客席に案内されたレノ神父は、いつになく神妙な面持ちで話し始めた。

「実は、エリカさんは半年も前に、修道院をクビになっているんです。」

「クビ？どういう事ですか？」

初めて耳にする話に、大神は聞き返した。

レノ神父もクビにした事に負い目を感じているのか、俯いて大神を見ようとしない。

「エリカさんは優しい心をお持ちで、シスターの鑑です。しかし、彼女はどうしても失敗が目に余るのです、ハイ。」

それから、レノ神父は大神にこれまでのエリカの話を聞かせた。

掃除をすれば女神像を壊し、草むしりをすれば花まで抜き、炊き出しを手伝えば不幸な人が更に不幸になり……。

「ですから大神さん。エリカさんに、もう修道院に来ないよう伝えていただきたいのです、ハイ。」

「そんな！エリカくんに非はないじゃないですか！」

大神はすかさず反論した。

確かにエリカのドジは目に余る。

だがしかし、彼女の行いが完全にマイナスになった事は一度もない。

寧ろ彼女の様子は、見ていて微笑ましいものだ。

しかしその時、真後ろから物音が聞こえて来た。

「エ、エリカくん!?」

大神は仰天した。
何とそこには、玄関で待っているはずのエリカの姿があったのだ。
おそらく話を聞いていたのだろう。
エリカの顔にはショックがありありと窺えた。

「エリカくん、待つんだ!!」

大神が必死に叫ぶ。
しかし、エリカは大神に背を向け、シャノワールを飛び出した。

「エリカくん、戻って来い!エリカくん!」

雨の中、外に飛び出したエリカを名前を呼ぶ大神。
すると、その声に他の隊員達が集まって来た。

「どうした、隊長。エリカが来ていたのか?」

「ああ……、実は……。」

「……遅いね、エリカさん。」

窓の外に流れる空の涙を眺めつつ、ダイゴが呟いた。
既にエリカとレノ神父がシャノワールに向かって小一時間。
いくら何でも遅い。

「大丈夫さ。向こうにはムッシュ大神がいるんだから。きっと話で盛り上がってるよ。」

ダイゴとは対称的に、寛いだ様子で答えるピエール。
しかし、ダイゴは妙な胸騒ぎがしてならなかった。
まるでエリカが、本当に手の届かない所へ消えてしまうような気が。

「何処行くの？」

ふとその場を離れるダイゴにピエールが尋ねる。

「うん……、ちょっとね。」

そう曖昧な返事を残し、外に出るダイゴ。
ピエールはしばらく開け放された扉を眺めた後、低い声で呟いた。

「……仕方ないな……。」

外は、一段と激しい雨が降りしきっていた。
その勢いは、雨というより水の散弾銃である。

「おかしい……。エリカさん、いくら何でも遅すぎる……。」

今思えば、最近のエリカは際立って様子が変だった。
マリア達がいた頃は張り切っていたのに、いなくなった途端に元気を無くしていた。
特にこの3日間は、シャノワールにすら顔を出さなかった程だ。
そのためにエリカに話し掛けられず、自分もまたエリカと距離がある事を、ダイゴは危惧していた。

「ダイゴさん！何故外に？」

「レノ神父様！！」

レノ神父の声が聞こえて来たのは、その時だった。
無事に帰って来たと安堵の表情を見せるダイゴだが、次の瞬間にはその表情が消えた。
何故ならそこにはレノ神父しかおらず、肝心のエリカの姿がなかったからである。

「し、神父様？エリカさんは……？」

恐る恐る尋ねるダイゴ。
すると、レノ神父は落胆の表情を浮かべた。

「では……、やはりエリカさんは教会に戻ってはないのですね……。」

教会に戻ってない。
レノ神父の言葉に、ダイゴは目の前が真っ暗になるような錯覚に陥った。
まさか……。

「エリカさん……、どうしたの……？」

まさかと思い尋ねるダイゴ。
すると、レノ神父の口から予想通りの答えが返ってきた。

「実は、エリカさんがシャノワールを飛び出してしまいまして……。」

「そんな……、エリカさんが……？」

驚くダイゴに、レノ神父は事情を手短に話した。
すると、ダイゴは怒りを露にレノ神父に詰め寄った。

「一体どういうつもりなんだ！エリカさんが……、エリカさんが何をしたって言うんだ！！」

「……私も後悔しているのです、ハイ。奨められたとはいえ……。」

「なっ……？」

レノ神父の言葉に、ダイゴはまたしても引っ掛かるものを感じた。
奨められた？一体誰に？
それを尋ねると、レノ神父は驚くべき人物の名前を口にした。

「はい。ピエールさんです。」

「ピ、ピエールだって！？」

ダイゴは驚きの余り目を見開いた。
あの気の良い友人がエリカを追い出すように言うとは考えもしなかったからだ。

「ハイ。ピエールさんに、エリカさんをこれ以上悲しませないようにと……、ハイ。」

「ピエールが……。くっ！」

ダイゴはキッと教会の中を睨み、中に戻る。
その顔には、怒りに満ちていた。

「ピエール！！」

普段発しない大声と共に、乱暴に扉を開け放つ。
たとえ友人であっても、エリカを傷つけるように仕組んだ事を許す訳にはいかない。
しかし、物申そうと部屋に乗り込んだダイゴの表情は、またも驚きに変わった。

「なっ……！」

先程までいたはずのピエールが、姿を消していた。
奥の窓が乱暴に割られ、そこから雨が降り込んでいる。

「ダイゴさん？……こ、これは！！」

慌てて後を追って来たレノ神父も、変わり果てた部屋の様子を見て同様に驚く。

「……二人を探して来る。レノ神父はここでエリカさんを待ってて。」

「は、はい。ダイゴさん、どうかお気をつけて……。」

レノ神父に告げ、ダイゴは教会を再び飛び出した。

「神よ……。私の過ちをお許し下さい。そして、迷える子羊達をお救い下さい……。」

降りしきる雨に、レノ神父はただそう祈る事しかできなかった。

「……ロベリア、ここにいたのか。」

シャノワールから程近い裏通りのバーに、ロベリアの姿があった。
既に何杯か呑んでいるらしく、空になったグラスがいくつも置かれている。

「よう、隊長。雨の中ご苦労な事だな。」

「こんな所で何をしているんだ！エリカくんが出て行ってしまったんだぞ！？」

呑気に言うロベリアを、大神が睨む。
しかし、ロベリアはその姿勢を崩さなかった。

「……で、アタシにも探せってか？」

「ロベリア！俺達は仲間だろう！！」

カウンターを乱暴に叩き、大神が訴える。
すると、ロベリアは5本目のグラスを空にして言い返した。

「仲間だからこそだ。嫌だというエリカを無理矢理連れ戻す方が、仲間にあるまじきじゃないのか？」

「……。」

その言葉に、大神を言い返せなかった。
確かにロベリアの言い分も正論だった。
今のエリカは、心が不安定な状態になっている。
そんな彼女を無理矢理連れ戻す事は、彼女の意志を無視した行為と

言われても文句は言えない。
するとその時、バーのマスターがカウンターに顔を出した。

「おいロベリア、赤い服の女が東に走って行くのを見た奴がいるぜ？エリカって娘じゃねぇのか？」

「バ、バカ！大声で言うんじゃない！！」

慌ててロベリアが叫んだ。
何の事はない。
なんだかんだ言って、やはりロベリアもエリカが心配だったのだ。

「ロベリア……。」

「……聞いたろ？東だってよ。」

罰が悪そうに背を向け、ロベリアが言った。
赤い服の女。
間違いなくエリカである。
ロベリアはマスターを仲介に情報屋に協力してもらい、エリカの居場所を探していたのだ。

「早くいきな。また何処か行っちまうぜ？」

「分かった。ありがとう、ロベリア。」

笑顔で礼を述べ、大神はバーを後にする。
その背中を見つめ、ロベリアは小さく悪態をついた。

「チッ、柄にもねぇ……。」

その頃、ダイゴはエリカを探して公園に来ていた。
既にシャノワール周辺は探し尽くした。
もうこの辺りしか残っていない。

「……、エリカさん!?」

木の奥に人影を見つけ、ダイゴが叫んだ。
しかし、そこにいたのはエリカではなかった。

「やあ、ダイゴじゃないか……。」

「!!」

そこにいたのは、ピエールだった。
「まだエリカを探してるの?いい加減諦めればいいのに。」

いつもと何ら変わらない微笑みをたたえるピエール。
しかしダイゴには、その微笑みが今までとは全く別のものに見えた。

「ピエール……、何故だ?」

低い声でダイゴが尋ねた。

「何の事かな？」

「エリカさんの事だ！」

スカした態度のピエールに怒りを募らせながら、ダイゴが言った。
しかし、ピエールはダイゴの神経を逆なでするように笑った。

「アハハ、そうか。レノ神父言っちゃったんだ。」

「質問に答えろ！！……何でエリカさんを追い出そうとした！？」

たまり兼ねたダイゴが怒鳴った。
今まで見せた事のない表情で、ピエールを睨みつける。
しかし、ピエールはダイゴを前にして冷然と言い放った。

「簡単さ。君を助けてやるためだよ。」

「何……？」

言葉の意味が分からず怪訝な顔を浮かべるダイゴ。
すると、ピエールは笑ったまま答えた。

「そうだよ、ダイゴ。君はエリカに何とも思われていない。だから僕が遠ざけてあげたんだよ。」

「ふざけるな！！そのせいでエリカさんは……！！」

「あれ？何で君が怒るのかな？　感謝の言葉も言えないのかなぁ、

君は。」

ピエールが蔑んだ目でダイゴを見た。
まるでダイゴが怒りに震える様を、楽しんでいるようにも見える。

「未練がましいね、ダイゴ。あの女はね、君じゃなくあの男を選んだんだよ。君なんて見向きもされてないんだ。まだ分からないのかな？」

「ピエール！！」

その言葉に、遂にダイゴが爆発した。
鬼のような形相で詰め寄り、友人の胸倉を荒々しく掴む。

だが次の瞬間、ダイゴの動きが止まった。

「う……ぐっ……！？」

右の脇腹に、焼け付くような激痛が走った。
胸から熱い何かが込み上げてくる。
ハッとして下を見ると、街灯に照らされた芝生に赤黒い染みができていた。

「……何かなぁ？ハッキリ言ってくれないと分からないじゃないか。」

激痛の余り意識が遠退き始めるダイゴに、ピエールが笑って言った。
その表情は、氷のように暗く冷たい。

「なぁ、『裏切り者』。」

刹那、ピエールの身体がダイゴから離れると同時に、何かがブチブチと耳障りな音を立ててダイゴの脇腹から引き抜かれた。

「ピ……、ピエ……！？」

その拍子に更なる激痛が#ダイゴを襲った。
咄嗟に何かを言いかけるが、程なくそれは赤黒い液体に変わる。
足に力が無くなり、雨に濡れた芝生に倒れる。
その瞬間、ダイゴは左手を真っ赤に染め、冷たく笑うピエールの顔を見た。

「あ～あ、……壊れちゃった。」

消え行く意識の中ダイゴが最期に聞いたのは、冷たいピエールの笑い声だった。

裏切りの果てに・後編（前書き）

前半部分のターニングポイントになります。

改めて見ると、ダイゴの振り回されっぷり半端なかった……。

裏切りの果てに・後編

「エリカくん、熱はおさまったかい？」

「はい、まだ寒気がしますけど……。」

優しく尋ねる大神に、エリカが赤い表情で答えた。
あれからロベリアの情報をもとに捜索を続けていた大神は、橋の上に佇むエリカを見つけた。
おそらく長時間雨に打たれたためだろう。
エリカは熱を出して倒れてしまったのだ。
大神はエリカを自分のアパルトメントに連れていき、保護したのである。
幸い熱いシャワーを浴びて熱も多少おさまったらしく、エリカは陰りがあるが笑顔を取り戻した。

「じゃあ、早くお休み。俺は床で寝るから……。」

「はい……。」

小さく頷き、ベットに潜るエリカ。
それを確認して、大神は明かりを落とした。

「エリカくん……、もう寝ちゃったかい？」

少しして、大神が尋ねた。
すると、ややあって返事が返ってきた。

「いいえ……、何だか眠れなくて……。」

元気のない声だった。
あれだけの事があったのだから、無理もないが。

「ねぇ、大神さん……。私、みんなに嫌われちゃいましたよね……？」

「何でそう思うんだい？」

「私がドジだからです……。ダイゴさんも神父様も、私が迷惑だったみたいだし……。特訓でも、足を引っ張ってばかりだったし……。」

やはり、と大神は思った。
エリカの失敗は確かに凄まじい。
特にダイゴが毎度被る被害には、同情すら感じた事もある。
だが、それがエリカを嫌う理由には、決してならなかった。

「そんな事ないよ。みんな雨の中エリカくんを探していた。みんな、君が好きだからだよ。」

「でも私は……、ドジな自分が嫌いです。」

普段なら「そうですか」と笑うはずのエリカが、暗い声のまま答えた。

「だから……、みんなに嫌われたくなくて、失敗した時は笑って明るく振る舞うんです。」

「そうだったのか……。」

エリカ自身、自分のドジが分からない訳ではなかった。
誰かの役に立ちたい。
誰かを助けたい。
そう思って行動に移しても、いつも失敗して周りに迷惑をかけてしまう。
それならば、せめて自分は笑顔でその場を明るくしよう。
その人が少しでも元気になるように。
エリカはそう考え、自分を責めながら笑顔を見せたのだ。
エリカはそうやって、一人で堪え続けていたのである。

「でも、今度はいろいろ重なって……、笑うのが辛いです……。」

「エリカくん……。」

初めて本音を口にしたエリカに、大神は優しく語りかけた。

「大丈夫だよ。みんな君を迷惑なんて思っていない。」

「本当ですか……？」

「ああ。俺だって、ダイゴだって、エリカくんが大好きだよ。」

「大神さん……、ありがとうございます……。」

その言葉に、ようやくエリカは笑った。
作り笑いではなく、本心で笑ったのだ。

「……ん？光……？」

突然明るくなった部屋に、大神は目を覚ました。
明かりもつけていないのに、一体どうしたというのか。

「こ、これは！」

ハッとして後ろを振り返り、大神は驚いた。
何と、エリカの身体から強い霊力が溢れ出して、全身が光っているのだ。
この霊力の強さは、アイリスにもひけをとらない。

「そういえば、マリアもエリカくんの霊力は完全に目覚めてないと言っていたな。」

普段のエリカと比べて、今感じる霊力は凄まじいものがある。
マリアの直感は、的中していたのだ。

「自分の霊力に気付けば、エリカくんも自分の事を好きになってくれるかな……。」

これだけ高い霊力があれば、戦闘でも足手まといにはなるはずがない。
もしかしたらエリカのドジも、霊力が開花していない事が原因かもしれない。
底知れぬエリカの力に、大神はただ驚愕するしかなかった。

その夜、地下神殿に居座るカルマールは、いつにも増して機嫌が良かった。
何故なら己の右腕が、遂に敵の居場所を突き止めたからである。

「してイーヴィルよ。間違いないのだな？」

念を押すカルマールに、イーヴィルは畏まった様子で太鼓判を押した。

「はい。『テアトル・シャノワール』……、そこに間違いございません。」

「なるほど、劇場に身を隠していた訳か……。」

イーヴィルの報告に、納得したようにレオンが呟く。
すると、カルマールは笑って命令を出した。

「よし、ナーデルよ。お前のその爪で、華撃団を引き裂いて来るが良い。」

「お任せあれ、公爵様。必ずや、奴らを芸術に変えて差し上げますわ！」

指名を受けた事が嬉しいのか、ナーデルは爪をギラリと光らせて笑い、その場を後にする。

「……コルボーよ、お前にも役を与えよう。」

「芸術の神・ミューズの如く、期待に添えた役を演じて見せましょうぞ！」

ナーデル同様に歓喜の言葉を口にするコルボー。
すると、カルマールはニヤリと笑って続けた。

「お前はナーデルの死に様を見て、イーヴィルと共に奴らを抹殺しろ。」

「なるほど、カルマール公のお役に立てるとは、幸せ者ですな。」

「かの女に相応しい醜い死に様、コルボーが見届けて差し上げましょう。」

「流石はカルマール様。これで我々の手を阻む者は無くなったという訳ですな。」

仲間を見殺しにする事に異を唱えるどころか、平気で笑う四人。
たとえ同胞といえど、仲間意識などというものは彼らの中にはなかった。

「……してイーヴィルよ。先の言葉の意味を言え。」

ひとしきり笑い、カルマールが尋ねた。
イーヴィルは、敵がいなくなると言った。
巴里華撃団は倒せるとしてももう一人、あの裏切り者が残っている。
すると、イーヴィルは冷たい微笑みと共に答えた。

「論より証拠。……こちらをご覧下さい。」

そう言って、血まみれの左手を開いて見せる。
すると、カルマールは納得したように笑った。

「ヌハハハハ！よくやったぞイーヴィル。これで小僧共もおしまいだ！」

凶悪な笑い声が、地下神殿に轟いた。

「ご、ごちそうさま……。」

翌朝、大神は先に起きたエリカの作ったという朝食を食べていた。
エリカ曰くかなりの自信作であったが、どうも常識が通用しないらしい味に大神はレノ神父の言葉が本当だと理解した。

「うふふ、私の料理全部食べてくれたの、大神さんが初めてですよ。」

「だ、だろうね……。」

何だか舌が変な感覚になってしまったが、エリカが作ってくれたため我慢する大神。

すると、大神の携帯キネマトロンに緊急連絡が入った。

「ん？緊急連絡……？こ、これは！！」

それを見るや、大神の表情は一変した。

何と、シャノワールが怪人に襲撃されたというのだ。

「……！」

「エリカくん！」

急に暗い表情に戻って部屋を飛び出すエリカ。

大神はエリカを慌てて追いかける。

しかし、アパルトメントの入り口に来た所で、不意にエリカの足が止まった。

何故なら……、

「み、みんな……。」

入り口には、グリシーヌを始め四人の隊員が顔を揃えていた。

あのロベリアもである。

「どうしたんだ、みんな。シャノワールが襲撃されたと連絡が来た

が。」

大神が四人に尋ねた。
シャノワールが襲われているなら、一刻も早く出撃しなければならないのに、四人共何をしているのか。
すると、コクリコが答えた。

「あれはね、嘘なんだ。」

「まともに会いに来ても、エリカはまた逃げてしまうだろう?」

コクリコに続くように、グリシーヌが言った。
おそらくエリカの事、直接訪ねても顔を会わせてくれない。
ならば、こうしてエリカがアパルトメントから出て来る状況を作り、自分達は入り口で待ち構えている計画だったのである。

「エリカ、シャノワールに戻って来い。お前は、大切な仲間だ。」

「私からもお願いです。帰ってきて下さい。」

「エリカがいないと、シャノワールが寂しいよ。」

「その……、あれだ。ほら、アタシの仕事も増えるだろ?だからさ、戻って来いよ。」

口々に言う仲間達。
その暖かい言葉に、エリカは胸に熱いものを感じたが、またこれまでの事が脳裏を過ぎった。

「でも、私は必要のない人間ですから……。」

「そんな事はないさ。エリカくん、俺達には君が必要だ。」

そう言ったのは、後ろにいる大神だった。

「明るくて、不器用で、優しくて、みんなの大好きなエリカくん。
それでいいじゃないか。」

「大神さん……、みんな……、ありがとう……。」

エリカは、目に浮かぶ涙を隠す事もせずに礼を言った。
その時、再び大神の携帯キネマトロンが鳴り響いた。

「さっきと同じ内容?……まさか、本当にシャノワールが襲撃されたのか!?」

携帯キネマトロンに、リピート機能はない。
更に発信源は作戦司令室からだ。
グラン・マが嘘をつくとは思えない。
つまり……、

「シャノワールに敵が現れた。すぐに戻るぞ!!」

「「了解!」」

エリカを含め、全員が隊員の顔になって返事を返した。

「お帰り、ムッシュ。エライ事になったね。」

開口一番、グラン・マがため息をついた。
既に最終防衛ラインを突破したポーン達が、シャノワールの眼前に迫っているのだ。
これまでにないピンチである。

「オーナー、通信回線がジャックされました！」

メルがいつになく慌てた口調で報告する。
するとその直後、モニターに見覚えのある顔が写った。

「うふふ、巴里華撃団の皆さん。お揃いね。」

それは、復活した怪人の一人、ナーデルだった。
以前にも増して、鋭い笑みを見せる。

「5分だけ待ってあげるわ。アタシに切り刻まれるか、建物ごと潰されるか、死に方を考えなさい。」

得意げに睨みを聞かせ、ナーデルの通信が途切れた。

「ふざけおって……、隊長、出撃命令を頼む！」

怒りを露にしてグリシーヌが言う。

すると、ここでロベリアが待ったの声をかけた。

「おいおい忘れたか？アタシらの光武Ｆは、性能で負けてるんだぞ？」

「でも……、戦うしかないじゃないか！」

恐怖を押し殺しながら、コクリコが言った。

確かに勝てる確率は低い。

だが、ここで諦めれば確実に自分達はやられるだろう。

出撃を迷う隊員達。

すると、グラン・マが安心させるように言った。

「そうでもないよ？帝都の紅蘭から土産があるんだ。」

「紅蘭から？……、ま、まさか！！」

帝都のメカ担当にして自分のフィアンセの名前に、大神はピンと閃いた。

「フフフ、見せてあげるよ。アンタ達の新星、『光武Ｆ２』をね。」

大神の反応に満足そうな笑みを見せ、グラン・マは立ち上がった。

「待ってたぜ隊長さん。見てくれ、光武Ｆ２だ。」

格納庫で花組を待ち兼ねていたジャンが、ズラリと並ぶ機体を見せた。

「こ、これが光武Ｆ２！」

大神は驚きの表情で傑作を見た。

天使の羽を想起させる翼を得たエリカ機。

身の丈はある巨大なバトルアクスを装備したグリシーヌ機。

スプリングを強化してジャンプ力を飛躍させたコクリコ機。

両腕に鋭利な鉤爪をつけ、死神のような姿になったロベリア機。

ボウガンから巨大な弓を装備した花火機。

そして、両肩のブースターで低空飛行を可能にした大神機。

帝国華撃団の紅蘭の設計のもと、ジャン班長以下数十名の整備班による最高傑作。

それが光武Ｆ２だった。

「紅蘭の奴、いい腕してるぜ。」

「カンナのおかげで、反射神経や体力もついたよ。」

「マリアさんに、状況判断の基本も教授していただきました。」

「さくら達からはチームワークを教えられた。……そうだな、エリカ。」

「はい！！」

グリシーヌの言葉に、力強く答えるエリカ。
巴里華撃団が、真に一つになった瞬間だった。

「よし、巴里華撃団、出撃！シャノワールを防衛せよ！！」

「強くなったボクの力、見せてあげる！」

「グリシーヌ・ブルーメールと巴里華撃団に、二度の敗北はない！」

「私達には、守るべき方達がいますから！」

「このアタシに刃向かう奴はどうなるか、教えてやるよ！」

「エリカ、エンジン全開です！！」

新たなる決意と共に、巴里華撃団は一斉に光武Ｆ２に乗り込んだ。

「出て来るかと思ったけど、このまま死にたいらしいわね。」

定刻になり、ナーデルが意外そうな表情で呟いた。

おそらくは玉砕覚悟で出て来ると思っていたが、未だにシャノワールは沈黙を保っている。
ロベリア辺りは一人でも出て来ると思ったが。

「……まあいいわ。いずれにしろ、このナーデルが芸術に変えてあげる。」

その時、待ち侘びた声がナーデルの耳に聞こえて来た。

「そこまでです！！」

「巴里華撃団、参上！！」

その直後、シャノワールを守るように六つの光武Ｆ２が姿を現した。

「やっぱり出て来たわね。それでこそ芸術のしがいがあるというものだわ。」

獲物を見つけたという目で巴里華撃団を睨むナーデル。
すると、ロベリアがわざと聞こえるように言った。

「弱い犬程よく吠えるってな、エリカ。」

「ハイ！って、何がですか？」

突然ロベリアに言われ、返事を返しつつも尋ねるエリカ。
すると、案の定ナーデルはキレた。

「キーッ!!バカにしないでよ!今度こそアンタ達の最期なんだから!!」

先程までの余裕の表情から一転して地団駄を踏むナーデル。
すると、すかさずコクリコが言い返した。

「こっちだって負けないよ!光武Ｆ２のパワーを見せてあげる!」

「フン、アタシのノクテュルヌとしもべ達だって、強化されているのよ?アンタ達なんか瞬殺だわ。」

言うやナーデルはノクテュルヌに乗り込み、己の忠実なしもべの名を叫んだ。

「出てらっしゃい!蠍怪獣アンタレス?!!」

すると奥の方の地面が割れ、見覚えのある長い尻尾の怪獣、アンタレス?が現れた。

「さあ、かかってらっしゃい!巴里華撃団!!」

ナーデルの命令と同時にこちらに迫るポーンの軍勢。
大神はナーデルに負けじと指示を飛ばした。

「よし、みんな行くぞ!生まれ変わった巴里華撃団の力、とくと見せてやれ!」

「「了解!!」」

六機の光武Ｆ２は、一斉に動き出した。

シャノワールは、人通りの多い通りが連なった場所に位置している。
言うなれば、シャノワールを中心に放射状に道があるという事だ。
大神はその片方ずつの延長線上にノクテュルヌとアンタレス?がいる事をいい事に、部隊を二つに分けて戦う事にした。
遠距離攻撃が得意な花火とエリカが、グリシーヌにカバーしてもらいながらアンタレス?を牽制し、その間に大神、ロベリア、コクリコの三人が一気にノクテュルヌを撃破するという作戦だ。
強力なポーンに対して部隊を分けるのは些か危険が伴うが、光武F2はその不安を払拭するに余りある力を見せ付けた。

「てやあっ!」

大神の気合いの一閃がポーンに炸裂した。
刹那、ポーンの身体はバターの如く真っ二つになった。

「こ、この力……、勝てる。これなら勝てるぞ!」

その想像を超える力に、大神までもが驚いた。
今まで隊員総出でかかって一体倒すのが精一杯だったが、この光武F2は違う。

ポーンを容易く、それもたった一撃で仕留めたのだ。
その力、以前の光武Ｆの比ではなかった。

「よう隊長、いい暴れっ振りじゃないか。」

隣でポーンを屠ったロベリアが声をかける。
彼女もまた、大神同様に大活躍していた。

「それにしてもロベリア、君の光武Ｆ２はやっぱりそんなデザインなんだね……。」

ふと、大神がロベリアに言った。
ロベリアの光武Ｆ２は緑をベースにしたものだが、その他は完全にロベリア好みのデザインにされていた。
カメラの下には鮫のように鋭い目と牙が描かれ、右腕の小手には赤い文字で何かが書いてあった。

「何だ？センス悪いってか？」

「い、いや……。何だか君のデザインは化け物みたいだなと……。」

正義を守る秘密部隊にはちょっとそぐわない感じのデザインに、正直な感想を述べる大神。
すると、ロベリアは得意げに笑った。

「まあね。アタシは化け物の方が性にあってるんだよ。」

確かに、と大神は思った。
元々ロベリアは正義の使者というイメージはないし、本人もそういい

うのは嫌いである。
おそらく彼女としては、相手も恐怖で腰を抜かす化け物をイメージしているのだろう。
今となっては、それもロベリアらしいと納得できてしまう。

「ほら隊長、グズグズしてるとあのチビに先越されちまうぞ？」

そんな事を考えている大神に、ロベリアが言った。
見ると、コクリコが屋根に登って上からポーン達を攻撃していた。

「なるほど……、コクリコに合わせた設計にしてあるのか。」

巴里華撃団は、結成から半年もない組織だ。
当然今のようなメンバー構成になる事など、誰も想像しなかっただろう。
そのため、光武Ｆは最終目標の六人という数こそ決まっていたが、それ以上の事は全くの白紙だった。
つまり当初から配属されていたエリカ、グリシーヌ、大神以外の三人の光武Ｆは、各々の武器を装備させただけの間に合わせだったのである。
しかし、今回の光武Ｆ２にリニューアルしたおかげで、コクリコは持ち前のアクロバティックな動きを最大限に発揮出来る。
その力、８階立てのマンションに軽くジャンプした程だ。

「よし、行くぞロベリア！」

「いちいち叫ぶなってのに……。」

意気揚々と進撃する大神の背中を、ロベリアはぼやきながら追いかけた。

その頃、グリシーヌ率いる別動隊はアンタレス?の前にそびえるロングソードなる迎撃兵器を破壊していた。

「グリシーヌさん、光武F2の調子は如何ですか?」

その内の一つを叩き潰したグリシーヌに、エリカが尋ねた。

「うむ、斧の振り応えが抜群に良い。これなら強化ポーンと言えども敵ではないな。」

慣れた手つきでバトルアクスを遊ばせ、グリシーヌが応えた。
以前は片手が盾を持っていたために右手一本で斧を使わざるを得ない状況にあったグリシーヌだったが、今回のリニューアルで更なる飛躍を遂げた。
盾を持つタイプではなく、左手に嵌めるタイプに変えたのだ。
これによって両腕で大きな斧が扱えるようになり、持ち前の攻撃力に磨きがかかった。

「しかし、エリカはどうした?何やら調子が悪そうだが……。」

ふと、グリシーヌが聞き返した。
花組が次々とポーンを沈黙させる中、エリカだけは際立って動きが鈍かった。
攻撃以前に、動く事すら難しいようにも見える。

「バ、バッチリですよ！私もエンジン全開です！」

「そうか……。だが、あまり無理をするなよ？」

平気と答えるエリカに、グリシーヌはそれ以上聞かなかったが、元気づけるように言った。

「エリカ、私とお前は最も古い仲間だ。こういう時にこそ、助け合っていこうではないか。」

「グリシーヌさん……。」

グリシーヌの言葉が意外だったのか、驚きの表情を見せるエリカ。
グリシーヌもまた、大神のような事を口にしたと思っていた。
しかし今は戦闘中だ。
あまり他の事に気を取られる訳にはいかなかった。

「花火、そちらはどうだ？」

「ええ、私は大丈夫よ。」

即答しつつ、花火は引き絞った矢を放つ。
矢は寸分狂わず奥にあるロングソードを射抜き、沈黙させた。

「あの距離を正確に狙うとは、流石だな。」

「いいえ、光武Ｆ２のおかげよ。集中力が増すように、防音効果があるみたい。」

花火の扱う弓は、他の武器と違って集中力を要する。
飛び道具である矢を使うため、必然的に遠い所にある標的を狙う事が多くなるからだ。
特に弓は、僅かでも狙いがズレるとまず標的には当たらない。
離れれば離れる程難しいのだ。
花火の光武Ｆ２におけるリニューアルはその点で、必要な集中力を雑音や他の事で邪魔されないよう防音効果のある素材や設備を充実させてある。
これにより、ただでさえ高い命中率がより確実なものになったのである。

「……さて、いよいよ本番という訳か。」

バトルアクスを手に、グリシーヌが仁王立ちになった。
その後ろでは、エリカと花火が武器を手に控えている。

「ガアアアッ！」

アンタレス？が雄叫びを上げた。
それと同時に、長く尖った尻尾をグリシーヌ達目掛けて突き出してくる。

「いかん、避けるぞ！」

グリシーヌの声と共に、素早く尻尾を交わす光武Ｆ２。

しかし、エリカの機体だけがやけにもたついた。

「エリカっ！！」

それに気付いたグリシーヌが、エリカを庇うように立った。
同時にアンタレス？の巨大な尻尾が襲い掛かる。

「くっ……！」

何とかバトルアクスで尻尾を弾くグリシーヌ。
そこに、花火がすかさずフォローに回った。

「そこです！」

十二分に引き絞った弓から手を離す。
すると、矢は寸分違わずアンタレス？の左目に深々と突き刺さった。

「ガアアッ！？」

突然の反撃に怯み、アンタレス？が後ずさる。
そこに、グリシーヌが反撃に出た。

「てぇぇぇ……！！」

バトルアクスを両腕で大きく振りかぶり、勢い良く真下にたたき付ける。
すると、アンタレス？の尻尾の先が切り落とされた。

「エリカ、大丈夫か？」

油断なく身構えながら、グリシーヌが尋ねた。
すると、エリカは覚束ない様子で答えた。

「は、はい。思うように動いてくれなくて……。」

ここでようやく、エリカは正直に話した。
やはりグリシーヌの読み通り、エリカだけは光武Ｆ２を完全に使いこなせていなかったのである。

「仕方あるまい。ここは隊長が先にナーデルを倒す事を信じて……！」

そこまで言いかけ、グリシーヌが片足をついた。

「グリシーヌ！？」

慌てて駆け寄る花火。
すると、グリシーヌはバトルアクスを杖代わりに立ち上がった、

「平気だ。少し気合いを入れすぎたのかもしれん。」

「待ってて下さいグリシーヌさん。今回復しますから……。」

自分を庇ってグリシーヌは負傷したのだ。
せめて自分の手で返さなくては……。
しかし、光武Ｆ２はエリカの思いに応えてくれなかった。

「え……？」

何と、グリシーヌの機体が回復できない。

いくら霊力を集中しても、全く回復させる事ができないのである。

「ど、どうして……！？」

信じられない表情のエリカ。
だがその時、アンタレス？が再び迫って来た。

「ガアアアッ！」

「くっ！エリカ、回復は後だ。私の後ろに下がれ。」

グリシーヌがエリカを庇うようにアンタレス？の前に立ちはだかった。

「グリシーヌさん！で、でも……！」

「安心しろ。そうやすやすとやられる私ではない。」

エリカを元気づけ、グリシーヌはバトルアクスを手に構えた。

「来い、怪獣！ここから先は進ませません！！」

一方、既にノクテュルヌと戦闘を開始していた大神達も、別動隊のピンチを察していた。

「コクリコ、グリシーヌ達を支援してくれ！」

「分かった！イチロー、気をつけて！」

大神の指示を受け、コクリコは屋根伝いにグリシーヌ達の方向へ走り出す。

すると、それに気付いたナーデルが妨害を仕掛けた。

「逃がさないわよ！！」

コクリコ目掛けて尻尾から電撃を発射させる。

しかし、それは不意に目の前に現れた緑色の光武Ｆ２によって阻止された。

「このアタシを差し置いて、好き勝手はさせないぜ？ナーデルちゃん。」

「ロベリア……！それならアンタから始末してやるわ！」

言うや、ナーデルは尻尾の電撃をロベリアに向けて発射した。

たちまちにしてロベリアの光武Ｆ２が電撃に包まれる。

「さあ、覚悟なさい！」

動けないものと思ってハサミを構えるナーデル。

しかし、不思議な事が起こった。

「なっ……！？」

何と、動けないはずのロベリアが、いとも容易くノクテュルヌの攻撃を防いで見せたのである。

「馬鹿が。言ったろ？パワーアップしたってよ。」

ロベリアがニヤついた表情でナーデルに言った。
光武Ｆ２のリニューアルは、攻撃面だけではない。
敵の攻撃に対する防御面も、またしかりなのである。
以前ナーデルやピトンの攻撃で光武Ｆが動きにくくなった事を受け、光武Ｆ２では霊子水晶を守る装甲盤を装備。
これにより、生半可な攻撃では光武Ｆ２の動きを封じる事は出来ないのである。

「そ、そんな……！聞いてないわよ！？」

「ついてないね、お前も。恨むんならあのイカの情報不足を恨みな。」

「馬鹿な……、公爵様が……。」

ナーデルは思わず狼狽した。
あのイーヴィルまで使ったのに、情報不足など有り得ない。
にも関わらず、ここまで追い詰められた状況。
という事は……。

「なら捨てゴマか？やっとお前らも怪人らしくなって来たじゃねぇか。」

嘲るようなロベリアの言葉が、全てを物語っていた。
カルマールの事、奴らの光武Ｆ２の完成を知っていたはず。
そして、その力を調べようというのだ。
自分をエサにして。

「嘘よ……、そんなの嘘よ！！」

ナーデルは必死にかぶりを振って否定した。
自分はカルマールに巴里華撃団全滅の刺客として送り込まれたのだ。
自分がモルモットなど決して有り得ない。
そう信じてノクテュルヌは再びロベリアに攻撃を仕掛ける。
だが、冷静さを欠いた隙だらけの攻撃が当たる程、ロベリアも甘くなかった。

「フン、だから馬鹿だってんだ。」

ハサミの一撃を難無く受け止め、もう一方の腕でノクテュルヌの身体を切り付ける。

「くっ……！」

「やれ、隊長！！」

ロベリアが叫んだ。
それを合図に、大神が稲妻を帯びた二刀を構える。

「狼虎滅却……、紫電一閃！！」

青く光る稲妻が、ロベリアの切り付けた跡に沿ってノクテュルヌを両断した。

「そ、そんな……、公爵様……。」

モルモットとなった自分の立場に信じられないまま、ナーデルはノクテュルヌ諸とも爆発した。

その頃、アンタレス?と戦っていたグリシーヌ達も徐々に戦況を覆しつつあった。

理由は簡単。

屋根伝いで救援に来た、コクリコのおかげだ。

「ネコネコ子ネコ、この子に決まり!マジーク・プティ・シャ!!」

火の輪に変えたバトンから、一斉に子ネコが現れた。

子ネコ達はアンタレス?を取り巻き、四方八方から引っ掻き回す。

そこに、再び花火が矢を放った。

「そこです!」

今度は右目を射抜いた。

完全に視界を奪われたアンタレス?は、凄まじい勢いで暴れ始める。

しかし、それこそグリシーヌ達の狙いだった。

「大いなる荒波の守護者よ。今こそ、目を覚ませ!フュリー・ネプ

チューン！！」

真横に振るわれたバトルアクスから津波が現れ、アンタレス？を押し流す。

「ガアアッ！？」

更に、そこへ津波が集まって具現化した海の王、ネプチューンが姿を見せる。

ネプチューンは一点に怪獣を見据えると、銛を手に突進した。

「ガアアッ……！！」

心臓を一突きにされ、アンタレス？は断末魔の叫びと共に大爆発した。

ナーデルとアンタレス？を撃破し、巴里華撃団はシャノワール前に戻って来た。

「流石に凄い力だ。光武Ｆ２、伊達ではないな。」

「それだけではありませんわ。私達自身の力も、確実に強くなって

います。」

新たに手にした力に拳を握るグリシーヌに、花火が答えた。
チームワークを契機として、巴里華撃団の力は飛躍的に上昇した。
その証拠に、今回は怪人やポーンだけでなく、アンタレス？までも撃破している。
初めてティガの助けを借りずに怪獣を倒せた事に、巴里華撃団は確固たる自信をつけた。

「皆さん、凄いです。私なんか、動かすだけで手一杯だったのに……。」

唯一活躍出来なかったエリカが、大神達に賞賛を送った。
確かに役には立てなかったが、勝てただけでも結果オーライというものだ。

しかし、カルマールの巴里華撃団壊滅のシナリオは、まだ終わっていなかった。

それは、作戦司令室からの通信が始まりだった。

「待って下さい、大神さん！」

「すぐ近くに物凄い反応がありますぅ！」

「何！？」

メルとシーの連絡に警戒を強める大神。
すると、ノクテュルヌとアンタレス？を倒した辺りの空間が歪み、何かの形を作った。
その姿に、大神は見覚えがあった。

「あ、あれは……うわっ！！」

その名を口にしようとした時、凄まじい電撃にも似たショックが大神達を襲った。

「な、何だ！？光武Ｆ２が……！」

バトルアクスを構えようとしたグリシーヌが、驚きの声をあげた。
何故なら、ノクテュルヌの電撃にも堪えるはずの光武Ｆ２が動きを止めてしまったからだ。

「如何かな？我がしもベガゾート？による、数倍に高められた電撃

ショックの味は。」

「その声は！」

首を必死に動かし、声がした上空を見る。
そこには、太陽を遮る漆黒の翼が羽ばたいていた。

「マスク・ド・コルボー！」

「また会ったな、愚かなる者共よ。」

シルクハットに隠れたコルボーの目が、ギラリと光った。

「今の戦いで、その機体の調査は済んだ。……ささやかな犠牲を伴ってな。」

ささやかな犠牲。
おそらくはナーデルの事だろう。
コルボーは数分前から、上空で大神達の戦いの様子を観察していたのである。

「巴里華撃団の諸君、我が舞台を汚した罪、今こそ償ってもらおう。」

「グワーッ！！」

コルボーの言葉に呼応するように、ガゾート?が咆哮をあげた。
その瞬間、ガゾート?の身体からシャノワールを包むように夥しい電磁波が放射される。

「くそっ、あれか……！」

大神の読み通りだった。

光武Ｆ２が動かなくなってしまったのは、ガゾート?が放射する電磁波の影響だったのだ。

「フハハハハ、どうだ巴里華撃団。指一本動かす事も叶うまい。」

「くっ……！」

完全に敵の術中に嵌まり、大神は悔しげに歯を噛む。

すると、コルボーは意外な事を口にした。

「しかし、我は手出しをせん。貴様達を地獄に送る、素晴らしい役者がいるのでな。」

「何!?」

何と、コルボーは自身の手を汚さない事を口にしたのである。

よく見ると、周りにはポーンすら連れていない。

ならば一体、どうやってこちらを攻撃しようというのか。

そう疑問に思う大神達に声が聞こえて来たのは、その時だった。

「ボンジュール、ムッシュ大神。」

その人物に、大神達は驚きの余り言葉を失った。

何故なら、そこに立っていたのは余りによく知るあの人物だったからである。

「ピ、ピエール……！？」

そこにいたのは、教会でボランティアをしていたダイゴの親友、ピエール・タバルニエその人だった。
いつものように微笑んで見せるが、その笑顔は今までにないくらい冷たい。
大神達は、揃って状況が掴めずにいた。
何故ピエールがここにいるのか、何故避難しようともしないのか。
そして、何よりも何故左手が血で真っ赤に染まっているのか。

「……！ピエール、ここは危険だ。早く安全な所へ……！」

「……、フフフ……。」

我に還った大神が避難を促した時、ピエールが不意に笑った。
その笑い声に、大神は今までにない悍ましさを感じる。
まさか……。
大神の脳裏に一つの答えが浮かんだ時、ピエールがようやく口を開いた。

「安全な所？それなら僕が連れてってあげるよ。……アイツの待つ地獄にね。」

「何……！？」

いつもと違い低く怖い声でピエールが言った。
その声に、大神は想像した答えを確信する。

「フハハハハ！紹介しよう、巴里華撃団の諸君。我等が同胞にしてカルマール様一のしもべ、イーヴィル・タバルニエだ！」

それを口にしたのはコルボーだった。
ピエールは、カルマールの放った刺客。
イーヴィル・タバルニエだったのである。

「どうだいコルボー。こういう演出も中々だろう？」

ピエール……、イーヴィルは真後ろにいる同胞に尋ねた。

「実に素晴らしい。長い間共に日々を送り、夢を語り、心を分けた友に裏切られて死んで行く……。これもまた傑作の悲劇だ。イーヴィル、君には演出の才能がある。」

「冗談じゃねぇ。ピエール、てめぇアタシらを騙してたのかよ！？」

ヌケヌケと言うイーヴィルとコルボーに、ロベリアが吠えた。
本当なら今すぐにでも爪の餌食にしたい所だが、動けないこの状況では睨みつける事しか出来ない。

「ピエール！君はきっとコルボーに操られているんだ。目を覚ませ！！」

一方の大神は、あくまでイーヴィルを信じて説得を試みる。
しかし、それが無駄である事は誰の目から見ても明らかだった。

「フフフ……、さあ、血まみれのパーティーの始まりだ。」

これから始まる狂乱の宴を心待ちにするかの如く楽しげに呟き、イーヴィルは真っ赤な左手を前に翳した。
すると、左手の中にある何かが反応して光を放つ。
その形に、エリカは見覚えがあった。

「あれ……、確かダイゴさんがお守りにしてた……。」

イーヴィルが血まみれの左手に掴んでいたもの。
それは、ダイゴがいつも肌身離さず持ち歩いていたスパークレンスだったのだ。

「あれ？知ってたんだ。そうだよ、これはスパークレンス。僕の友達の大事な大事な宝物さ。」

「スパークレンス……。」

初めて見る超古代の彫刻に、目を奪われる大神。
一方、ロベリアは何かに気付き、ドスの効いた声で尋ねた。

「おい。……てめぇダイゴをどうした？」

あの血まみれの腕に握られたスパークレンスが気になり、ある予想が脳裏を掠める。
すると、イーヴィルは軽い口調であっさりと言った。

「ああ、ダイゴ？どうだろうね？今頃セーヌ河で魚のエサにでもなってるんじゃない？」

「なっ、何だと！？」

「貴様、ダイゴに何をした!?」

グリシーヌが憤怒の形相で怒鳴った。
今この男はどれだけ恐ろしい事を口にしているか分かっているのか。
しかし、イーヴィルは丁寧に説明した。

「何、簡単な事だよ。ダイゴから無理矢理スパークレンスを貰ったのさ。……、腹の肉と一緒にね。」

凶悪な顔でイーヴィルが笑った。

「それで動かなくなっちゃったからね。セーヌ河に捨ててあげたんだ。心配しなくても、今頃腐って海の底に……。」

「黙れっ!!」

グリシーヌが怒鳴り声を上げた。
その顔は、今までにない程の怒りを秘めている。

「無慈悲な人殺しめ……!!許してはおかんぞ!!」

気の弱い者なら逃げて行きそうな迫力でイーヴィルを睨むグリシーヌ。
しかし、イーヴィルはそれすら嘲笑で返した。

「アハハハハ……!!動けないくせに凄まれても、何も怖くないんだけどなぁ?」

「くっ……!!」

グリシーヌのみならず、巴里華撃団の誰もがイーヴィルを睨んだ。
もし動けたなら、真っ先に襲い掛かるだろう。
しかし、ガゾート?の電磁波の中では、それも叶わなかった。

「安心しなよ。僕が君達をダイゴの所に連れてってあげるから。」

「何だと!?」

ダイゴの所に連れていく。
すなわち、殺すという事。
だが生身の身体でどうするというのか。
すると、イーヴィルはニヤリと笑ってスパークレンスを大きく反時計回りに回転させた。
刹那、コルボーを超える闇の力がイーヴィルに集まる。

「本物の地獄を見るがいい……、巴里華撃団!!」

高らかに叫ぶイーヴィルの身体を闇と同化し、スパークレンスが石床に転がる。
そして次の瞬間、巴里華撃団は信じられない光景を目の当たりにする事になる。

「ハハハハハ……!!」

闇の中から、不気味な笑い声が聞こえて来た。

何事かと警戒する巴里華撃団。
そして闇が消え去り、不気味な笑い声の正体が、その姿を現した。

「な……！」

「ば、馬鹿な……！！」

「悪い冗談だぜ……。」

大神も、グリシーヌも、あのロベリアすら、俄かに信じる事が出来なかった。
青い目、野太い声、全身を包む黒いライン。
相違点はいくつか見受けられるが、その姿は見間違いでは決してなかった。

「……ティ……、ティガ……？」

誰かが呟いた。
巴里華撃団の前に現れたのは、ウルトラマンティガそっくりの黒い光の巨人……。
言わば、闇の巨人が立っていたのである。

「……どうして？」

突然の声に驚き、周りを見る。
しかし、周りは緑色の何かに覆われて何も見えない。

「どうしてそうまでして、君は光を求めるの？」

また声がした。
一体自分に何を語りかけているのか。
いや、それよりもここは一体何処なのだろうか。

「じゃあ君は、何のために戦うの？」

すると、突然景色がまばゆい光に包まれた。
「君の意志……、今一度示してごらん。」
光に包まれる中、声は確かにそう言った。

「う……。」

次の瞬間、景色は全く別のものに変わっていた。
やたらと金が目立つ壁の模様。

一人分にしてはやたらとでかいベット。
その光景に、見覚えがあった。
確か……。

「……気がついたざますね？」

ああ、グリシーヌの屋敷だ。
そう確信できたのは、忘れもしないあのメイド長の声を聞いたからだ。
見ると、そこにはタレブーの姿があった。

「タレブーさん……。ここは？」

「お嬢様のお部屋ざます。傷は簡単ではあるざますが、治療はしてあるざます。」

タレブーに言われて、右の脇腹を見る。
そこには綺麗に包帯が巻かれ、応急処置が成されていた。
そしてその脇腹に、昨夜の出来事を思い出した。

「……、そうだ、エリカさんが……！」

すると、タレブーは無言で外を指差した。
その方向を見ると、黒い煙を上げる巴里の街が見えた。
いや、その様子には気付かなかったかもしれない。
何故なら、その街の真ん中に、醜悪な闇の波動を漂わせる闇の巨人がいたからである。

「そんな馬鹿な……！！何で……！！」

そう呟いて、ハッとして壁にかけられた服を見た。
黒い服の、ポケットの辺りに大きな穴があき、赤い血がこびりついている。

「やはり、貴方だったざますね……。」

ふと、タレブーが神妙な面持ちで口を開いた。

「以前屋敷に来た時から、貴方には何かを感じたざます。貴方が、お嬢様と共に巴里を守ってくれたざますね。」

「タレブーさん、知っていたの？」

すると、タレブーは重々しく頷いた。

「もちろんざます。メイドは仕える方の事を、何でも知っているものざます。」

そう言って、タレブーは窓を開けた。
途端に巴里を襲う激しい轟音が響いてくる。

「お嬢様の事、よろしくお願いするざます。」

その言葉で十分だった。
窓から外に降り立ち、仲間の下へと急ぐ。
その背中が見えなくなると、タレブーはじっとその先を見つめて言った。

「ここまで彼を運んでくれた事、感謝するざます。」

すると、彼女の背後で声がした。

「大した事ではありません。それに……。」

そう言って、タレブーの横に並んで窓の外の景色を見る。

「巴里の守護神の戦い振り、是非一度拝見したかったものですから。」

闇の巨人と化したイーヴィルの激しい攻撃に、巴里華撃団は絶体絶命の状況にあった。

動けない自分達目掛けて光弾の雨が振ってくる。

大神達は、その攻撃を成す術のないまま耐え忍んでいた。

「みんな、大丈夫か！？」

ボロボロの状態になりながらも大神が隊員達に声をかける。

すると、各々の空元気な返事が聞こえて来る中、エリカだけ反応がない事に大神は気がついた。

「エリカくん、どうした！？」

「……。」

呼べど叫べど返事はない。
すると、その様子を見下ろしていたコルボーが冷たく笑った。

「フハハハハ！哀れなる姫君よ、大事なものの命が消えて声も出せぬか。」

「……。」

エリカは沈黙したまま答えなかった。
ダイゴは死んだ。
それは、あの血まみれのスパークレンスが物語っている。

「……ダイゴさん……。嘘でしょ……？ダイゴさん……。」

今までダイゴと過ごした思い出が頭に掠め、エリカは殆ど放心状態だった。
ダイゴは死んだ。
嘘だ。
昨日まで、すぐ側にいてくれたのに。
だが何度頭の中で繰り返しても、あのお守りが、血まみれのスパークレンスがそれを否定した。

「悲劇のヒロインのつもりかなぁ？　あいつを死に追いやったのは、他でもない君だって言うのにさ。」

なじるようにイーヴィルが笑うが、幸か不幸かエリカの耳には届いていない。

「まずは……、一人目だ。」

言うや、イーヴィルは胸のカラータイマーに手を当て、漆黒のエネルギーを具現化した槍を生み出した。
ダークレイランス……
ティガのハンドスラッシュと対を成す、イーヴィルの技だ。

「エリカくん！！」

大神が叫んだ。
しかし、誰も動けないこの状況では助けに行く事も出来ない。
いや、もし動けたとしても、エリカに避ける気力はなかっただろう。
天使のごとき翼を持つ光武Ｆ２目掛け、イーヴィルが邪悪の槍を高々と振り上げる。
だが次の瞬間、それに新たな声が割って入った。

「それが……、君の正義なのか……？……ピエール……。」

「何……？」

「！？」

「え……？」

その声に、その場にいる全ての人物が驚愕した。
声がした真後ろの通りから、こちらに歩いて来る人影。
自分達の幻聴や虚栄でないのなら、それは信じられない人物だった。

「……ダイゴ……さん……。」

エリカがその名を口にした。
すると、ダイゴはそれに答えた。

「何とか、間に合ったみたいだね……。」

幻ではない。
先程イーヴィルが殺したと豪語したダイゴは、生きていたのである。

「ダイゴ……本当に……？」

「生きて……いたのか。」

嬉しさよりも、驚きに近い反応と共にダイゴを見る巴里華撃団。
すると、ややあってイーヴィルが冷たい笑みでダイゴを見下ろした。

「……死に損ないが、何の用かな？」

「……。」

ダイゴは、無言で変わり果てた親友を見上げた。
スパークレンスを使い、まがまがしき闇に転じたその姿に、ダイゴは穏やかな眼差しを向ける。

「ダイゴ。君は何故そうまでしてこいつらを庇う？愚かな人間共を、何故守ろうとする？」

理解出来ないという表情で、イーヴィルは裏切り者を見下ろした。
すると、ダイゴは静かな口調で答えた。

「僕は……、光を継ぐ者だからだ。」

「フフフ、君らしい答えだな。そんなにそいつらがいいのか？この僕よりも。」

ふてぶてしい態度を崩さないイーヴィルに、ダイゴは沈黙を返す。
すると、イーヴィルはさらに醜悪な笑いをダイゴに突き付けた。

「その女はお前を捨てたんだぞ？僕はそれをわざわざ教えてあげたって言うのに。ダイゴ、君はいつからそこまで堕ちたのかなぁ？」

「堕ちたのは君だ、ピエール。」

ダイゴの表情が、僅かに哀れみに変わった。

「君が何と言おうと、僕はエリカさんを守る。」

「そんな女に、命を懸けてやる価値なんてあるのかな？　いつも君を引っ掻き回して、終いには捨てたこの女を。」

イーヴィルが尋ねた。

すると、ダイゴは目を閉じて答えた。

「僕に……、笑顔をくれた人だから……。」

「……ダイゴさん……。」

初めて会ったあの日、エリカは初対面の自分に、まばゆい光のような笑顔を見せてくれた。

そして、孤独という闇の中から自分を救ってくれた。

自分は一人じゃない。

そう自覚できた時の喜びは、今でもハッキリと覚えている。

「だから、エリカさんが大神さんと二人で楽しそうにしてると、苦しかった。自分がまた一人になるんじゃないかって、怖かった。」

今まで心に押し止めていた思いを、切々と語るダイゴ。

その俯いた顔に、何かが光った。

「捨てられたかもしれない。元々僕にそんな意識なかったかもしれない。でもね、ピエール……。」

ふと、ダイゴは顔を上げた。

その瞳には、涙が溢れていた。

「それでも僕は……、エリカさんが……、好きなんだ……。」

「……、ダ、ダイゴさん……！！」

その言葉に驚いたのは、エリカだった。
まさかダイゴが、自分にそんな感情を抱いていたとは思いも寄らない事だった。
しかし今思い出せば、これまでのダイゴの行動の数々はそれにピタリと当て嵌まる。
大神に冷たい態度を取っていたのは、ヤキモチを焼いていたから。
そう考えれば、あの日途中でサッカーを抜けた事も納得がいく。

「我慢しようともした。わざと距離を置いて、忘れようともした。
でも、それでも好きなんだ……。」

ダイゴは、エリカに聞かれる事を承知で打ち明けた。
エリカが自分ではなく、大神に惹かれている事は分かっている。
しかし、この想いを抑える事だけは、どうしても出来なかった。

「……だから、僕は戦うんだ。大切なものを守るために……。」

ダイゴはそう告げて、石床に転がっている光の証、スパークレンスを手に取った。

刹那、イーヴィルと互角の強い光がダイゴの下に集まる。

その神々しささえ感じさせる暖かい光に、大神達は見覚えがあった。

「ダイゴ……、まさか君は……。」

ハッとした表情で呟く大神。

その視線を感じながら、ダイゴはスパークレンスを大きく時計回りに回転させ、空に高々と掲げ、その名を叫んだ。

「ティガーーーーーッ!!」

魂の叫びと共に、巨大な光の柱がダイゴの身体を包み込んだ。

そして、大神達の前に信じられない光景が飛び込んで来た。

「こ、これは……！！」

大神だけではない。
グリシーヌも、花火も、コクリコも、ロベリアも、コルボーやイーヴィルも、そしてエリカも……。
そこにいる全ての者が、その姿に目を離せなかった。
太陽の光を受け、鮮やかに光るブレスターと額のクリスタル。
赤・紫・銀の体色と胸に輝く空色のカラータイマー。
その光を具現化したかのような姿を、知らない者など巴里にはいない。

「ウルトラマン……ティガ……。」

大神がその名を呟いた。
そこに立っているのは、今まで幾度となく自分達の窮地を救ってくれた巴里の守護神。
ウルトラマンティガだったのだ。

「そんな……、ダイゴさんが……。」

驚愕の事実に、エリカは目を見張ると同時に、前にダイゴと二人で地下のカタコンベに潜入した時の事を思い出した。
あの時、地下に眠っていた巨人の石像。
それこそティガであり、それを受け継いだダイゴこそ、今まで自分達を守り続けていたウルトラマンティガだったのである。

「チャッ！」

今までと変わらぬ姿でイーヴィルと対峙するティガ。
すると、イーヴィルは凄絶な笑みでティガを見返した。

「フフフ、そうか……。ダイゴ、あくまでも僕と戦うというんだね？親友の僕と……。」

「大切なものを守るために戦うと言ったはずだ。そのためなら、僕は戦う。たとえピエール、君が相手でも！！」

初めてティガが言葉を発した。
その幼さの残る口調は、間違いなくダイゴそのものだ。

「フフフ……、つくづく君にはガッカリだよ。ダイゴ！まずは君から殺してやるよ！！」

言うや、イーヴィルがティガ目掛けて襲い掛かって来た。
ティガもイーヴィルを見据えて飛び出す。

「ジアッ！」

「チャッ！」

二つの拳が激しくぶつかる。
シャノワールを舞台に、死闘が始まった。

イーヴィルティガ。
その邪悪な野心故に闇に転じたもう一人の巨人。
巨人同士の戦いは、これまでにない激しいものとなった。
対極に位置する光と闇。
互角の力は何度もぶつかり合い、火花が散り、轟音が轟く。
その余りの激しさに、大神達はただ見ている事しか出来なかった。
パワー、スピード共に互角。
しかし、程なくして僅かにティガの方が圧され始めた。
昨夜イーヴィルに受けた右脇腹のハンデと、かつての親友を相手にした事による躊躇いがあったからである。

「ジアッ！」

イーヴィルが顔面目掛けてパンチを打ち込んで来た。
ティガはそれを片腕で止め、反対の腕でパンチを放つ。
しかし、イーヴィルはそれを難無く掴み、ティガの脇腹を蹴りつけた。

「ジュワッ！？」

激しい痛みに苦悶し、ティガの動きが一瞬止まる。
すると、イーヴィルはティガの首を掴み、勢い良く投げ飛ばした。

「ウリャアッ！！」

更に追い撃ちをかけるかの如く、イーヴィルは先程蹴りつけたティ

ガの脇腹を容赦なく踏みにじった。

「ジュワッ……！？」

「ハハハハハ……！！」

脇腹を押さえて痛みに耐えるティガ。

イーヴィルはその様子を野太い声で嘲笑いながら、更にティガの首を両手で掴み、物凄い力で締め上げて来た。

その弱みにつけ込んだ陰惨な戦い方は、彼の本来の残虐さを十二分に表している。

しかし、ティガもその程度ではやられなかった。

「ハッ！」

イーヴィルが油断した一瞬を突き、巴投げで後ろに蹴飛ばす。

そしてイーヴィルの手が離れるや、素早く起き上がって間合いを取った。

「フフフ……、その身体でやるじゃないか。君も最早化け物だね。」

不敵な笑いと共に、イーヴィルは両手を真横に水平に伸ばした。

すると、その腕に沿って闇のエネルギーが黒い筋を生み出す。

「ハッ！」

それを見たティガも、両手を胸の前で合わせた。

そして、イーヴィルが両手をゆっくり狭めると同時に、両手を水平に伸ばして光の筋を生み出し、エネルギーを集約する。

その様子は、まるで相手の動きを逆再生しているかのようだ。

「ジアッ！」

「ハッ！」

そして、同時に腕をＬ字と逆Ｌ字に組み、双方から光線が発射された。

「ヌゥゥゥ……！！」

「ハァァァ……！！」」

ぶつかり合う光と闇。

それはしばらく均衡し、やがて相殺されて消え失せた。

「オォッ！？」

「ジュワッ！？」

その衝撃で、二人の巨人は真後ろに倒れる。

最強の必殺技、ゼペリオン光線の撃ち合いの衝撃は、それ程凄まじいものだった。

「フフフ……！」

エネルギー消耗をものともせず立ち上がるイーヴィル。

しかしその時、その胸のカラータイマーが赤く点滅を始めた。

「オォッ！？」

イーヴィルは驚いた様子でカラータイマーを見た。
一方、起き上がったティガのカラータイマーも同じだった。

「チャッ……。」

同じタイミングで点滅を始めたカラータイマー。
先程の撃ち合いは、それ程までにエネルギー消耗が激しいものだったのである。

「ヌォォォッ！！」

それを認めないとばかりに、イーヴィルが吠えた。
ティガもそれに気付き、構え直す。

「チャッ！」

「ヌゥッ！！」

イーヴィルはティガを一点に見据え、大地を蹴って跳び上がった。
それを見て、ティガも地面を跳躍する。
そして、蹴りの姿勢で突っ込んでくるイーヴィルに、猛然とチョップで迎え撃った。

「ジアァッ！！」

「チャーッ！！」

二つの影が交わり、空気の擦れる音がした。
そして、二人の巨人は同時に大地に足をつく。

「……。」

「……。」

まるで西部の決闘のような沈黙の中、一陣の風が戦場を吹き抜ける。

そして……、

「ジュワッ……！」

その片方が、地に膝をついた。

それは、ティガだった。

「ダイゴさん！！」

「フフフ……！！」

エリカが叫ぶ中、勝ち誇った様子で笑うイーヴィル。

しかし次の瞬間、ティガにトドメを刺そうとした彼の動きが止まった。

「オ……、オォッ！？」

苦しむと言うより、驚いた声で倒れるイーヴィル。
すると、それに気付いたティガが徐に立ち上がった。
あの一瞬、攻撃をキメたのはティガだった。
膝をついたのは、攻撃のショックで脇腹の痛みが走ったからである。

「ば、馬鹿な……！ティガの力を以ってしても……！！」

イーヴィルは目の前の状況が信じられず、再びゼペリオン光線を発射しようと両手を伸ばす。
しかし、エネルギーが底をついた今の状態では、再びゼペリオン光線を撃つ事など出来なかった。

「チャッ！」

そのイーヴィルを倒すべく、両手を胸の前で合わせるティガ。
だがその寸前、イーヴィルの背後に何かの影が現れた。

「ヌゥ……！？」

目の前に伸びる不自然な影に、イーヴィルが恐る恐る振り返る。
そこには、凶悪な面構えのガゾート？が、イーヴィルをジロリと見下ろしていた。
そして……、

「グワーッ！！」

咆哮と共に口を大きく開け、ガゾート？はイーヴィルに頭から噛み

付いて来た。

「!?」

「なっ!?」

「ひ、酷い……!!」

瞬く間に頭から食らい尽くされるイーヴィル。
その余りに残酷な光景に、ティガと大神達は絶句した。
その中、一人高らかに笑う者がいた。
誰よりも悲劇を愛する者、マスク・ド・コルボーである。

「素晴らしき我が同胞よ。楽しい舞台を見せてくれた事、礼をいう。
後はこのマスク・ド・コルボーに任せてくれたまえ。」

既に足だけになった同胞に、コルボーは芝居かかった口調で言った。

「実に美しい悲劇だ……。かりそめの光から友を救い出そうと迷走し、その友の手によって死んでいく哀れな勇者。」

ティガを悪人の如くまくし立て、コルボーは高らかに宣言した。

「我等が勇者に捧げよう!無慈悲なる裏切り者の首を!友を惑わしたる愚か者達の最期を!!」

その言葉に、ティガは怒りの余り拳を震わせた。

「ンゥゥゥ……、チャッ!!」

「哀れなる裏切り者よ。貴様に安らかな床は似合わない。この血と鋼に満ちた狂乱の地に果てるがいい。」

ティガの神経を逆なでするように言って、コルボーは己の忠実な部下に命令を下した。

「行け、変形怪獣ガゾート?!かの裏切り者を喰らい尽くすがいい!!」

「グワーッ!!」

ガゾート?は凄まじい咆哮を上げ、ティガ目掛けて突進して来た。

「チャッ!」

ティガも傷が癒えぬまま、怪獣に応戦する。

しかしいくらティガと言えども、力をほぼ使い果たした今の状態では、まともな戦いにならなかった。

「ジュワッ!?」

ガゾート?のタックルを受け、ティガは真後ろの建物を巻き込んで倒れる。

「フハハハハ!ぶざまだな、ウルトラマンティガ。そうして地面にはいつくばる姿が、裏切り者には相応しい。」

傷付いたティガの様子に、満足げに笑うコルボー。

そして、更に冷酷な命令をガゾート?に与えた。

「よし、ガゾート?よ。あの哀れな裏切り者に、かの仲間の死に様を存分に見せてやれ。」

「グワーッ!!」

命令を受け、ガゾート?は標的をティガから未だ動く事の叶わない巴里華撃団に変え、にじり寄った。
動きの鈍ったティガの眼前で巴里華撃団を全滅させようというのである。

「く、くそ……!!」

逃げようにも応戦しようにも、身動きが取れなければどうする事も出来ない。
その間にも、ガゾート?は殺意の孕んだ目で大神達を見下ろす。

「フハハハハ!ガゾート?、まずは裏切り者の心を惑わす、あの哀れな姫君を狙え!!」

「チャッ……!!」

ティガは直感した。
コルボーの示した姫君。
それが、エリカである事に。

「グワーッ!!」

最初の標的をエリカに決め、ガゾート?は全身の電気をスパークさせる。

「エリカくん！」

大神が助けに行こうとするが、光武Ｆ２は沈黙したまま動かない。

「（エリカさん……！！）」

ティガは一縷の望みをかけ、傷付いた身体に鞭を打ち立ち上がった。

そして……、

「グワーッ！！」

「チャーッ！！」

ガゾート？目掛けて飛び出した。

ガゾート？の全身がスパークした瞬間、エリカは沸き上がる恐怖から思わず目を閉じた。

やられる。

殺される。

そう思った。

「……あ、あれ……？」

しかし、いつになっても衝撃は襲って来ない。
確かにガゾート？は自分を狙って攻撃して来たはずなのに。
エリカは、恐る恐る目を開け、目の前の状況を見た。
そして、見てしまった。
自分を抱きしめるようにして庇うティガの姿を。

「ダ……、ダイゴさん……！？」

「チャッ……！」

声をかけるエリカにティガが答えようとした時、ティガの真後ろから咆哮が轟いた。

「グワーッ！！」

「ジュワッ！？」

ガゾート？の鈎爪が、ティガの背中を切り付けた。
背中をのけ反らせて苦しむティガ。
しかし、ガゾート？は立て続けにティガの背中を切り付けて来た。

「＃＃ＮＡＭＥ１＃＃さん！！」

ようやくティガが自分を庇ってくれた事に気付き、エリカが叫ぶ。

「エリカさん……。」

ふと、耳元に心地好い声が聞こえた。

それは、ティガだった。

「エリカさん……、大丈夫……。僕が、必ず守るから……。」

「ダイゴさん……！！」

今までにない弱々しい声に、エリカはティガが瀕死の状態である事を悟った。
無理もない。
ただでさえ深手を負った状態でイーヴィルと激しい戦闘を行い、間を置かずして現れたガゾート？の猛攻から身を挺して自分を庇っているのだ。

「どうして……、どうして動いてくれないの……？動いてよ……、お願いだから……！」

必死に光武Ｆ２を動かそうとするエリカ。
しかし、光武Ｆ２は沈黙したまま動く気配を見せない。
援護も、回復も、目の前で傷付くティガを助ける事も叶わない。
エリカは、両目に涙を溜めて祈った。

「神様、お願いです……。私は、今までみんなに迷惑ばかりかけて来ました。」

生来のドジで、レノ神父やダイゴを始め、様々な人達に迷惑をかけて来た。
しかし、今度だけは迷惑をかけられない。
足を引っ張る事は出来ない。
それは、大切な人の死を意味していたからだ。

「でも、今だけ……、一つだけお願いを聞いて下さい！ダイゴさんを……、ダイゴさんを助けて……！！」

すぐ近くで、カラータイマーの警告音がけたたましく鳴り響く。
ティガの命が、ダイゴの命が、消えようとしていた。

「フハハハハ！素晴らしい幕だ！裏切り者は醜く死に、隠れ家諸とも炎に包まれる。さあ、最期の命の煌めきを見せておくれ！！」

二人を嘲るように、コルボーが笑った。
そして、ティガの背中に凄まじい衝撃が伝わる。

「ジュワッ！？」

「きゃあっ！！……、ダイゴさん！？」

衝撃に悲鳴をあげ、エリカはハッとした。
自分の感じた衝撃すら大きなものだった。
それがティガにはどれ程のものだったか。
想像に難くなかった。

「ジュワッ……！！」

「ダイゴさん……？嫌、ダイゴさん……！！」

身体が激しく痙攣して尚、ティガはエリカの光武Ｆ２から離れようとはしなかった。
既にティガの身体は、背中を中心に無数の傷がついている。
最早立つ事すらままならない状況の中、エリカの瞳から涙がこぼれ落ちた。

「嫌……、こんなのやだよ……！」

次々の脳裏に浮かぶ思い出の数々が蘇り、涙となって天使の頬を伝う。

そして、それと同時に身体の奥から何かが溢れ出すのを、エリカは感じた。

「駄目えええぇぇぇ……！！」

エリカの涙が慟哭に変わる。

その時、またも信じられない事が起こった。

エリカの光武Ｆ２から、凄まじい閃光がほとばしったのである。

その眩しさと神々しさは、ティガすら上回る程である。

「な、何事……！！」

今度はコルボーが驚く番だった。

何とティガを含め、大神達の傷が癒された。

それだけではない。

光に弱いガゾート？にダメージを与え、電磁波を消し去ったのである。

「グワァッ！？」

閃光に思わずたじろぐガゾート？。

その奥に、翼を羽ばたかせる天使の姿を彼らは見た。

「エ、エリカさん……？」

ティガが恐る恐る尋ねる。
すると、厳かな返事が返って来た。

「さあ、お立ちなさい。光の使者、貴方には成すべき事があるはず……。」

「エリカ……、何か雰囲気が違うね……。」

コクリコが率直な意見を口にした。
おそらく眠っていた霊力を覚醒させたためだろう。
いつもの陽気なエリカではなく、神をも想起させる美しき天使がそこにいた。

「小癪な真似を……！いでよポーン共！裏切り者諸とも皆殺しにしてしまえ！」

またも舞台を邪魔されたからか、コルボーが吠えた。
すると、コルボーやガゾート？の周りにおよそ十数体のポーンが姿を現した。

「大神さん、ガゾート？は僕に任せてコルボーを……！！」

エリカの霊力を受け、立ち上がったティガが叫ぶ。
胸のカラータイマーは赤いままだが、戦えなくはない。

「よし、みんな行くぞ！！」

「「了解！！」」

完全復活した大神が二刀を構えて叫ぶ。

隊員達は、溢れる気迫を以って答えた。

コルボーとガゾート?、更に召喚されたポーンの軍勢を相手に、シャノワール前一帯は再び戦場と化した。
覚醒したエリカと復活したティガを交えた戦闘は、ナーデルとの戦闘時以上に激しいものとなった。
そんな中、コルボーは蒸気獣セレナードを駆り、上空から襲い掛かって来た。

「愚かなる者共よ!早々に我の前に屍を曝せ!」

漆黒の翼を羽ばたかせ、身を切り裂く旋風を巻き起こすコルボー。
そこに、ある人物が立ちはだかった。
花火である。

「コルボーさん……、ナーデルさんもイーヴィルさんも、仲間だったのでしょう?何故あのような……。」

弓に矢を番えながら、花火が問う。
すると、コルボーは平然と言ってのけた。

「これはいつかのマドモアゼル。貴女も我の価値観というものが、分かっていただけませんかな?」

「はい……、残念ながら。」

律儀にそう答え、花火は矢を放った。
瞬速とも思える速さで矢はコルボーに殺到するが、コルボーは難無く横に避けてそれをかわす。

「マドモアゼル……、貴女は我が舞台に幕を降ろすには優し過ぎる。」

言うや、コルボーは己の魔力を最大限に集中させた。
すると、花火とコルボーを中心に、一部分が闇に包まれる。

「それともマドモアゼル……、この我を貴女が殺すというのか？」

暗闇に溶け込み、花火を挑発するコルボー。
それは闇を反響し、光武Ｆ２を包む。
コルボーはこれを利用し、自分の声を闇の中で反響させ、花火の集中力を低下させようと企んだのである。
しかし、これがコルボーの敗因だった。

「北大路花火、二の舞……、御覚悟！」

花火は目を閉じ、静かに弓を引き絞る。
そして、カッと目を見開き、霊力を込めた矢を放った。

「落花啼鳥！！」

刹那、矢の軌道に沿って霊力が巨大な鳥となって現れた。
鳥は大きな翼を羽ばたかせ、羽根を四方八方に飛ばす。

すると、羽根は闇を照らす光となってセレナードを包み込んだ。

「な、何……！？」

全身を閃光に貫かれ、セレナードは全身から煙をあげる。

直後、コルボーは目の前でこちらに矢を十二分に引き絞る花火の姿が見えた。

「ごきげんよう……。」

その一言と共に、花火が矢を放った。

その頃、ガゾート？とティガの戦いも、終盤を迎えようとしていた。

「グワーッ！！」

「ハッ！」

鋭い鈎爪となった両腕をかわし、腹部に強烈なパンチを叩き込む。

「グワッ！？」

その一撃に怯み、ガゾート?は数歩後ろへ後退した。
本来ガゾート?は、コルボーの闇の力を素にして生まれた怪獣だ。
その身体は完全なものではなく、攻撃される瞬間に相手の部位を吸収する事も出来る。
しかし、今度ばかりはそうもいかなかった。
モルモットとなったノクテュルヌに加えてイーヴィルティガを吸収したために身体が飽和状態となり、身体が実体により近くなってしまったのである。

「ハァァァ……、チャッ!!」

その一瞬の隙を突き、ティガは胸のカラータイマーに光を圧縮し、タイマーフラッシュスペシャルを放った。
目が眩まんばかりの閃光が、カラータイマーから放射される。

「グワァーッ!!」

しかし、ティガの予想に反し、ガゾート?は光に苦しんでこそいるものの、完全な決定打にはならなかった。
既にエネルギーはほぼ無くなっている。
次で決められなければ、それはティガの敗北を意味していた。

「（負けるもんか……！エリカさんは、僕が守るんだ……！！）」

決意の闘志を燃え上がらせ、ティガは残り少ないエネルギーで、ゼペリオン光線を発射した。

「ハッ!!」

渾身の力を込めた一撃が、ガゾート?の胸倉を直撃した。
タイマーフラッシュスペシャルの直後だった事もあり、ガゾート?は更に激しく苦しむ。

「チャァァァッ!!」

ティガは更に、体内に残る全てのエネルギーをゼペリオン光線に注ぎ込んだ。
その一瞬、白いゼペリオン光線が鮮やかな金色に変わる。

「グワァァァッ……!!」

金色のまばゆい光線に包まれたその瞬間、ガゾート?は悍ましい断末魔と共に仰向けに倒れ、大爆発した。

「チャッ……。」

そして、ティガもまた地面に膝をつき、静かに消え失せた。

「……ダイゴさん、気がつきましたか?」

目を覚ましたダイゴの視界に最初に飛び込んで来たのは、心配そう

に自分を見つめるエリカの顔だった。

「エリカさん……。」

見ると、周りには同様に心配そうな表情でダイゴを覗き込む大神達の姿もある。

「ごめんなさい……。私、ダイゴさんの思いに気付いてあげられなくて……。」

あの時、ダイゴの想いの全てをエリカは知った。
大神に夢中になる余り、ダイゴを茅の外に置いていた自分を、エリカは恥じた。
今まで誰より側に居て自分を支えてくれたのは、他でもないダイゴだったというのに。

「思いもしませんでした……。ダイゴさんが私の事……、そんな風に思ってくれていたなんて……。」

「エリカさん……、謝るのは僕の方だよ。」

辛い表情を見せるエリカに、ダイゴは言った。自分が勝手に彼女を好きになったのだ。
エリカは何も悪くない。
自分の事で彼女が謝る事などないと、ダイゴは思っていた。

「僕の方こそ、勝手に勘違いして、勝手に嫉妬して……、エリカさんや大神さんを傷つけた……。謝るのは、僕の方だ……。」

「ダイゴさん……。」

どう言葉をかけていいか分からず、エリカは口ごもる。
しかし、何かを決心したように再び口を開いた。

「ダイゴさん……。私、驚きました。」

「え？」

「だって、目の前で好きだなんて言われたら……。本当にビックリしたんですよ？」

その時のダイゴの様子を思い出したのか、エリカは顔を赤くした。
それを見て、ダイゴの顔も赤く染まる。

「……でも、嬉しかったです。私を一人の女性として好きと言ってくれて……。」

「エリカさん……。」

「それで、その……、ま、まだダイゴさんの事、一人の男性として見た事がないので……。」

恥ずかしがっているのか、いつになく緊張した様子のエリカ。
しかし、目を閉じ、気持ちを落ち着かせた様子で続けた。

「で、ですから……、私、今すぐは答えを出せません。なので、少しだけ待っててもらえませんか……？」

「え……？」

「私、もっとダイゴさんの事を知りたいです……。お友達じゃなくて……、そ、その……ひ、一人の男の人として……。」

その言葉に、ダイゴは一瞬時が止まったような感覚を覚えた。
エリカは答えを出した訳ではない。
しかし、自分の気持ちを知った上で、自分を一人の男性として好きになりたいと言ったのだ。
半ば諦めかけていたダイゴにとって、それがどんなに嬉しい事か。

「エリカさん……、その言葉だけで十分だよ……！」

ダイゴは、胸に込み上げる熱いものを隠そうともせずに答えた。
今すぐ答えを出す必要なんかない。
これから自分達は、長い時間一緒になるのだから……。
ダイゴは、長い間自分の心の奥底に巣くっていた闇が、瞬く間に消えていくのを自覚した。
それは、やはり目の前の天使の見せる、輝かしい笑顔のおかげだったのかも知れない。

「……どうだい、ジャン班長。」

大神達がシャノワール前の戦闘に勝利した頃、作戦司令室はいつになく緊張した空気に包まれていた。
グラン・マの隣では、メルとシーに手伝ってもらいながら、ジャンが何やら大掛かりな機械を操作している。

「よし、準備完了だ。始めるぜ。」

ジャンが機械のスイッチを作動させた。
すると、作戦司令室のメインモニターに巴里のとある場所が写る。

「なるほど……、ノートルダム寺院か。」

その場所を見て、グラン・マが納得した表情で呟いた。
あれからグラン・マ達は、紅蘭が光武F2と共にプレゼントしてくれた高性能蒸気レーダーで、カルマールの隠れ場所を探していたのである。
カルマールは他の怪人より飛び抜けて魔力が高い。
こちらはそれを逆手にとって、魔力の反応で怪人の本拠地を探しだそうと考えたのである。
そして、浮上したのがノートルダム寺院だった。
四方を水に囲まれたセーヌ河に浮かぶシテ島にあるそれは、正しく天然の要塞。
隠れて何かを企むには絶好のポイントだった。

「……いよいよ、決戦だね。」

神妙な面持ちでグラン・マが呟いた。
巴里華撃団と謎の怪人達との戦い。
その最後の戦いが、始まろうとしていた。

裏切りの果てに・後編（後書き）

《次回予告》

避難命令が発令され、決戦の時が近づいて来た。

敵はノートルダムにあり！

ムッシュ、ダイゴ、覚悟を決めな！

次回、サクラ大戦３！

《拝啓ウルトラマン様》

愛の御旗のもとに……

貴方ですね？我が光を、受け継ぐ者は……

拝啓ウルトラマン様・前編（前書き）

前半部のクライマックスに当たります。
何気に欧州星組は初登場だったり……。

拝啓ウルトラマン様・前編

シャノワール防衛から三日。
ダイゴを含めた巴里華撃団のメンバーは、揃って作戦司令室に顔を揃えていた。

「おエライさん方から決定が下ったよ。」

緊張の空気に包まれる中、グラン・マが厳かに告げた。

「準備が完了し次第、巴里華撃団はシテ島に出撃。ノートルダムに総攻撃を開始する。」

怪人の首領、カルマールがノートルダムに潜んでいる事を突き止めてすぐ、攻撃という訳にはいかなかった。
帝都でもそうだったように、巴里にも賢人機関が存在する。
巴里華撃団の出撃も、賢人機関の許可が降りて初めて可能になるのだ。
ならば何故、この決定に三日も要したか。
それは、一部の軍部による攻撃作戦が先に行われていたからである。
しかし、いくら実戦を積んだ特殊部隊といえ、霊力のない人間が束になってかかった所で勝ち目はない。
結果、三日という無駄な時間をかけて巴里華撃団に主導権が移ったのである。

「いよいよ決戦か……。」

大神が神妙な面持ちで呟く。
すると、奥に座るグリシーヌが拳を握り締めた。

「ついにカルマールと決着をつける時が来たのだな。相手にとって不足はない！」

「少しは慎重になれよ。前はコテンパンだっただろ？」

血気盛んなグリシーヌに、ロベリアが呆れた表情でツッコミを入れる。

確かにそうだ。

以前シャンゼリゼで相対した時は、こちらは全く手も足も出なかった。

力をつけたからと言って、その二の舞にならないと何故断言できよう。

「そうでしたね……、前回は一矢報いる事も……。」

「ボク達……、きっと勝てるよね……？」

ロベリアの言葉に不安げな表情を見せる花火とコクリコ。

すると、ここでダイゴが口を開いた。

「きっと大丈夫だよ。いろんな特訓をして、強くなったんでしょう？」

「ああ。ダイゴの言う通りだ。今の俺達には、チームワークと光武Ｆ２がある。自信を持つんだ。」

前回の戦いから、巴里華撃団は様々な形で強化を計った。

加山の助けで帝国華撃団に来仏してもらい、チームワークと基礎訓練、更に光武Ｆ２を加えて飛躍的な進化を遂げている。

その力は、今や帝国華撃団と遜色ないものになりつつあった。

「それに、ヤバくなったらエリカとダイゴが、前みたいに大活躍してくれるさ。なあ？」

「ま、まあね……。」

「は、はい……、任せておいて下さい……。」

ロベリアに急に言われたためか、やや遅れて返事をする二人。

すると、グラン・マが話をしめた。

「よし。既に巴里全域に避難命令が発令されてある。アンタ達はまだ街に人が残ってないか、見回りに行っておくれ。」

許可が降りた時点で、巴里華撃団の出撃は決定的となった。

当然決戦はノートルダム寺院のあるシテ島になるのだが、実は巴里華撃団の前座としてカルマールと交戦した特殊部隊から気になる情報が寄せられていた。

『敵は地下の巨大な兵器を用い、巴里殲滅を狙っている』

確実な内容ではないが、事実であれば巴里市街が戦場となり、一般市民に夥しい犠牲者をだす可能性がある。

それを避けるべく、政府は巴里全域に避難命令を発令したのである。

最も、それが怪人によるものと公表する事は出来ないので、大地震が来るとしているのだが。

「さて……。」

大神達が全員作戦司令室を後にしたのを見届け、グラン・マは独り言のように呟いた。

「……という訳だ。頃合いを見て接触しておくれ。」

「分かりました。」

すると、グラン・マの独り言に別の声が答えた。

グラン・マはその声に驚く事もなくモニターに写った巴里の街を眺めていた。

避難命令が出され、人の消えた巴里の街は沈黙に包まれていた。

「人がいなくなると、こうも静かになるものか。」

大神は改めて、普段の巴里の良さというものを感じた。

花の都と呼ばれる巴里も、そこに人がいなければ寂れた街と何ら変わりない。

この街に再びかつての賑やかさを取り戻せるかは、自分達巴里華撃団にかかっていた。

「そこにいるのは隊長か？」

ふと声がして振り返ると、グリシーヌの姿があった。

「グリシーヌ、逃げ遅れた人はいなかったかい？」

大地震が来ると避難命令を出したからと言って、すぐに誰もが避難できる訳ではない。

荷物の準備に時間がかかったり、身体の不自由な人は、まだ巴里市内に残っている可能性があった。

「ああ。この一帯は無人だ。教会の方にも、エリカが向かっている。」

グリシーヌは大神を安心させるように答え、続けて尋ねた。

「隊長。貴公は巴里を、この街をどう思う？」

「巴里を？」

「そうだ。私はブルーメール家の名において、巴里を守る。私の子達も、同様に守り続けていく。しかし、異邦人である貴公にとって、巴里とは何だ？」

人には誰も、生まれ育った故郷がある。

大神なら日本。グリシーヌなら巴里という具合に。

故郷は不思議とその人の心を和ませ、離れる事を拒ませる。

そして、自分が死ぬまでは平和であり続けて欲しいと願うものだ。

グリシーヌにとって、巴里は先祖代々栄えたブルーメール家の街だ。

これまでの歴代の先祖達がそうだったように、命を懸けて守り抜く事を決意するのも当然である。
しかし、大神は巴里に来て半年にもならない異邦人。
決して長いとは言えない期間で、この巴里の街を愛せるのだろうか。
すると、大神はハッキリと答えた。

「巴里は、俺の第二の故郷だ。日本だけじゃない。この巴里も、俺は大好きだ。」

「そうか……。貴公なら、やはりそう言ってくれると思っていた。」

大神の答えに、グリシーヌは思わず笑みをこぼした。
僅か半年だというのに、命すら躊躇わない大神。
そこに見えるサムライ気質は、不思議とグリシーヌを安心させた。

「ならば隊長。私と共に誓いを立ててはくれまいか。必ず勝ち、巴里を守り抜くと……。」

「ああ、分かった。」

間を置かずに頷き、大神はグリシーヌの動きを真似て、太刀を構えた。

「グリシーヌ・ブルーメール……、この斧に誓い、巴里の街を守り抜く。」

「大神一郎……、この剣に誓い、巴里の街を守り抜く。」

それぞれ今まで共に戦ってくれた戦友を手に、改めて来たる戦いへ

の勝利を誓う。
儀式と言えばそれまでだが、二人にはまるで今まで巴里を守って来たいくつもの魂が、武器を伝えに自分を祝福しているように感じられた。

「……礼を言うぞ、隊長。シャノワールで会おう。」

そう言って、グリシーヌはその場を立ち去る。
大神はその背中が、今まで以上に頼もしく見えた。

「おい君、避難命令を聞いていないのか？早く避難所に向かいなさい。」

背後からそう声がかけられたのは、その時だった。

「エビヤン警部。警部も見回りを？」

振り向いた大神の目に写ったのは、厳しい表情でこちらを見るエビヤン警部の姿だった。

「何だ、大神君じゃないか。君も見回りをしてくれていたんだね。」

向こうもこちらに気付き、表情を緩める。
大神は、無難な程度でそれに答えた。

「はい。これから俺も避難所に向かう所です。」

「そうか、分かった。本官も後から合流しよう。」

大神の言葉に安心したらしく、エビヤン警部は笑顔を見せる。

「それでは失敬。……サフィールさんに、よろしくな。」

そう言って、エビヤン警部は町外れの方へ走り出す。
あの美術館騒ぎの一件で、エビヤン警部は少なからずロベリア紛する踊り子のサフィールを意識していた。
ロベリアからすると迷惑千万らしいが。

「さて、俺も見回りに戻るか。」

教会の方はエリカが向かったという。
エビヤン警部が来た方角からして、警察署や大神のアパルトメント周辺は大丈夫だろう。

「そうだな……、シルク・ド・ユーロに向かってみるか。」

サーカスで一躍巴里の人気者となったシルク・ド・ユーロ。
しかし、今回の避難でテントを畳み、動物達を連れて避難しなければならない。
それが気になった大神は、シルク・ド・ユーロに向かった。

その頃、ダイゴの姿は教会の前にあった。
逃げ遅れた人がいないか確かめる事もあるが、もう一つ理由がある。
それは、この戦いに生きて勝てるよう、祈りを捧げるためだった。
シャンゼリゼで感じたカルマールの力は、自分達を遥かに凌駕している。
たとえ力をつけた自分達でも、勝てる保障はない。

「……ん？」

ふと入口で、ダイゴの足が止まった。
見ると、中では赤い服のシスターが一人、祈りを捧げていた。

「主よ……、私達はこの街を守るため、大いなる戦いに挑みます。
命を賭した戦いになるでしょう……。」

「……。」

「でも、これは私の使命。逃げる訳には参りません。主よ、どうか
罪深き我らを、お守り下さい……。」

泣く事もなく、取り乱す事もなく、穏やかな表情で祈りを捧げるエリカ。
ダイゴはその背中に、不安と戦う彼女の心を見た。

「エリカさん……、不安なんだね？」

「……、ダイゴさん！」

突然の声に驚き、エリカが後ろを振り返る。

ダイゴは、優しい微笑みでエリカを見た。
すると、エリカは不安な表情で告白した。

「はい……。私、怖いんです。本当に勝てるのか……。」

「大丈夫さ。正義のために戦う僕らを、神様は見捨てたりしないよ。
前だって、ピンチを切り抜けられたでしょ？」

不安がるエリカに、ダイゴは自信を持って答えた。
確かにカルマールの力は脅威だ。
ダイゴも不安ではないと言えば、嘘になるだろう。
しかし自分達は、これまで何度もピンチを乗り越えて来た。
大丈夫。今度もきっと勝てる。
だが、エリカが不安に思うのはそれだけではなかった。

「いいえ……、私は、その力も怖いんです……。」

「え？」

怪訝な顔を見せるダイゴ。
エリカはそんなダイゴに、不安の正体を打ち明けた。

「私が怖いのは、私が持ってる力なんです。」

「力？もしかして、前の戦いの時の……？」

前回のシャノワールでの戦いで、エリカが目覚めさせた真の力。
その力は、巴里華撃団はおろかティガにも匹敵し、コルボーやガゾート？に凄まじいダメージを与えた。

「私みたいなドジに……、こんな凄い力は使いこなせません。もしまた失敗して、みんなを危険に曝したらと思うと……。」

力が強いという事は、それだけ代償が大きいという事。
怪獣すら苦しめたあの力、一歩でも使い道を誤れば、甚大な被害を仲間や巴里にもたらす恐れがある。
エリカが恐れていたのは、その力の暴走だった。

「大丈夫だよ、エリカさん……。」

そう言って、ダイゴはエリカの前に立ち、その両手を自分の両手で包み込んだ。

「えっ!?あ、あの……、ダイゴさん!?」

突然の行為に、耳まで真っ赤になるエリカ。
すると、ダイゴは赤い顔でエリカを見つめて言った。

「大丈夫だよ……。エリカさんは、僕が守るから……!」

「ダイゴさん……。」

一瞬か、それともっと短い時間だったか。
二人は全てを忘れ、互いに見つめ合っていた。

「あ……、ご、ごめん!恥ずかしがったでしょ!?」

羞恥に気付き、先に離れたのはダイゴだった。

「じ……、じゃあまた後でね!」

対応に困ったダイゴは、エリカを置いて教会を後にする。
するとその様子がおかしかったのか、エリカは赤い顔のまま笑った。

「アハハ、ダイゴさんったら……。」

いつになく積極的だったダイゴの仕草を思い出し、エリカは笑った。
その胸中に、先程までの不安は消え失せたようだった。

その頃、大神はシルク・ド・ユーロからシャノワールへ続く大きな通りを歩いていた。
既にシルク・ド・ユーロの人達は、動物達を含めて避難を完了していた。
これで残る箇所は、墓地に続く花屋とグリシーヌ邸。
そして、この公園になる。

「流石に、ここは誰もいないか……。」

歩いて来た町並み同様、人気のない公園。
すると、大神の後ろから声がした。

「相変わらず、アンタは仕事熱心だね。」

それは、ロベリアだった。
何をするでもなく、公園の真ん中にある池の柵に腰を降ろしている。

「ロベリア。ここの避難状況は？」

「見ての通りさ。金目のものもなくなって、アタシには退屈だよ。」

「そ、そうか……。」

何ともロベリアらしい答えに、思わず納得する大神。
すると、ロベリアがふと遠くを見た。

「本当なら、アタシはまだ刑務所の中。１０００年の懲役だったはず……。そのアタシが巴里のために戦ってると思うと、自分の人生に驚かされるぜ。」

かつて巴里の悪魔と恐れられ、今もそう恐れられているロベリア。
常識的に考えて最も正義に掛け離れた彼女が、こうして巴里華撃団として戦うのは、運命の悪戯と言うべきだろうかと、大神は思った。

「刑務所は暇でね。色んな事を考えてたよ。壁の向こうと壁のこっち、どっちが外かってな。」

「刑務所の方が中じゃないか？」

常識的な判断で答える大神。
すると、いつもは不快な顔をするロベリアが真顔で答えた。

「地球ってのは丸いだろ？なら、囲いの中が狭いが広いかで、違いはない。」

それは、１０００年という長い時を過ごそうとしていた時の、ロベ

リアなりの考え方だった。
どんな場所にいようと、地球という星の中にいる事は変わらない。
だから場所を、ましてやそこにいる期間を気にする必要はない。
今日も明日も、中の自分も外の誰かも、この星で生きているのだから関係ない。
しかし、今のロベリアにその考え方はもうなかった。

「でも、今はもう駄目だ。こっちの世界に、大事なものができちまったからな。」

「ロベリア……。」

いつになくアンニュイな様子のロベリアに、一瞬目を奪われる大神。
すると、ロベリアは途端にいつもの調子に戻った。

「なんてな。じゃアタシは、金目のものでも探してくるよ。」

「ま、待てロベリア！泥棒は……！」

慌ててロベリアを捕まえようとする大神。
しかし、逆にロベリアに羽交い締めにされてしまった。

「それなら、アタシをしっかり捕まえておきな。アンタだけだよ、そんな事出来るのは……。」

「ど、どういう事だ……？」

言葉の意味が分からず、首を傾げる大神。
すると、ロベリアは大神の耳元で囁くように言った。

「でもね、隊長。アタシも捕まるより、捕まえる方が性に合ってるみたいだ。……覚悟しておけよ？」

そこまで口にして、大神を掴む力が急に弱まった。
振り返ると、もうそこにロベリアの姿はなかった。

「ロベリアも変わったな……。素直になったというか……。」

口調や態度は相変わらずだが、随所に彼女なりの愛着が見受けられる。
その一番の理由が自分にある事を、大神はまだ知らない。

「ムッシュ。避難状況はどうだい？」

シャノワール前に戻った大神に、入口でジャンと待っていたグラン・マが尋ねた。

「まだ半分ですが、ほぼ完了しています。あと３０分程で全てかと。」

「そうか。……何だか巴里が別の街みてぇだな。静かになっちまってよ。」

大神の報告に、ジャンがため息と共に呟いた。
まるで死んだように静かな巴里。
それが僅かな一時か、永遠に続くかは、自分達にかかっている。
そう思い重圧を感じる大神の肩に、グラン・マが手を置いた。

「ムッシュ、怪人の被害で一番大きいのは建物なんかじゃない。被害に遭った人の心だよ。」

「隊長さんなら分かるよな？一番守るべきは、巴里の人達だ。これ以上、悲しませる訳には行かねぇ。」

グラン・マに続いてジャンが言った。
人の心は脆い。
たった一度の悲しみが、時に一生をかけても癒せないものもある。
あの血も涙もない怪人などのために、巴里を悲しみに脅かす事は、許されなかった。

「司令、班長、俺達で巴里の未来を作りましょう。巴里華撃団なら絶対に出来ます！」

「そうだね、ムッシュ。アンタの言葉、信じるよ。」

「光武Ｆ２は完璧に整備しておいてやるぜ。頼んだぜ、隊長さん。」

大神の強い言葉に勇気づけられ、グラン・マとジャンの表情から緊張が消える。
不安になればなる程、その不安は現実になる。
それを止めるには、自信を持つ。
則ち、信じる事だった。
巴里華撃団との絆か、これまでの戦いの経験からか、大神は仲間達

の力に揺るぎない自信を持ち、信頼していた。
そこには、何物も恐れぬサムライ気質があった。

次に大神が向かったのは、花屋の隣にある墓地だった。
流石に誰もいないとは思うが、場所が場所だけにどうしても気になるのだ。

「あ、大神さん……。」

来て見ると、案の定花火の姿があった。
おそらくフィリップに挨拶に来たのだろう。
その手には、お供え用の花束が抱えられていた。

「ご苦労様です。すみません、見回りの最中に……。」

「構わないさ。フィリップさんのお墓参りだろう?」

「はい……、最後のお別れにと思いまして……。」

大神が尋ねると、花火はやや陰りのある表情で答えた。
やはり花火も、この戦いに不安を感じているのだろう。
フィリップの死から立ち直ったとはいえ、その心は大神程強いもの

ではない。
それを知る大神は、勇気づけるように言った。

「最後じゃないよ、花火くん。俺達は帰って来るさ。勝って、笑顔で帰って来るんだ。」

「そうでしたね……。みんなで、生きて帰って来るんでしたね。」

僅かだが勇気を取り戻す花火。
大神は、厳しい表情を緩めた。

「それじゃあ、俺もフィリップさんに挨拶させてもらえるかな？」

「はい、お願いします。フィリップも喜んでくれますわ。」

快く了承してくれた花火に礼を述べ、大神はフィリップの眠る墓の前に立った。

「フィリップさん、俺達は巴里を守り、生きて帰ってきます。どうか見守って下さい。」

「フィリップ……、また来ますね。」

両手を合わせて目を閉じ、冥福を祈る。
すると、ふと花火が尋ねた。

「そういえば大神さん。日本では約束の時、指切りをすると……。」

「ああ、そうだよ。小指を出してごらん。」

怖ず怖ずと差し出された花火の右手の小指に、大神は自分の小指を絡める。

「大神さん、生きて帰って来ましょうね。みんなでまた、笑えるように……。」

「ああ、約束する。みんなで生きて帰る。そして、巴里の平和を祝おう。」

そして、二人は声を揃えて言った。

「「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲〜ます、指切った。」」

花火との指切りを済ませ、大神は最後にグリシーヌ邸の方に向かった。

その途中の市場を通り掛かった時、コクリコの声が聞こえて来た。

「あ、イチロー。見回りご苦労様。」

「コクリコ。この辺の避難状況は？」

「うん。もうこの辺りには、誰もいないみたいだよ?」

大神に聞かれ、周りを見渡して答えるコクリコ。
その時、コクリコの目に黒い影が写った。

「あ、イチロー!あそこに猫がいるよ。」

近寄るコクリコについて行くと、赤い首輪をつけた子猫が市場の影に隠れていた。
大きさはグラン・マの飼っているナポレオンの半分くらい。
まだ人間で言えばコクリコくらいの年齢だ。

「どうしたの?飼い主とはぐれたの?」

優しく抱き寄せ、コクリコが話しかけた。
抵抗がない事から、人間に慣れている事が分かる。
つまり野良猫ではなく、コクリコの言う通り飼い主とはぐれたのだろう。

「ねぇイチロー。この子猫、飼い主が見つかるまで預かっていいかな?」

「飼い主が見つかるまでだよ?きっと探していると思うから。」

この子猫とはぐれた事で、飼い主を糾弾するつもりはない。
何しろ大地震の避難で、大忙しだ。
そのどさくさでペットとはぐれる事は、十分有り得る話だった。
あくまで飼い主が見つかるまでという事で、大神はコクリコの提案を受け入れた。

「やった！名前はどうしようかな？」

「とりあえず、コクリコの好きな名前でいいんじゃないか？」

どうせ長く一緒にいる訳ではないし、深く考える必要もない。
大神のアドバイスに、コクリコは決めた。

「分かった。一番好きな人の名前をつけるよ。」

その時、子猫がコクリコの腕をすり抜けて地面に落ちた。

「あっ！コラ、イチロー！じっとしてなきゃ！」

慌てて考えたばかりの名前を叫び、子猫を抱き抱えるコクリコ。
しかし、今の一言に反応する人物がいた。
イチローこと、大神である。

「え？今、俺の名前……。」

「え？……ハッ！そ、それじゃ、ボクもう行くね！！」

大神に言われて気がついたコクリコは、顔を真っ赤にして市場を走り去った。
その後ろ姿を見ている内、大神は思わず微笑んだ。

「迫水大使、こちらでしたか。」

久しぶりに足を運んだ日本大使館で、大神は入口に立つ迫水に話しかけた。

「大神君か。既に一帯の避難は完了したよ、安心したまえ。」

「そうですか。では、大使も……。」

以前と変わらぬ笑顔で応える迫水に安心し、笑顔を返す大神。
しかし次の瞬間、迫水の顔から笑顔が消えた。

「強いな、君は。決戦を前に、平常心を保てるなんて……。」

「大使……？」

「僕は自分が情けないよ。戦うのは大神君達だというのに……。」

それは、迫水が五十数年の人生で初めて見せた不安であった。
かつて政治界において無敵を誇った『鉄壁の迫水』。
その分厚い壁が、恐怖の重圧を潰されかかっていた。

「大使、俺達を信じて下さい。そうでなくては、俺達は安心して戦えません。」

「……そうだね、ありがとう大神君。やはり君を巴里華撃団の隊

長に推薦して良かったよ。」

大神の励ましに心を救われ、迫水は礼を述べた。
あの迫水大使すら不安にさせる程の強大な力。
大神は、先の帝都の戦いを超える死闘が待っている事を予感した。

その帰り道、大神はグリシーヌ邸の玄関で信じられない光景を目にした。

「タ、タレブーさん！」

何と、メイド長のタレブーが一人、中庭の掃除をしていたのである。
大神は慌ててタレブーの所に走った。

「タレブーさん！避難命令が出ているのに、何をしているんですか！」

「これはオオガミ。見ての通り掃除ざます。」

タレブーは平然と言った。

「お嬢様は大いなる使命のもと、勇者ティガと共に戦おうとしているざます。ならば私の使命は、屋敷を守り、お嬢様のお帰りを待つ事ざます。」

「しかし、タレブーさんも危ないかもしれないんですよ！？」

「いくらオオガミの頼みでも、こればかりは聞けないざます。」

頑なにメイド長の務めを果たそうとするタレブー。
そんな彼女に、大神は必死に訴えかけた。

「グリシーヌが心配します。彼女なら屋敷より、タレブーさんを心配するはずです。」

「確かに……、お嬢様はお優しい方ざますから。」

グリシーヌは生まれて数年で、両親が他界している。
そんな彼女にとって、先代から仕えているタレブーは育ての親と言うべき存在だった。
グリシーヌにとってタレブーを失う事は、正に親を無くすと同じ事。
そんな不安を、戦いを前にグリシーヌにさせる訳にはいかなかった。

「タレブーさん。グリシーヌの思いを察して下さい。彼女なら何て言うか……。」

大神に言われ、タレブーは一瞬考えた。
ここにもしグリシーヌがいれば、自分に何て言うか。
答えは、簡単に出て来た。

「……分かったざます、オオガミ。お嬢様を悲しませる訳には、いかないざますからね。」

「タレブーさん、ありがとうございます。」

「礼を言うのは私ざます。オオガミ、お嬢様をお頼みするざます。」

それはメイドとしてというより、立派な母の顔だった。
そのタレブーに、大神はグリシーヌを絶対に守る事を誓った。

「よし、これで街の見回りも終わりだな……。」

避難所に向かったタレブーを見送り、シャノワールの方に歩き出す大神。
その時、携帯キネマトロンに通信が入った。

「何だ？……、何だと！？」

『ノートルダムに異常発生』。
携帯キネマトロンには、そう書かれていた。
もしや怪人が先手を打って動き始めたのか。
嫌な想像をする大神の耳に鐘の音が聞こえて来たのは、その時だった。

「くそっ！一体何をするつもりだ……！！」

それは、巴里の街を覆う黒雲の中から現れた。
巨大な怪物の姿をした兵器が、雲を割って巴里上空を飛来する。
巴里を狙うように下を向いたいくつもの突起。
刹那、その突起の先端から凄まじい魔力が放出された。
魔力は炎となり、瞬く間に巴里の街を焼き尽くす。
更に間髪入れずに、突起の先が接点となって巨大な円を描き出す。
すると、円は凍てつく衝撃波となって巴里の街に牙を向いた。
燃え盛る炎から一転、氷に包まれた巴里の街。
もし避難命令がなければと思うと、大神はゾッとした。

「あれが、カルマールの武器なのか……。」

空に消えていく兵器に、大神は呟いた。

「都市に満ちるエネルギーを利用した空中砲台オプスキュール……、これ程の威力とは！」

先程巴里の一部を半壊させた兵器に、怪人最期の生き残り、レオンが感嘆の声を上げた。
しかし、カルマールは軽く笑った。

「今のは単なる余興。小僧の驚く顔が見たくてな。」

「では、まだオプスキュールの攻撃力は上がるのですな！」

今のが余興とするならば、一体どれ程の力を秘めているというのか。
驚きの表情を浮かべるレオンに、カルマールは笑って宣言した。

「いかにも。次の攻撃を以ってすれば、小僧共や裏切り者はおろか巴里そのものが蒸発してしまうわ。」

今の余興でこの威力である。
次の発射が、巴里華撃団の、そしてウルトラマンティガの最期を意味していた。

「カルマール公、その次の発射は、いつ行う予定なのですか？」

レオンが尋ねると、カルマールは顎に手を置いて考えるそぶりを見せた。

「エネルギーの吸収にはしばらく時間がかかる。早くて明日の日の出だろう。」

オプスキュールは、巴里という都市に満ちる負の感情をエネルギーとする。
絶大な威力を発揮できる反面、一発の発射に時間がかかるデメリッ

トがあった。
次の発射までおよそ一日。
それまで巴里華撃団とウルトラマンティガの攻撃を妨害する必要があった。

「レオンよ。定刻まで小僧共の足止めをしろ。」

「お任せあれ。裏切り者の首を、公爵様に捧げましょう。」

従順な態度を見せるレオン。
しかし、彼らは気づかなかった。
その会話を盗み聞きする二つの影の存在に。

「……会話の内容は、全て記憶した。」

「フフン、思い上がるのも今の内で～す！」

オプスキュールが巴里に齎した被害は、甚大過ぎるものだった。
モンマルトルを中心に四つの地域が壊滅し、シャノワール周辺もかなりの被害を受けた。
幸い避難が終了していた事もあって怪我人はいなかったが、このままでは巴里が全滅するのも時間の問題だった。

「さて、ムッシュ。この状況をどう判断する？」

グラン・マに聞かれ、大神は即答した。

「情報を集めましょう。あの兵器にも、何らかの弱点があるはずです。」

「そうだよね！イチロー頭いい！」

「確かに、下手に攻撃されても返り討ちですから。」

大神の考えに、コクリコと花火が賛同する。

その時、入口から聞き覚えのある二つの声が聞こえて来た。

「その通りで～す！情報収集はメチャ重要で～す！流石分かってますね！」

「正確な情報を収集し、的確な分析を行い、確実な作戦を立てれば、」

「勝利なんてイージーで～す！！」

「こ、この声はまさか……！！」

やたらハイテンションな声とコンピューターみたいな無感情の声。

この二つの声に、大神は聞き覚えがあった。

振り向くと、そこには懐かしい二人の仲間の姿があった。

「お久しぶりです、中尉サン！はるばる帝都から参上した、ソレッ

タ・織姫で～す！」

「レニ・ミルヒシュトラーセ、一五四〇到着。隊長、久しぶりだね。」

それは、元欧州星組にして現帝国華撃団隊員、織姫とレニだった。
巴里華撃団決戦の報を聞き、帝都最後の助っ人として駆け付けたのである。

「織姫くん！レニ！君達も来てくれたのか！」

頼もしい仲間の到着に、笑顔がこぼれる大神。
すると、二人は相変わらずの返事を返した。

「当然で～す。困った時はお互い様ですよ、中尉サン。」

「隊長が守るものを、ボク達も守りたいから。」

心温まる言葉を返す二人。
しかし、ここで当人の大神以上に興奮する者がいた。
言わずと知れた、エリカである。

「キャ～～～！！織姫さんにレニさ～～～ん！！」

「エリカさん！エリカさん、落ち着いてってば！！」

「巴里華撃団花組、エリカ・フォンティーヌです！！よろしくお願いします！！」

ダイゴに止められながらも、身を乗り出して自己紹介するエリカ。

その様子に、織姫もレニも度肝を抜かれた。

「そ……、そですか……。近所のおバカが飛んで来たと思ったで～す……。」

これまでの六人同様ドン引きする織姫。

一方、レニは無言のままエリカを見つめていた。

「あら？レニさん聞こえませんでした？」

「聞こえている。……呆れていただけ。」

いつものペースのエリカをバッサリ切り捨てるレニ。

すると、グラン・マが口を開いた。

「ムッシュ加山に手配してもらってね。敵の情報収集を依頼してたんだよ。……早速、教えてくれるかい？」

グラン・マに言われ、織姫とレニは報告を開始した。

「昼間に現れた兵器は、空中砲台オプスキュールというらしいで～す。しかも、あの空中砲台は明日の日の出と同時に巴里を総攻撃しま～す。」

「何だと！？それは真か！！」

織姫の第一声に、早くもグリシーヌが反応した。

昼間の攻撃だけで巴里の五分の一が消えたのだ。

何としても、二回目の発射を阻止しなければならない。

「でも、どうやってそんな情報を集めたんですか？」

誰もが気になる疑問を、エリカがぶつけた。
確かに二人が齎した情報はかなり有力だ。
これだけで次の発射がいつで、それまでに攻撃を仕掛ける必要がある事が分かる。

「双眼鏡で読唇術を使い、怪人カルマールの会話をキャッチした。難しい事じゃない。」

エリカの質問に答えたのはレニだった。
二人はノートルダム近くに潜伏し、カルマールとレオンの会話を盗み聞きしていたのである。

「ありがとう、二人共。助かったよ。」

「何をウォーターくさい事言ってるですか、中尉サン？まだこれは序の口で～す。」

礼を述べる大神に、織姫は顔の前で人差し指を動かして笑った。

「私達はこれからシテ島に潜入して、更に情報収集を続ける予定で～す。」

「な、何を言うんだ！シテ島は敵の本拠地なんだぞ！？」

グラン・マの話では、シテ島はカルマールによって難攻不落の要塞と化している。
その固さは、フランス軍部の特殊部隊を敗走させた程だ。
そんな危険な場所に仲間を行かせる訳にはいかない。

しかし、レニはキッパリと言った。

「情報不足は敗北の原因に繋がる。ここは危険を冒してでも、勝利を優先すべきだ。」

「私達は帝国華撃団で～す！心配ありませ～ん！」

「隊長、命令を。」

レニの言葉に大神は一瞬迷う。
しかし、やがて決心したように二人を見て言った。

「……分かった。織姫くん、レニ、シテ島の偵察任務を命じる。気をつけるんだぞ？」

「任せて下さ～い！」

「了解。」

危険なミッションにも関わらず、織姫とレニは表情を変える事なく答えた。
次の発射である日の出は１３時間後。
それまで準備を整える必要があった。

「よし、二人の連絡が届くまで、みんなは身体を休めてくれ。」

「「了解。」」

危険を冒してまで情報収集に向かう二人のためにも、必ずカルマールを倒し、オプスキュールを止める。

巴里華撃団は、そう決意を新たにした。

時間に僅かに余裕が出来た事もあり、大神は織姫の向かった楽屋に足を運んだ。
これから彼女は命懸けのミッションに挑む。
みんなの前では強がっていたが、本当は不安があるはず。
織姫がそういう人間である事を、大神は知っていた。
しかし、そんな考えは楽屋の中に入るや一瞬で消えうせてしまった。
何故なら……、

「あら、中尉サン。いい所に来たで～すね。一緒にどうですか？」

呑気な織姫に、大神は驚いて返す言葉が見つからなかった。
何故なら織姫が、グリシーヌや花火を交えて何やら奇怪なダンスを踊っていたからである。

「な……、何をしてるんだ？」

大神が尋ねると、グリシーヌが意外な顔で答えた。

「何を言うのだ隊長。これは日本の伝統的なダンスであろう？」

織姫の動きを真似て、奇怪な動きをしながら答えるグリシーヌ。
すると、横にいる花火が説明してくれた。

「てんてこ舞いというそうです。私もちっとも知りませんでした。」

まだまだ勉強が足りないという表情の花火だが、知らなくて当然だ。
何故なら……、

「あの、二人共。てんてこ舞いはダンスじゃなくて、忙しい事を表す言い回しなんだけど……。」

「なっ、何っ!?織姫!!この私を謀ったな!!」

大神に真実を伝えられるや、真っ赤な顔で斧を構えるグリシーヌ。
すると、織姫は悪びれもせずに大神の腕にしがみついた。

「いや～ん、このタコみたいに真っ赤っかのブルーメールの娘を何とかして下さ～い。私怖いで～す。」

「何を言うか!この女の仕出かした事、万死に値する!」

「グリシーヌ、何もそこまで驚かなくても……。」

流石に凄い剣幕のグリシーヌを見て、花火も止めに入る。
しかし、グリシーヌは大神に叫んだ。

「隊長!そいつを引き渡せ。貴公が巴里華撃団の隊長ならば、断れぬはずだ!」

「残念でしたね～。中尉サンは、帝国華撃団の隊長で～す。さ、中尉サン。行くで～す。」

「待て織姫！逃げるつもりか！！」

吠えるグリシーヌを尻目に、織姫は大神を引っ張って楽屋を出た。

「あはは、面白かったで～す。あのブルーメールの娘の顔、傑作で～す。」

「……織姫くん、人を騙しておちょくるのは良くないぞ？」

相変わらずの織姫を嗜める大神。
すると、織姫は一転して素直な態度を取った。

「ごめんなさいで～す。中尉サンが仲良くしてるから、ヤキモチ焼いたで～す。」

「織姫くん……、俺は今巴里華撃団の隊長だ。でも、君達を忘れた事はないよ。」

大神は織姫を元気づけるように言った。
よくは分からないが、好きな人物が他の誰かと仲良くしてるのは面白くないのだろう。
かつてのダイゴがそうだったように……。

「中尉サンが言うなら安心で～す。……じゃ、あのグリシーヌに謝って来ますね。」

そう言って、織姫は楽屋にとって返した。

織姫と別れた後、大神は道具室で準備をしているレニの手伝いに向かった。
織姫同様レニも不安があるはず。
そう思って道具室に入る大神だったが、やはり一瞬でその考えは消えた。
何故なら……、

「レニさ～ん、このロープどうしますか？」

「この袋の中。きちんと纏めてね。」

「この電灯は？同じ袋でいいの？」

「それは、このカバンの中。出しやすいように、上に置いて。」

エリカやコクリコの手伝いで、着々と準備を進めるレニ。
しかし、その光景に不釣り合いな人物がいた。

「隊長、どうしたんだい？」

大神に気付いたレニが声をかける。
すると、大神はその驚きを口にした。

「……、何でロベリアまで手伝ってるんだ?悪いものでも食べたか?」

何と、あの合理主義のロベリアまでもがレニの手伝いをしているのだ。
すると、ロベリアはウンザリした表情で言った。

「アタシの事はどうだっていいだろ!?アンタも手伝いな!」

その反応は、怒ったというより痛い所を突かれた時のそれである。
すると、コクリコがニヤニヤと笑って説明した。

「ロベリアはね……、レニとの勝負に負けて手伝わされているんだ。」

何の勝負をしたかは、敢えて聞かないでおく。
すると、レニが作業を進めつつ、ロベリアの評価を出した。

「筋は良かった。だが、動きに無駄が多い。」

「マリアといい、コイツといい、帝国華撃団はバケモン揃いだな。」

余程負けた事が悔しいのか、ロベリアはため息を吐く。
その間に、準備は全て完了した。

「協力に感謝する。予想以上に準備時間が短縮出来た。」

相変わらずの事務的な言葉で礼を述べるレニ。
しかし、一瞬ばつが悪そうな顔で、レニが大神を見る。

「あの……、隊長も、ありがとう。」

「俺こそ、ありがとう。わざわざ帝都から来てくれて、嬉しいよ。」

シャノワールで初めて笑顔を見せるレニに、大神も笑顔を返す。
すると、初めてレニの笑顔を見る三人が驚きの声を上げた。

「わあ！レニさんって、笑うとキュートなんですね！」

「本当だ！とっても可愛いよ！」

「へぇ……、中々のタマだね。気に入ったよ。」

「……いや、その……。」

三人からまじまじと見られ、赤面するレニ。
すると、レニはそれを微笑ましく見ていた大神に声をかけた。

「隊長……、ちょっと来て。話があるんだ。」

そう言って、大神を道具室の外に連れ出すレニ。
すると、レニは厳しい表情に戻って言った。

「今度の戦い、絶対に気を抜いては駄目だ。あの敵は危険過ぎる。
おそらくティガの助けがあっても、厳しい戦いを強いられるはずだ。
」

カルマールは誰もが恐れる強敵。
それは、大神も分かっていた。

「織姫も強がっていたけど、本当は心配している。だから……、」

「分かっているさ、レニ。俺達は絶対に負けない。今までがそうだったように……。」

レニの不安を払拭するように、大神は断言した。
すると、レニもようやく笑顔を取り戻す。

「今のボクにはこんな事しか言えないけど……、頑張って……。」

「ああ。レニ、俺達は必ず勝つ。約束するよ。」

たとえ強敵だろうと、正義のもとに打ち勝ってみせる。
懐かしい仲間の笑顔に、大神は誓った。

「……。」

その頃、ダイゴはシャノワールの外に出ていた。
周りにはオプスキュールにやられた無残な街の姿がある。
その恐ろしさは、発射から数時間が経った今でも震えが来た。

「カルマール……、何て恐ろしい……。」

ふと、ダイゴは懐のスパークレンスを手にとった。
左右の二つの羽根に包まれたクリスタルは、輝く時を待っている。
ウルトラマンティガ。
かつて巴里の守護神とされた伝説の光の巨人。
しかし、今度ばかりはその巨人の力を以ってしても、奴らに勝てる自信はなかった。
カルマールは桁違いの魔力を持つし、配下のレイキュバスには自分も苦戦した。
これまでを踏まえて、その強敵と再び相見える事がないと、何故言えようか。

「ティガ……。」

ダイゴがふと、巨人の名前を口にした。

「勝てるかな……？僕は、この戦いに……。」

尋ねるように、スパークレンスに語りかけるダイゴ。
その時だった。

「それは……、貴方次第ですよ。」

「えっ!?」

突然の背後からの声に肩を震わせ、ダイゴは恐る恐る後ろを振り向いた。
すると、そこには大神と同じくらいの歳の青年がダイゴを優しい目つきで見ていた。
初対面だというのに、何やら懐かしい感じがする。
会った事もないのに、何故だろう。
すると、そんなダイゴの思いに応えるように、スパークレンスのクリスタルが仄かな優しい光を放った。

「こ、これは……!?」

突然の出来事に驚くダイゴ。
すると、青年はそのクリスタルの光に目を細めた。

「やはり……、貴方ですね?我が光を継ぐ者は……。」

「え……?」

青年の発した言葉の意味が分からず、ダイゴは呆然と青年を見た。
そして、恐る恐る尋ねた。

「あ、貴方は一体……！？」

すると、青年はようやく自己紹介をしていない事に気付いた。

「これは失礼、申し遅れました。」

そして、青年は自らの名前を名乗った。

「帝国華撃団・花組、御剣　秀介。またの名を、ウルトラマンジャック。」

拝啓ウルトラマン様・後編（前書き）

そう言えば戦闘機が活躍していないと思う今日この頃。

拝啓ウルトラマン様・後編

「ウ、ウルトラマン！？」

その言葉に、ダイゴは驚愕の余り目を見張って叫んだ。
目の前の青年、御剣　秀介は、自身をウルトラマンと名乗ったのである。

「先日のここ、シャノワール前における戦いは見事でした。私も一部始終を拝見しましたが、あの窮地を脱しきれる者はそうはいません。」

先日の戦い。
それは、ガゾート？やイーヴィルティガと交戦した、あの戦いである。
あの時イーヴィルに川に落とされたダイゴを助けたのは、秀介だったのである。

「光を継ぐ者、ダイゴ＝モロボシ……。今一人の巨人、ウルトラマンティガ。貴方は、私の光を受け継ぐに相応しい。」

「貴方の光を……！？」

秀介の言葉の意味が分からず、ダイゴが尋ねる。
すると、秀介は徐に左手を顔の横に持って来た。
僅かに袖がずり落ち、金色の鮮やかなブレスレットが見える。
ウルトラブレスレット。
秀介がジャックに変身する時に使用する、ウルトラの宝具の一つだ。
見ると、その黄金の腕輪に、赤いきらびやかな十字架があった。

「さあ、貴方の光の証を……。」

秀介に言われ、ダイゴは懐のスパークレンスを取り出した。
秀介の光を感じたのか、スパークレンスもまた光を放っている。
すると、ブレスレットとスパークレンスは、共鳴するかのように明滅を始めた。

「これは……、光が共鳴している!?」

今まで見た事のない程に強く眩しい光。
それは見る見る内に激しいものに変わり、凄まじい閃光となった。

「うっ……!!」

その余りの眩しさに、ダイゴは一瞬目を閉じる。
そしてその目を再び開いた時、ダイゴの顔は驚きに変わった。

「!!スパークレンスが……!!」

何と、秀介のブレスレットにあった十字架が、スパークレンスのクリスタルを包むように形を変えていたのである。

「秀介さん……、これは一体……?」

ダイゴが恐る恐る尋ねると、秀介はそのままの表情で答えた。

「『プラズマ・オーブ』。ウルトラの星に伝わる、『受け継がれる光』です。」

「ウルトラの星……？」

おうむ返しに聞くと、秀介は夜空を指差す。
その先を追うようにしゃくり上げると、夜空に一際暖かい光を放つ星があった。

「あれが、ウルトラの星……。」

「はい。あれは私の、そして貴方の故郷です。」

ダイゴにも見えたウルトラの星。
ティガの光を継いだためか、その光はダイゴに懐かしい印象を与えた。

「でも、何で僕にこんな凄いものを？」

プラズマ・オーブの力が凄まじいものである事は、ダイゴにもハッキリ分かった。
スパークレンスを通じて、熱い光の奔流が身体の中を駆け巡るのだ。
しかし、分からない。
何故秀介は、そんな凄い代物を自分に継がせるのか。
すると、秀介は小さく笑った。

「ダイゴ……。貴方はかつての私によく似ています。」

「秀介さんに……？」

「ええ。……かつて、私は初めての任務で地球に来ました。誰もが認める美しいこの星を守る守護神になる……。そう思っていました。」

思っていましたという事は、今は違うのだろうか。
そう考えるダイゴに気付いているのかいないのか、秀介は続けた。

「しかし、戦いの中で、帝国華撃団の皆さんとの関わりの中で、私はそれより大切な事に気付きました。……何だか分かりますか？」

「大切な事……？ううん、一体何？」

分からず聞き返すダイゴ。
すると、秀介はやはりと頷いた。

「それが分かれば、貴方も、きっと強くなれますよ。」

「え……？」

言葉の意味が分からず、目を丸くするダイゴ。
しかし、秀介は答えを教えてはくれなかった。

「貴方は答えを見つけている。ただ、それに気付いていないだけです。」

そう呟き、秀介はダイゴに背を向けた。

「あ、秀介さん……！」

ダイゴが慌てて呼び止めるが、秀介は夜の闇に消えて見えなくなった。

「……。」

ダイゴはもう一度、スパークレンスを見た。
クリスタルを包む赤いオーブ。
その秘められた力に、ダイゴはただ圧倒されるしかなかった。

「……もう、何を言っても無駄みたいだね。」

露骨に落胆の色を浮かべ、ピエロが言った。

「何!?どういう事だ!?」

「あの時、道を間違えてさえいなければ……。」

ピエロは大神の声には答えず、蔑んだ表情で大神を見る。
その時だった。

「!?」

何もない世界は、突然巴里上空に姿を変えた。
そこには、街を次々と破壊していくオプスキュールの姿が見える。

「チャッ！！」

下から声がした。
見ると巴里の守護神、ウルトラマンティガがオプスキュールと対峙しているではないか。
ティガはオプスキュールを一点に見据え、両腕を胸の前で合わせて左右に広げる。
すると、オプスキュールも突起の一つにエネルギーを集中させた。
そして……、

「ハッ！！」

ティガの腕からゼペリオン光線が発射されると同時に、オプスキュールもエネルギーを発射して来た。
激しくぶつかる二つの力。
しかし、程なくしてティガのゼペリオン光線が破られた。

「ジュワッ！？」

凄まじいエネルギーの直撃を受け、ティガは仰向けに倒れ動かなくなる。
その時、まるでティガの魂を弔うように、ノートルダムの鐘が鳴り響いた。

「止めろぉぉぉ……！！」

そう叫んだ時、大神の目に映る景色が一転した。

「大神さん、どうされました？」

見ると、不安な表情のメルが大神の顔を覗き込んでいた。
その事から、ここが巴里上空ではなく作戦司令室と分かる。

「メルくん……。良かった、夢か……。」

決戦を前に、何とも不吉な夢を見たものだ。
大神はかぶりを振って、隊長の顔になった。

「シーくん、織姫くん達からの連絡は？」

「それがまだですぅ。もう時間まで４時間くらいしかないのにぃ。」

大神が仮眠をとったのが１３時間前。
つまり二人は、少なく見積もっても７時間はシテ島にいる事になる。

「ムッシュ、ちょっといいかい？」

その時、グラン・マが再び作戦司令室に顔を出した。

「司令、如何しました？」

「実はね、あの娘達の中から副隊長を選んで欲しいんだよ。」

いつになく神妙な面持ちで、グラン・マが言った。確かに決戦の時は目の前に迫っている。

いくら歴戦の猛者である大神といえども、今度の敵を己の判断力のみで対抗しうるかと問われれば自信はない。

そこで彼を補佐するポスト、則ち副隊長の任命を、グラン・マは提案したのである。

「万が一、ムッシュが倒れた時の事も踏まえてね。頼めるかい？」

「確かに、そうですね。」

無論この戦いで倒れるつもりなどない。

しかし、もしもの為のセーフティーネットは欲しい所だった。

「誰にするかはムッシュに一任する。それと……、」

グラン・マは一瞬躊躇うそぶりを見せるが、すぐに続けた。

「ムッシュはいずれ、帝都に帰る。その時は副隊長が隊長代行を務める事になるからね。」

「……分かりました。」

帝都に帰るという事に、大神は一瞬辛い顔を見せる。

無理もない。

今まで巴里で出会った人達との触れ合いは大神に帝都にない感動を与えた。
最早自分にとって第二の故郷となった巴里。
そこを離れる事は、大神の胸を締め付けた。

「本人にはムッシュから言っておくれ。じゃ、頼んだよ。」

そう言って作戦司令室を後にするグラン・マ。
ああ言ってはいたが、大神自身、答えはもう決まっていた。

「おい二人共、あの派手コンビからの連絡はまだなのか?」

ロベリアが作戦司令室に現れたのは、ちょうどその時だった。

「ロベリア……、いい所に来てくれた。」

「あん?何だよ。」

「話があるんだ……。」

大神はロベリアを、誰もいないシャノワールのポーチに連れて来た。

ここなら、他の誰かに聞かれる事もないだろう。

「話って何だよ。出撃前で苛ついてんだから。」

これから伝えられる内容も知らず、ロベリアが悪態をつく。

大神は、そんな彼女の顔を見つめ、ハッキリと告げた。

「ロベリア……、実は君を巴里華撃団の副隊長に任命したいんだ。」

「……はあ!?」

数秒の間を置いて、ロベリアの表情が驚きに変わった。

無理もない。

協調性のカケラもない自分に管理職など任せたら、巴里華撃団が崩壊してしまう。

そんな事が分からない大神ではない。

しかし、大神の口から出た言葉は同じだった。

「もう一度言う。君を巴里華撃団の副隊長に任命したい。」

「ア、アンタ気は確かか!?アタシに副隊長なんて……!言っただろ?巴里の平和に興味なんかないって!」

いつもの調子で言い返しているつもりだろうが、動揺しているのはバレバレである。

「大体アンタ、アタシの戦いの目的知ってんだろ?それとも、特別手当でもつくのかい?」

自分はあくまで自由のために戦うのであって、平和の為ではない。
１０００年の懲役をチャラにすれば、こんな所とは縁を切る。
そう言うロベリアだが、大神はその態度に見える僅かな変化に気付いていた。

「俺も知らないが、大した金額じゃないだろう。」

「だったらノンだ。そんな面倒な事できるか。」

ロベリアは即答し、シャノワールに戻ろうとする。
しかし、次に大神が発した一言で、その足は止まる事になる。

「ロベリア、俺が最も信頼しているのは君だ。パートナーになってくれないか。」

「ほう、相棒ね……。」

その一言が嬉しかったか、ロベリアはフッと笑顔を見せた。
最初なら炎を浴びせてでも断っただろうロベリアには、なかった笑顔だ。

「分かったよ隊長。それなら引き受けてやるよ。」

根負けした様子で、ロベリアが肩を竦めた。

「でもアタシを任命したからには、アタシの失敗はカバーしてくれるよね？」

「ああ。君の事は、俺がサポートする。」

「覚悟しろよ?ずっと、苦労をかけてやる。」

大神の返事に、ロベリアは笑顔を向ける。
しかし大神はその途端、暗い表情になって答えた。

「……それは、出来ない。俺はいつか帝都に戻る時が来る。君を副隊長に任命するのは、その後の巴里華撃団を任せたいからだ。」

すると、ロベリアは一瞬ショックとも取れる表情を見せたが、すぐにそれを呆れ顔で隠した。

「そうか、帰るのか……。まあ、こんなガラクタ部隊よか、帝都の方がやりやすいよな。」

「そんな事はない。済まないロベリア……、分かってくれ。」

ロベリアが傷ついたと思い、謝罪を口にする大神。
すると、ロベリアは再び笑顔で大神を見た。
今まで見た事がない、優しい笑顔だ。

「気にするな、隊長。帰る事くらい分かってたさ。でも……、今すぐじゃないんだろ?」

「ああ。少なくとも巴里に平和を取り戻すまでは、ロベリアと一緒にいる。」

そう言うと、ロベリアは大神の肩に手を置き、頬に触れた。
別れを惜しむ恋人のように……。

「いいよ、それで。巴里にいる間だけは、アタシをしっかり捕まえ

ててくれよ。」

「もちろんだよ、ロベリア。」

そう答えた時だった。

大神の携帯キネマトロンに、緊急の通信が入ったのである。

それは、織姫とレニからの連絡によるものだった。

「ロベリア、作戦司令室に戻るぞ！」

「フッ、了解だよ！」

不敵な笑みで、ロベリアは笑った。

「こちら織姫、敵のアジトが判明しましたで～す！」

作戦司令室に、織姫の通信が聞こえて来た。

「アジトはノートルダムの真下。地下深くに位置していま～す！」

「分かった。織姫くん達はシテ島を脱出してくれ。」

報告に礼を述べつつ、大神が言った。
しかし、二人はそれを一蹴した。

「それは出来ない。作戦をより有利に展開するためには、情報が少な過ぎる。」

「中尉サン、心配し過ぎで～す。私達だってそんなにおバカじゃないで～す。」

「駄目だ！脱出してくれ！！」

大神は叫ぶが、レニに強引に通信を切られてしまい、連絡はつかなくなってしまった。
確かに場所は特定出来たが、敵の戦力やオプスキュールのメカニズムなど、不明な点は数多く存在する。
しかし、今はあの二人の身が心配だった。

「よし、ムッシュ。こっちも動いた方が良さそうだよ？例の話を。」

グラン・マに言われ、大神は席から立ち上がった。

「実は、決戦にあたってロベリアを副隊長に任命した。みんな、よろしく頼むぞ！」

「どうしてもって言うもんでね。そこんとこよろしくな。」

熱意に溢れる大神とは逆に、やる気のない様子で肩を回すロベリア。
しかし、隊員達の受けは意外と良かった。

「はい！隊長、副隊長！ガツンといきましょう！」

「我らが宿敵、カルマール……。この手で成敗してくれよう。」

「この戦いに勝てば、街は平和になるんだよね！？」

「はい。必ず、笑顔の溢れる巴里を取り戻しましょう。」

「さて、稼ぎに行くか。隊長、出撃命令だ。」

口々に決意を述べる隊員達。
その決意に勝利を決意しつつ、大神は出撃命令を出した。

「巴里華撃団・花組、出撃！！目標地点、ノートルダム！みんな、行くぞ！！」

「「了解！！」」

シテ島、ノートルダム寺院。
周囲をセーヌ河に囲まれたそこは、巴里市内に位置していながら、難攻不落の要塞となっていた。

先の特殊部隊との戦闘の跡が生々しく残る寺院前を、我が物顔でのし歩くポーン達。
そこに、六機の光が現れた。

「巴里華撃団、参上！！」

言わずと知れた巴里華撃団である。
すると、ノートルダム寺院の上から声が聞こえて来た。

「現れたな、巴里華撃団。お前達の無謀さを後悔させてやろう。」

それは、復活した怪人最後の生き残り、レオンだった。
以前のふてぶてしい態度はそのままに、レオンは大神達の前にその姿を現す。

「戯言を！そのような言葉に怖じけづく巴里華撃団ではないぞ！」

前回煮え湯を飲まされかけた事からか、グリシーヌが言い返す。
すると、レオンは高笑いを上げた。

「ワハハハハ！その台詞、これを見ても言えるか？」

「あ、あれは！？」

その時ノートルダム寺院の頂上、レオンの真ん前に、異様な形をした二つの十字架が現れた。
二つを結ぶ赤い球からは、何やら怪しいエネルギーを感じる。
しかし、大神が驚いたのはそんな事ではなかった。

「レニ！織姫くん！大丈夫か！？」

何と、十字架にはシテ島に潜入した織姫とレニが捕われていたのだ。

「巴里壊滅の余興だ。貴様の大事な仲間が死んでいく様を見せてやろう。」

「そうはさせない！みんな、先に二人を救出するぞ！」

「「了解！」」

一刻も早くオプスキュールを止めなければならないが、二人を見捨ててはおけない。

大神の思いを汲み取り、隊員達が一斉に動き出す。

しかし、それで簡単に助けさせる程、レオンは甘い相手ではなかった。

「馬鹿め。貴様らとて罠に嵌まっているのだぞ？」

レオンが右手を上げ、不気味に笑った。

その時、巴里華撃団の周囲を取り囲むように巨大な魔法陣が出現し、リングのようなバリケードが張り巡らされた。

等間隔に配置された柱を結ぶ青い線からは、凄まじい魔力を感じる。

「チッ、準備のいいこって。」

「貴様らにはそこで、オプスキュールの姿を楽しんで貰うぞ。最もその時が、貴様らの最期だがな。」

吐き捨てるロベリアに、レオンが勝ち誇った様子で笑う。

すると、大神の耳に別の声が聞こえて来た。

「中尉サン、大丈夫で～す……。そのバリケードは間に合わせ……、意外と、脆いで～す……。」

「な、何!?まだ喋れるというのか!」

どうやら余程痛め付けていたらしく、レオンの表情が驚きに変わる。
すると、それを尻目にレニが口を開いた。

「バリケードの弱点は、その支柱……。光が支柱を通過する時に攻撃すれば……。」

見ると、バリケードは一定の速度で光が時計周りに動いている。
それこそ支柱を結ぶ青い線のエネルギーであり、これを維持しなければバリケードはたちまちに消えてしまうのだ。
どんなに追い詰められた状況にあっても、有利な情報を最大限伝達する。
二人の強い心に、大神は奮い立った。

「余計な事を!今すぐ殺してやる!!」

言うや、レオンが右手を上げた。
刹那、目に見える程の雷が球からほとばしり、二人に襲い掛かる。

「あああああ……!!」

「うっ……、くうっ!!」

傷ついた身体への容赦ない攻撃に、苦悶の声を上げる二人。
それを見て、大神は直ちに指示を出した。

「みんな！一刻も早くバリケードを破壊して、二人を救出するぞ！」

「「了解！」」

巴里の命運を賭けた決戦。
その前哨戦の火蓋が切って落とされた。

その頃、シャノワールの格納庫でもう一人慌てる者がいた。
ダイゴである。
紅蘭の発明した『流星Ｆ』が完成したという事で、ダイゴだけはエクレールに入れず、現地合流となってしまったのだ。
それだけではない。
出発前になって、ジャンがとんでもない事を口にしたのだ。

「言っとくがダイゴ。こいつは俺の新しい子供のようなもんだ。壊しやがったらただじゃおかねぇぞ！！」

「壊すなって言われても……。」

それがジャンの挨拶のようなものと知らないダイゴは、ジャンの言

葉を真に受けながらノートルダム寺院を目指す。
すると、程なくしてレーダーに魔力の反応が見られた。

「ん？……、あれは！！」

前方を注視したダイゴは驚きの声を上げた。
何故ならそこには、十字架に捕われた織姫とレニ。
更にバリケードに囲まれた状態で敵と交戦する巴里華撃団の姿があった。

「よし、僕も……！」

大神達を加勢するべく、ダイゴは流星Ｆのハンドルを大きくきる。
しかしその時、何か凄まじい衝撃が流星Ｆを襲った。

「うわあっ！！な、何だ……！？」

ハンドルをいくら操作してもいう事をきかない。
それどころか、流星Ｆは煙を上げて落下し始めた。

「くっ……！！」

ダイゴはハンドルを目一杯に引き、機体の体勢を元に戻す。
そして落下の勢いを利用し、水上を滑走する形でノートルダム寺院に向かった。

「みんな、大丈夫！？」

シテ島の淵に流星Ｆを停止させ、ダイゴが声を張り上げる。
すると、レオンがニヤリと笑った。

「来たかティガ。ならば隠しておく必要もあるまい。」

レオンは三度、右手を上に掲げた。
すると、シテ島の周りを流れるセーヌ河の中から、黒い化け物が現れた。

「ギィー！！」

いや、化け物ではない。
かつてシャンゼリゼでティガに倒された、超古代怪獣レイキュバスである。

「あ、あれ、レイキュバス！？」

思い出したようにコクリコが叫んだ。
大神を始め、他の隊員達も同様に驚いている。
先程ダイゴの流星Ｆを撃ち落としたのは、レイキュバスだったのである。
すると、レオンは大神達の表情に笑った。

「驚くのはまだ早い。いでよ、我がしもべ！髑髏怪獣レッドキング？！」

刹那、ノートルダム寺院前の地面が熱気に包まれた。
それと同時に何やら地中を掘り進む音が聞こえて来る。

「ま、まさか……！！」

唯一レッドキングを知るダイゴが叫んだ。

すると、寺院前の地面から赤い火柱が上がる。
そして、その中に光る二つの赤い目を、ダイゴは見た。

「あ、あれは……！？」

ポーンを切り伏せつつ、大神が叫んだ。
時折赤く発光する黒い凸凹の皮膚と、以前の三倍近くに膨れ上がった二本の腕。
まるで煮えたぎる溶岩のごときその身体からは、万物を溶かす程の高熱が発っせられている。
その熱さ、足元の地面が赤く変色する程だ。

「ガハハハハ！巴里華撃団、カルマール様の力で強化された我がしもべになぶり殺されるがいい！」

「ガオオオッ！！」

「ギィーッ！！」

二大怪獣が同時に咆哮を上げ、島を揺るがした。
ダイゴは怪獣を見据えながら、生まれ変わったスパークレンスを空に掲げた。

「ティガーーーーーッ！！」

「チャッ！！」

光の柱から出現したティガは、バリケードに包囲されたままの大神達を守るように、二大怪獣の前に立った。
その胸には、カラータイマーを守るように赤いサークルが見える。

「現れたなウルトラマンティガ。」

獲物を見つけた肉食動物のように、レオンがティガを睨んだ。
その両脇にはレイキュバス？とレッドキング？が控えている。

「行け、しもべ達よ！あの裏切り者を今度こそ始末するのだ！！」

その声と共に、二大怪獣が一斉にティガに襲い掛かって来た。

「ハッ！」

その剛腕とハサミがぶつかる寸前、ティガは空中高くに飛び上がった。
更に海面スレスレに急降下し、パンチの姿勢で飛び込む。

「チャーッ！！」

疾風のごとき勢いで、ティガはレイキュバス？に激突した。
その勢い、レイキュバス？の巨体が大きく後ろに飛ばされた程である。

「ガオオオッ！！」

「チャッ！」

ティガは間髪入れずに、襲い来るレッドキング？に視線を向けた。
体当たりで迫るレッドキング？の巨体をかわし、すれ違い様に背中にチョップを打ち込む。

「ガオオオッ！」

レッドキング？はそれだけで巨大な腕で裏拳を打ち込む。
ティガはそれを屈んでかわし、脇腹を蹴りつけた。

「ギィーッ！！」

「チャッ！」

そこに、先程ティガのパンチで吹っ飛ばされたレイキュバス？が襲い掛かって来た。
ティガはすかさずレッドキング？を投げ飛ばし、もう一体の怪獣に振り向く。

「ハッ！」

突き出されたハサミを両腕を使って左右に弾き、顔面に膝をたたき付ける。
更に怯んだレイキュバス？の腹に、ティガは重い蹴りを喰らわせた。

「何！？まさかこれ程まで戦えるとは……！」

ティガの戦い振りを見て、レオンは驚きの表情を見せた。

自分のレッドキング?はカルマール自身が最高傑作を自称する程の生物兵器であるし、レイキュバス?も元々高い戦闘力がより一層強化されている。
しかし現在、その怪獣を二体同時に相手していながら、ティガは優勢を保っている。
それには、ティガ自身も驚いていた。

「(まさか、これがプラズマオーブの力……!?)」

全身に漲るエネルギーと、相手が遅く見えるくらいのスピード。
更にかなりの重量を誇っているはずのレッドキング?をやすやすと投げ飛ばせる程のパワー。
秀介から受け継いだプラズマオーブは、初戦からその力をまざまざと見せ付けた。

「ハッ!」

ティガはバク転で二大怪獣から距離をとり、大神達を囲む九つの柱目掛けてハンドスラッシュを発射した。
青白い光弾が全ての柱に命中し、たちまちにして炎上する。
すると、柱と柱を結ぶバリケードが消滅した。

「ありがとう、ダイゴ!」

「よし、織姫くん達を救出するぞ!」

窮地を脱してくれたティガに礼を述べながら、二人を助けようとする大神。
しかし、ここでレオンがそれを阻んだ。

「動くな！こいつらを見殺しにするつもりか？」

言うや、レオンは蒸気獣マルシュを召喚し、赤く燃える拳を二人に突き付ける。

「くっ……！レオン、卑怯だぞ！！」

「フン、この偉大な私が何故人間ごときに手段を選ばねばならん。」

大神の叫びに、レオンは嘲笑を返した。
織姫とレニを捕われている以上、形勢は絶対にこちらが不利だ。
更にレオンは、人質を盾に恐るべき要求を突き付けてきた。

「よし、大神一郎。武器を置いてこちらへ来い。」

「くっ……！！」

罠である事は見え見えだ。
しかし、行かなければ二人の命が危ない。
大神は数秒躊躇ったが、やがて二刀を地面に刺して歩き出した。

「お、大神さん……！」

止めようとするエリカを押し退け、マルシュの前に立つ大神。
すると、レオンは勝ち誇った様子で笑った。

「ガハハハハ、馬鹿な奴め。お前の仲間がやられる様を見ているがいい！」

言うや、レオンは燃える拳を突き出し、炎の塊を発射した。

しかし、炎は大神ではなく、何と二大怪獣と戦っていたティガを直撃した。

「ジュワッ!?」

レッドキング?にパンチを浴びせようとしていたティガは、その一撃を胸に受けて吹き飛ばされる。
そこに、二大怪獣が反撃を仕掛けて来た。

「ガオオオッ!!」

レッドキング?がお返しとばかりに巨大な腕で殴り掛かる。
ティガは起き上がる間もなく、その一撃で地面にたたき付けられた。

「ジュワッ!!」

その凄まじい衝撃で、地面が大きく凹む。
更にレイキュバス?に火炎放射を浴びせられティガはその場に蹲った。

「ダイゴさん!!」

思わずエリカが叫ぶが、織姫達を人質に取られたこの状況では助けに行く事も出来ない。
最早これまでか……。
誰もがそう思った時、不思議な事が起こった。
何と、織姫とレニに捕らえていた赤い球が真っ二つに切断されたのだ。

「何!?一体何事だ!?」

突然の出来事に狼狽するレオン。
見るとノートルダム寺院の入り口に、織姫とレニともう一人、大神のよく知る人物の姿があった。
左手のブレスレットから伸ばした金色の剣。
それを見た大神は、驚愕に目を見張った。

「間に合ったようですね、大神隊長。」

「秀介！秀介じゃないか！！」

何と、そこにいたのは帝国華撃団最後のメンバー、御剣　秀介だったのだ。
彼もまた、大神のピンチに宇宙から駆け付けたのである。
それに驚いたのはレオンだった。

「ば、馬鹿な！あの呪縛を生身の人間に破れるはずが……！！」

自分の封印術には絶対の自信を持っていただけに、動揺を隠しきれないレオン。

すると、秀介は不敵に笑って見せた。

「今に分かりますよ。」

言うや、秀介は左手のスパークソードを解除し、天に掲げる。
すると、ブレスレットが俄かに発光を始めた。

「ジャーーーーック！！」

秀介が叫んだ。
刹那、冷たい巴里の夜空に、ウルトラの星が輝いた。

大神を始め、その場にいる誰もが驚いた表情で固まっていた。
秀介のブレスレットが光を放った次の瞬間、秀介の姿が消え、代わりにティガによく似た巨人が立っていたからである。

「ウルトラマン……、ジャック……！」

大神が巨人の名を呟いた。
かつて遥か東の帝都を守った光の巨人。
その彼が、実に3年の月日を経て、この巴里に帰ってきたのである。

「シュワッ！」

3年前と変わらぬ声で、ジャックは二大怪獣に飛び掛かった。

ウルトラマンジャック。
遥か東の地の勇者の助太刀に、レオンの運命はほぼ決まった。
レイキュバス?とレッドキング?の力を以ってすればティガもろとも巴里華撃団を全滅出来ると踏んでいたし、織姫とレニを人質にとればそれこそ確実と考えていた。
しかし、ウルトラマンジャックという全くの計算外の敵に、二大怪獣は早くも敗北の色を見せ始めていた。

「（くっ……！まさかもう一人の巨人が現れるとは……！）」

レオンは悔しげにジャックを見た。
ティガとはまた違った神々しさを持つ光の巨人。
数多の怪物から宇宙を守り抜いて来た彼には、既に救世主としての貫禄がつきつつあった。
しかし、ここで退く訳にはいかない。
カルマールがオプスキュールを発動させ、巴里を壊滅させるために戦わなくてはならないのだ。
レオンは負けると分かっていながら、マルシュを起動させた。

「大神さん、ノートルダム寺院の妖力反応が上昇しています！」

メルから通信が入って来たのは、その時だった。

「隊長、この敵は私に任せて下さい。足止めを喰っては間に合いません。」

すると、ジャックが大神達を守るように叫んだ。
二大怪獣と対峙しながらも、ノートルダム寺院への道を確保している。
確かにジャックの言う通りだ。
このままカルマールにオプスキュール発動を許してしまったら、全てが無駄になってしまう。
大神は、ジャックの言葉に従って指示を出した。

「よし、今の内にオプスキュール発動を阻止する！秀介、ダイゴ、この場は頼んだぞ！！」

「分かった！！」

「了解です！！」

二人の返事に頷き、寺院内に急ぐ巴里華撃団。
すると、レオンがそれを阻止しようと動いた。

「させるか！カルマール様には近づかせん！！」

物凄いスピードで疾駆し、大神達の前に立ちはだかるレオン。
しかし、そこに横からティガが飛び蹴りを放って来た。

「チャッ！！」

完全に大神達に注意が向いていたレオンは、そのまま奥に吹っ飛ばされる。
すると、ティガが叫んだ。

「みんな、奴を倒したらすぐに合流するからね！」

「ありがとう、ダイゴ！！」

ティガのフォローもあって、ノートルダム寺院内に潜入する巴里華撃団。
それを見て、レオンは烈火の如く怒った。

「グオッ！許さん！許さんぞ、ウルトラマンティガ！！」

「ガオオオオッ！！」

「ギィーッ！！」

レオンに続いて二大怪獣が雄叫びを上げる。
二人の巨人は、ノートルダム寺院を守るように並んで立つと、互いに頷き合った。

「チャッ！」

「シュワッ！」

襲い掛かって来るレイキュバス？とレッドキング？。
ティガとジャックはそれぞれ一体ずつと戦い、敵のチームワークを打ち消す作戦に出た。
こうして一対一の状況を作り出す事で、個々の戦闘力に勝る自分達

を有利にするためだ。
結果、それは功を成し、二大怪獣は先程までの勢いが嘘のように、ウルトラマンに歯が立たなかった。

「ハッ！」

パワータイプになっていないにも関わらず、ティガはレイキュバス？を高々と持ち上げ、地面にたたき付けた。
一方、ジャックもレッドキング？を相手に優勢を保っていた。

「ガオオオオッ！」

「ヘッ！」

熱さのあまり溶岩と化した岩石を投げつけて来るレッドキング？。
ジャックは宙返りで溶岩をかわし、流星キックを放った。

「ヘアァッ！！」
ノートルダム寺院の地下深く。
大神達はレオン率いる二大怪獣をティガとジャックの二人に任せ、カルマールが潜む地下神殿に突入した。
地下に進むにつれ、入り口でも感じた妖力がますます高まるのが分かる。

「来おったか小僧。レオンも使えぬ奴よのう。」

野太い声が辺りに響いた。
その悪意に満ちた声、聞き違えるはずがない。

「カルマール！」

二刀を手に、大神が叫んだ。
目の前の悪趣味な祭壇には、パイプの煙を蒸す仇敵の姿がある。

「見るが良い。これぞ我が究極の破壊兵器、オプスキュールだ！」

カルマールが叫んだ。
すると、目の前に巨大な魔法陣が描かれ、閃光を放った。

「こ、これは……！？」

目の前に広がる光景に、大神達は仰天した。
地下神殿にいたはずの自分達が、オプスキュール毎巴里上空にワープしてしまったのだ。
見ると、ノートルダム寺院前では二人のウルトラマンが二大怪獣と激戦を繰り広げている。

「ヌハハハハ！諸君らにはこの巴里が灰に変わる様を見届けてもらうとしよう。」

奥の方からカルマールの笑い声が聞こえて来た。
見ると、既に召喚した蒸気獣『サンフォニー』がこちらに睨みを効かせている。

「そんな事はさせるか！みんな、何としてでもオプスキュールを止めるんだ！！」

「「了解！！」」

大神の声を合図に、巴里華撃団は一斉に駆け出した。

カルマールが召喚した空中砲台オプスキュールで戦う両者に、地上で戦うティガもすぐに気が付いた。

「あれは！」

「オプスキュール……。幸い発射には至ってないようですが。」

上空に浮かぶ怪物を象った兵器に目を向ける二人。
すると、レオンが誇らしげに笑った。

「クックックッ……。驚いたか？カルマール様の力を以ってすれば、奴らなど一ひねりだ。」

レオンの言う事もあながち否定出来ない。
以前のシャンゼリゼの戦いでは、巴里華撃団は惨敗している。
確かにその頃とは比べものにならない強さではあるが、オプスキュールから感じるカルマールの魔力は大神達のそれにも全くヒケをとっていない。
負けるとは思わないが、苦戦は免れないはずだ。

「もう間もなくオプスキュールのエネルギーは満タンになる。遅か

れ早かれ貴様らはおしまいだ。」

「それを許す私達と思いますか？」

レオンの言葉を遮るように、ジャックが口を開いた。

「ティガ、ここは私が。貴方は隊長のもとへ向かって下さい。」

「え！？で、でも……。」

確かにカルマールは大神達にも手に余る強敵だ。
おそらく自分達の助けがなければ厳しい相手だろう。
しかし、こちらもレオンを含め三体の怪獣を相手にしている。
いくら歴戦のジャックと言えども、この数の差を覆すのは至難の業だ。
しかし、ジャックはハッキリと告げた。

「御安心下さい。私は負けません。」

「え？」

「私は……、ウルトラマンですから。」

その重みのある言葉に、ティガは言葉を止めた。
この人なら勝てる。
根拠は何一つないが、ジャックの不思議とティガをその気にさせた。

「さあ、早く。」

ジャックの言葉に頷き、ティガは額のクリスタルに両腕を交差させ

た。

「ンゥウゥ……、ハッ！！」

クリスタルが発光し、ティガはマルチタイプからスカイタイプにチェンジする。
そしてティガは、オプスキュール目指して飛び立った。

「チャッ！」

「ムッ、逃がすものか！やれ、レイキュバス？！！」

レオンの指示を受け、レイキュバス？が先程流星Ｆを撃墜した火炎弾を発射した。
いくつもの火球が、凄まじいスピードでティガを追う。
しかし、その火炎弾が命中する事はなかった。
何故なら、それを光弾で打ち消したものがいたからだ。

「……貴方達の相手は私です。」

ウルトラショットを放ったままの姿勢で、ジャックが冷ややかに口を開く。
すると、レオンは殺気を剥き出しにしてジャックを睨んだ。

「おのれ、ウルトラマンジャック！！貴様だけは生かしてはおかん！！」

「そんな大口叩ける立場ですか？」

迫り来る二大怪獣を前に平然と言葉を返し、ジャックは構えを取っ

た。

「シュワッ！」

華麗な身のこなしで、レイキュバス？の頭上を越えて背後を奪う。

「ヘッ！」

ジャックはそのままレイキュバス？の尻尾を掴み、ジャイアントスイングの要領で投げ飛ばした。

「ヘアァッ！！」

更にレッドキング？のパンチを軽くかわしそのまま腕を掴んで投げ飛ばす。
その時、青い目に変わったレイキュバス？が口から冷気を吐き出して来た。

「ヘッ！」

素早く横に飛んでかわすジャック。
すると、先程までジャックのいた地面がみるみる内に凍り付いてしまった。

「（なるほど。それなら……。）」

今の攻撃から何かヒントを得たのか、ジャックは心の中でほくそ笑んだ。
そして、不思議な事にレイキュバス？の前に立ったのだ。

「馬鹿め！やれ、レイキュバス？！」

勝ち誇った顔でレオンが命令を出し、レイキュバス？は再び冷気を吐き出す。

しかし、これこそがジャックの狙いだった。

「ヘッ！」

ジャックはブレスレットを盾に変形させ、冷気を受け止めた。

ウルトラディフェンダー……ブレスレットを盾にして相手の攻撃を防ぐ、ジャックの必殺技の一つだ。

「シュワッ！」

そして、ジャックはディフェンダーをそのままレッドキング？に向けた。

すると、驚くべき事が起こった。

ディフェンダーから、先程受け止めた冷気がレッドキング？目掛けて発射されたのである。

「ガオオッ！？」

全身に凍てつく冷気を浴びせられ、凍りつくレッドキング？。

ジャックはすかさずディフェンダーを光の刃に変形させた。

ウルトラスパーク……ブレスレットを光の刃に変えて敵を切り裂く、ジャックの必殺技だ。

「ヘアァッ！！」

裂帛の気合いと共に、ブレスレットが放たれた。

刃はレッドキング?の両腕と首を切り落とし、ジャックの左腕に戻る。
それと同時にレッドキング?の腕と首が地面にたたきつけられ、震動が来た。
この事態に慌てたのは、レオンである。

「何!?我がしもべ、レッドキング?が、敗れたというのか!!」

真に貴族たる自分に忠実で、自ら怪獣の王と定めたレッドキング?。
それが、異国の巨人にやすやすと倒されるなど、到底信じられない事であった。

「小賢しい真似を!レイキュバス?、奴を真っ二つにしろ!!」

いきり立ったレオンの命令を受け、レイキュバス?がハサミを突き出してくる。
すると、ジャックはそれを宙返りでかわし、レイキュバスの顔面を派手に蹴りつけた。

「シュワッ!!」

「ギィッ!?」

更にジャックは、仰向けに倒れるレイキュバス?を持ち上げ、セーヌ河に投げ飛ばした。

「ヘッ!」

そして、水面で悶えるレイキュバス?を狙って両腕を十字に組んだ。
スペシウム光線……数多の敵を撃破して来た、ジャック最大の必

殺技である。

「ヘアァッ！！」

十字に組まれた両腕から、青白い光線が発射された。
電光石火の光線がレイキュバス？の顔面を正確に狙い撃つ。

「ギィーッ！！」

全身を火花を包まれたレイキュバス？はそのままセーヌ河に沈み、
大爆発を遂げた。

「ば、馬鹿な！！この私の力を以ってしても、奴らを止められんというのか！？」

驚愕の表情でレオンが叫んだ。
織姫とレニを人質にとり、巴里華撃団をバリケードに閉じ込め、更にウルトラマンティガを迎え撃つべく差し向けた二大怪獣。
その全てが尽く、あの銀色の巨人によって阻まれてしまった。

「ありえない……！高が人間ごときにこの私が……！！」

現状を信じられずに喚くレオン。
しかし、それがレオンの敗因になった。

「！？」

ジャックに殴り掛かろうとした時、レオンの立つ地面が大きく揺れた。
そして、みるみる内に亀裂が走っていく。

「先程から戦いの様子は見ていました。」

ジャックが背中を向けたまま言った。
そこはレッドキング?が現れた場所であり、レイキュバス?が冷気を浴びせた場所。
つまり、高温に熱せられたものが急激に冷たくなった場所である。
高温になった地面は溶岩のような液体と化す。
それが地面に戻ったのは、冷気で固体の温度にまで冷やされたから。
つまりここで再び地面を熱すると……。

「カ、カルマール公!!オプスキュールで……、巴里を灰燼に帰して下されぇぇぇ……!!」

最期の叫びと共に、レオンは奈落の底へ沈む。
そして地面は再び崩れ、奈落の穴を埋め尽くした。

巴里の町並みを眼下に見下ろすオプスキュールでの決戦。
激しい風が吹き荒れる中、カルマールとのリターンマッチの火蓋が切って落とされた。
帝国華撃団との関わりの中で多くを学び、打倒カルマールに意気込

む巴里華撃団であったが、それだけで勝たせてくれる程敵も甘くはなかった。
サンフォニーを守るように左右に三本ずつ備え付けられた小型兵器、フレイムアローとフリーズアローから光弾が発射され、大神達の行く手を遮っているのである。

「ヌハハハハ！どうした小僧共。グズグズしていてはオプスキュールが発射されてしまうぞ？」

六つの兵器に翻弄される大神達の様子を眺め、楽しげに笑うカルマール。
しかし、ここでカルマールはある事に気付いた。

「む？四人しかいないとはどういう訳だ？」

よく見ると、六つのアローに攻撃されている光武Ｆ２は四機だけで、残る二つがない。
一体何処に消えたのかと辺りを見渡すが、それらしい姿は何処にもない。

「ええい、臆病者め。隠れてないで出てこい！」

痺れを切らしてカルマールが吠える。
すると、返事は案外近くから上がった。

「ほう、いいのかい？アタシにそんな大口叩いて。」

その声と共に、サンフォニーの前の地面からロベリアと大神が現れた。
ロベリアの地面に溶け込む能力を使い、二人はアローの射程を抜け

て来たのである。

「行くぞ、ロベリア！」

「いちいち叫ぶなよ……！」

いつもの掛け合いを交えつつ、二人は動いた。
ロベリアが目の前に巨大な炎を生み出し、大神は二刀を大きく振りかぶる。
そして、二人は同時に叫んだ。

「「コンブスティオーネ！！」」

ロベリアの炎に大神が二刀をたたき付ける。
すると、炎が大神の霊力で拡散し、たちまちにして六つのアローを焼き尽くした。
二人はカルマールより先に兵器を破壊し、敵を孤立させる事にしたのである。

「どうだカルマール！これで兵器は使えないぞ！」

「ほほう、腕を上げたものだのう。余と互角に戦うだけの力はあるようだ。」

状況的には追い詰められたはずのカルマールは未だに余裕を崩さない。
それが力から来る余裕か、ハッタリかは分からないが、今はそんな事を気にしている場合ではない。

「ならば来るがよい、巴里華撃団！この余自らが潰してくれようぞ

！！」

「望む所だ！みんな行くぞ！カルマールを倒すんだ！！」

「「了解！！」」

しかし今正に攻撃を仕掛けようとしたその時、大神達の立つ位置が俄かに揺れた。

「？」

何事かと立ち止まる大神達。
すると、地面を突き破って触手が現れた。
カルマールの操る捕獲ユニットである。

「し、しまった……！！」

気が付いた時には既に遅く、大神とロベリアの光武Ｆ２が二本の捕獲ユニットに捕らえられてしまった。

「ヌハハハハ！油断大敵とはこの事よの、小僧。」

「くっ……！！」

悔しげに顔を歪める大神。
まさかサンフォニーにこんな能力があったとは、思いもしなかった。

「大神さん！！」

カルマールが余裕の笑いを見せる中、エリカが助けようと飛び出し

たのはその時だった。

「……！！エリカくん、駄目だ！来るんじゃない！！」

大神が何かに気付いて叫んだ時だった。
地面からもう一本の触手が現れ、エリカの光武Ｆ２を弾き飛ばしたのである。

「きゃあぁぁっ！！」

突然の不意打ちに吹き飛ばされるエリカ。
その瞬間、誰もが顔面蒼白になった。
何とエリカの光武Ｆ２が宙を舞い、オプスキュールから転落したではないか。

「エリカッ！！」

「エリカさん！！」

「エリカくん！！」

口々に名前を呼ぶ大神達。
この高さから地面に落ちたら一たまりもない。
誰もがエリカの死を想起する。
しかし、そこに一つの巨大な影が現れた。

「あ……！！」

「あれは！」

「遅いんだよ、バカが……。」

途端に笑顔を取り戻す大神達。
それに対し、カルマールは不機嫌な表情に変わった。
何故ならそこにいたのは、巴里華撃団と共に戦うもう一つの光だったからである。

「チャッ……。」

オプスキュール甲板に降り立ち、ティガは腕に抱えていたエリカを優しく下に下ろす。
ティガはこちらに向かう途中、オプスキュールから転落するエリカを発見。
間一髪で救出に成功したのである。

「ありがとうございます、ダイゴさん……。」

助けてくれたティガに赤い顔で礼を述べるエリカ。
ティガは無言で頷くと、両腕を左右に広げて頭上で重ねた。
すると、青白いエネルギーがティガの手中に発生する。

「ハァァァ……！！」

「させるか、馬鹿者め！！」

ティガを妨害するべく、サンフォニーの触手がティガに襲い掛かる。
しかしティガは上空にジャンプしてそれを回避し頭上の両腕を左腰に添え、右手を突き出した。

「ジュッ！！」

ティガの右手から二本のランバルト光弾が発射された。
ランバルト光弾は大神とロベリアを束縛していた二本の捕獲ユニットに命中し、二人を解放させる。

「チャッ！」

ティガはそれを確認すると、サンフォニーの前に降り立った。
目の前のカルマールは、強敵を前にしての武者震いを感じたか、ニヤリと不敵な笑いを見せた。

「来たか、ウルトラマンティガ。貴様と相見える時を、余も楽しみにしていたぞ。」

「カルマール、貴様の企みもそこまでだ！！」

カルマールの言葉には答えず、ティガが叫ぶ。
すると、それに合わせて大神も指示を出した。

「みんな、準備はいいな？蒸気獣サンフォニーを撃破するんだ！！」

「「了解！！」」

ティガを交えてのカルマールとの決戦は、これまでになく激しいものとなった。
甲板から現れる捕獲ユニットは神出鬼没で倒してもキリがなく、攻撃の手は自然と緩む。
そうなった巴里華撃団はカルマールにとって、絶好の標的だった。

「闇に閉ざされし冥界の門よ、我が前に開け！シャティマン・ドゥ・ディウー！！」

カルマールが魔力を集中させた。
すると、サンフォニーの前から津波が発生し、大神達に襲い掛かって来た。

「ハッ！！」

ティガは両腕を胸の前で交差させ、ウルトラシールドを張る。
しかしその直後、左右から現れた二本の捕獲ユニットが一斉にティガを捕らえた。

「ジュワッ！？」

引っ張られるようにして両腕の自由を奪われるティガ。
すると、カルマールが高笑いを上げた。

「ヌハハハハ！かかったなティガ。余の触手に捕われたが最後、貴様の力を根こそぎ吸い付くしてくれようぞ！！」

「ジュワッ……！！」

抵抗するティガの首に、更に三本目の捕獲ユニットが絡み付いた。

これでは抵抗はおろか、呼吸もままならない。
たちまちエネルギーを吸収され、ティガのカラータイマーが点滅を始めた。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

ティガは再び額のクリスタルを発光させ、パワータイプにチェンジした。
プラズマオーブの力で飛躍させた怪力で、三本の触手を引き千切る。
しかし、かなりのエネルギーを奪われたティガはよろめきながら片膝をついた。

「ヌハハハハ！これで更にオプスキュール発射は早まったな。どうする小僧、時間はないぞ？」

挑発するようにカルマールが笑う。
確かにタイムリミットの日の出まで残り僅か。
もう時間がなかった。

「オプスキュールは俺達が止める！ここまで来て諦めてたまるか！！」

言うや、大神の二刀が光った。

「この一撃で仕留める！みんな、援護を頼む！！」

「「了解！！」」

隊員達の返事に頷き、大神は勢い良く飛び出した。

「馬鹿め、貴様も触手の餌食にしてくれる！」

真正面から飛び込んで来る大神を鼻で笑い、カルマールは捕獲ユニットを出現させる。
しかし、今の巴里華撃団にそれは通用しなかった。

「そこです！！」

花火の光武Ｆ２から、いくつもの矢が放たれた。
矢は一寸の狂いなく、捕獲ユニットを射抜く。
その捕獲ユニットに、今度はエリカのマシンガンが浴びせられた。
たちまちにして粉々に吹き飛ぶ捕獲ユニット。
すると、続けざまにコクリコが子猫を次々に呼び出した。

「行っけぇ！！」

「むむっ！？」

無数の子猫に引っ掻き回され、よろめくサンフォニー。
そこに、グリシーヌが猛然と切り掛かった。

「砕けろっ！！」

気合いと共にバトルアクスを袈裟掛けに一閃させ、サンフォニーに深々とと傷痕をつける。
その直後、今度は背後から声が聞こえて来た。

「このアタシが何もなしに済ますと思ったか？イカ野郎。」

言うや、ロベリアの鉤爪がサンフォニーの全身を切り刻む。

灼熱の爪は、その身体にかなりの傷を負わせた。

「今だ隊長！やっちまえ！！」

グリシーヌの傷痕と対角線になるように最後の一撃を与え、ロベリアが叫んだ。
その真上から、猛スピードで大神が突っ込んで来る。

「狼虎滅却……、古今無双！！」

まるで隕石の如く、二刀を交差させた状態の大神がグリシーヌとロベリアの傷痕をなぞるように二刀をたたきつけた。
その凄まじい一撃に、サンフォニーは遂に煙を上げ始めた。

「まさか、これ程までとは……！あの時諸君らを見逃したのは、間違いであったのか……！？」

自身の敗北が信じられず、カルマールが叫ぶ。
シャンゼリゼでは歯牙にもかけなかったはずの大神達に遅れを取り、ましてや敗北するなど有り得なかった。

「しかし……、オプスキュールの妖力は最大でなくとも臨界点に到達しておる！諸君らも道連れだ！！」

「そんな事、させてたまるか！！」

その時、大神が叫んで飛び込んだ。
二刀を突き立て、猛然と殺到する。
だがその刀が届く寸前、サンフォニーの周囲に出現したバリアがそれを阻んだ。

「くっ……！ここまで来て、諦めてたまるか！！」

「ヌハハハハ！見るが良い！巴里の最期だ！！」

大神を嘲笑い、カルマールがオプスキュールのスイッチを作動させた。

そして、無常にも怪物の顔を象った発射口から漆黒の光線が発射される。

だが、それを許さぬ光のメシアがいた。

「シュワッ！！」

何と、それはウルトラマンジャックだった。

ジャックはオプスキュールの光線を、ディフェンダーで防いでいるのだ。

「隊長、今ならまだ間に合います！！」

「秀介、恩にきるぞ！！」

しかし、そこに立ち上がったのはジャックだけではなかった。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

ティガが徐に立ち上がり、パワータイプからマルチタイプへチェンジする。
そして両腕を胸の前で合わせ、残り少ないエネルギーの全てを、胸のカラータイマーに集中した。

「大神さん！！」

「ティガの攻撃をカルマールに貫通させる！バリアを破壊できる力を……、巴里を守りたいという想いを、俺にくれ！！」

大神が叫んだ。
すると、五人の隊員達は自らの霊力を大神に分け与えた。

「隊長！勝利を掴むのだ！！」

勇猛果敢、切り込み役のグリシーヌ。

「イチロー！ダイゴ！やっちゃえ！！」

巴里華撃団最年少だが、才気に溢れたコクリコ。

「大神さん！巴里に光を！！」

静かにして猛者、流麗なる花火。

「私達の想いを、届けて！！」

ダイゴが愛した巴里の天使、エリカ。

「隊長！テメェの底力、見せてみろ！！」

そして、大神のパートナーにして副隊長のロベリア。
ティガが両腕を水平に広げてエネルギーを集約する中、大神の光武F2に全ての霊力が集まった。

「これで終わりだ！！」

大神の叫びと共に、バリアに亀裂が入った。
亀裂は瞬く間にバリア全体に広がり、跡形もなく崩れ去る。
最早カルマールを守るものは、何も無くなった。

「チャァァァッ！！」

そこに、ティガの渾身の必殺技、ゼペリオン光線が撃ち込まれた。
まばゆい閃光が、一直線にサンフォニーを直撃する。

「まさか……！この余が、ただの人間如きに敗北するというのか……！？」

閃光に包まれるサンフォニーの中、カルマールが叫んだ。

「このままで済むと……、思うな……！！ウルトラマンティガァァァ……！！」

最期の言葉と共に、カルマールはオプスキュール諸とも炎の中に消えた。
それと時を同じくして、巴里の空に朝日が昇る。

まるで、戦いに勝利した大神達を祝福するかのように。

「大神さん！やりましたね！！」

ノートルダム寺院に凱旋した大神達を、メルとシーの二人が出迎えた。

見ると、その後ろにはジャン班長やグラン・マの姿もある。

巴里華撃団の勝利を労うべく、ノートルダム寺院まで駆け付けたのだ。

「あんた達、よくやってくれたね。」

「支配人、巴里華撃団、全員無事帰還いたしました。」

改めて勝利を報告する大神。

すると、エリカが不意に口を開いた。

「それじゃあアレ、みんなでやりましょうよ。」

「そうか？じゃあ行くぞ……！」

「勝利のポーズ、決め！」

「秀介サン、何で私達はナシですか～？久しぶりに勝利のポーズしたかったで～す！」

「あくまで巴里華撃団が主役ですよ。彼らに貢献出来てよかったじゃないですか。」

「そうだね……。」

その日の夜、シャノワールはいつにも増して大盛況になった。
それもそのはず。
織姫とレニの二人が、今宵一夜限りのショーを披露してくれたから

である。

「わあ、カッコイイね！」

客席から二人を眺め、コクリコが瞳を輝かせた。
自分が主役と主張せんばかりの織姫と、それを笑顔でフォローするレニ。
欧州星組時代から相棒だった二人だからこそ出来る、正に阿吽の呼吸というものだった。

「ところで、隊長はどうしたのだ？」

「そう言えば、ダイゴさんもいらっしゃいませんね……。」

ふと気付いたように、グリシーヌと花火が辺りを見渡した。
大神とロベリア、更にエリカとダイゴの姿がない。
せっかくの織姫達のレビューというのに、一体何処に行ったというのか。
すると、グラン・マが意味ありげに笑った。

「二人共、そいつは聞くだけヤボってもんさ。」

巴里は情熱的な街だ。
活気の戻った夜の巴里を並んで歩くのは、やはりカップルが多い。
その街中を、仲良く寄り添って歩く一組のカップルがあった。

「ねぇ、ダイゴさん……。」

ふと、エリカが隣に立つダイゴに話し掛けた。
気のせいか、その顔はいつになく赤いように見える。

「なんだか夢みたいです……。僕達が、この平和を守ったんだよね……。今でも実感できないよ……。」

「そうだね……。巴里にこうして、平和が戻るなんて……。」

賑やかな町並みを見渡し、ダイゴが呟いた。
一度は破滅の危機に陥った巴里を自分達の力で守り抜いた事に、ダイゴは不思議な余韻を感じていた。
もしカルマールを倒せなければ、今の幸せな一時を過ごす事も叶わなかっただろう。
ダイゴは改めて、ティガと秀介、そして大神達に感謝した。

「ダイゴさん、私幸せです……。」

ふと、エリカがダイゴの手を握った。
その突然の行為に、ダイゴの顔が途端に紅潮する。

「だって……、これからもずっと二人でいられるでしょう?」

「エリカさん……。」

耳まで赤くなるのを感じながら、ダイゴがエリカを見る。
エリカもまた、真っ赤な顔でダイゴを見つめていた。

「これからもずっと……、側にいて下さいね。」

「うん……。僕はずっと、エリカさんから離れないよ……。」

互いに背中に手を回し、囁き合う。
そんな至福の一時に、二人は勝利の余韻を感じていた。
この平和が今度こそ永遠に続けば……。
二人はそう願わずにはいられなかった。

地下に埋もれたノートルダム寺院の地下神殿。
そこに、一つの影が浮かんだ。

「パリシィの御霊よ。その役務を果たし、一時の眠りにつくがいい……。」

影が口を開いた。

「遥かなる時の流れに逆らう愚かな裏切り者……。闇に覆われた都市と共に、大いなる裁きを……。」

拝啓ウルトラマン様・後編（後書き）

《次回予告》

我らが勇者、ティガ。

巴里の守護神、ティガ。

哀れな裏切り者、ティガ。

次回、サクラ大戦３。

《翼の紋章》

愛の御旗のもとに……

パリシィの子供達よ……、ゆっくりとお休み……。

翼の紋章（前書き）

ようやく４万字内に収まり、ホッとしてます。

それは、やはり突然現れた。

「巴里を守護する者、大神一郎。」

「またお前か！今度は何だ？」

またも現れたピエロを睨む大神。
すると、ピエロはいつになく不敵な笑いを見せた。

「君に問う。君にとっての敵は何か？」

「これまで巴里の平和を脅かして来た怪人や怪獣達だ。巴里の平和を守るのが、俺達の任務だ！」

大神は即答した。
すると、ピエロにニヤリと薄気味悪い笑みを浮かべる。

「本当かい？ならばまだ、君は戦わなければならない。」

「何だと？カルマールの他に敵がいるというのか！？」

ピエロの言葉に激しい反応を見せる大神。
すると、ピエロはそれを楽しむかの如く笑った。

「フフフ……、気付かないのかい？」

その時、大神の目の前に人影が写った。

「……、ロベリア！！」

それは、大神と共に副隊長として戦った巴里華撃団の仲間、ロベリアだった。
まるで眠っているかのように、反応を示さない。
見ると、ロベリアの周りには大神の仲間達の姿が次々と写し出された。

「エリカくん！ダイゴ！みんな……、一体どうしたんだ！？」

大神の声に反応する者は誰もいない。
すると、ピエロが口を開いた。

「もう一度問う。大神一郎、君の敵は怪人か？」

「何？みんなに何をした！？」

大神が叫んだ。
しかし、ピエロが返したのはその答えではなかった。

「もし君の敵が怪人なら、ここにいる六人は君の仲間ではない……。」

「何だと！？どういう事だ！！」

「何故なら、この子達には怪人達と同じ血が流れているから……。」

「馬鹿な！何を根拠に……！！」

「それは、超古代より続くパリシィの血……。怪人達にもこの子達にも、同じ血が流れているという事さ……。」

頭を振る大神に構わず、ピエロは言った。

「君は戦わなければならない。パリシィの血を引く全てと、あの裏切り者と共に……。」

「パリシィ……？裏切り者……？何の事だ！！」

聞き慣れない言葉を問い質したその時、大神の意識は夢の世界から現実に引き戻された。

「また……あの夢か……。」

先日からよく見るピエロの夢。

会話の流れからして連続性を持ったその夢が、大神はどうも気になった。

「何かの正夢でなければいいが……。」

平和になった巴里の朝日を眺め、大神が呟いた。

カルマールを打倒し、ようやく掴み取った平和。

しかし、その余りにも早い崩壊の時が、迫ろうとしていた。

「さぁさぁダイゴさん！どうぞ上がっちゃって下さい！」

いつにも増して上機嫌なエリカに連れられてダイゴがやって来たのは、シャノワールの屋根裏部屋だった。

あれから修道院をクビになってしまったエリカは、グラン・マの計らいでこの屋根裏部屋に移り住む事になったのである。

「へぇ～、きちんと整理されてるね。」

部屋全体を見渡して、ダイゴが呟いた。

綺麗に拭き掃除された床には、修道院時代からあった祭壇や日記帳などが並べられている。

「ふぅ、何だかいい天気ですね！」

窓を開け払い、エリカが言った。

外から日差しが差し込み、暖かな夏の日差しが風と共に入って来る。

「そうだね。もうすぐ秋になるから、巴里も涼しくなるしね。」

しみじみと頷くダイゴ。

すると、エリカが何故か頬を膨らませてダイゴを見た。

「もう、何言ってるんですかダイゴさん！」

「えっ？な、何で怒るの？」

何かエリカの気に障るような事を言ったのだろうか。
すると、エリカは考え込むダイゴの腕を抱き寄せて言った。

「ダイゴさんは私とアッツアツになるんですから、涼しくなっちゃ駄目です！！」

「エ、エリカさん……。」

秋の涼しさを恋の終わりと履き違えたか、エリカは口を尖らせた。
最もそれはダイゴにしても願ってもない事だが、こう勘違いが酷いと何やら複雑な気分である。

「心配しなくても大丈夫だよ。僕とエリカさんは一年中一緒なんだから。」

そう言うと、エリカは途端に笑顔になった。

「うふふっ、ならいいんです。」

その時、ふとエリカのお腹の虫が鳴った。

「「あ……。」」

同時に声を上げてエリカのお腹に目をやる二人。
その様子は、まるで子供を授かった新婚のようにも見える。

「……。」

「……。」

「あ、あの、ダイゴさん……。」

「……な、何？」

「もし良かったら……、朝ごはん食べに行きません？」

躊躇いがちにエリカが尋ねた。
思えば朝起きてすぐエリカに連れて来られたので、今日はまだ何も食べていない。
せっかくのエリカの誘いという事もあり、ダイゴはエリカの申し出を受ける事にした。

「……うん、もちろんいいよ。行こう、エリカさん。」

「はい！」

差し出されたダイゴの手を、エリカは笑顔で握った。

その頃、大神の姿は裏通りにあった。
朝食をとろうと足を運んだカフェで偶然ロベリアに会い、半強制的

にこの店に連れ込まれたのである。

「中々似合ってるじゃないか。」

隣に立つロベリアが珍しく大神を褒める。
しかし、合わせ鏡を見る大神の表情は良くなかった。
それもそのはず。
鏡に写ったのは、黒いコートにチェーンを着飾った冴えないヤンキーだったからだ。

「ロベリア……、本当にこれ着るのか?」

「当たり前だろ?それとも、アタシのペアルックは嫌か?」

「いや、そんな事はないぞ!だけど……。」

ロベリアの言う通り、コートはロベリアの色違いで、俗に言うペアルックという奴だ。
確かにロベリアの考えは嬉しいのだが、爽やかな好青年で通っていた自分には明らかにイメージが違う事を、大神は自覚していた。

「俺にはやっぱりモギリ服の方がいいな……。」

「ふ~ん、アタシのお願い聞いてくれないんだ。」

「いや、別にそういう訳じゃ……。」

「いいよ、それならそれで。ただし……、」

弁解しようとした大神に、ロベリアがニヤリと笑った。

「アタシが副隊長を辞めちまうけどね。」

「いいっ！？ずるいぞロベリア！！」

この服は些かキツイものがあるが、かといって副隊長を辞職されてはたまったものではない。

ロベリアは、そんな大神の反応を見越したように笑った。

「さあ隊長、どうするんだ？」

「……分かったよ。ロベリアがそうして欲しいなら……。」

大神はため息を吐きながら、ロベリアの申し出を呑むしかなかった。

いつもと変わらぬ日常。

しかし、それは余りに唐突な形で消え去る事になる。

その日の夜、大神はレビューを終えたロベリアと二人で、ある場所へ向かった。
モンマルトルの丘。
巴里を一望できる名所の一つだ。

「巴里にこんな所があったなんて、知らなかったな……。」

眼下に広がる町並みを眺めながら、大神が呟く。
すると、前を歩くロベリアが答えた。

「そりゃそうさ。ここはアタシがよく使う逃げ道の一つだからね。巴里の人間でも、知ってる奴は少ないだろうね。」

モンマルトルの丘は自然を大事にしているらしく、街中の街路樹より立派な木が道を覆い隠している。
昼間は木漏れ日が差し込んで森林浴を楽しめるが、夜になると月明かりが遮られて真っ暗闇に変わる。
ことロベリアにとってこの場所は、いざという時の逃げ道に最適という訳だ。
しかし、ロベリアがこの場所を気に入っている理由はそれだけではなかった。

「見てみな、隊長。」

そう言って、ロベリアが展望台の手摺りに寄り掛かった。
大神も同じように巴里の町並みを見下ろす。
そこには、美しい巴里の明かりが見えた。

「ここで警察をやり過ごしてる時、よくこうして巴里の街を見てたモンだ。それで、一つ気付いたのさ。」

「気付いた？」

「ああ。巴里の街には、昼と夜とで違う。華やかな昼間と違って、夜は温もりのある光がある。」

巴里は花の都と謳われる程、華やかさが魅力的な街だ。
しかし、そればかりが巴里の魅力ではない。
夜はこうして、温もりのある光が街を包んでいるのだ。
その一つ一つは、名前も知らない誰かの温もりに溢れている。
そう考えると、何やらセンチメンタルな気分になる。
花の都と謳われた巴里のもう一つの姿が、そこにはあった。

「でも、それも一時の間だけだ。いずれは終わりが来る。……アタシ達みたいにな。」

「え？」

ロベリアの最後の言葉の意味が分からず、聞き返す大神。
すると、ロベリアはまっすぐに大神を見て尋ねた。

「隊長、アンタ……帝都に将来を約束した奴がいるだろ。」

その言葉に、大神は思わずハッとした。

確かにロベリアの言う通りだ。
大神は帝都にいる紅蘭と、既に将来を約束している。
分かっていた事だが、今まで伝えられずにいた事だ。

「……そうだ。君の言う通り、俺は帝都に大事な人を残して来ている。」

一瞬躊躇ったが、大神は意を決して正直に答えた。
ロベリアに対して特別な感情を抱かなかったと言えば嘘になる。
しかしロベリアなら嘘をついても見破るだろうし、そうまでして好きと言う事を望んではない。
ロベリアも、大神の答えに納得したように口を開いた。

「やっぱりね。まあアンタみたいな男を、アイツらがほっとく訳もねぇからな。」

「隠すつもりはなかったんだ。ロベリア、済まない……。」

大神はロベリアに謝罪した。
確かに事実ではあるが、その事実にロベリアが少なからず傷ついたのもまた事実だ。
しかし次の瞬間、ロベリアの口から信じられない言葉が返って来た。

「許すものか！！」

「ロ、ロベリア！？」

突然態度が豹変したロベリアに、大神は驚きの表情でロベリアを見た。

まさかロベリアはそこまで怒っているのか。

いや、そうではない。

何故ならロベリアの口から出て来た言葉は、会話の流れと全く違うものだったからだ。

「許しはしないよ……。大地は都市を憎み、それを守護する者達を憎む……。」

ロベリアとは明らかに異なる口調。

この口調に、大神は聞き覚えがあった。

「……！お前は、夢に現れたピエロか！？」

「君の敵が怪人達なら、この子達は君の仲間ではない。何故なら、この子達には怪人達と同じ血が流れているのだから……。」

大神の声を無視して、ピエロは続けた。

「それは、超古代より続くパリシィの血。君はその全てと戦わなければならない……。」

夢で聞いたものと同じ台詞。

そこまで口にした時、ふとロベリアが糸の切れた人形のようにその

場に崩れ落ちた。

「ロベリア！」

大神は慌てて駆け寄り、ロベリアを優しく抱き起こした。

「ロベリア、しっかりしろ！ロベリア！」

優しく肩を揺すりながら呼び掛ける。

すると、程なくしてロベリアは目を開いた。

「う……、た、隊長……。」

「ロベリア……、大丈夫か？」

意識を取り戻したロベリアに尋ねる大神。

すると、ロベリアは頭に手をやって答えた。

「ああ、アタシなら平気だ。一体何だってんだ？」

おそらく記憶が飛んでいるからか、あまり状況が掴めていないロベリア。

大神は、ふと思い出した様子で尋ねた。

「ロベリア、パリシィと言う言葉に聞き覚えはないかい？」

「パリシィ？さぁな、ガキの頃に聞かされたような覚えはあるが……。」

ロベリアから返って来たのは曖昧な返事だった。

あのピエロが何者で、言った事が本当かは分からない。
ただ一つ言えるのは、これまで大神の見た夢はただの夢ではないという事だ。
そこまで考えを巡らせた時だった。
巴里の街を、凄まじい震動が襲ったのである。

「こ、これは……！！」

あまりの震動に立っていられず、その場に座り込む二人。
すると、ロベリアが驚いた表情で街を指差した。

「た、隊長！街が、街が燃えてやがるぜ！？」

「何！？」

ロベリアの言葉に大神は巴里の街に視線を写し、そして絶句した。
先程まで平和だった巴里のそこら中で、火の手が上がっていたのである。
新たな闇の出現か。
それとも怪人に生き残りがいたのか。
いずれにせよ巴里の平和が再び終わった事は間違いなかった。

「ロベリア！シャノワールに急行するぞ！」

「あいよ。全くどうなってるんだろうね！？」

「巴里華撃団、参上！」

謎の地震から程なく、巴里華撃団の姿はノートルダム寺院にあった。
かつて巴里の命運を賭けてカルマールと激突した決戦の地。
一際高い妖力を感知したそこに地震の元凶があると踏んだ大神達は、
再び戦場となるであろうこの地に駆け付けたのである。

「何でしょうね、この根っこ。気持ち悪い色ですね。」

そこら中に生えた謎の根っこを掴み、エリカが呟いた。
他の植物と比べてどす黒い色で、何やら有害な感じがする。

「ただの植物ではあるまい。何者かの意思でこうなったのだろう。」

根っこを注意深く観察しながら、グリシーヌが分析する。
その時、大神の光武Ｆ２に警告の表示が現れた。

「これは……！みんな気をつけろ！奥に何かいるぞ！！」

その声に一斉に警戒する花組。
すると、大神達の前に見覚えのある巨大な影が現れた。

「……諸君ではないか……。また、余の邪魔だてをするつもり

か……？」

「カルマール！！」

そこに現れたのは、以前このノートルダム寺院で倒したはずのカルマールだった。

確かにオプスキュールを呼び出せたカルマールなら、これだけの植物の根っこを呼び出せた事にも納得出来る。

「貴様、まだ生きていたのか！！」

「分からん……。一度は死んだかも知れん。」

大神の言葉に、カルマールはやけに弱い声で答えた。

以前の余裕はなく、まるで死人のように生気がない。

「だが、余はここにいる。巴里が余を呼んでおるのだ。破壊してくれとな……。」

刹那、サンフォニーを取り囲むように根っこが現れた。

「大神さん、また根っこが！」

「カルマール！この植物はお前の仕業か！？」

問い質す大神。

しかし、カルマールの答えは全く違うものだった。

「そのようなものは知らん……。余の目的は諸君らの、裏切り者の抹殺のみ……。」

「何……！？」

不可解な答えに大神が眉を潜めた時、流星Ｆで空中に待機していたダイゴから通信が入った。

「大神さん！空に何かいる。凄いスピードだ！！」

「何っ！？」

その直後、空を切り裂く咆哮が轟き、サンフォニーと並ぶ巨大な影が寺院前に降り立った。

「ビィーッ！！」

それは、身体に開いた無数の穴が特徴的な翼竜を想起させる怪獣だった。

赤い真っ赤な目からは、殺気にも似た闘争本能が強く感じられる。

「よくぞ目覚めた、超古代怪獣ゾイガー……。」

やはり部下だったらしく、現れた翼竜にカルマールが命令を下した。

「行けぃゾイガー！あの忌ま忌ましい小僧共を皆殺しにしてしまえ！！」

「ビィーッ！！」

命令に応えるように咆哮を上げ、ゾイガーは大神達を睨む。

そして、口から無数の光弾を吐き出した。

「いかん！みんな、下がるんだ！！」

咄嗟に指示を出し、後方へ退避する花組。
しかし、縦横無尽に飛び交う光弾は地面を砕き、花組を二つに寸断してしまった。

「これで逃げ場はないな、小僧……！」

「くっ……！！」

眼前に迫るサンフォニーを前に、大神は悔しげに歯噛みした。
ゾイガーの光弾は地面を寸断し、花火、コクリコ、エリカの三人がゾイガーのいる対岸に取り残されてしまったのだ。
チームワークが売りの巴里華撃団にとって、戦力の分断は大きな打撃であった。
しかし、そこに助け舟が現れた。
ダイゴである。

「大神さん、あの怪獣は僕に任せてカルマールを！！」

「ダイゴ！よし、エリカくん達はダイゴの援護を、ロベリアとグリシーヌは俺と一緒にカルマールを撃破するぞ！」

「「了解！！」」

命令を受けて動き出す花組。
同時にダイゴも、スパークレンスを取り出して叫んだ。

「ティガーーーーッ！！」

「チャッ！！」

流星Ｆから飛び出した光の巨人が、ゾイガーの前に降り立った。
それに伴い、ゾイガーも襲い掛かって来る。

「ビィーッ！」

「ハッ！」

口から吐き出される光弾。
ティガは素早くウルトラマンシールドを展開し、地面をも砕くそれを打ち消した。

「チャーッ！」

それと同時に、ゾイガーの顔面目掛けてハンドスラッシュを発射する。

「ビィッ！？」

思わぬ反撃にたじろぐゾイガー。
ティガは更に追い撃ちをかけるべく、ゾイガーの腹を蹴りつけた。

「ハッ！」

が、しかし、ゾイガーの皮膚は思いの外固く、ティガのキックが容易く跳ね返されてしまった。

「ビィーッ！！」

ゾイガーは更に、お返しとばかりにティガにタックルを仕掛けて来た。

「ジュワッ！？」

そのカウンターに不意を突かれ、後ろに倒れるティガ。
それを見たゾイガーは、翼を広げて空高く飛び上がった。

「チャッ……。」

そしてティガが立ち上がるタイミングを見計らって、体当たりを仕掛けて来た。

「ビィーッ！」

「ジュワッ！？」

超高速の体当たりをまともに喰らい、ティガはまたしても地面に倒れる。
そこに、ゾイガーの光弾が襲い掛かった。

「ジュワッ！？」

四方八方から光弾に蒔かれるティガ。
それを見て、大神はすぐさま命令を出した。

「エリカくん、花火くん、ゾイガーの翼を狙撃して飛行能力を奪うんだ！」

「はい！」

「お任せを！」

大神の指示を受け、二人はすぐさま空中にいるゾイガーを攻撃した。
しかしゾイガーのスピードはメルバ以上で、中々攻撃を当てる事が出来ない。

「ンゥゥゥ……、ハッ！」

すると、ティガは額のクリスタルを発光させ、スカイタイプにチェンジした。

「ハァァァ……！」

そして両腕を左右に広げて頭上で重ね、ランバルト光弾を発射した。

「ジュッ！！」

突き出された右手の光弾は、一直線にゾイガーの右翼の根元を直撃した。
プラズマオーブの力で、スカイタイプの集中力が飛躍的に上昇したためである。

「ビィーッ！！」

叫び声と共に地面に落下するゾイガー。
ランバルト光弾の威力からか、直撃を受けた右の翼は無くなり、煙が上がっていた。

「ビィーッ！！」

ティガを睨みつけ、怒りの叫びを上げるゾイガー。
すると、ゾイガーは意外な行動に出た。

「えっ……！？」

「チャッ……。」

その信じられない行動に、ティガもエリカ達も驚きの声を上げた。
何とゾイガーは、残る左の翼を不要とばかりに引きちぎったのである。
まるでティガに対する闘争心を剥き出しにするかの如く……。

「ビィーッ！！」

「チャッ！」

咆哮と共に襲い来るゾイガーに、ティガは真正面から応戦した。
だが、ゾイガーの戦闘力は翼を失って尚高いものだった。

「ハッ！ハッ！」

スピードを活かしてマシンガンのごときパンチを浴びせるティガ。

だが、ゾイガーの固い皮膚はティガの猛攻を全く寄せつけなかった。

「ビィーッ！」

「ジュワッ！？」

更に激しいラッシュを受け、状況はまたしてもゾイガーに傾く。
ゾイガーの戦闘力は、これまでの怪獣とは一線を画していた。

「ビィーッ！！」

勢いに乗ったゾイガーは、凄まじい力でティガの首を締め付ける。
すると、ここで遂にティガのカラータイマーが点滅を始めた。

「ダイゴさん！！」

思わず叫ぶエリカ。
すると、隣に立つ花火が再び矢を放った。

「はっ！！」

狙い澄ました一矢が、ゾイガーの片腕に突き刺さった。
その一瞬、ゾイガーは腕こそ離さなかったが、注意をティガから逸らす。
ティガにはその一瞬で十分だった。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

一瞬の隙をついてクリスタルを発光させ、パワータイプにチェンジする。

そして、内側からゾイガーの肩を掴み、巴投げの要領で後ろに投げ飛ばした。

「ビィッ！？」

「チャッ！！」

起き上がって反撃しようとするゾイガーの腹に、今度は力強いストレートパンチが打ち込まれた。

「ビィッ！！」

やはり固い皮膚に変わりはないが、大地を揺るがす衝撃にゾイガーの身体は大きく真後ろに吹き飛ぶ。

「ハァァァ……！！」

ティガは両手を外側からゆっくりと回転させ、胸の前で圧縮したエネルギーボールを生み出す。

そして、ゾイガー目掛けてパワータイプ必殺のデラシウム光流を放った。

「ダアッ！！」

極限まで圧縮されたエネルギーボールが、一直線にゾイガーの顔面を直撃した。

たちまちゾイガーの全身をエネルギーが包み込む。

「ビィーッ……！！」

最期の咆哮と共に、ゾイガーは大爆発した。

その頃、大神達とカルマールの戦いも大詰めを迎えていた。
捕獲ユニットを全て切り伏せ、大神が猛然と切り掛かる。

「狼虎滅却……、紫電一閃！！」

大神の二刀から霊力を具現化した狼が現れ、四方八方からサンフォニーを引っ掻き回す。
それが決定打となり、サンフォニーは全身から煙を上げ始めた。

「……小僧、覚えておけ……。余を倒した所で巴里壊滅は止まらん。」

「何……？」

「巴里が巴里である限り、この街は滅びの定めにあるのだ……！！」

何やら意味深な言葉を残し、カルマールは爆発四散した。

だが、大神達は今の戦いに疑問を持った。

「どういう事だ？前と違って手応えがなかったが……。」

以前オプスキュールで相対した時のカルマールは、威厳と共に圧倒的な妖力で常に有利に立っていた。
しかし、今のカルマールからはそれが見受けられない。
攻撃も激しくなかったし、捕獲ユニットの動きも隙だらけだ。
大神達やウルトラマンティガにリベンジに来たというより、まるで倒されるために現れたようにとれなくない。
すると、隣にいたコクリコが何かに気付いて叫んだ。

「みんな、見て！変な根っこが光り始めたよ！！」

見ると、ノートルダム寺院一体に張り巡らされた植物の根っこが一斉に光り始めたのだ。
まるで、カルマールの死に反応したかのように。

「カルマールは倒した。どういう事だ？やはり怪人と植物は関係ないのか？」

植物を発生させたのがカルマールなら、倒した時点で植物も消滅しているはず。
なのにまるで力を蓄えるように光り出すとはどういう事か。
その時、グリシーヌの言葉に答える声があった。

「あるよ……。」

「き、貴様は……！！」

その声と共に現れた人物に、大神は仰天した。
何故ならその人物は、大神に散々夢の中で御託を並べたピエロだったからである。

「はじめまして……、と挨拶すべきかな？一人を除いては。」

「ふざけるな！貴様、何者だ！？」

油断なく刀を構える大神。
すると、ピエロは余裕を持った表情で答えた。

「心配はいらない。彼らの仲間ではないからね。ましてや、君達の仲間でもないが……。」

「ならば何者というんだ？」

大神は間髪入れずに問い質した。
自分達の仲間でもなく怪人達の仲間でもないなら何だというのか。

「大いなる超古代の意思を伝える者……。人間は、サリュと呼んでいた。」

サリュと名乗ったピエロは、何処か懐かしむような目つきで答えた。

「遥か３０００年前、この地は自然の恵み豊かな大地だった。」

サリュがそう呟いた時、目の前の世界が大きく変わった。
まるで、サリュのいう超古代にタイムスリップしたかのように。

「これは……？」

「な、なんだ!?サリュとやら、下らぬまやかしは止めろ!!」

まやかしと決めて否定するグリシーヌ。
しかし、コクリコの反応は違った。

「でも、何だか懐かしい感じがするよ?昔、何処かで見たような……。」

すると、サリュは目の前の景色について説明を始めた。

「これは、君達が祖先より受け継いだ、超古代の記憶。このセーヌ河に浮かぶシテ島には、かつて自然と共に生きる一族がいた。」

「それが、パリシィという事か?」

大神の言葉に頷き、サリュは続けた。

「ある時、パリシィはその光故、闇の力により滅亡の危機に立たされた。」

すると、サリュは右手を徐に上げた。
途端に景色が変わり、平和だったパリシィの街が闇に包まれる。
その奥に、醜悪なる闇の元凶が見えた。

「あれが、闇……?」

「そう。しかし、パリシィには希望があった。守り神がいたからだ。」

「守り神……？」

そう呟いた時、闇から街を守るように、一筋の光が現れた。
その姿に、大神達は揃って驚きの声を上げた。

「あ、あれは！？」

光の正体。
それはこれまで幾度となく自分達を救ってくれた光の勇者にして巴里の守護神、ウルトラマンティガだったからである。

「守り神は激しい戦いの末、自らの魂を以って闇を封じ込めた。そして、生き残ったパリシィは石像となった守り神を神殿に安置してこう讃えた。『ティガ』と……。」

サリュが再び右手を上げた。
すると、最初より慎ましくはあるが、平和な街の風景が写る。
ティガによって救われたパリシィの人々が、新たなスタートを切ったのだ。

「だが、ティガによって守られた平和も長くは続かなかった……。」

サリュが三度右手を上げた。
すると、パリシィの街はまたも炎に包まれた。
それも今度は闇ではなく、人間の手によって……。

「パリシィの時は、ローマ人によって終わった。人の悲しみを踏みにじり、その上に築かれた街……。それが、今の巴里だ。」

「この巴里に、そんな歴史が……。」

ティガが命を賭して守り抜いた平和が壊れる様に、エリカが傷心の思いで呟く。

すると、サリュは更に続けた。

「しかし、人間はパリシィにある光とティガという守り神の制裁を恐れた。そして、魔術を用いた城壁によってパリシィの怨念を無理矢理深い眠りに就かせた。」

「城壁？」

思い当たる節がなく、大神が尋ねる。

すると、ダイゴが答えた。

「きっと、カタコンベだ……。」

「カタコンベ？」

「ティガの石像が安置されていた場所だよ……。シテ島からティガを引き離して、少しでもパリシィの怨念からティガを遠ざけようとしたんだ……。」

初めてティガと出会った場所。

そこは、シテ島から最も離れた位置にある隠し部屋だった。

何のためにティガの石像をそこに安置したか。

それがサリュの言うパリシィの怨念から遠ざけるためと考えれば、簡単に説明がつく。

「その通り。流石は光を継ぐ者、察しが良い。」

ダイゴの推理に、サリュが満足げに笑った。

「しかしその城壁も、文化の発展に伴い人間の手で破壊された。そして、怪人達が現れた。」

「つまり、奴らはパリシィの怨念から生まれたと……？」

ロベリアの言葉に頷いた後、サリュはニヤリと笑った。

「そして不思議な事に、君達巴里華撃団も怪人達と同じパリシィの血族なんだ……。」

「馬鹿な！そんな証拠が何処にある！！」

たまり兼ねたグリシーヌが叫んだ。

すると、サリュは不敵に笑って見せた。

「ならば見せてやろう。君達がパリシィという証を！！」

サリュの金色の目がギラリと光った。

すると、エリカ達五人の右手の甲に紋章が現れた。

その形は縦線の左右に二本ずつ斜め上に線が伸び、まるでスパークレンスと同じ翼の形をしている。

更にそれと共鳴するように、ダイゴのスパークレンスが明滅する。

「ふざけるな！アタシ達が怪人と同じ血を引いてるだと！？」

「ですがロベリアさん……。胸の奥から沸き上がる、奇妙な懐かしさを感じませんか？」

「みんな、そうなのか？」

これまでの過程を見る以上、サリュの言う事がデタラメとは考えにくい。

大神は、六人に恐る恐る尋ねた。

「隊長、理由は説明出来ないが、奴の言う事は確かだ……。」

「ボク……、生まれるずっと前からパリシィとして生きてたと思う。何故だか……、そう思うんだ……。」

「凱旋門で初めてティガを見た時に懐かしさを感じたのも、私やみんなに霊力があったのも、みんなパリシィの力なんですね……！？」

エリカの言葉が、全てを物語っていた。

ダイゴだけではない。

エリカも、グリシーヌも、コクリコも、花火も、そしてロベリアも、怪人同様にパリシィの子孫だったのである。

「その翼の紋章こそ、パリシィの証。そしてそのスパークレンスは、パリシィの守護神であるティガの証……。」

「じゃあ、あいつらが僕を裏切り者と言ってたのは……！」

ここに至り、ダイゴはようやく裏切り者と言われた由縁を察した。

今巴里に生きる人々のほとんどはローマ人の子孫。

つまりティガは、今まで本来守るべきはずのパリシィではなく、仇であるローマ人を守って来た事になる。

それは、巴里華撃団も同様だった。

「パリシィの真の力は死せる時。つまり、君達に倒された怪人の数だけ怨念の力は増す。」

「何っ!?じゃあまさか……!!」

大神の表情がまたも驚きに変わった。
サリュの言葉が事実なら、怪人達の目的は巴里の平和を脅かす事ではなく自分達に倒される事になる。

「君達が肉体のみならず魂までも滅ぼしてくれたおかげで、超古代の最期の力を呼び覚ます事が出来る……。」

サリュはフワリと宙に浮かび上がり、両手を広げた。
すると、六つの光の玉がその周りを浮遊する。
それこそカルマールを含めた怪人達の魂だった。

「さあ目覚めの時だ、オーク巨樹!パリシィの魂を以って、超古代の盟約を果たす時だ!!」

「みんな、力を貸してくれ!奴を止めるんだ!!」

何をするつもりか知らないが、巴里に害を成すつもりなら放ってはおけない。
しかし、返って来たのはあまりに無気力な返事だった。

「できません……。」

答えたのはエリカだった。

他の四人も、苦虫を噛み潰したような表情で俯いている。

「駄目だ……！大神さん、スパークレンスも反応しない！」

「何だって！？」

やはりティガも力を貸してくれないというのか。

驚く大神と対照的に、サリュは高笑いを上げた。

「フハハハハ！パリシィの血を引く者が、パリシィの意志に逆らえるはずがない！」

「くっ……！！」

信じたくはない。

しかし現にスパークレンスは反応を示さないし、エリカ達も躊躇ったままだ。

「さあ、裁きの時だ！とこしえに消え失せるがいい、巴里と言う名の醜悪なる都市よ！！」

サリュがそう叫ぶと、辺りを漂っていた魂達は地面に溶け込むように消え失せた。

「それでは、ごきげんよう。パリシィの子供達、ゆっくりとお休み……。」

そう言って何処かへと消えるサリュ。

刹那、先程とは比べものにならない震動がノートルダム寺院を襲った。

「大神さん、このままじゃ……！」

「そうだな。よし、一旦シャノワールに戻るぞ！」

ダイゴに言われ、大神は命令を出した。

しかし、五人は思い悩むように反応を示さない。

「退却だ！グズグズするな！！」

大神が怒鳴り付けた。

すると、五人はようやく意識を現実に引き戻した。

「「りょ……、了解！」」

それは大神達が脱出した直後に現れた。

最初の根っことは比べものにならない程の巨大な根。

それは一瞬にしてノートルダム寺院を包み、巴里の街に牙を剥いた。

逃げ惑う人々。

潰されていく建物。

巴里全域に緊急避難命令が発令されるまで、２分もかからなかった。

「ノートルダム寺院より発生したオーク巨樹は成長を続け、市街に広がっていますぅ！」

「主要道路は壊滅。建物もほぼ倒壊。都市機能、沈黙しています。明日の夕刻には、オーク巨樹が巴里全域を覆い尽くすものと推測されます。」

メルとシーから齎された報告は、巴里華撃団にとって正に死刑宣告だった。

カルマールの決戦からようやく街が立ち直った矢先の出来事に、グラン・マの表情も暗いものに変わる。

「巴里が消える……。正に最悪だね。」

「……すみません。俺達が怪人を倒したばかりに……。」

「ムッシュ、そんな事はないよ。オーク巨樹だけなら勝算はある。」

謝罪する大神に、グラン・マは首を振った。

「問題なのはこの子達だよ。祖先がパリシィと知って、戦う意志が消えかけている。」

「失ってはいない！だが……！！」

咄嗟に言い返そうとしたグリシーヌだが、言葉に詰まって黙り込む。明らかに動揺している証拠だった。

「スパークレンスに光があれば……、すぐにでも戦ってやるのに……！！」

形見の彫刻を悔しそうに握り締めるダイゴ。
そのクリスタルに、光はない。
その点、花火は戦う意志がない事に正直だった。

「パリシィの歴史を知って、今の巴里を守る事に納得がいかないんです……。」

「何甘えてるんだい！！これは戦争なんだ！アンタ達は兵士なんだよ！！」

「違う！アタシ達は人間だ！！機械じゃねぇ！言われるままに死ねるかよ！！」

一喝するグラン・マに、今度はロベリアが言い返す。
すると、今度はコクリコが口を開いた。

「人間だけど、パリシィなんだ……。ボクには出来ない……。」

「みんなはサリュに惑わされているだけだ！しっかりしろ！」

何とか正気に戻そうと大神が呼び掛ける。

その時、作戦司令室を激しい震動が襲った。

「どうしたんだい！？」

「シャノワール劇場部分にオーク巨樹が到達！！外部から攻撃を受けています！！」

「全防御シャッター閉鎖完了！地下までの到達時間……、じゅ、１０分！？」

最早一刻の猶予もなかった。

オーク巨樹は、遂にシャノワールにまで魔の手を伸ばしたのである。

「支配人、避難命令を！」

「よし、脱出だ。メル、全施設内に避難命令を出すんだよ！シー、ジャンにエクレールの発進準備を急がせておくれ！」

「「ウィ、オーナー！」」

大神の言葉を受けてテキパキと指示を与えるグラン・マと、しっかりとした返事を返す二人。

続いてグラン・マは俯いたままの五人を怒鳴り付けた。

「アンタ達何してるんだい！早く格納庫に向かうんだよ！！」

格納庫に急行した大神達を待っていたのは、いつもと違うエクレールだった。

「ジャン班長、これは新型のエクレールですか！？」

「ああ、そうさ。強行突入に改造した、その名も『エクレール・フォルト』だ。」

車体前部に、ジャン考案の新兵器マキシマ砲を備えた攻撃型エクレール。
光武Ｆ２に並ぶもう一つの巴里華撃団の武器だった。
とはいえ、この状況では悠長に自慢している暇はない。

「さあ、早く乗り込め！光武Ｆ２は中にある。」

「了解しました！！」

「全スタッフ搭乗完了！」

最後の整備班が乗り込むと同時に、発進準備も完了する。
しかし、相手もかなりのつわものだった。

「オーク巨樹、格納庫内に侵入!!急いで下さぁい!!」

シーの報告が終わらない内に、オーク巨樹が襲い掛かって来た。

「くそっ……、遅かったか!?」

「緊急発進!総員、衝撃に備えな!!」

エクレールフォルトは臨界点突破と同時に最高速度で発進した。
喰らいつくオーク巨樹の根をアームで引きはがす。
しかし、安心は出来なかった。

「前方よりオーク巨樹出現!」

メルの報告と同時に根が張り巡らされ、フォルトの道を塞ぐ。
それを見たグラン・マは直ちに指示を出した。

「照準セット!マキシマ砲、発射!!」

刹那、フォルトの前部にある主砲が火を噴いた。
凄まじいエネルギーの圧縮された弾丸が撃ち込まれ、オーク巨樹の壁を一瞬で粉砕する。
しかし、これで終わりではなかった。

「オーク巨樹の根より、小型兵器が放出!照合不能!未確認兵器です!!」

「小型兵器の攻撃が始まりました!エクレールフォルトの蒸気ユニットを狙ってますぅ!!」

ポーンとはまた違う兵器だろう。
いずれにせよ、独断でフォルトの心臓でもある蒸気ユニットに目をつける辺りから、高い知能を持った生命体と分かる。

「聞こえるかい、アンタ達?すぐに上に出て蒸気ユニットを守るんだよ!」

エクレールフォルトの驚異的なスピードを可能にしているのは、上部にある蒸気ユニットのおかげ。
これが破壊されようものなら、たちまちエンジンがオーバーヒートを起こし、エクレールフォルトは爆発してしまう。
それだけは、何としても阻止しなければならない。

「了解しました!みんな、出撃するぞ!!」

グラン・マの指示を受けて出撃命令を出す大神。

「分かった!」

しかし、それに答えたのはダイゴだけだった。他の隊員達は黙ったまま答えようとしない。

「どうしたんだみんな!」

「……出来ません。」

ようやくエリカが口を開いた。
しかし、それは出撃拒否の意志だった。

「これは命令だよ!行かなきゃここにいる全員が死ぬんだ!!」

「でも、ボク達はパリシィなんだよ……！？」

グラン・マに言われ、尚も拒む隊員達。
そのコクリコの言葉と同時に、激しい震動がフォルトを襲った。

「エクレールフォルト一部に異常発生！」

「最後尾のハッチが制御不能ですぅ！」

「何……！？」

最後尾はダイゴの流星Ｆがあったはず。
つまり、これでダイゴは出撃したくても出撃出来ない事になる。
大神は一瞬考えたが、決意した様子で叫んだ。

「司令、俺一人で出撃します！格納庫を開けて下さい！！」

「頼んだよ、ムッシュ……！！」

「ごめんね、大神さん……！」

托すように頷くグラン・マと、出撃出来ない事を詫びるダイゴ。
それに一瞬だけ笑うと、大神は叫んだ。

「大神一郎、出撃します！格納庫、開けて下さい！！」

轟音と共に格納庫が開かれ、爆風の熱気が肌に感じられる。
しかし大神が今正に出撃しようとした時、名乗りを上げる者がいた。

「あ～、ったくバカかてめぇは！一人で勝ち目なんかねぇだろうが！！」

ロベリアだった。
呆れたという表情だが心配しているのは見え見えだ。

「ロベリア……、しかし俺には……。」

「みんなを守るってか？アンタらしいな。それが侍気質かよ。」

やれやれという様子で肩を竦める。
がしかし、その直後ロベリアはハッキリと告げた。

「どうせ止めても行くんだろ？アタシも行ってやるよ！」

「……いいのか？ロベリア。」

大神が尋ねると、間髪入れずにロベリアは答えた。

「もうパリシィだか何だか知るか！パートナーに手を出す奴は潰さねぇと収まらねぇんだ！」

一見すると自己中心的な言動だが、裏を返せば大神を傷つけられたくないという気持ちが見て取れる。
それが分かる大神には、その一言で十分だった。

「よし……行くぞ、ロベリア！！」

「だから、いちいち叫ぶなってのに……。」

いつもの掛け合いを挟みつつ、二人はエクレールフォルトに飛び出した。

オーク巨樹の根から現れた小型兵器。
それは、超古代兵器カラミテだった。
機械仕掛けでありながら生命体のような様子は、ポーンより降魔を彷彿とさせる。
大神とロベリアは互いに背中合わせになり、前方から近寄って来た敵だけを相手にする作戦に出た。
本来なら蒸気ユニットを狙う敵を片っ端から倒すのがベストかも知れないが、こちらはたった二人である。
危険を侵して攻撃を試みるより、こうして守備的に行動した方が遥かに安全で効率良く戦えるのである。
事実、大神とロベリアはさしたるダメージもないまま６０近い数のカラミテを撃破していた。

「なあ、隊長……。」

また一匹カラミテを爪で屠り、ロベリアが言った。

「あいつら、来ねぇな。」

「ああ。」

あいつらとは聞く間でもないだろう。
ロベリアは、自嘲気味に笑った。

「アタシら巴里華撃団も、結局はこんなモンか。チームワークだ何だで、気に入ってたんだけどな。」

「ロベリア、俺は信じているぞ。」

諦めたように笑うロベリアに、大神は言った。

「思い出してごらん、シャノワールや今までの戦いを。いつでも俺達は力を合わせて頑張って来たじゃないか。」

カラミテを切り捨てながら、大神はロベリアを勇気づけるように言った。

「君だって信じているんだろう？みんなの事を。だから、俺は信じている。絶対にみんなは来てくれると……。」

あのシャンゼリゼの敗戦で、巴里華撃団は強く生まれ変わった。
絆を深め、助け合い、共に勝利を掴み取って来た。
その思いを、みんなは決して裏切らない。
それを、大神はもちろんロベリアも知っていた。

「……全く、何でそんな覚悟ができるんだ？やっぱりバカだからか？」

「バカでも、弱気になるよりいいだろう？」

珍しくおどけて見せる大神。
すると、ロベリアは声を上げて笑った。

「アハハハハ！そりゃそうだ。仕方ねぇからあいつらが来るまで、アタシがアンタを守ってやるよ。」

「ありがとう。俺もロベリアを全力で守るぞ！」

「アタシよりユニットの心配してな！」

いつもと何ら変わらぬ掛け合いを織り交ぜながら、二人はエクレールフォルトに仁王立ちになった。

それから約１０分。
フォルトの上にはカラミテの残骸で埋め尽くされていた。

「これで波は防いだか……。」

周囲にカラミテがいなくなった事を確認し、大神が二刀を下ろす。
だが次の瞬間、何かが大神の横を過ぎった。

刹那、何かが後ろに飛ばされる。

「ロベリアッ！！」

大神はブースターを全開にして、ロベリアをギリギリの所で抱き留めた。

「クソッ、どれだけ居やがるんだ……！？」

大神に助け起こしてもらいつつ、ロベリアが悪態をついた。
フォルトの上にはまたたくさんのカラミテが溢れている。
いくら巴里華撃団の中で戦闘に卓越した二人でも、この状況では多勢に無勢だった。

「諦めるな、ロベリア！まだ負けてはいない！！」

必死に闘志を奮い立たせ、大神が二刀を握り締める。
その時、聞き慣れた声が聞こえて来た。

「この地に遣わされし、母なる天使よ。光、あれ……グラース・オ・スィ・エール！！」

刹那、二人の光武Ｆ２の傷が全快していく。
こんな事が出来るのは、一人しかいない。

「エリカくん！！」

大神が叫ぶ。
そこにはエリカ以下、巴里華撃団のメンバーが勢揃いしていた。

「二人の姿を見て、大切な事に気付きました……。」

「遅れて済まぬ、隊長。私達が間違っていた。」

「もう、パリシィだとか関係ないよ！！」

「大切な者を守る……。それが巴里華撃団ですから……！」

口々に決意を述べる隊員達。

こうなれば、敵が何人来ようと負けはしない。

大神はみんなの決意に熱いものを感じながら、命令を出した。

「巴里華撃団、出撃せよ！！エクレールフォルトを守るんだ！！」

「「了解！！」」

パリシィであった真実を切り捨て、仲間のために戦う事を誓った巴里華撃団。

そんな彼らにカラミテなど、烏合の衆に過ぎなかった。

勇躍する光武Ｆ２の前にカラミテは次々と敗れ去り、既に１００体

に上る個体が殲滅されていた。

「あと少しで出口みたいだな……。みんな、無事でよかった……。」

一人も欠ける事なくカラミテを撃退出来た事に胸を撫で下ろす大神。
しかし、相手も甘くはなかった。

「エクレールフォルト後方より、妖力反応確認！」

「小型兵器どころか、怪獣レベルです！！」

「な、何だと！？」

カラミテを打ち破った矢先の報告に、大神は耳を疑った。
すると、最後尾にいたグリシーヌが叫んだ。

「隊長、後ろだ！！」

言われるままに後ろを目をやる。
すると、一つの巨大な影がエクレールフォルトの最後尾でこちらを睨んでいた。
カラミテが無数の同族の残骸を取り込んで合体した巨大機械人形ゴブニュである。

「グオオオッ！！」

ゴブニュは雄叫びを上げ、同族達の無念を晴らさんとばかりに襲い掛かって来た。

閉じ込められた格納庫の中、ダイゴは一人悔しさに身体を震わせていた。

「どうして……、どうしてなんだ……！！」

握り締められたままの光の証。
そのクリスタルに、光はない。
上では既にゴブニュと大神達の激しい戦闘の音が聞こえている。
今こそティガの力を使う時だ。
しかし、スパークレンスはそれを拒むかの如く、沈黙を保っている。

「ティガ……。やっぱり君も、あいつらに味方するのか……？」

パリシィの守護神である以上、やはりオーク巨樹につくというのか。
いや、そんな事はない。
ダイゴは頭を振って否定した。
パリシィの復讐などのために、ティガが戦う訳がない。
その証拠に、ティガはこれまで幾度となく怪人や怪獣と戦って来た。
今度だって、その時だ。

「お願いだ、ティガ……。僕が光を継いだのなら、僕に力を貸し

てくれ……！！」

必死に懇願するダイゴを突き放すかの如く、沈黙を保ったままのスパークレンス。

どうすればティガの光を取り戻せるか、ダイゴは必死に頭を働かせた。

すると、脳裏にあの言葉が蘇った。

「戦いの中で、帝国華撃団の皆さんとの関わりの中で、私はそれより大切な事に気付きました。……それが分かれば、貴方も、きっと強くなれますよ。」

カルマールとの決戦の時、同じ光の勇者が口にした言葉。

ダイゴにはその答えが、今ハッキリと分かった。

「そうか……！！そういう事だったんだ……！！スパークレンス！」

ダイゴは再びスパークレンスを握り締め、語りかけた。

「もう一度僕に力を貸してくれ……！守護神になるためじゃなくていい……！大切な人を守り抜く力を、愛する力を、僕に貸してくれ！！」

そう叫んだ時だった。

「……スパークレンス……！！」

何と、それまで沈黙を保っていたスパークレンスが一転、今までのように光を放ち始めたのである。

まるで、ダイゴの思いを聞き入れたかのように……。

「みんな……、今僕も行くからね……！！」

光の証を握り締め、ダイゴはそれを天高く掲げた。

「ティガーーーーッ！！」

エクレールフォルトにおけるゴブニュとの戦闘。
既にカラミテの大群との戦闘で疲弊しきった巴里華撃団にとって、ゴブニュは相手にするに余りある存在だった。

「くっ！！」

「グリシーヌ！」

剛腕の一撃を受け、後ろに追いやられるグリシーヌ。
真後ろのコクリコが受け止めるが、それでもギリギリ踏み止まれた

程度だ。

「諦めるな、みんな！ここでコイツに屈すれば、みんな生きては帰れないんだぞ！？」

必死に隊員達を励ましつつ、大神が叫ぶ。
しかし、状況は見る限り絶望的だった。
隊員達はいずれも霊力をほとんど使い果たしているし、特に大神とロベリアの二人は立っているのがやっとの状態だ。
そんな状況で怪獣を相手にしようなど、無謀以外の何者でもなかった。

「来るぞ！みんな、後ろに下がるんだ！！」

大神の指示で、素早く後ろに下がる隊員達。
だがここで一人だけ、遅れた者がいた。
エリカである。
実は先程大神とロベリアを回復させた際、霊力を大幅に消費してしまい、動きや反応が鈍くなってしまったのである。

「エリカくん！！」

気が付いた大神が助けに入るが間に合わない。
誰もがゴブニュに叩き潰されるエリカの姿を想像して目を閉じる。
しかしその瞬間、エクレールフォルトの内部からあの声が聞こえて来た。

「ティガーーーーッ！！」

その叫びと共に光の柱が現れ、中から大いなる巴里の光が現れた。

「ティガ！！」

「ダイゴさん……。」

ティガの腕に抱かれ、まじまじとティガの横顔を見つめるエリカ。
ティガはエリカを優しく下に下ろすと、改めてゴブニュと対峙した。

「チャッ！」

「グオオオオッ！」

ゴブニュも標的をティガに変え、襲い掛かって来る。
両者は互いに真正面からつかみ合った。

「ハッ！ハッ！チャッ！！」

激しいパンチのラッシュを浴びせるティガ。
しかし、ゴブニュのボディはゾイガーよりも固く、全くティガの攻撃を受け付けない。

「グオオオオッ！」

ゴブニュは更に、ティガの腕を掴んで後ろの列車に投げ飛ばした。

「ジュワッ！？」

その衝撃でフォルトから振り落とされるティガだが、素早くジャンプしてフォルトに舞い戻る。

「グオオオッ！」

「ハッ！」

すかさず襲い掛かるゴブニュのラリアットを前転でかわし、僅かながらも距離を取る。

「ンゥウゥ……、ハッ！！」

そして額のクリスタルを発光させ、パワータイプにチェンジした。

「グオオオッ！」

「チャッ！」

そして、殴り掛かって来るゴブニュの腕を捕まえ、腹部に渾身の肘打ちを叩き込む。

「グオッ！？」

「チャーッ！！」

思わず怯んだ所を持ち上げ、たたき付けようとする。
だがその時、ゴブニュが驚きの行動に出た。

「ジュワッ！？」

何と、ティガの身体にしがみついて離れなくなったのである。
更に耳を澄ますと、何やらカチカチという音が聞こえて来る。
そう、まるで時計の秒針のような。

「まさか……、自爆装置か！？」

大神が叫んだ。
ゴブニュは大神達巴里華撃団抹殺のために送り込まれた機械人形だ。
おそらく戦況が不利と見るや全てを巻き込んで葬る算段だったのだろう。

「ハッ！」

ティガがクリスタルの光を右手に移し、エクレールフォルトを光に包んだ。
その直後、ゴブニュの身体から目が眩むほどの閃光が放たれ、轟音に変わった。

「ダイゴさあああん！！」

爆発の轟音の中、エリカの叫び声が一瞬聞こえたかと思うと、轟音

に掻き消されてしまった。

「うっ……！？」

気が付くと、ダイゴは外に放り出されていた。
周りには爆発の衝撃からか、瓦礫が山になっている。
目覚めたばかりの頭で辺りを見渡すダイゴの目に赤い服が見えたのは、その時だった。

「エリカさん！！」

ダイゴはハッとした様子で駆け寄り、エリカをそっと抱き起こした。
目立った怪我はないらしく、とりあえず胸を撫で下ろす。

「ん……ん……、ダイゴ……さん……。」

意識のない中自分の名前を呼ばれている事に戸惑いつつ、ダイゴはエリカの肩を優しく揺すった。

「エリカさん。エリカさん、しっかりして。エリカさん。」

「う……ん？……あ、ダイゴさん……？」

閉じられていた目がうっすらと開かれ、エリカがダイゴを見た。
そして、何度か瞬きをした後、目に涙を溜めてダイゴに抱き着いた。

「あ～ん、ダイゴさ～ん！」

「エ、エリカさん……！？」

突然の事に驚くダイゴ。
すると、エリカは＃＃ＮＡＭＥ１＃＃の胸に顔を埋めたまま、嗚咽混じりに言った。

「良かった……、良かったです……ダイゴさん、無事で……良かった……。」

「エリカさん……、泣かないで。僕は大丈夫だから……。」

そう言ってエリカを落ち着かせるダイゴ。
すると、何やらまた震動のような揺れを感じた。

「……、まさか……！！」

ハッとした表情で後ろを向くダイゴに気付き、エリカもまた顔を上げる。
そして、二人は絶句した。

「う……、嘘……！？」

「爆発が、こんなに……。」

そこは、まるで月面のクレーターのような巨大な穴が開いていた。

ゴブニュの爆発は、巴里の街に巨大な穴を作る程の威力だったのである。

「まずい！エリカさん、ここは早く離れないと！」

「は、はい！！」

ダイゴに手を引かれ、エリカはただ頷く形でその場を離れた。

それからおよそ３０分。

ダイゴとエリカはオーク巨樹の進攻をかい潜り、教会の前に落ち延びていた。

既に根の攻撃で教会は見る影もないが、それでも他の建物程酷い壊れ方はしていない。

「レノ神父は……、いないみたいだね。」

入口を塞ぐ瓦礫を退かし、ダイゴが呟いた。

並べられた椅子はどれも柱の下敷きになり、綺麗だったステンドグラスが砕けて床に散乱している。

それでも中央にあるイエスの像が無事なのは不幸中の幸いだろうか。

季節は残暑というのに、壁に開いた穴から吹き抜ける風は冷たかっ

た。

ダイゴとエリカは、教会の奥にしまってあったシーツに包まり、夜を明かす事にした。
風の冷たさからか、それとも薄着だからか。
密着状態の二人は互いの体温に顔を赤くしていた。

「ダイゴさん……。」

ふと、エリカが口を開いた。

「皆さん、無事でしょうか……？」

「大丈夫だよ……。そう、信じよう。」

そう言って、ダイゴはエリカの手を優しく包む。
あの大爆発から生還出来るかは分からない。
しかし今は、その僅かな可能性に縋りたかった。

「はい……。ダイゴさん。」

「何？」

「この前の話の続き、してもいいですか？」

ダイゴの胸に寄り添いながら、エリカは口を開いた。

この前。

おそらくそれは、ダイゴがエリカを守るために目の前でティガに変身した時の、あの告白だろう。

「あれから私……、ダイゴさんの事を意識してみました。友達としてじゃなく、一人の男の人として……。」

僅かな沈黙。

エリカは、やや緊張したような面持ちで続きを話した。

「私……、今までダイゴさんとこうしているのが当たり前になってました……。出会えた事に感謝しても、毎日会える事を、忘れていたんです……。」

「……。」

「私は、大きな罪を犯していました……。今まで私を側でずっと支えてくれていたのは、ダイゴさんだったのに……。」

「エリカさん……。そんな、大袈裟だよ……。」

顔を赤らめて苦笑いを浮かべるダイゴ。

だが、エリカの表情は真剣そのものだ。

「そんな事ありません。私が鈍感だったせいで、傷つけた事だってあったのに……。」

「もう……、終わった事だよ。」

「……、どうしてですか？」

ふと、エリカの声が小さく、弱弱しいものに変わった。
居心地の悪い沈黙。
不審に思い視線を向けると、そこには両目に涙を溜めて俯く天使がいた。

「どうして……、そんなに……、そんなに……、優しいの……？」

「エリカさん……。」

「私……、ホントにドジばかりで……、迷惑しか、かけてないのに……。」

「そんなの……。」

「どうして……、側に……いてくれるの……？」

涙に震えた声は次第に嗚咽に変わり、見られたくないのかエリカは両手で顔を覆い隠す。
ダイゴは今まで、数えきれないくらい自分やみんなを助けてくれた。
時には日常で、時には戦場で。
自分のドジに突き合わせても、嫌な顔一つ見せずにいつも助けてくれた。
そんな彼に、今まで一体どれほどの仕打ちだっただろう。
罵倒や蔑みがあったって不思議ではない。

なのに何故、ダイゴは不幸しか起こさない自分から離れようとしないのだろう。
強い自責の念が、エリカに重くのしかかっていた。

「関係ないよ、エリカさん……。」

そんなエリカの肩に、ダイゴは優しく手を置いた。

「ドジだとか、気づかなかったとか、そんなもの関係ない。」

「……どうして……？」

涙に濡れた顔を上げ、エリカが尋ねる。
いつもなら恥ずかしさの余り目を背けてしまいそうな表情。
だがダイゴは、しっかりとその瞳を見つめ返し、答えた。

「だって、僕と友達になってくれた。僕を……孤独から救ってくれたじゃないか……。」

涙に濡れた瞳が、僅かに見開かれた。
ダイゴは少しだけ微笑む。

「覚えてる？　友達もいなくて、ここで毎日神父様の真似してた僕に、エリカさん、話しかけてくれたよね？」

無言で頷くエリカ。
ダイゴは続けた。

「レノ神父に聞いたんだ。僕が初めて笑ったのは、その時なんだって。きっとエリカさんに会わなかったら、僕は今もここで祈ってた

と思う。」

「ダイゴさん……。でも、エリカは……。」

包み隠さない言葉に頬を赤らめつつも、頭を振って返すエリカ。
しかし、ダイゴは無言でその頭を抱きすくめ、それを止めた。

「エリカさん……、僕は決めたんだ。僕に笑顔をくれた君を、今度は僕が笑顔にしてみせるって……。」

胸の中に収まったエリカが、一瞬震える。
それを落ち着かせるように、ダイゴは優しく髪を撫でた。

「だから、もう一人で抱え込まないで。辛い事も、苦しい事も、僕が全部受け止めてあげるから……。」

その時だった。
ダイゴの背中に、エリカがおずおずと手を回したのだ。
まるで、ダイゴの温もりを求めるかのように。

「エリカさん……。」

「……ホント、ですか……？」

聞き取れないくらいのか細い声と共に、エリカがゆっくりと顔を上げた。
照れと涙で瞼も頬も真っ赤だが、その目は驚きで見開かれている。

「ダイゴさん……、エリカの側に……、いて、くれるんですか……？」

堂々巡りで何度も尋ねられた問いに、ダイゴは微笑みを返した。

「いるよ。ずっと、ずっと側にいる。……もちろん、君が嫌じゃなければ、だけど……。」

エリカの震えが一瞬止まる。

直後、エリカは自分からダイゴに飛びついた。

「嫌なんかじゃありません……！ダイゴさんと一緒で、嫌なんかじゃありません……！！」

「うん……。」

「嬉しい……。私の事、ドジも力も、受け止めてくれるなんて……。夢、みたい……。」

霊力に起因する力でおびえられ、遠ざけられた自分。

生来のドジで、周りから白い眼で蔑まれた自分。

そんな自分を、温かく包み込んでくれる人が、今目の前にいる。

そう実感し、エリカの瞳からまた涙が溢れだした。

「……エリカさん、あの時の答え、教えてくれる？」

耳元で、ダイゴが囁いた。

あの答えとは言わずもがな、シャノワール前でのダイゴの告白である。

僅かな間を挟み、答えはハッキリと帰ってきた。

「……好き、です……。私も、エリカも……ダイゴさんが好

き、大好きです……！！」

「エリカさん……！！」

最早言葉は必要なかった。

顔を完熟した林檎のように真っ赤に染め、見つめ合う二人。

何時しかすき間風の冷たさは、感じなくなっていた。

「ダイゴさん……。約束ですよ……？エリカの事、離さないで下さいね……。」

「分かってる……。ずっと、ずっと側にいるよ、エリカさん……。」

甘く優しい声で囁き合い、どちらからともなく唇を重ねる。

初めて巡り合ったこの場所で今宵、イエスに見守られる中、一つの愛が生まれた。

「……？」

いつの間に眠ってしまったのだろうか。

気が付くと夜は明け、壁の穴から朝日が差し込んでいた。

隣では昨晩愛を誓った天使が、可愛らしい寝息を立てている。

「ダイゴさん……、お目覚めですか？ハイ。」

「レノ神父！」

見ると、目の前にレノ神父の姿があった。
おそらく眠っている間に教会に戻って来たのだろう。

「さあ、どうぞ。身体が温まります。」

そう言ってレノ神父は、二つのマグカップを渡してくれた。
中には作り立てのコンソメスープがある。
礼と共に一口含むと、身体の奥まで暖かくなるのを感じた。

「ん……。」

ふと、コンソメスープの香りを嗅ぎ付けたエリカが目を覚ました。

「あ……、ダイゴさん……。」

「おはよう、エリカさん……。」

寝ぼけ眼のエリカが可愛らしいと思いつつ、ダイゴがマグカップを渡す。
エリカはそれを受け取り、ダイゴ同様一口含んだ。

「……はぁ、美味しいです……。」

「お口に合いましたか、エリカさん？」

「はい。……って神父様!!何でここに!?」

レノ神父を見るや否や、エリカは慌てた。
無理はない。
何せエリカはダイゴと違って自身が巴里華撃団の一員である事をレノ神父に秘密にしている。
今のエリカは戦闘服姿。
これでは言い逃れのしようがない。
しかし、そんな心配は無用だった。

「ご安心下さい、エリカさん。貴女が巴里華撃団におられたという事は、既に私も耳にしている事です。ハイ。」

「ええっ!?神父様、ご存知だったんですか!」

レノ神父の言葉に素直に驚くエリカ。
すると、教会の入口から声がした。

「アタシが話したのさ。レノ神父はダイゴの正体も知ってたしね。」

「グラン・マ!!」

ダイゴとエリカは同時に叫んだ。
教会の入口に立っていたのは、ゴブニュの爆発に巻き込まれたとばかり思っていたグラン・マだったからである。

「グラン・マ!無事だったんですね!」

「ああ、ムッシュ達も揃って無事だよ。安心おし。」

嬉しさのあまり飛びつくエリカの頭を優しく撫で、グラン・マはダイゴに視線を向けた。

「ダイゴ、あの時は助かったよ。」

「え？」

「あの爆発さ。アンタはあの時、バリアでエクレールフォルトを包み込んで、アタシ達を守ってくれたんだよ。」

そうは言うものの、無我夢中だったために記憶にないダイゴは首を傾げた。

ゴブニュが自爆した瞬間、ティガはウルトラシールドを全面に展開。エクレールフォルトを包み込んで、爆発から守ったのである。

「とりあえず凱旋門まで来ておくれ。ムッシュ達も待ってるはずだからね。」

「エリカくん！ダイゴ！二人共無事だったのか！！」

グラン・マに連れられて凱旋門にやって来た二人を最初に出迎えたのは大神だった。
その後ろには、仲間達の姿がある。

「みんな……、本当に良かった……！」

「エリカとダイゴだけ連絡がつかないから、どうしちゃったかと思ったよ……。」

「ごめんね、心配かけて。」

心配をかけた事を謝罪するダイゴ。
すると、グリシーヌが笑顔で首を振った。

「気にする事はない。こうして無事に戻って来たではないか。」

「アンタ達は簡単には死なないから、心配もなかったけどね。」

「これで、巴里華撃団勢揃いですね……！」

生きて再会出来た事に喜び合う面々。
すると、ここでグラン・マが口を開いた。

「それだけじゃないよ。この凱旋門には、支部基地があるんだ。」

「支部基地!?本当ですか!!」

初めて聞く設備の存在に驚く大神達。
すると、グラン・マは七人の表情を満足げに眺め、続けた。

「紹介するよ。巴里華撃団、凱旋門支部長だ。」

そう紹介されて現れた人物に、大神達は更に驚かされる事となった。
何故ならその人物は、大神達がよく知る人物だったからである。

「しばらくだね、大神君。僕だよ、迫水典通だ。」

「さ、迫水大使!!まさか、あなたが支部長だったんですか!?」

「ハハハ、大神君。今は大使じゃなくて支部長だよ。」

驚いた表情のままの大神に、迫水は笑って答えた。

「それに凱旋門にあるのは基地だけじゃない。凄い切り札を用意してあるんだ。」

「切り札?」

「そうさ。この戦況を一気に覆す究極の切り札を、迫水支部長に依頼していたんだよ。さあ、ついておいで。」

そう言って歩き出す二人の後を追う大神達。
その時、ふとエリカが隣を歩くダイゴに耳打ちした。

「ダイゴさん、夜の事、本当でしたね。」

「うん……。信じていたから……。」

そう言ってダイゴは光の証を取り出した。

クリスタルはダイゴに応えるように、淡く光を放っていた。

翼の紋章（後書き）

《次回予告》

現代に蘇る、超古代の怨念……。

だがこの胸に希望がある限り、俺達は絶対に勝つ！！

次回、サクラ大戦３最終話！！

《巴里は燃えているか》

愛の御旗のもとに……

巴里華撃団、参上！！

巴里は燃えているか（前書き）

本編最終回に当たります。
といっても後半はほぼエピローグだったり……。

巴里は燃えているか

凱旋門支部。
巴里の名所として知られるこの門の地下には、迫水支部長の指揮によって設計された作戦室があった。
シャノワールが破壊された今、この凱旋門支部が最後の砦になる。
一応の希望が見えたが、まだ安心は出来なかった。

「ノートルダム寺院を発生源とするオーク巨樹の進攻は、巴里の市街地の７２％に広がりました！」

「オーク巨樹の根で道路も寸断されて、市民の多くが市内に取り残されています！」

オーク巨樹の進攻はとどまる所を知らず、凄まじい勢いで巴里を潰していく。
このままでは、日没までには完全に巴里の街は呑まれてしまうだろう。

「だが、方法はある。我々はオーク巨樹の特定の一部分に、妖力が極めて高い場所を特定した。おそらく心臓部と見ていいだろう。」

「じゃあ、その心臓部に侵入出来れば……！！」

「そうさ。オーク巨樹心臓部の強襲作戦。それが唯一無二のミッションだよ。」

大神の反応に頷き、グラン・マが言った。
確かにオーク巨樹は巴里全域を包む程巨大だ。

しかしその心臓部さえ破壊出来れば、オーク巨樹の活動を停止させられる。
だが、ここで疑問が残った。

「しかしエクレールフォルトでも、その心臓部までは到達できんぞ？」

それを口にしたのはグリシーヌだった。
ティガのバリアで無事だったとは言え、オーク巨樹の心臓部と見られる所まではかなりの距離がある。
それにまた根やカラミテの妨害があるかも分からない。
しかしグラン・マは、その疑問は一言で払拭した。

「そこで切り札の登場さ。コイツをご覧！」

そう言って、グラン・マが目の前にある簡易モニターを作動させた。
すると、大神達のいる凱旋門が写る。
そして、凱旋門の一部が展開し、中から巨大な銃にも似た兵器が登場した。

「こ、これは……！？」

「リボルバーカノン……。光武Ｆ２長距離輸送を目的に作られた、巨大射出兵器だ。」

迫水の説明に、大神は圧倒された。
帝都の空中戦艦ミカサに次ぐ大きさを持つこの兵器なら、オーク巨樹に飛び込む事くらいたやすい。
だが、迫水は厳しい表情でこう付け加えた。

「だが、それはリボルバーカノンが完成していたらの話だ。」

「じゃあ、まさか……！！」

「そうだ。照準システムは目視だし、射出カプセルも実験段階。距離の調整すら出来ない。」

その言葉に、隊員達の表情が僅かに強張る。
今回の作戦に、リボルバーカノンは不可欠。
可能性の薄い実験中の兵器で突入し、更にそのまま無数のカラミテがうごめくオーク巨樹内部を、心臓部目指して進まなければならないのだ。

「正に命懸けの作戦ですね……。」

大神も緊張を見せながら呟く。
すると、グラン・マは意外な事を口にした。

「命懸け？アンタ達、この戦いに生きて帰ろうなんて甘い気でいるんじゃないだろうね？」

「え……？」

その言葉に、隊員達の誰もが表情を変えた。
すると、迫水が畳み掛けるように続けた。

「巴里華撃団の戦いは、どんな犠牲を払っても負けてはならない。命を捨てても勝つ。それが巴里華撃団だ。」

「死んで巴里を歴史に残す。これが最後のミッションだよ。」

それはつまり、巴里華撃団への死刑宣告だった。

「さあムッシュ、命令を。」

グラン・マが大神に促した。
だが、大神はそれには従わなかった。

「……それは出来ません。」

「大神君！この期に及んで何を甘い事を！」

グラン・マの言葉を拒否した大神に、迫水の激が飛ぶ。

「君も軍人だろう！死んでこの街を守る事は、巴里華撃団隊長として名誉ある事のはずだ！」

「それは違います。俺は帝都で、生きる尊さと残される悲しみを嫌という程に味わいました。それは、この巴里でも同じはずです。」

もしグラン・マや迫水の言う通り命を捨てたとして、果たして巴里華撃団は任務を全うしたと言えるのか。
そんな事は絶対にないと、大神は断言できた。
エリカやダイゴが死ねばレノ神父が悲しむだろう。
コクリコが死ねばロランス卿が悲しむだろう。
グリシーヌや花火が死ねばタレブーが悲しむだろう。
ロベリアが死ねば、エビヤン警部が悲しむだろう。
そして、自分が死ねば帝都のみんなが悲しむだろう。
死ぬ事では何一つ守れない。
帝都における二度の大戦で、大神はそれを知りすぎる程に知ってい

た。
だからこそ、今の命令には従う訳にはいかなかった。

「俺達は生きて帰って来ます。平和を取り戻し、みんなで巴里の未来を歩むために！」

「ムッシュ……、あんた……。」

初めて命令を無視した大神に、呆気に取られるグラン・マ。
大神は後ろに控える六人に振り向き、ハッキリと告げた。

「いいな、みんな。必ず生きて帰って来るんだ！！命令なんかじゃない、それが俺の頼みだ！！」

必ず生きてみんなで帰る。
大神は命令としてではなく、頼みとして隊員達に伝えた。
すると、隊員達は力強く応えた。

「頼みとあらば聞くしかあるまい。貴公と共に、生きて帰ろう！」

「ボクも頑張る！イチローやみんなが一緒なら、怖くないよ！！」

「生きる尊さ……、この戦いで示しましょう！」

「また帰って来れるさ。……絶対に！！」

「みんなで帰って来ましょうね。約束ですよ！」

「それがいい。帰って来ないと、ボーナスもオジャンだしね。」

先程までの表情を打ち消し、決意を述べる六人。
その姿に、今度はグラン・マ達が驚く番だった。

「……分かったよ。ムッシュ、アンタには一本取られたね。」

そう肩を竦め、グラン・マは大神に言った。

「では、作戦を開始するよ。オペレーションネームは、『巴里は燃えているか』だ。」

その言葉に、大神は作戦開始の号令をかけた。

「『巴里は燃えているか』発動!!巴里の未来を取り戻すぞ!!」

「みんな、行ったみたいだね。」

リボルバーカノン発射準備が進められる中、グラン・マが呟く。
すると、隣に立つ迫水が応えた。

「よろしかったのですか?失敗は許されませんよ?」

「あの子達の顔を見たろ?隊長を心から信頼していた顔だよ。アタ

シにも見せた事がないのにね……。」

副隊長のロベリアを始め、六人全員が大神を隊長としてだけでなく人として信頼していた。

今思えば、それが自分達にないものにグラン・マは思えた。

単に東洋人だからでも、隊長だからでもない。

大神には彼にしかない何かがあった。

「大神君はいつの間にか、我々を越えていたんですね……。」

「そうだね。生きて未来を作る……、いい言葉じゃないか。」

「そろそろ出撃か……。」

一足早く用意を整えた大神は、凱旋門の外から巴里の街を眺めていた。

オーク巨樹によって、無残に破壊された街。

その姿を目の当たりにしただけで、震えんばかりの怒りが込み上げてくる。

「よう隊長。用意は終わったのか？」

ロベリアが現れたのは、その時だった。

「ロベリア。俺は完了したよ。君はどうだい？」

「別に。ただアンタの馬鹿面を拝んどこうと思ってね。」

いつものようにぶっきらぼうに答えるロベリア。

しかしその表情は、何時になく不安の色が見え隠れしている。

「ほら、そうすれば後腐れなくて済むだろ？」

「ロベリア……？俺達は生きて帰るんだ。そんな心配はいらない。」

まるでこの戦いで死ぬ事を前提に話すロベリアに、大神は元気づけるように言った。

この戦いで仲間を、ましてやロベリアを失う事など有り得ない。

すると、ロベリアは何時になく真剣な表情で答えた。

「悪いカンが来やがるんだよ……。何だか、アンタとは永遠に会えないようなね……。」

「大丈夫だロベリア。君は俺が絶対に守る。だから生きて帰ろう。」

大神がそう励ました時だった。

激しい震動が凱旋門を襲い、警報が鳴り響いたのである。

「緊急警報、緊急警報！オーク巨樹が凱旋門支部に接近しています

！！」

「巴里華撃団は大至急、作戦室に急行して下さい！！」

「ロベリア、行くぞ！」

「だな。いっちょやってやるか！」

それまでの表情を捨て、二人は作戦室に急いだ。

「どうやら向こうも気付いたみたいだね。」

オーク巨樹はそれまでの進攻から一転して、凱旋門支部を攻撃し始めた。

おそらく先手を打ってこちらを潰すためだろう。

こうなると、最早時間差で攻め込むしかなかった。

「迫水支部長！ジャン班長！リボルバーカノンの準備を！！」

「了解した！！」

「任せときな！！」

大神達をオーク巨樹に到達させるべく、迫水とジャンは発射準備を急ぐ。

グラン・マは続けて、大神に命令を出した。

「大神隊長！出撃命令だ！」

「巴里華撃団・花組、出撃せよ！！これが最後の戦いだ！」

「「了解！！」」

「リボルバーカノン、リフトアップ！！」

グラン・マの命令で、リボルバーカノンが動き始めた。

六機の光武Ｆ２を収納した射出カプセルが、リボルバーカノンに装填される。

だが今正に発射しようという時、恐れていた事態が発生した。

「凱旋門支部より西方に妖力反応あり！」

「画像に写します！……こ、これは！！」

モニターに映し出された映像に、シーが思わず驚きの声を上げた。
何故ならその妖力の正体は、オーク巨樹の根よりたちの悪いものだったからだ。

「まさか……、昨日の機械人形か！」

そのまさかだった。
オーク巨樹から発射されたカラミテが次々と合体し、昨夜エクレールフォルトを襲った時より数倍巨大な機械人形に変化したのである。

「ダイゴ！時間がない。一刻も早く奴を食い止めて、リボルバーカノン発射の時間稼ぎをするんだよ！！」

「了解！！」

グラン・マの命令を受け、ダイゴはスパークレンスを掲げて叫んだ。

「ティガーーーーッ！！」

「チャーッ！！」

凱旋門支部前に光の柱が現れ、中から鮮やかにティガが飛び出した。
ティガは空中を舞い、ゴブニュに飛び蹴りを喰らわせながら着地する。

「グオオオッ！！」

「チャッ！！」

凄まじい咆哮を上げるゴブニュに、猛然と立ち向かうティガ。
凱旋門支部にて、巴里は燃えているか前哨戦が幕を開けた。

巨大機械人形ゴブニュ。
パリシィの恨みを晴らさんと現れたこの強敵に、ティガが苦戦を強いられるのは当然の事であった。
エクレールフォルトの戦闘の時とは比較にならないパワフルな攻撃力と鉄壁の守備力は、ティガを圧倒するにあまりある力を見せ付けた。

「ハッ！」

ティガがパンチやキックで何とかゴブニュの進撃を妨害しようとする。
しかし、ゴブニュの固い身体には全く攻撃が通用しなかった。

「グオオオオッ！！」

「ジュワッ！？」

ゴブニュがティガの腕を掴み、後ろへ投げ飛ばした。
ティガの身体は紙屑のように放物線を描いて地面に落ちる。

「巨大機械人形、凱旋門支部に迫っています！」

「くっ……。」

芳しくない戦況にグラン・マの表情が険しくなる。
オーク巨樹の根が凱旋門支部をいつ攻撃するか分からない以上、直ちにリボルバーカノンを発射に持ち込まなければならない。
しかし、ゴブニュはそれを阻止するかのようにリボルバーカノンの正面から迫っている。
これでは発射しようにも大神達をオーク巨樹まで届ける事すら叶わないだろう。
しかし、ここで名乗りを上げる者がいた。
ジャン班長である。

「オーナー、まだ方法はある。俺に任せてくれねぇか？」

「ジャン……。どういう事だい？」

この状況で一体何をしようというのか。
怪訝な表情で聞き返すグラン・マに、ジャンは自信ありとばかりに笑って見せた。

「リボルバーカノン整備に併せて、ちょっと面白いモンを作ったんですよ。おい野郎共！アレを起動させろ！！」

ジャンが指令マイクで怒鳴った。
すると、地下の整備士達の返事と共に、凱旋門の頂上に一つの砲台が現れた。

「エクレールフォルトを改造した、『マキシマシューター』だ。コイツのマキシマ砲を使えば、機械人形も一撃って訳よ。」

モニターに写る改造兵器を満足げに説明するジャン。
リボルバーカノン整備の傍ら、線路がない事から今回活躍が見込めなかったエクレールフォルトを、ジャンは整備士の一部に命じて改造させたのである。

「でも、マキシマ砲で倒せる保障はあるのかい？」

「不要な部品は全て外して、マキシマ砲のエネルギーを極限まで高めてある。心配はいらねぇよ。」

マキシマシューターの開発には携わっていないが、ジャンには確信があった。
普段は根性がなく手の焼ける奴ばかりだが、彼らの腕は整備士として充分信頼できる。
だからこそ、ジャンはマキシマシューターを弟子に一任し、自分は

リボルバーカノン整備に全力を注いだのである。

「ただし発射はエクレールフォルト全ての動力を圧縮して行う。……チャンスは一度っきりだ。」

「面白いじゃないか。アンタらシャノワール整備班の心意気、見せてもらうよ。」

ジャンの警告に、グラン・マは笑って快諾した。
最初からやり直しのきかない命懸けの作戦なのだ。
一か八かの賭けくらいで怖じけづいてはいられなかった。

「ダイゴ！そいつを凱旋門支部からマキシマ砲で狙い撃つ！動かねぇように押さえてくれ！！」

発射台を手に、ジャンが叫んだ。
すると、ゴブニュに必死にしがみついていたティガが頷いた。

「チャッ！！」

ティガはゴブニュを後ろから羽交い締めにし、凱旋門支部に曝す。
刹那、ジャンが発射台に手をかけた。

「今だ！マキシマ砲、発射！！」

マキシマシューターから圧縮された凄まじいエネルギー弾が発射された。
エネルギー弾は一直線にゴブニュを直撃し、着弾箇所から炎が上がった。

「マキシマ砲……、ここまでとはね……！！」

ティガの攻撃すら毛程にも感じていなかったゴブニュの鉄壁のボディに深手を負わせたこの威力。

エクレールフォルトの時と比較にならないマキシマ砲の威力に、グラン・マは圧倒された。

だがこれで沈黙する程、ゴブニュは甘い相手ではなかった。

「グオオオッ！！」

「ジュワッ！？」

何と、ゴブニュは弱った身体でティガを振り払い、凱旋門支部に殺到したのである。

「巨大機械人形の攻撃、来ます！！」

メルの報告が終わらない内に、凱旋門支部を凄まじい衝撃が襲った。

ゴブニュが勢いをそのままに体当たりを仕掛けて来たのである。

「くっ……！？」

そのあまりの衝撃に立っていられず、その場に倒れる。

しかし、グラン・マだけは違った。

「ムッシュ……、ダイゴ……、みんな……、後は頼んだよ……。」

ここで自分達がやられては、大神達の決意全てが無駄になる。

何としても彼らをオーク巨樹へ送り届けなくては。

グラン・マは痛む身体に鞭打ち、リボルバーカノンのトリガーに指をかけた。

「リボルバーカノン……、発射！！」

最後の力を振り絞り、グラン・マはリボルバーカノンのトリガーを引いた。

そして、巨大射出兵器から六つの弾丸が発射される。

「みんな……、巴里を……、守っておくれ……。」

オーク巨樹に猛スピードで迫る大神達の姿に母親のように語りかけ、グラン・マは崩れ落ちた。

「グオオオッ！！」

凱旋門支部に体当たりを敢行したゴブニュは、そのままリボルバーカノンを叩き潰そうと拳を上げる。

だがその時、信じられない事が起こった。

何と沈黙したはずのマキシマシューターが、再びゴブニュ目掛けてマキシマ砲を発射したのである。

「グオオオッ！？」

至近距離からマキシマ砲の直撃を受け、ゴブニュは胸から激しい火花を散らしながら後ずさる。

マキシマシューターを開発した整備士達は、ジャンも知らない独自の手法で、理論上一発しか発射出来ないマキシマシューターに二発目の発射を実現させたのである。

「チャッ！！」

そこに、再びティガが飛び掛かった。
先程とは違い、ゴブニュを激しい格闘技で追い詰めていく。
ゴブニュと言えども、二度のマキシマ砲で弱った今の状態でティガと互角に戦える程の力は残されてはいなかったのである。

「チャーッ！！」

何発目かのパンチを浴びせ、ティガはゴブニュの頭を掴んで地面にたたき付けた。
弱り切った身体に激しいラッシュを受けたゴブニュの身体は既に限界に達しており、全身から火花が散る。

「グオオオッ！！」

それでも凱旋門支部を破壊しようと、ゴブニュは最後の咆哮を上げる。
ティガは両手を胸の前で合わせて左右に広げ、渾身のゼペリオン光線を発射した。

「ハッ！！」

L字に組まれた腕から光線が発射され、マキシマ砲を受けた箇所に直撃した。
たちまちゴブニュの全身を光が包む。

「グオオオ……！！」

パリシィの恨みを代弁するかのような叫びと共に、ゴブニュは遂に

大爆発を遂げた。
しかし、これで終わりではない。
オーク巨樹の進攻から、巴里の街を守らなければならないのだ。

「ンゥゥゥ……、ハッ！！」

ティガは額のクリスタルを発光させ、スカイタイプにチェンジする。
そして、目の前にそびえるオーク巨樹目指して飛び立った。

「チャァァァ……！！」

最高速度でオーク巨樹に突進するティガの身体を青い光が包み、ティガはオーク巨樹の中に消えて行った。

「……どうやら無事にオーク巨樹に着いたみたいだな。」

射出カプセルから出て来た大神は、目の前の景色にそう呟いた。
周囲を取り囲む悍ましい植物の壁。
そこはオーク巨樹の内部であった。

「そうだ、みんなは……。」

大神は周囲を見渡すが、自分の他に光武Ｆ２の反応がない。
リボルバーカノンが実験段階であったためにみんなとはバラバラになってしまったのだろう。
とりあえずは奥に突き進んで合流を試みるしかないようだ。

「よし、とりあえず心臓部を目指そう。」

目的地が同じなら、闇雲に歩き回るより目的地を目指した方が早い。
しかし、そう簡単に通してくれる程相手も甘くはなかった。

「くっ……！！」

真上からの殺気に気付いて後ろに避ける。
すると、大神のいた地点にカラミテが降りて来た。

「仕方ない……！」

なるべく霊力の消費は避けたいが、やられる訳にはいかない。
大神は二刀を抜き、猛然とカラミテに切り掛かった。

その頃、巴里市街でも多くの人々が立ち上がっていた。
その筆頭は、警官隊を指揮するエビヤン警部だった。

「撃てぇっ！これ以上根の進攻を許すな！巴里の街を守るんだ！！」

エビヤン警部の号令と共に、警官隊が一斉に発砲する。
普通の鉛程度で根を倒せる訳はないが、それでも根を怯ませるだけの力はあった。

「頼んだぞ、巴里華撃団！ウルトラマンティガ！！お前達なら、きっとやってくれる！！」

自分達の力は彼らに対して微力でしかない。
しかし、それでも巴里という街を守るためなら、命懸けの戦いを躊躇う理由などなかった。

エビヤン警部率いる警官隊が戦っている中、逃げ遅れた人々を助けに一人の人物が現れた。
ロランスである。
偶然にも巴里から離れていた彼は、コクリコへの土産に買って来た

沢山のパンを逃げ遅れてお腹を空かせた人々に配っていたのである。

「この程度の事しか出来ませんが、私も巴里の力になりたいのです……。」

ロランスは巴里にそびえるオーク巨樹を見た。

「光の巨人ウルトラマンティガ……、巴里華撃団の皆さん……。あなた達の勇気が、巴里に希望を齎すはず。私はそう信じています。」

大神の二刀が稲妻がほとばしり、たちまちにカラミテを消滅させる。しかし、敵は次々と現れてキリがなかった。

「くそっ、数が多過ぎる！このままでは……！！」

このままではじり貧になり、心臓部どころか脱出も覚束ない。必死に頭を働かせる大神の目に薄い根の膜が見えたのは、その時だった。

「これは……。」

奥の道か透けて見える。

これならカラミテの追撃を振り切って進撃できるかもしれない。

「狼虎滅却……、古今無双！！」

大神は周囲のカラミテ諸とも壁を切り付けた。

すると、たちまち壁に光武Ｆ２一体がやっと通れるくらいの穴が空く。

「よし、みんな無事でいてくれ……！！」

隊員達の無事を祈りながら、大神は走り出した。

「皆さん、しっかりして下さい。神様はきっと、私達を見守ってくれています。」

怪我をした人達を手厚く看護しながら、レノ神父が勇気付けた。

今自分達が希望を捨てる訳にはいかない。

何故なら、自分達のために命懸けで戦っている人達がいるのだから。

「エリカさん、ダイゴさん、巴里華撃団の皆さん……。どうか巴里をお守り下さい……。主よ、この巴里を見守って下さい……！！」

オーク巨樹の進攻によって無残に破壊された巴里。
しかし、その中に比較的被害のない家があった。
この巴里で最も名のある、グリシーヌ邸である。
各地で破壊が進む中、この屋敷だけは根の進攻が無いに等しい状況だった。
何故なら、屋敷を守る歴戦のメイドがいたからである。

「グリシーヌお嬢様……。お嬢様が戻られるまで、このお屋敷は必ずお守りするざます！！」

タレブーが決意と共に箒を振るった。
すると、その霊力に圧倒された根がたじろぐ。
タレブーはオーク巨樹の根を相手に、屋敷の玄関に仁王立ちになった。

一方、そのグリシーヌはオーク巨樹内部でカラミテ相手に奮戦していた。
その隣には大神の姿もある。
壁を開いて進んで来た大神は、自分と同様に無数のカラミテと戦うグリシーヌと合流したのである。

「よし、敵はいないみたいだな。先へ進もう。」

最後のカラミテを切り伏せ、大神が先に続く通路を見た。
未だレーダーに反応はない。

「みんな、無事でいてくれ……。」

自分達のようにカラミテの大群に襲われている可能性は高い。
隊員達の無事を祈る大神。
すると、グリシーヌが口を開いた。

「案ずるな隊長。皆は必ず生きている。私には分かるのだ。」

「どうしてだい？」

大神が尋ねると、グリシーヌは小さく笑って応えた。

「私も皆と同じく、隊長を信じているからだ。だから、必ず生きている。約束したのだからな。」

「そうだな……。みんなで生きて帰ると、約束したからな。」

グリシーヌの言葉に、大神は胸中の不安が僅かに消えた気がした。
みんなは自分達が来てくれる事を信じている。
ならば自分達は、みんなが無事でいる事を信じる。
それが何より大事な事を、大神は知っていた。

巴里華撃団とウルトラマンティガがオーク巨樹に突入してからしばらく。
衝撃の去った凱旋門支部で、グラン・マ達は大神達の戦況を不安げに見つめていた。

「大丈夫かなぁ、大神さん達……。」

不安げにシーが呟いた。
すると、メルが応えた。

「大丈夫よ、シー。大神さん達は絶対に帰って来るわ。約束してくれたもの。」

「メルさんの言う通りだ。大神君達を信じよう。」

メルに同意するように、迫水が口を開いた。
先程のゴブニュの体当たりで負傷したらしく、頭に包帯を巻いている。

「それにしてもジャン班長。あなたの整備士達は素晴らしい方達だ。」

迫水はジャンに向き直った。
おそらく二度目のマキシマ砲がなければ、リボルバーカノン発射は叶わなかっただろう。
今回の作戦における整備班の活躍は、充分なものだった。

「当たり前さ。何たって、俺の自慢の弟子共だからな。けっ、いっちょ前に成長しやがって……！！」

自分ですら一発が限界と言ったマキシマ砲に二発目を撃たせた力量は、既に自分を越えている。
ジャンは弟子に追い抜かれた事に、喜びと淋しさの入り混じった複雑な思いを抱いていた。

「それはムッシュも同じだよ。あの子はいつの間にかアタシ達をも越えていた。そのムッシュなら、絶対に負けはしないよ。」

グラン・マはハッキリと断言した。

生きて未来を作る。
自分に逆らってでも自らの決意を貫く大神の生き方は、かつてグラン・マと共に人生を歩んだライラック伯爵と同じものかあった。

「帰っておいでよ、大神隊長……！」

その頃、大神とグリシーヌはようやくコクリコと合流した。
射出カプセルが岩に埋まってしまって身動きがとれないコクリコを、岩を破壊して救出したのである。

「コクリコ、大丈夫か？」

「うん、ありがとう。ごめんね、心配したでしょ？」

瓦礫の化した岩の中から出て来るコクリコ。
すると、大神は優しく笑った。

「無事ならいいのさ。怪我がなくてよかった。」

「エヘッ、ありがとう。」

少し恥ずかしそうに笑うコクリコ。
すると、奥の方でグリシーヌの声がした。

「隊長！こちらにもいたぞ！」

「本当か！？……、花火くん！！」

そこには、グリシーヌに助け出された花火の姿があった。

「はい、平気です。しかし……、」

大神に無事である事を伝えながらも、花火は不安の表情を見せた。

「こんな巨大な敵を相手にして、生きて帰れるのでしょうか……？」

やはり、と大神は思った。
オーク巨樹の力は凄まじく、以前相対したオプスキュールさえ霞む程である。
そんな強敵に何の不安も感じない事は有り得なかった。

「心配いらないよ。今の花火くんには強い意志がある。何者にも負けない強い意志が。」

「……ありがとうございます。」

大神の言葉に自信を取り戻す花火。
その時、オーク巨樹内部が僅かに揺れた。

「これは……！根の進攻が進んでいるのか！？」

間もなく日没が近い。
このままでは心臓部を叩く前に巴里が壊滅してしまうだろう。
その時、花火が口を開いた。

「危険ではありますが……、オーク巨樹の幹を移動しては如何でしょうか？」

確かに危険だが有効な作戦ではあった。
オーク巨樹内部はかなり複雑に入り組んでいて、それこそ一日で心臓部に到達するのは至難の業だろう。
しかし、外側の幹を伝って降りれば話は別だ。
妖力の強さから判断して心臓部はオーク巨樹の最下層。
幹伝いなら壁に阻まれる事もなく、ノンストップで行ける。
しかし、外に通じるために落ちれば一巻の終わり。
有効ではあるが、かなりの危険を孕んだ作戦だった。

「いや、悩む暇はない。花火くんの提案でいこう。」

大神は迷う事なく即答した。
今は一刻も早くオーク巨樹の最下層に乗り込まなければならない。
そのためなら、多少のリスクなど関係なかった。

「ここから先はかなり危険な道のりになる。みんな、心してかかるんだ！」

「「了解！」」

三人の返事に頷き、大神は先陣をきって進み出した。

オーク巨樹の幹は、幾重にも連なる根の螺旋だった。
眼下には巴里の風景が広がっていて、明らかに自分達が突入した時よりも根の進攻は進んでいた。

「花火くんの提案は正解だったな……。」

街の様子を見て、大神が呟く。
すると、隣に立つグリシーヌが斧を手にして言った。

「……そう簡単にも行かぬようだぞ……？」

見ると、幹には無数のカラミテが大神達を待ち構えていた。
その数ざっと２０。
秒殺で突破するには些か数が多い。
しかし、そこに救いの天使が現れた。

「大神さ～ん！！」

その声に目を懲らすと、カラミテの中に一つ、赤い光武Ｆ２が見えた。

「エリカくん！！」

「愛の使者、エリカ・フォンティーヌ参上！！」

完全にヒーロー気分で宙を舞い、颯爽と降り立つエリカ。

……が、

「あ、あれ……？」

着地点を間違えたか、エリカはカラミテのど真ん中に孤立してしまった。

これでは四方八方から袋だたきにされてしまう。

「エリカくん、相変わらずだな……。みんな、急いでエリカくんを助けるんだ。」

「「……了解。」」

苦笑いを浮かべつつ、四機の光武Ｆ２は飛び出した。

オーク巨樹心臓部。

生きとし生けるもの全てが立ち入る事を許さないような神々しさを持つそこは、さながら聖域としての様相を見せた。

その奥に、サリュの姿かあった。

「フフフ……、やはり来たね。」

「黙れ！いつまでも我々が貴様に惑わされると思うたか！！」

目の前に現れたサリュにバトルアクスを突き付け、グリシーヌが叫ぶ。

その目には、生来の闘志がたぎっていた。

「所詮君達はパリシィに過ぎない……。怪人達と同じさ……。」

「ボク達はパリシィだ。でもお前とは違う！！」

尚もパリシィと言う言葉を並べるサリュに、今度はコクリコが言い返した。

「君達は勝てない。それが運命だから……。」

「運命は受け入れるものではありません。この手で開くものです！」

かつてのか弱い自分と決別し、毅然と言い放つ花火。

「忘れたのかい？君達パリシィとティガの悲しい過去を。」

「私達は過去には生きません。未来を作るために戦うんです！」

パリシィとティガに纏わる悲しい過去。

しかし、それが未来を潰す理由とはならない。

エリカも、グリシーヌも、コクリコも、花火も、サリュの言葉には

もう惑わされなかった。

「そこまで心を決めたのなら……、言葉は無意味だね……。」

それを理解したらしく、サリュも表情を変える。

「君達の出した答えを見せておくれ。来るがいい、蒸気獣オバド！！」

サリュが右手を上げた。
すると、その手に無数の光が集まり、巨大な昆虫を模した蒸気獣が現れた。
昆虫型蒸気獣、オバドである。
言葉が駄目なら力で捩じ伏せる。
サリュはそう考えたのだ。

「みんな、行くぞ！攻撃目標、巨大蒸気獣！！」

「「了解！！」」

オーク巨樹心臓部におけるサリュとの戦闘。
巴里華撃団はサリュの操る蒸気獣オバドの能力の前に、苦戦を強いられる事となった。
昆虫の中でも蠅をモチーフにしているらしく、オバドは空中を自在に飛び回って中々攻撃が命中しない。
更に無数の小型兵器に分裂し、四方八方から攻撃を仕掛けて来るのだ。
これではこちらが先にやられてしまう。

「パリシィの子供達よ……憎しみを讃えよ！

ル・ルワ・ディ・ムーシュ！！」

無数に分裂したオバドが、一斉に攻撃を放ってきた。
四方八方から耳をつんざくスクリームが放射され、大神達を苦しめる。
だが、ここで反撃に転じる者がいた。
花火である。
防音性に優れる花火の光武Ｆ２だけは、サリュのスクリームが効かなかったのだ。

「北大路花火、二の舞……御覚悟！落花啼鳥！！」

渾身の一矢が、オバド本体の羽根を貫いた。
たちまち飛行能力を失い、地に足を着くオバド。
そこに、グリシーヌが追い撃ちをかけた。

「大いなる荒波の守護者よ。今こそ、目を覚ませ！！フュリー・ネプチューン！！」

バトルアクスから凄まじい大津波が発生し、オバドを飲み込む。
しかし、巴里華撃団の連携は更に続いた。

「ネコネコ子ネコ！この子に決まり！マジーク・プティ・シャ！！」

召喚されたネコ達が、一斉にオバドを引っ掻き回す。
その瞬間、大神が叫んだ。

「エリカくん！」

「レッツゴー！」

大神がオバドに殺到すると同時に、エリカがマシンガンをぶっ放す。
そしてその攻撃で怯んだオバド目掛けて、大神が二刀を振るった。

「狼虎滅却……、紫電一閃！！」

大神の二刀が稲妻を放ち、オバドの頭をかち割った。
たちまちにオバドの全身が火花を散らす。
すると、サリュはニヤリと笑って見せた。

「これでいい……。我が魂を以って、オーク巨樹は満たされる……。」

「何……？ま、まさか……！！」

サリュの言葉に、大神はハッとした。
オーク巨樹の活動源は、怪人の魂……。
つまり、言い換えればパリシィの魂である。
そしてサリュはパリシィの意志を伝える超古代の存在。
と言う事は……、

「今さら遅い……。我が魂を以って、オーク巨樹の核たるデルニエが目覚める……。君達は終わりだよ……。」

その言葉を最期に、オバドは壮絶なる大爆発を遂げた。
刹那、オバドの奥にある巨大なオブジェのようなものに光が集まった。

「な、なんだ！？」

その光量に、思わず後ずさる大神達。
すると、オブジェに足が生え、オーク巨樹の核、デルニエが覚醒した。
頭には花の花弁のような葉っぱをつけ、昆虫のような身体で這うように大神達に迫る。

「あれを目覚めさせるのが、サリュの目的だったんですね……。」

「ならば、奴を倒せばオーク巨樹は活動を停止するはずだ。」

花火の言葉に、大神は二刀を握る力を込めた。
オーク巨樹心臓部に位置する核。
それを破壊出来れば、いかに巨大なオーク巨樹と言えども滅びるはずである。

「大神さん、やりましょう！私達で未来を作るんです！！」

エリカが決意と共に叫んだ。
他の隊員達も、同様に武器を手に立ち上がる。

「よし、行くぞ！この戦い、絶対に勝つ！！」

「「了解！！」」

大神の号令で、一斉にデルニエに攻撃を仕掛ける花組。
しかしその時、デルニエが足を地面にたたき付けた。
刹那、激しい震動が伝わる。

「くっ……！？」

その激しさに足が止まる。
すると、今度はデルニエの頭の葉が回転しながら襲い掛かって来た。

「こんなものっ！！」

踏み止まったグリシーヌがバトルアクスで真っ二つに叩き斬る。
二つになった葉は左右の地面に突き刺さった。
これ程の切れ味、直撃では一たまりもない。
しかし、デルニエの追撃は続いた。
左右の六つの目から閃光と共に衝撃波が発生し、大神達を吹き飛ばす。

「くっ……！！みんな、大丈夫か！？」

何とか踏み止まり、大神が叫ぶ。

「何という強さだ……、我々がまるで玩具ではないか……！！」

バトルアクスを杖代わりに、グリシーヌが答えた。
オーク巨樹の心臓だけあり、その妖力は半端なものではない。
かつて相対したオプスキュールすら、歯牙にもかけない程だ。
その時、コクリコが何かに気付いて叫んだ。

「イチロー！あ……、あれ……！！」

「何？……あれは！！」

コクリコの指差した方に視線を移した大神は、驚きに目を見張った。
何故なら……。

「ロベリアの……、射出カプセル……。」

それは、合流するであろう最期のメンバー、ロベリアが入っていたはずの射出カプセルだった。

かなりの衝撃を受けたためか、カプセルは大きくひしゃげ、原形を留めていない。

そして、近くにあるはずのロベリアの光武Ｆ２の反応が何処にもない。

と言う事は……。

「ま、まさか……、ロベリアが……。」

その考えに至った時、大神の脳裏に凱旋門でロベリアが口にした言葉が蘇った。

「悪いカンが来やがるんだよ……。何だか、アンタとは永遠に会えないようなね……。」

その一瞬、大神の中の世界が止まった。

「嘘だろう……？ロベリア……。」

力無く片膝が地面に着く。

そこに、デルニエの妖力が無数の弾丸となって襲い掛かった。

「みんな、伏せて！！」

コクリコが叫ぶ中、大神は一人動かなかった。

ロベリアの死を受け、現実を受け入れられないのだ。

「大神さん、危ない！！」

エリカの叫び声も、大神には届かない。
そして、妖力の弾丸が大神に牙を剥いた。

だがその瞬間、大神の前に飛来した一つの影が、その爪で妖力弾を叩き落とした。

「！！」

その姿に、大神はまたも目を見張った。
そこにいたのは、たった今存在が絶望視された、巴里華撃団副隊長の姿だった。

「待ったかい、相棒？」

ぶっきらぼうな口調で鈎爪を構えるその姿、見間違いでは決してなかった。

「ロベリア！無事だったんだな！！」

「憎まれっ子世に憚るってね。こんな間抜けにやられるロベリア様じゃないよ。それに……。」

歓喜に震える大神に当たり前のように返すと、ロベリアは続けた。

「アンタ、言ってくれたろう？生きて未来を作れって。惚れたアンタの頼みなら守るさ！」

「ありがとう、ロベリア……！共に未来を掴もう！！」

二刀を手に、ロベリアの隣に立つ大神。
しかし、援軍はロベリアだけではなかった。
突如心臓部の壁の一部が崩壊し、差し込む光と共に一人の巨人が現れたのである。

「ウルトラマンティガ！！」

それは、巴里華撃団と並ぶ今一つの光の巨人、ウルトラマンティガだった。

「チャーッ！！」

デルニエにスカイキックを浴びせ、ティガは地面に降り立つ。
巴里を照らす七つの光が今、一つに揃ったのだ。

「大神さん、ゴブニュは片付けた。僕も戦うよ！！」

「アタシらを敵に回した事、後悔させてやるぜ。なあ隊長！」

ダイゴとロベリアの言葉に頷き、大神は叫んだ。

「もちろんだ！みんな、全員揃った巴里華撃団の力を見せてやれ！！」

「「了解！！」」

副隊長のロベリアと、光の巨人ウルトラマンティガ。
二人の合流により、戦況は逆転した。
元々植物であるオーク巨樹にとって、ロベリアの炎は正しく天敵であるし、ティガがデルニエの攻撃を一手に引き受けているため、大神達はチームワークを最大限に活かして戦えるのだ。

「ジュッ！！」

ティガがエネルギーを集中し、ランバルト光弾を放った。
青白い光の矢はデルニエの顔面に突き刺さる。
そこに、ロベリアが追い撃ちをかけた。

「地獄より来たれ、災いの使徒……朽ち果てろ！！
デモン・ファルチェ！！」

霊力を具現化した死神が、血塗られた鎌を一閃させた。
その軌道に沿って炎が舞い踊り、デルニエの傷が広がる。
ティガは更に、胸のカラータイマーに手を当てて、ティガフリーザーを発射した。

フリーザーはデルニエの頭上に炸裂し、たちまちに凍り付かせる。

「ンゥウゥ……、ハッ！」

その隙にティガは額のクリスタルを発光させ、パワータイプにチェンジした。

そして、間髪入れずに両手を外側から回転させてエネルギーを集中する。

「ハァァァ……！！」

「グオオオオッ！」

そのティガを見て、デルニエも反撃に転じようとする。

しかし、それに気付いた大神が叫んだ。

「みんな、奴に隙を与えるな。ティガを援護するんだ！」

「了解！！」

大神の指示を受け、隊員達は一斉にデルニエに対し猛攻を仕掛けた。

口火を切ったのはコクリコだった。

「ネコネコ子ネコ！この子に決まり！マジーク・プティ・シャ！！」

無数のネコが現れ、デルニエを引っ掻き回す。

動かなくなった的に、今度はエリカのマシンガンが火を噴いた。

「よろしく！」

「任せろ！」

エリカの声に答えながら、グリシーヌが振りかぶったバトルアクスを渾身の力でたたき付ける。
その刃と弾丸がデルニエの左右の節足を破壊したのは同時だった。

「グオオオッ！」

苦悶の叫びを上げながらデルニエの六つの目が光る。
しかし、その目から衝撃波を放つ事は叶わなかった。
何故ならその六つの目全てに、瞬速とも言うべき速さで矢が突き立てられたからである。

「大神さん、ロベリアさん、今です！！」

「よし、行くぞロベリア！！」

「ハラワタまで焼き付くしてやるぜ！！」

花火の合図に、二人がデルニエの正面に踊り出る。
そして、それぞれの獲物に炎が宿る。

「コンブスティオーネ！！」

炎を纏った大神の二刀とロベリアの鈎爪が、デルニエの傷をなぞるように切り付けた。
そこに、ティガのデラシウム光流が炸裂する。

「ダァッ！！」

極限まで圧縮されたエネルギーがデルニエを包み、凄まじい大爆発を引き起こす。

「やったか……！？」

爆煙に勝利を確信する大神。
しかしその時、爆煙の奥から声が聞こえて来た。

「無駄だ……。」

「何！？サリュッ！！」

爆煙の中から聞こえるその声は、明らかにサリュだった。
サリュは魂をオーク巨樹に捧げ、デルニエと一体化していたのである。

「大いなるパリシィの意志は誰にも阻めない……。パリシィの裁きを受けるがいい！！」

爆煙の奥で六つの目が光った。
すると、激しい震動が心臓部を襲った。

「こ、これは……！？」

何が起こったのか理解する間もなく床が崩れ、大神達とティガはオーク巨樹の最下層へ真っ逆さまに落ちて行った。

そこは、見た事もない不思議な空間だった。
幻か、それともオーク巨樹の妖力が生み出した超空間なのか。
上下左右何もない空間に浮かぶ巨大な魔法陣の上に、大神達はいた。

「こ、ここは一体……？」

不思議そうに周囲を見渡す大神達。
すると、目の前にもう一つ魔法陣が現れ、中からデルニエが現れた。
昆虫のような核ともう一つ。
それを支えるような怪物の姿があった。
四本ある腕の内二本で核を支え、下半身が巨大な手のようになっているその姿は、悍ましい以外の何者でもない。

「こ、これがデルニエの真の姿なのか……！？」

その身の毛もよだつ姿に、思わず背筋が凍り付く大神。
すると、デルニエからサリュの声が聞こえて来た。

「パリシィの子供達よ……、死して我が糧となれ……！！」

閉じられていたデルニエの目が開いた。
金色に光る左目と、不気味な青い右目。
怪物の姿によく似合う、冷たい殺意の篭った目でこちらを見下ろし

ている。
だが、そんなものに物おじする巴里華撃団ではなかった。
「みんな、絶対に諦めるな！奴を倒して巴里に平和を取り戻すんだ！！」
「「了解！！」」

何故だ……。
何度この言葉を心の中で繰り返しただろう。
自分は超古代からパリシィの意志を伝える存在だった。
そして今また、自分はパリシィの無念を晴らすため、巴里に裁きを与えようとしている。
しかし、目の前のパリシィの子供達は、自分の言葉を聞くどころか逆に襲い掛かって来る。
「何故パリシィの意志に逆らう……？お前達の同族を殺して来た奴らを、何故庇う……？」
それは、巴里華撃団と共に自分に対峙する巨人にも同じ事が言えた。

超古代からパリシィを守り続けて来た存在、ウルトラマンティガ。
遥か３０００年の昔、自らの命を危険に曝してまでパリシィを守ったはずの彼までが、何故パリシィに逆らうのか。
いくら自問しても、答えは帰って来ない。

「この……、裏切り者共めがぁぁぁ……！！」

デルニエは怒りを露に妖力を爆発させた。
核の六つの目からそれぞれ妖力の塊を取り出し、下半身の手に掴む。

「魂を我に……、ル・クレピスキュル・デ・ディウー！！」

魔法陣を覆い尽くさんばかりの妖力の塊が、大神達目掛けてたたき付けられる。
……だが、

「ハッ！！」

ティガが胸の前で両手を合わせ、左右に広げた。
すると、淡い光の膜が展開し、デルニエの妖力を包み込んだ。
そして、ティガはその膜の上からデラシウム光流を圧縮して見せた。

「ハァァァ……！！」

凄まじいまでのエネルギーが圧縮され、まばゆい閃光を放つ。
そして、ティガはそのエネルギーを大きく振りかぶり、裂帛の気合いと共にデルニエに投げ返した。

「チャァァァッ！！」

先程とは比較にならない大爆発が起こった。
その凄まじい衝撃で、デルニエは後ろの壁にたたき付けられた。
するとその拍子に幻が解け、周りの景色はオーク巨樹の最下層に姿を変える。

「ば、馬鹿な……！！このデルニエの力を以ってしても……！？」

そこまで口にした時、デルニエの視界に信じられないものが写った。
消え失せた魔法陣から降りて来る大神達の背中に、天使と見間違えんばかりに美しい、純白の翼が見えたのである。
更にその奥に立つ黄金の巨人を、デルニエは見た。

「あ、あれは……！？」

全身を黄金の光に包まれた、伝説の光の巨人。
その名、グリッターティガという。
巴里に災いを齎す闇を討つ、伝説の光。
目の前に立つ黄金の巨人は、正にその巨人だった。

「どういう事だ……！！何故裏切り者の貴様に、その光が……！？」

信じられない現実を目の当たりにして、デルニエが叫ぶ。
すると、ティガは厳かな口調で答えた。

「全ては、この巴里に溢れる愛の光だ。」

かつて東方の光の勇者が残した問いの答え。
それは、ウルトラマンは守護者ではなく、この星に住む全ての命と

互いに愛し守り合う存在であるという事だった。
大神やエリカ、巴里華撃団のメンバーや巴里に生きる全ての人々の想いが、グリッターティガを覚醒させたのである。

「サリュ……、パリシィの復讐を謡った所で、貴様も巴里の平和を脅かす悪に過ぎない。今こそ裁きを受ける時だ！！」

その言葉と共に、大神が二刀を手に飛び出した。

「正義！」

「友情！」

「勝利！」

「平和！」

「未来！」

「そして、愛！！」

口々に叫ぶ仲間達。
すると、大神の光武Ｆ２がまばゆい光に包まれる。

「消え失せろ！巴里に仇なす敵よ！！」

大神の二刀が、デルニエの頭を十字に切り裂いた。
その直後、後ろのティガが両手をＬ字に組んで、黄金色に光るまばゆい光線を発射した。
グリッターゼペリオン光線……全身を包む黄金の光の力をゼペリ

オン光線と共に発射するグリッターティガの必殺技で、その破壊力はゼペリオン光線の比ではない。
黄金色の光線は一直線に、大神に切り裂かれたデルニエの顔面を直撃した。

「ば……馬鹿な……！！」

閃光に包まれる中、サリュが呆然とした表情で呟いた。

「私は……、巴里に……、神の意志に背いたというのか……！？」

認めたくはないが、目の前の現実が全てを示していた。
遥か３０００年の超古代から巴里を見守り続け、パリシィの代弁者として正義の裁きを与えようとしたピエロは、皮肉にも巴里に仇なす悪魔として、光の前に滅ぶ事となった。

核であるデルニエと、その支配者であったサリュの消滅によって、巴里を蹂躙していたオーク巨樹は跡形もなく消え去った。
その跡には出現地点であるノートルダム寺院を中心に、たくさんの

緑が広がっていた。
まるでパリシィの怨念を静め、浄化させるかのように。

「なるほど。パリシィの怒りは、ティガの想いによって封じられた訳だね。」

その報告を聞き、グラン・マは一人納得した表情を浮かべた。
怪人達の正体は、超古代の予言書にある闇ではなく、光であったパリシィが闇に墜ちた姿というべきだろう。
そして、ティガはパリシィではなく巴里という街そのものを護る存在だったと、グラン・マは結論づけた。

「さて、帰って来たみたいだよ。あの子達がさ……。」

そう言って、グラン・マは前に広がるシャンゼリゼ通りに目を向けた。
そこには、巴里に奇跡を起こした七つの光の姿があった。

巴里華撃団とウルトラマンティガの凱旋から、一ヶ月が過ぎた。
オーク巨樹の進攻で破壊された巴里も復興作業が進み、ようやく以前の姿を取り戻していた。
以前と変わらぬ穏やかな夜。

その寝静まった街中を、二つの影が寄り添うように歩いていた。

「……もう夜か。時が経つのは早いモンだ。」

「君に会ってからの半年もあっという間だったよ。」

ふと呟くロベリアに、大神が返事を返した。

大神が巴里華撃団隊長としてフランスに来てから、僅か半年。

その短い間に、様々な事があった。

エリカやダイゴを始め、たくさんの人と知り合い、ロベリアと出会った。

その思い出に浸る中、大神はその全てが泡沫の夢のように思えた。

「半年があっという間なら……、二年や三年くらいたいしたことないだろうね。」

「え……？」

ロベリアが声のトーンを少し下げた。

言葉の意味が分からず、大神がロベリアに目を向ける。

すると、ロベリアははぐらかすように言った。

「何でもないよ。……隊長、今からアンタの部屋に行ってもいいかな？」

「俺の部屋に……？」

「いいだろ？」

いつもの誘惑するような眼差しとは違う、ロベリアの願い。

それを断る理由は、大神にはなかった。

「いいよ、行こうか。」

そう答えて微笑むと、ロベリアも微笑みで返した。

もうすっかりお馴染みになった大神のアパルトメント。
明かりも付けず、二人は背中合わせでベッドに腰掛け、まどろんでいた。

「アタシってさ……、昔っから誰かに大切にされた事なんて一度もなかった。」

ふと、ロベリアが口を開いた。

「それで悪さをするようになって、今度は周りの奴らがアタシを避けるようになった。」

今まで決して語られる事がなかったロベリアの過去。
幼少の時から両親を失い、齢十にも満たない少女がこの巴里を生きるためには、盗む事しか残されていなかった。
気が付けば、周りからは巴里の悪魔と呼ばれ、ロベリアはそのまま闇に生きる事を余儀なくされていた。
そんな彼女に光を届けたのが、大神という存在だった。

「でも、隊長……。アンタだけは違ったね。このアタシに本気でぶつかって来てくれた。」

一生孤独の闇に生きると思っていたロベリアにとって、それがどれだけ嬉しかったか。
悪巧みをすれば必死に止めようとしてくれたし、戦いの時は真っ先に自分を心配してくれた。
そんな大神にロベリアが特別な感情を抱くのは、ある意味当然の成り行きだったかもしれない。

「ロベリア……。人は誰でも、誰かを愛する事が出来るんだ。」

背中越しに、大神の優しい声が聞こえて来た。

「そういうアンタのために、アタシも決心したんだよ。」

「決心？」

「何でもない……。それより、見てごらん。いい月が出ているよ。」

怪訝な表情の大神にそうはぐらかし、ロベリアは窓の外に広がる夜空を見上げた。
見事なまでに美しい満月。
いつも月明かりに悪事を働いて来たロベリアですら、その美しい輝きを知らずにいた。

「隊長……、アンタは太陽みたいな奴だ。側にいるだけで、自然に胸が暖かくなる……。」

「それならロベリアは、あの満月みたいだな。」

「アタシが？」

大神の言葉を意外に思い、ロベリアが振り返った。
そこには、太陽のように眩しい大神の笑顔があった。

「そう。あの満月の柔らかい輝きは、君によく似ている。」

「……でも、それじゃあいつまで経っても一つにはなれないよ。太陽と月ならね……。」

まるで帝都に戻る大神と引き裂かれる運命を呪うように、ロベリアは呟いた。

「このまま、時が止まればいい……。そうすれば、ずっと、こうしていられるのに……。」

「ロベリア……。」

「なあ隊長、そう思わないか……？」

哀愁をたたえて微笑むロベリア。
そのロベリアを抱きしめようとした時だった。

「……誰だ？」

不意に扉をノックする音が聞こえた。
こんな深夜に一体誰が来たというのか。

「アタシの客さ……。」

ロベリアが無気力に呟いた。
その途端、扉が強引に蹴破られ、たくさんの警官達が部屋になだれ込んで来た。
その奥に、エビヤン警部の姿があった。

「……ロベリア・カルリーニだな。」

「ああ。」

何時になく緊迫した様子で言葉を交わす。
すると次の瞬間、エビヤン警部は決定的な一言を口にした。

「自首する旨の電話があったが……、間違いないな？」

「ど、どういう事だ、ロベリア！？」

目の前で起こっている内容が分からず、大神が問いただす。
すると、ロベリアは当たり前のように答えた。

「キレイな体になりたくなったのさ。……誰かさんのおかげでね。」

「……連行しろ。」

エビヤン警部の命令で、警官がロベリアを部屋から連れ出す。
無意識に追い掛けようとする大神の手を、エビヤン警部が掴んだ。

「大神君、彼女自身が決めた事だ……。」

「くっ……！！」

その言葉に一瞬躊躇った大神だが、次の瞬間には手を振りほどいて部屋を飛び出した。

「ロベリア！！」

大神が外に出たのは、ロベリアが護送車に乗せられた時だった。
その腕の手錠には、冷たい鎖が繋がれてある。

「ロベリア！」

大神は護送車の扉越しに、ロベリアに呼び掛けた。

「俺は待っているぞ！……君が戻って来るまで、待ってるからな！！」

止めてはいけない。
ロベリア自身の決めた事だ。
だからせめて、ロベリアが罪を償い、戻って来る日を待っていよう。
大神に出来るのは、その思いを叫ぶ事だけだった。
その時……。

「……ありがとう……。」

ロベリアの口からたった一言、言葉が漏れた。
大神の言葉か、今までの日々か、それとも自分を変えてくれた事への感謝か。

少なくともそこにいたのは、人々が恐れる悪魔などでは決してなかった。

「ロベリアァァァ……！！」

走り去る護送車。

狼にも似た大神の悲しい叫びは、けたたましいサイレンに掻き消されていった。

その翌日。

休日にも関わらず、大神の姿はシャノワールにあった。

昨夜グラン・マから、緊急で呼び出しを受けたのである。

「支配人、お話とは……？」

昨夜の一件で心の傷が癒えぬまま、大神はグラン・マに尋ねる。

すると、グラン・マは何時になく厳しい表情で大神に告げた。

「落ち着いてお聞き。実は、ムッシュを帝国華撃団に戻すよう命令

が来たんだよ。」

「ほ、本当ですか！？」

あまりの衝撃に、大神は足が震えた。
帝都に帰る。
それは当然、巴里を去るという事だ。
長い夢が覚める時が、来たのである。

「詳しい話は分からないけど、東京でムッシュが必要らしいんだ。」

巴里華撃団のバックアップもしてくれた帝国華撃団。
エリカ達も憧れていた彼女達が自分を必要になるなど、一体どうしたというのか。
もしや、また強大な闇が帝都を襲っているというのか。
そんな不安に駆られる大神に追い撃ちをかける一言を、グラン・マは口にした。

「出発は一週間後。……済まないね。火急の要件らしいんだよ。」

「一週間後……。」

大神は、力無く残された日数を口にした。
昨夜ロベリアが出所するまで待つと、約束したばかりなのに。

「みんなにはまだ伝えてない。アンタの口から別れを言っておきな。

」

あまりに突然突き付けられた別れ。
自分ですらショックを隠しきれないのに、みんなはどんな反応を返すだろうか。
みんなの心を傷付ける罪悪感に苛まれながら、大神はフラフラとシャノワールを出た。

「おや、大神君ではないですか。」

ふと、市場の方から声がした。
そこにいたのは、ロランスだった。

「どうされました？目の輝きが薄らいでいますよ？」

心配そうに尋ねてくれるロランス。
大神は表情を変えられないまま答えた。

「実は一週間後、東京に帰る事になりまして……。」

「そうですか……。巴里も寂しくなりますね……。」

ロランスは、大神の表情に納得したように頷いた。

「ところで、コクリコはこの事を……。」

そこまで口にして、ロランスは止めた。

「いや、心配はないでしょう。コクリコは、巴里に愛された子ですから。」

もう自分が親代わりに心配する必要はない。
コクリコを強く偽らない子にしてくれたのは、外ならぬ大神なのだから。

「大神君。東京でも頑張って下さい。」

「ありがとうございます、ロランスさん……。」

励ましの言葉をかけてくれるロランスに礼を述べ、大神はその場を立ち去った。

大神が次に足を運んだのは、グリシーヌの屋敷だった。
気丈な彼女ならショックも少ないかも知れない。

そう期待した事もある。

「どうした、隊長？深刻な顔をして。世間話ではあるまい。」

何も知らないグリシーヌが尋ねる。

大神は、躊躇いながらも告げた。

「実は……、一週間後に東京に戻る事になった……。」

「……真か？」

俄かにグリシーヌの表情が強張った。

それでも態度に表さないのは有り難い事だが。

「その話、いつ聞いた？」

「俺も、今聞かされたばかりだ……。」

すると、グリシーヌは荒々しく扉を開けた。

気が付けばその手には、愛用の斧が握られている。

「グリシーヌ！何処に行く気だ！？」

大神が慌ててグリシーヌの手を掴む。

すると、グリシーヌは叫んだ。

「グラン・マに直談判して来る。貴公は巴里華撃団の隊長だ。帝都になど行かせん！」

それは、今までにないくらい激しい気迫だった。

だが、今度ばかりはその気迫と斧を以ってしても、大神を守る事は叶わなかった。

「グリシーヌ……、帝国華撃団に俺が必要なら、俺は行かなければならないんだ。」

「何を言う！貴公は巴里を去る事が苦しくないのか！？」

「分かってくれ！俺だって辛いんだ！！」

喚くグリシーヌに、大神は叫び返した。
すると、グリシーヌは斧を下ろした。

「……出て行け……。」

短い一言。
いや、おそらくそれが精一杯なのだろう。
グリシーヌの肩は、小さく震えていた。

「済まない、グリシーヌ……。」

一言だけ詫びて、大神は部屋を後にした。
後にグリシーヌの部屋を訪れたメイドは、部屋の中で取り乱して号泣するグリシーヌを目の当たりにする事になる。

「おやオオガミ、今日はどうしたざますか？」

傷心の想いで玄関に出た大神に、タレブーが声をかけた。

大神は、辛い表情を必死に押し殺して答えた。

「実は一週間後に東京に帰る事になりまして……。別れを伝えに……。」

「そうざますか……。」

タレブーは、箒を置いて大神をしっかり見て口を開いた。

「わたくし、オオガミの事を認めていたざます。」

「え……？」

「オオガミが来てから、お嬢様も人の気持ちが分かるように成長なされて、この屋敷のメイド達にも笑顔が増えたざます。オオガミのおかげざます。」

やはり歳をとると涙腺は緩むのだろうか。

タレブーは目尻の涙を拭った。

「東京に戻っても、ブルーメール邸で働いた事を誇りとして、頑張るのですよ……。」

「はい。タレブーさんも、お体に気をつけて。」

その言葉に、タレブーは年甲斐もなく泣き崩れた。

「ヨヨヨ……オオガミ、達者で暮らすざますよ……。」

ブルーメール邸でメイドとして働いた日々。
あの時は恥ずかしくて仕方なかったが、今思えば他では分からない良い思い出になった。
大神は、自然とそう思えた。

「おやおや、粗野で粗雑で粗暴な日本人が、東の果てに帰るのかい？」

ブルーメール邸を後にした大神に、声をかける者がいた。
いつかの高慢貴族、ダニエルである。

「お前か……、何の用だ？」

不快感を露にして、大神がダニエルを睨んだ。
しかし、ダニエルはそれに怯む事なく言った。

「これで花の都、巴里の格式も戻るという訳だ。……最後に言わせてもらう。」

生憎ここはパーティー会場でも何でもないただの道端だ。
何か減らず口でも叩こうものなら、構わず殴り倒す。
そう考えていた大神だが、ダニエルが口にしたのは減らず口などではなかった。

「Ａｕ　ｒｅｖｏｉｒ．ｅｎ，Ｍｅｒｃｙ　ｂｅａｕｃｏｏｐ．」

「え……？」

『ありがとう、そしてさようなら。』

聞き間違いでなければ、ダニエルは確かにそう言った。
悪い印象しかなかったダニエルからそんな事を言われるとは思わず、大神はしばし呆然としていた。

「……これは大神さん、如何されましたか、ハイ。」

エリカとダイゴに会いに教会を訪れた大神は、レノ神父にばったり出会った。

「実は……、一週間後に東京に帰る事になりまして……。」

「そうですか……。大神さんにはお世話になりっぱなしでしたのに……。」

大神の言葉に、悲しみの表情を見せるレノ神父。
しかし、レノ神父は大神を励ますために話題を明るいものに変えた。

「ああ、そうでした。エリカさんの事で、聞いていただきたい事があるのです。」

「エリカくんの？」

まさかまた大失敗の話だろうか。
しかし、レノ神父の話は大神の予想と異なるものだった。

「実は神父として、大神さんの人を信じる心に打たれましたです。そこで、もう一度エリカさんを信じる事にしたのです。」

「それじゃあ、エリカくんを……！！」

「はい、エリカさんには見習いシスターとして、帰って来て貰おうと思います。」

パリシィ怪人の一人、イーヴィルの策略で教会を追放されていたエリカ。
その過ちに気付き、ダイゴとエリカが深い愛情で結ばれた事を知ったレノ神父は、エリカを信じる事にしたのである。
かつて、大神がそうだったように。

「それでは大神さん、私はエリカさんにこの事を伝えて来ますので……。」

「はい。レノ神父も体に気をつけて。」

そう言って教会を後にしるレノ神父を見送る大神。
すると、ふと教会の鐘が鳴り響いた。
まるで、この教会に戻って来る一人の天使を祝福しているかのように。

「あ、大神さん。どうかなさいましたか？」

「いや、花火くんはここにいると思って……。」

大神の予想通り、花火はフィリップの墓前にいた。
屋敷にいないなら大概こちらにいる。
いつしか完成していたこの方程式は、別れを告げるこの時も外れなかった。

「大神さんも、フィリップの墓参りに？」

「え？……ああ、まあ……。」

花火に言われ、大神は曖昧な返事を返した。

おそらく花火は、大神がここに来た真の目的を夢にも思っていないだろう。
最も、知る由もない事だが。

「フィリップ。私は、強くなれました。」

花火は目を閉じて、天国にいるフィリップに語りかけた。

「安心して下さい。花火は、もう泣いたりしませんからね。」

過去の悲しみを断ち切った花火。
その彼女に、自分はまた新たな悲しみを押し付けるのか。
そう思うと、大神は何も出来ない自分が悔しくて仕方なかった。

「花火くん……。」

「？どうされました、大神さん？」

不意に名前を呼ばれ、首を傾げる花火。
大神は、胸が引き裂かれる思いで真実を口にした。

「実は俺……、東京に戻る事になった……。」

「ええっ……！い、いつですか……？」

「一週間後だ。帝都で、何か大変な事が起こったらしい。」

その言葉に、花火の顔から先程までの微笑みが消えた。

「そうですか……。」

「済まない、花火くん。俺にはどうする事も……。」

やはりショックを隠しきれない花火を前に、大神が口を開く。

しかし、花火の反応はグリシーヌより冷静だった。

「大丈夫です。一番辛いのは大神さんのはず。それに……。」

悲しみを必死に堪え、花火は続けた。

「泣かないって、決めましたから……。」

「花火くん……、ありがとう……。」

辛い状況にいて尚自分を気遣かってくれた事に感謝し、大神は足早に墓地を去った。

泣かないと言ってくれても、それには限界がある。

せめて一人にしてあげる。

これが、今の大神に出来る唯一の心遣いだった。

「あ、大神さん!!」

公園まで歩いた大神は、名前を呼ばれた方に振り返った。

そこには子供達に混じってサッカーを楽しむエリカがこちらに手を振っていた。

「ちょうど良かった！再来週子供達とサッカーの試合があるんですけど、大神さんも来てくれますよね！？」

来る事を前提で尋ねるエリカ。
だが、その試合の日に大神は巴里にはいない。
何故なら……

「済まないが、試合には出られない。……実は俺、一週間後に東京に帰るんだ。」

「もう大神さん！嘘ついても駄目ですよ？」

「……。」

信じていない、と言うより信じたくないのだろうか。
一瞬笑顔が引き攣るのを、大神は見逃さなかった。

「ねぇ大神さん。帰るなんて嘘でしょ？エリカには分かりますよ？」

「済まないが本当だ。俺が今まで、そんな笑えない嘘をついた事があったか？」

あくまで嘘というエリカに、大神はキッパリと言った。
信じたくないのは分かる。
大神だって、嘘だと思いたい。
しかし、これは事実だ。
一週間後、大神は巴里を発たなければならないのだ。

「嘘って、言って下さいよ……。嘘つきは嫌われちゃいますよ、大神さん……。」

「エリカくん……。」

突き付けられた真実を受け入れられず、震えながら懇願するエリカ。だが、大神は沈黙を以ってそれを突き放した。
すると、たまり兼ねたエリカは叫んだ。

「嘘つき……。大神さんの嘘つき！！」

大声と共に大神に平手打ちを食らわして、エリカは走り去った。

「嘘つき……か……。」

エリカの背中に、大神は力無く呟いた。

「やあ、大神君。」

運河の橋の上にいた迫水が、大神に声をかけた。

「グラン・マから聞いたよ。東京に戻るそうだね。」

「はい。迫水大使には、自分の口から伝えようと思っていたのですが……。」

「来たまえ、大神君。少し、話をしよう。」

そう言って、迫水は話し始めた。

「大神君。僕は君から、多くの事を学んだよ。」

巴里華撃団。

かつて政治界で鉄壁の異名を馳せた自分に相応の任務と思って、迫水は着任した。

しかし、彼は政治特有の欠点に気付かないでいた。

人を信用し、みんなで助け合い、共に笑う事。

平和を願いながら、他人を敵、或いは道具としてしか見ない自分。

その過ちに気付けたのは、大神のおかげだった。

「犠牲の上にある勝利は、勝利ではない。君は、それを教えてくれた。」

「迫水大使……。」

「これから、巴里は変わるよ。平和と愛の満ちた街に。」

あの時、大神達が帰って来なければ、たとえ勝利を手にしていても後悔していただろう。

迫水は、大神に真の正義を見た。

「さあ、行きたまえ。まだ、別れを言ってない人がいるんだろう？」
「はい……。」

「あ、イチロー！どうしたの？」

サーカスの動物小屋に、コクリコの姿があった。
何やら小道具が散らかっている所を見ると、何か新しい手品を考案中なのだろうか。

「実は、コクリコに話があるんだ……。」

「話？一体何のお話なの？」

楽しい話を想像したのか、ワクワクした様子で尋ねるコクリコ。
大神は意を決して告げた。

「実は俺、一週間後に東京に帰る事になった……。」

「え？何で？」

理由が分からず、コクリコが尋ねる。
悲しいというより、驚いた様子が強い。

「さっき支配人に言われた。帝都で、何か重大な事件が起こったらしい。」

これまでみんな傷付いたからか、目を背ける大神。
しかし、コクリコは意外な反応を見せた。

「ふ、ふーん、そうなんだ……。行ってらっしゃい、イチロー。」

「コクリコ……。」

それは、我慢強さを持つコクリコだからこそ言える言葉だった。
悲しみを表に出さず、逆にこちらをを気遣う優しさに一瞬、大神は自分が泣きそうになった。

「また……、会えるよね？」

「ああ。いつかきっと……。」

涙を堪えるコクリコに、大神はしっかり頷いた。
これが今生の別れであってなるものか。
大神はコクリコの優しさに、心の底から感謝した。

大神は、次にエビヤン警部のいる警察署に向かった。
ロベリアがそこにいない事は分かっているが、せめてエビヤン警部に自分が帝都に帰る事を言付けてもらうためだ。

「大神君、よく来てくれたね。」

守衛から話を聞くや、エビヤン警部は入口に立つ大神を出迎えてくれた。

「君とロベリアが知り合いだったとはね。しかも、シャノワール全員で匿っていたとは知らなかったよ。」

「すみませんでした……。俺達には、ロベリアが必要だったんです。」

「いや、忘れてくれ。今のはケチな警官のグチさ。」

超法規的処置とはいえ、犯罪者を匿う事は法で許されない。
しかし、エビヤン警部は笑って流してこう言った。

「大神君、信じられるかね？独房に入るロベリアが、こう言ったんだ。」

『惚れた男と未来を作るために、キレイな身体になる』

「巴里の悪魔と呼ばれたロベリアを変えてくれたのは君だ。ありがとう、大神君。」

「いえ、ロベリアは根っからの悪人じゃなかったんです。」

握手を受けながら、謙遜を口にする大神。
すると、エビヤン警部は真顔で言った。

「それにしても、大神君達だったんだね。巴里を救ってくれたのは……。」

リボルバーカノンでオーク巨樹に突入し、ウルトラマンティガと共にパリシィの怨念を沈めた巴里華撃団。
その正体が、今回の戦いを受けて警察にも極秘情報として共有される事になった。
当然大神達の正体も知られ、巴里華撃団は警察と連携して巴里の平和を守る事になる。

「だが、あの事件は極秘扱いになってしまって、感謝状すら出せない。だから、私達の気持ちを受け取って貰えるかな。」

そう言った時、周りにいた警官達が一斉にに並んだ。

「全員整列！大神一郎隊長に敬礼！！」

エビヤン警部の号令に合わせ、警官達が大神に精一杯の感謝を表した。

「大神君。巴里は我々に任せて、安心して行って来なさい。」

「エビヤン警部、ありがとうございます……。」

街をあらかた一周した大神は、シャノワールに戻った。
メルとシーにジャン班長。
別れを言っていない人はまだいる。

「あ、大神さん！いい所に！」

ロビーに戻った大神に、シーが声をかけて来た。

「ケーキ焼いたんです。食べて行って下さい。」

そう言って、シーは有無を言わさず大神を売店に引っ張り込んだ。

「さあどうぞ。これは自信作ですよぅ！」

いつにも増して上機嫌に、シーがケーキを置いた。
デコレーションもこれといって特徴のないケーキだが、シーの作るお菓子は味が絶品とエリカに聞いた事がある。

「……うん、美味しいよ。お店に出せるんじゃないか？」

その話に漏れない味に、絶賛する大神。
すると、シーは満面の笑みを見せた。

「ほら、ほっぺにクリームがついてますよぅ？大神さん、子供みたい……。」

そう言って、クリームをすくい取るシー。
その瞬間、大神はシーの目に光るものを見つけた。

「シーくん……。」

「あれ……、このクリームしょっぱい……。何でかなぁ……？」

しょっぱいのは当たり前だ。
大神が来る直前まで、ずっと泣いていたのだから。

「シーくん、知ってると思うけど……。」

「ううん、言わないで下さい……。」

言いかけた大神を、シーが止めた。
その目には、溢れんばかりの涙が溜まっている。

「……分かったよ。シーくん、ありがとう。」

「大神さん……。」

シーの思いを汲み取り、大神は告げずにその場を離れた。

「何だムッシュじゃないか。みんなに挨拶は済んだのかい？」

不意に支配人室に戻って来た大神に、グラン・マは意外そうな顔をした。

すると、大神は僅かに表情を引き締めて答えた。

「いえ、支配人にもきちんと挨拶をと思いまして。」

「よく気付いたね。それでこそ紳士というものだよ。」

「え？」

「言ったろ？ムッシュを紳士にするのも、アタシの仕事だってさ。……大きくなったね、ムッシュ。」

グラン・マの言葉に、大神は胸が熱くなった。

坊やだなんだと扱いは悪かったが、それでも自分に母親のように接してくれた。

それは、グラン・マも同じだった。

「ムッシュ。このシャノワールに、いつか帰っておいで。アタシらは、ずっと待ってるからね。」

「はい、支配人。ありがとうございます。」

「あれ、メルくんはいないのかな……？」

グラン・マとの挨拶を済ませ、大神はメルのいる秘書室に戻った。
しかし、メルの姿はない。

「ん？」

ふと、大神はメルの机を見た。
そこには、一ヶ月前にカルマールとの決戦に勝利した時の写真がある。
いや、よく見ると配置がおかしい。
あの時大神の隣には、エリカがいたはずだ。
しかし、どういう訳がこの写真ではメルが隣に写っている。
大神は写真を手に取って見て、ようやく謎が解けた。
メルは写真を切り貼りして、自分が大神の隣に来るようにしたのだ。
しかも、大神とメルのツーショットになっている。

「……大神さん、勝手に写真を見るのは良くありませんよ？」

「いいっ！？メルくん！」

不意に後ろの声に振り向くと、メルがやれやれと言った様子で大神を見ていた。

「す、済まない。目に写ったものだからつい……。」

「もういいです。内緒にしようと思ってたのに。」

「え？」

意味深なメルの発言に、目を丸くする大神。
すると、メルは僅かに赤い顔で言った。

「分かったでしょう？大神さんが、どれだけ巴里に愛されているか。」

今まで街を歩いた中で、大神との別れに悲しまなかったものはいない。
それは、大神がそれだけ巴里の人々に好かれている事を示していた。

「だから、私達との思い出、忘れないで下さいね。」

「ありがとう、メルくん。巴里華撃団での思い出は、俺の一生の宝物だよ。」

「よう隊長さん、待ってたぜ。」

格納庫に来た大神を、ジャンが笑顔で迎えた。
その奥では若い整備士達が慌ただしく、共に巴里を守った光武Ｆ２を整備している。

「グラン・マに聞いたぜ。帝都に戻るんだってな。」

「はい。今まで裏で支えてくれて、ありがとうございました。」

「いいって事よ。おっとそうだ、隊長さんに渡してぇモンがあるんだ。」

律儀に礼を述べる大神に笑って応えると、ジャンは隅の工具箱をガサゴソとあさくった。

「ほら、コイツを持っていきな。俺の発明家の先祖様が使ってた、自慢のレンチだ。」

それは、年代物にも関わらずピカピカに磨かれたレンチだった。
よく見ると、持ち手の部分に名前が彫ってある。

「これは……、ジャン班長の名前……。」

「ああ。俺と同じ名前の先祖様だ。何でも１９世紀辺り、１５くらいの年で飛行機を作ったそうだ。」

その言葉に、大神は驚いた。
今の蒸気の力ですら、飛行機を飛ばすのは難しい。
それを１９世紀に、しかもエリカやダイゴくらいの年齢で成功させるとは、驚くべき天才である。

「そんな大事なもの……、本当にいいんですか？」

そんな天才の先祖の形見なら、ジャンが持つべきもののはず。
しかし、ジャンはキッパリと言った。

「もらって欲しいんだ。たくさんの夢を叶えて来た道具だ。大切にしてやってくれ。」

「ありがとうございます、ジャン班長。」

そう言って、大神はレンチを有り難く受け取った。
１００近く昔から誰かの夢を叶えて来ただけあって、そのレンチには温もりと重みがあった。

「大神さん、ここにいたんだね？」

グラン・マ達との別れを済ませ、シャノワールから出て来た大神の前にダイゴが現れた。

「ダイゴ。俺も君を探してたんだ。」

「分かってる。エリカさんから聞いたよ……。」

少し悲しそうな表情を見せるダイゴ。
その表情に、大神はエリカにぶたれた頬に手をやった。
大して痛くはない。
寧ろ、心が痛かった。

「エリカさん、『ごめんなさい』って言ってた。だから、責めないでね。」

「ああ、分かってるさ。ぶたれるのも道理だ。」

あくまで自分が悪いと言う大神。
その様子に、ダイゴは僅かに微笑んだ。

「それならいいよ。それに……、本当に謝りたいのは僕だから。」

「何故だ？ダイゴは何もしていないじゃないか。」

ダイゴが自分に謝る理由が分からず、首を傾げる大神。
すると、ダイゴは首を振った。

「僕はね、大神さん……。ずっと貴方に嫉妬してたんだ。」

「嫉妬？」

「うん。エリカさんを取られるんじゃないかってね。」

ダイゴにとって、エリカは自分を孤独という闇から救い出してくれた光とも言うべき存在。

そのエリカが自分の前からいなくなるというのは、則ち闇に逆戻りする事を示していた。

大神とてそんなつもりは塵程にもないが、元々エリカか日本に興味を持っていた事や、巴里華撃団に属するという共通点などが重なり、エリカは一時期大神に強い憧れを抱く事になった。

当然ダイゴにとってそれは面白くない訳で、特にあのサッカーの時はエリカをも傷つけてしまった。

「僕は、ずっと怖がってたんだ。エリカさんがいなくなれば、また闇に落ちるって。でも、それは違うんだ。」

そう言って、ダイゴは光の証、スパークレンスを取り出した。

「エリカさんは僕を嫌いにならないって、信じれば良かったんだ。そしてそれを大神さん、貴方が教えてくれた。」

いつかエリカが言った、大神が巴里の全ての人々に愛されているという事。

現在にいたり、ダイゴはようやくそれを理解した。

「だからこそ言える。大神さん、貴方は巴里の人々全てから愛されてる。……僕も含めてね。」

「ダイゴ……、ありがとう。」

その一瞬、大神にはダイゴが逞しく見えた。
光を連想させる姿は、あの東の地の勇者と同じものだろうか。

「大神さん。何かあったら、僕達はいつでも、何処へでも助けに行くからね。」

「ああ。ダイゴ、エリカくんを頼んだぞ。」

どちらからともなく、二人は熱い握手を交わした。

そして一週間が過ぎ、いよいよ大神が帝都に戻る日がやって来た。
人々で賑わう駅には、ダイゴを含めた巴里華撃団のメンバーが揃って見送りに来ている。

「さあ、みんな。ムッシュにお別れを言いな。」

グラン・マに言われ、一同は別れの言葉を口にした。

「うっ、うっ……、大神さん、さようなら。巴里に着いたらお手紙下さいね。」

涙混じりに言葉まで間違えているエリカ。

「元気でな、隊長。東京での武運を祈っているぞ。」

散々泣き晴らしたためか、エリカより吹っ切れた様子で別れを述べるグリシーヌ。

「イチロー、ボク、大きくなったら絶対東京に行くからね。」

悲しくても泣かない、それでも無理に笑わなくなったコクリコ。

「大神さん、もう一度巴里に来て下さいね……、ぽっ。」

希望をもった言葉で大神との再会を信じる花火。

「大神さん。どんなに離れていても、僕らは一つだからね。」

大神に代わって巴里を守る事を誓った、『光を継ぐ者』、ダイゴ。

「大神さんのモギリ服、ずっと置いておきますから。いつか帰って来て下さいね。」

「大神さん、東京の美味しいお菓子、送って下さいね。」

仕事で、時には戦闘で大神を支えてくれたメルとシー。

「隊長さんよ、あっちには俺がいねぇんだからさ、光武を壊すんじゃねぇぞ。」

完璧な整備で大神達の戦いに貢献してくれたジャン。

「大神君、帝都でもしっかり頑張るんだぞ。」

大神を巴里華撃団と巡り会わせてくれた迫水大使。

「本当はあと一人、ロベリアがいるはずだったんだけどね。」

各々の別れが済んだ所で、グラン・マが唯一の欠員の名前を口にした。

巴里華撃団副隊長として、大神のパートナーとして巴里を守ってくれたロベリア。

彼女は今、冷たい牢獄で残りの刑期を満たすべく服役中だった。

「支配人、巴里を救った功績でも懲役１０００年は無くせなかったんですか？」

「ああ、２年だけ残っちまってね。」

大神が尋ねると、グラン・マはやや残念そうに頷いた。

「ただ、それも副隊長の特別恩赦でチャラに出来たのにさ。ロベリアの奴、拒否したんだよ。キレイな身体になってやり直したいってね……。」

「そうだったんですか……。別れの挨拶だけはしたかったのに……。」

残念そうに俯く大神。

だがその時、驚くべき声が聞こえて来た。

「何だい、シケた面して。いい男が台なしだよ?」

「ロベリア!!」

何と、ホームの影からエビヤン警部に連れられたロベリアが現れた。
エビヤン警部の計らいで、大神の見送りに間一髪で駆け付ける事が出来たのである。

「なあ隊長、アタシ達に別れの言葉は似合わないだろ?だから……。」

そう言って、ロベリアは大神の肩に手を回した。

「柄にもなく手紙なんか書いちまってよ。まあ、汽車の中ででも読んでくれよな。」

「ロベリア……、心配しなくても読むよ。」

やたら密着してくるロベリアに驚きつつ、手紙を受け取る大神。
その時、汽車の汽笛が鳴った。

「発車みたいだね。行っといで、東京に。」

「はい。みんな、元気でな。」

そう言って汽車に乗り込む大神。
すると、ロベリアが声をかけた。

「じゃあな、隊長。」

「ああ、ロベリア。」

短い言葉のやり取り。
しかし、二人にはこれで十分だった。
そして、汽車がゆっくりと走り出す。

「（またな……、隊長。）」

四人はたまらず追いかけるが、ロベリアだけはその場で大神を見送った。
そして、汽車は大神を乗せ、巴里の街を後にした。

「ロベリア……、手紙には何て書いてくれたのかな……？」

少し緊張しながら、大神は封を切った。
中には、こう書かれていた。

『愛すべき相棒へ

世の中は分からないもんだね。

隊長みたいな男に惚れるなんてな。

最初は何だコイツって思ってたけど、気がつけばアタシが参っちまった。

アンタ、前に言ったよな？

人は誰かを愛する事が出来るって。

アンタに惚れてからアタシも世の中を見る目が変わったよ。

アタシが悪党になったのは、みんな世の中のせいだって思ってたけど、そいつは違った。

アンタに会ってから、世の中も何か悪くないって思ったんだ。

大神一郎。アンタはアタシ以上に天才の泥棒だ。

何たって、アタシの心を盗んじまったんだからね……

覚悟してろよ？

今度はアタシが、アンタを東京の女から盗んでやるからな？

ロベリア・カルリーニより、愛を込めて

」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3428y/

超古代の星

2011年12月8日13時51分発行